見下ろすループは青

木村薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
見下ろすループは青

【Ｎコード】
Ｎ２５０２Ｋ

【作者名】
木村薫

【あらすじ】
　中学教諭の関口晴貴は，不可思議な能力を隠して日々すごしていた。そんな日常に虚しさを感じていたある日，一人の少女と出会う。異世界から来たという彼女には，晴貴と同じ力があった。それは，奏でる音で物質を動かす『魔力』。
　突然に蘇る記憶の断片と魂の叫びに身を任せ，晴貴は運命に向かって走り出す。
　一章は現代日本が舞台。二章『パンドラの光』は舞台が異世界に移行。三章『劫火の都』を進行中。

同作者の前作『千夜を越えて』の続編ですが，単独でも読めるよう工夫していきます。
Ｒ１５をかけました。ゆるいですが，対象の方や残酷な場面が苦手な方はお気をつけ下さい。
基本，毎週水曜日に更新中です。

1　始まりの夕暮れ　～　一章　二人の距離　～

ドアから一歩踏み出した途端，猛烈な湿気と暑さが肌に襲い掛かった。思わず回り右して建物の中に戻りたくなるが，背後から吐き出される人の波がそれを許さない。

押し出された勢いのまま，歩道の空いた空間に出てから振り返る。築五十年という古いビルで効き過ぎた冷房がつらかったが，今となっては天国だったと思い知る。早くも噴き出した汗が襟に滲んでいく。不快感にネクタイを緩めて溜息。肺から零れた息が辺りと同じ湿度と気付いて，さらに体感気温も上昇する感覚にげっそりする。

「関口ぃ」

間延びした声に振り返ると，見知った顔。すでに汗だくなのは同じだ。

「たまんねぇな。取りあえず，どっか歩こ。この人込み見るだけで暑苦しい」

「水野でも滅入るか」

「当たり前だろ。あ，大塚さんじゃん。おーい」

水野もネクタイを緩めながら，人込みの中へ手を振る。

老若男女入り乱れる人込みの中から，よくも知り合いの判別がつくものだ。水野の器用さに関心しながら，右肩にかけたリュックを背負いなおす。

夕焼けの赤味を帯びた光に照らされコンクリート細工を壁面に施した，昭和のニオイを漂わす年代モノのビル。そこから一斉に出てきた人々の群れに，歩道にいた若い茶髪の集団は異様なモノを見る目つきで離れていく。

それはきっと本能だ。

何故か社会人の格好なのにリュックや肩掛けバック率が高い。スラックスの端から見えるソックスは綿の白。女性もどこか垢抜けないローヒール。大きなカバン。それでいて，外見の年齢より精力ある雰囲気。

若者が活気ずく夏の夕暮れの繁華街近くに突如現れた俺たちの共通項は，教師だ。学校の先生。教員。地方公務員。

夏休みの繁華街独特の猥雑とした雰囲気すら，この集団は規律していくだろう。いや，今はそんな元気はさすがにないか。五時間ぶっ続けの研修の直後にこの暑さ。ビルから出てきた顔は，どれも疲れた顔をしている。

「久しぶりだなぁ。去年の研修以来じゃない？」

「そうだね。あいかわらず水野くん，元気だねぇ。夏男のままじゃない」

「おう。部活やってるぞ。見ろよ，この日焼け」

腕時計を僅かにずらすと，真っ白な肌が覗く。炎天下，毎日グランドにいる野球部の指導していれば日焼けもするだろう。大学時代から夏も元気だったが，それに磨きがかかったようだ。

一年ぶりに会った彼女は，より落ち着きと知性を漂わせている。俺と水野と同じゼミ仲間。学生の当時から，彼女は飛びぬけて美しかった。男どもの，淡い憧れの視線を弾き飛ばしていた。

「それに比べて，関口くんは白いね」

「吹奏楽顧問。屋内。インドア派だから。大塚さんは？」

「私はバトミントン。運動部でもインドア派。日焼けはしないけどさ」

体育館は蒸れてキツイのよねぇ。そう言って，手にしていた研修

資料で顔を仰ぐ。僅かに化粧の香りが鼻先を掠めた。
ノースリーブの白のシャツから伸びる腕は，真っ白な筋肉質。程よい曲線美に，慌てて視線をずらした。
四年間をともに過ごして，卒業して，先生して六年。すっかり女の香りが濃厚に漂いだしている事に，腹の奥が僅かに熱くなった。
偽れない事実に，罪悪感。

「よかったらさ，三人でどこか行く？　もう六時だし飯でも」
「うーん。水野くんの薦めるお店は外れないから行きたいんだけど，実は先約があって」

その顔が僅かに綻ぶ。あ，これはデートか。
男の直感。素早く水野を見ると，逞しい顔が打ちひしがれていた。太い眉が八の字に下がってしまっている。まるでお預けを喰らった大型犬。
分厚い研修資料の入った封筒で頭を小突く。お前，彼女いただろうが。

「ごめん。今度飲み会あったら行くから，誘ってね」
「おう。他の連中誘って中間テストの辺りでやろうか。部活ないから時間とれるだろうし。なぁ，水野」
「そ，そだな。旨い店紹介するから」
「うん。期待してるから。本当，ゴメンね」
「いいからいいから。またね」

軽く手を振ると，小走りでかけていく。
バッグから取り出した携帯電話で，僅かな指先の動きで通話しながら人波の向こうに消えていった。
白のシャツが眩しい。少しだけ，侘しさ。

「あぁ。吉田ゼミの天使にも彼氏が出来たかぁ」
「時間の問題だっただろ。幸せそうだからいいじゃん」
「男前の台詞だねぇ」

太く褐色の腕を組んで唸る。
卒業から六年。教育大だったから，大部分は教師をしている。それなりに社会人している。
そう。みんな，もう大人だ。
キャンパスに迷い込んだ犬に眉毛描いてアホしてた俺たちも，分別をつけて大人になっている。気付いたら，もう大人の世界に入っていた。

「大塚さん，美人だしなぁ。そろそろ結婚しそうだ」
「なんだよ。残念？」
「いんや。まだ決まったわけじゃないしっ」
「山ちゃんあたりに聞いてみたら？　仲よかっただろ」
「そだなぁ……ああぁ，でもやだな。ホントだったらおれ，ショックだよっ」
「お前が言うかな。彼女とうまくいってるんだろ」

歩道に溢れていた大量の教師の人波も，互いに声を掛け合い連れ合い，次第に少なくなっていく。
日の長い夏といえ，高層ビルの谷間となると，ネオンの方が明るくなってきた。
灯りに集まる虫のように，華やかに着飾った人だけは絶え間なく集まってくる。

「まぁ，俺の話は追々と。とり合えず，飯を食べに行くか」
「男二人になっちまったけど，しゃあないか……」

途端，油と香辛料のニオイの埃っぽい風がビルの谷間から吹き込んだ。

「きゃあ！　」

交差点前で風船を配っていた女の子がミニのスカートの裾を押さえようとした途端，原色の風船が幾つも街路樹の上へ飛んでいく。派手に企業名がプリントされた風船が，ゆうらりと風の合間を縫い夕闇の空へ上がりかける。

「ふうせんだ！」
「ママ，風船！」
「とって，とってよう」

雑踏から上がる可愛らしい声に，思わず笑みが零れる。ビル風を操るのは難しい。口笛を奏でる。低く，高く，まっすぐに。音を空気に蕩かすように。この空気を貫く強さを持たせて。流れろ。落ちろ。立ち止まれ。

上空を流れていた風が，辺りを包み込むように地上に向けて吹いてくる。と，舞い上がろうとした風船が押し戻される。それはまるで，映像を巻き戻しているような光景。

「あ，ゆうクンとこに風船がきたよ」
「わぁ！　ふうちぇん！　」
「風船が降ってきたよ！　ママ，これいいのかな？　」

いいんじゃないかな。これ，タダで配ってたぞ。

突然空から舞い戻ってきた風船に，子ども達は歩道を走り回って掴もうとはしゃぐ。

物理の法則を無視した光景に見蕩れた大人と，はしゃぐ子ども。

戸惑いながらも，風船を飛ばしたアルバイトらしき女の子が「どうぞお持ちください」と声をかけ出す。子どもの親は「あら，まぁ」とか「すみません。じゃあ，遠慮なく」とか挨拶を交わす。なんとなく忙しく如何わしさすら感じた繁華街の空気が，この一角だけ暖かくなった感覚だ。

うん，いいことしたかも。

「関口。今，善いことしたって満足してるだろ」

「どっかに飛んでゴミになるよりいい」

「あんまり使うなよ」

「あんまり使ってないよ」

水野が太い腕で先を促すように引っ張る。

確かに，今の口笛を不審がられてはマズイ。カンがいい人が，この光景を見ていれば真相がばれてしまう。

「関口は結構お人よしだから。大丈夫かよ」

「だから，めったにしないって！　お前の時とか今みたいな時とか，忘年会のかくし芸とかで」

「だから心配なんだって」

俺の能力。不可解な能力。空気を動かし風を操ったり，マジックのように物質に穴を開けたり。

水野の時は，バイクで転倒して砕けた腰骨をくっつけた。

俺は音を使って，モノを動かす。それは，物理を無視した法則。

「変な宗教とかにバレたら，お前マズイじゃん」

「教祖になって，大もうけとか。水野，一緒にやらない？」

「あのなぁ」

「判ってる。水野だから言ってる。お前は，いい奴だから」

大学一年の夏。バイクの免許を取りたての俺達のツーリングで，山道の急カーブでトラックを避けようとハンドルを切りすぎて転倒した水野。トラックは走り去るし，信州の山奥で救急車なんて待ってられない。焼けたアスファルトの上で呻く水野の姿を見て，思わず俺は必死に唄っていた。

感じるままに。頭の片隅から湧き上がる唄を，朗々と唄っていた。固く目だけは閉じて。ただ，砕けた骨と，ちぎれた筋肉と血管と神経を繋ぎ合わせる事に集中して。

死んでいった祖母や祖父と，能力は使わないと約束していたのに。能力を使わず，二人の死に際を見送ったのに。

無我夢中で俺は水野を助けて。

唄い終わり恐る恐る目を開けた俺に，水野はまっすぐに目を見て言ってくれた。

「ありがとう」と。

偏見も恐れも持たず，未知のものを受け入れた水野を，俺は尊敬している。

「じいちゃんもばぁちゃんも死んだ今は，この事知ってるのはお前だけだ」

「彼女出来たら，ちゃんと見定めてから告白しろよ」

「彼女，うん，あぁ」

「関口の人生最大の難問だ。この大問題を受け止めて秘密にしておけるだけの彼女見つけるのは大変だよなぁ」

他人事の口調で言い切られ，思わず天を仰ぐ。

彼女出来ない歴二十八年。月にでもお願いすべきか。

ビルの切れ目から覗く白く細い月を見上げ，息を飲む。

「鷹？」

純白の鷹が，ビルの屋上につけられたネオンの広告に留まっている。
確かに，視線があった。飛び込む金色の瞳。強い意志が，体を貫く。

『潮時ぞ』

その言葉が純白の鷹からなのは，確信できる。
金色の瞳が，笑みを浮かべるように細くなる。
鷹が笑う？　そんな馬鹿な。
あっけにとられて空を見上げる俺の目の前で，数回羽ばたいて消えていた。気づけば，口をあんぐりと開けて呆けた俺は水野に小突かれているし。
何だったんだ，今の。

2　歪んだ扉の音

床から天井まで，道路側の側面はガラス張り。十二階からの絶景に目もくれず，とり合えず研修資料を読みふける。

最新の授業を。最新の情報を。最高の方法で。

あの狭い会館で五時間も研究会をしたんだから，それなりの成果が欲しい。世の中教師にキツイ目を向けているが，それなりに努力をしているのだ。

灼熱の夏休みを部活で費やし，たまに部活を休みにした時は研修。俺って，まじめだ。

「お待たせしましたぁ」

緊迫感のない朗らかな声と共に，大ジョッキになみなみと注がれたビールが二つテーブルに置かれる。

白い泡をブルリンと震わし汗をかいて黄金色に輝くビールと，二センチの厚みの研修資料。

互いに手の中の資料とビールを無言で見比べる。水野の喉仏が上下して，生唾を飲み込む音まで聞こえる。

「後だな。俺の資料，後で水野の中学に送るよ。国際理解で使うだろ」

「お，おう。オレの道徳の資料も関口ん学校に送るよ。川東中だったよな」

「うん。とり合えず，一杯いくか」

「だな！　」

このくそ暑い夏の夕方に，ビールの誘惑に勝てる奴などいない！

「っつかれーっす！」
「まじめな俺たちに乾杯っ」

喉を通る炭酸と苦味に，「今日の俺頑張った」と一人満足。吐き出す息がひんやりと冷えている心地よさに，ようやく一息つけた感覚。

慌てて資料をリュックに入れる。ここで油の染みでもつけたら，職員室で広げるのが恥ずかしい。向かいの席の水野も，ジョッキを戻すと資料を仕舞っている。

繁華街の中心部の広場を見下ろす総合ビルの十二階。うだる暑さの下界を見下ろしてのビールは，美味しい。

水野が彼女と来る店なんだろうか。若い女性客や合コンらしき団体も見える。イタリアン中心の洒落た店だ。繁盛している店独特の明るい喧騒が心地よい。厨房からの掛け声も，華やかだ。

「大塚さん，いればなぁ」
「彼女に言うぞ」
「あ，勘弁。それよりさ，お前本当に彼女まだ出来ないのか？」
「しょうがない。事情が事情だから。俺の場合は性格重視でハードル高いんだ」
「まぁねぇ。しかし勿体無いよ。関口，外見は結構モテてるのにさ。青い瞳のクールな王子で」
「勝手だよ。こっちの事情も知らないでさ」

確かに，そう噂もされている。新任で入った時は，女子生徒からそれなりに黄色い声をうけた。けど，誰も目をあわそうとしない。

俺の目は青い。何故だろう。小さい頃に亡くなった父と母も，祖父母にも，青い目はなかった。先祖に異国の血が混ざっている訳でもない。

純正の日本人から，真っ青な青の目。でもそんな事を説明したと

ころで，ありもしない噂を立てられるのは目に見えている。曽祖父がイギリス人という事にしているのも，冷静に考えれば笑っちゃう程に滑稽だ。要らない噂をされないのはは良いけど，見たことのない曽祖父を勝手にイギリス人にした事は申し訳なく思っている。死んで黄泉の国で会えたら謝っておこう。うん。

「でも結婚とかどうするよ」
「彼女いないのにそういう話してどうする。あ，水野……」
「まぁ，秋に結納しようかって話だ」
「おめでとう」
「まだ早い」

ジョッキをあわせ，ビールを煽る。
さっきより水野の日焼けした顔が赤いのは，酔いのせいではないだろう。
そろそろ三十が見えてきた。結婚の字がちらつきだすのも，不思議ではない。さっきの大塚さんだってそうだ。
アルコールを含んだ息を吐くと，「アンチョビのピザでぇす」がテーブルの中央に置かれる。二人同時に手を伸ばし，塩辛さと苦味を堪能。一口食べると，空腹に気付いたのは水野も同じようだ。あっと言う間にピザは半月状態になっていく。

「式には呼べよ」
「おう。二次会の幹事も頼もうかな」
「よし。余興のマジックはまかせとけ」
「関口のマジックは本物だからヤバイんだよ。ほら，大学四年の卒業飲み会でさ，お札がテーブルを貫通するのやっただろ」
「あぁ，投げたコインがグラスを貫通するのとか」
「あれは傑作だったなぁ。教授，目ぇ丸くしてた。今や伝説だぞ。伝説」

そりゃそうだ。タネがあるのがマジック。俺のはタネなんてない。それこそ本物の超常現象。

少年漫画とかだと，こんな能力があれば世界を救うヒーローだ。でも，現実なんてこんなものだ。こんな能力があっても，役に立たない。せいぜい忘年会やコンパのマジックモドキをして余興に使うぐらいだ。本気で人に見せて生活しようと思ったら，ろくでもない稼業の人に利用されて化け物扱いされるだろうし。

こんな能力があっても，使えないのならないのも一緒。使わないのなら，ないのも一緒。そう思ってる。だから，教員して人並の生活を目指している訳で。

それでも，目の前の親友には結婚が控えている事実。対する俺は，何もない。

だって，こんな妙な能力があること，人に言えない。今の人生で満足しているのに，余計な雑音はいらない。

いっそ，俺が強欲で野心的だったらどんなに楽だろう。それこそ，宗教でも立ち上げれば楽な人生かもしれない。でも，望むのは，『普通な生活』だ。

衣食住がそろっていて，一緒に暮らせる家族や子どもがいて，笑いあって暮らせるのなら，何もいらない。両親が早くに死んだ俺にとって，祖父母の温かさは有難かった。でも，だからこそ『普通の生活』に憧れる。それなのに，この能力。いやになる。

「もうさ，宇宙人でもいいから運命の女だった思ったら，離すなよ」

「……宇宙人は困るな」

「なんだよ。関口も同じようなもんだろ」

水野の遠慮ない言葉に苦笑。確かに宇宙人のようなもんだ。未確認能力なんだから。

「そうだ。未確認生物ってたら，さっき白い鷹みたぞ」
「どこで」
「会館出たとこで」
「……白いカラスだろ。ここ，街だぞ。県庁所在地だぞ」
「だな。うん。見間違いか」

ましてや，鷹が笑うはずはない。気のせいだ。
そう思おうとして身震いをする。強い意志を感じる金色の瞳。『潮時ぞ』との言葉。あんなもの，見たことない。

「なんだよ。関口にも怖いもんあるんだ」
「あるよ。まぁ，でも，ありえんよな。気のせいだ」

水野の気遣わしげな視線を断ち切る為に，ジョッキを一気にあおる。食道を通り抜ける炭酸に眉をひそめ，憂鬱とともに息を吐き出す。
何もかも，なかったことにしたい。そんな思いが頭を掠める。この能力さえなかったら，どれだけ楽に生きられるんだろうか。水野みたいに，人生を共に行きぬく伴侶を得たい。そんな事すら不可能なら，使うことも出来ない能力なら，なんの意味もない。

「吉兆かもよ。白い鷹なんてさ，神様の御使いって感じじゃんか」
「蛇なら聞くけど。まぁ，そだな。そう思っとくよ」
「そうしとけ。深く考えるとハゲるぞ」
「あいにくと，俺の家系はハゲじゃない」
「……オレんとこはハゲなんだよ」
「ハゲる前に結婚できそうでよかったな」

俺は，いい友達を持ったよ。ホントに，サンキュ。

言葉には出さず，微笑んでピザに手を伸ばす。
水野の存在がなかったら，きっと自暴自棄な人生だった。なら，今のままで頑張っていくしかない。そう，判ってた事だ。アルコールと疲れで少し弱音が出ただけだ。

「明日は，ゆっくりしようかな」
「え，関口，部活いれてんのか？」
「いんや。休みだよ。夏休みの最後の週ぐらい休みにしないと，宿題やれんだろうし。俺が仕事しようか迷ってたんだ。新学期の実力テスト，プリントしとこうかなって」
「だよなぁ。オレんとこも休みだよ」

褐色に近いほど日焼けした顔が，溶けるように緩む。あ，デートにでも行くんだろう。
となれば一緒にツーリングなんて誘えないな。野暮な事はしない主義だ。心の中で「ご馳走さん」と囁きながら，メニューに手を伸ばす。

「パスタでも，追加するか？」

食欲をそそる文字に目を落とした途端だった。
聴いた事のない音に頭を殴られる。
それは，グラスが割れる前に響く音。花火が爆ぜる前の音。空気が震える音ではなく，何かが壊れる前に響く，音なき音。
破壊の前兆の音が，今まで聞いたことない爆音で響き渡る。
首筋の髪が逆立つのを感じながら，跳ねるように飛びあがり震源地を目で追う。
街路樹の向こう，生い茂った葉の向こう，広い四車線四車線の道路の合間に作られた噴水公園。その水の気配がブレている感覚。

「関口？」
「しゃがめ！」

反射的に手を道路側のガラス張りにかかげた瞬間，外からすざまじい勢いの空気がガラスに叩きつける。
一瞬で真っ白なヒビが入るガラスの壁に，とっさに頭に浮かんだ音を口笛で吹いていた。頭の中にガラスの粒子が水へ変化するイメージが浮かんでいた。
衝撃に耐えられないガラスが，砕け散りながら空中で水の粒へと変化していく。
俺，ガラスの粒子の配列を変えて水に変化させたのか？　今までこんな事出来なかったのに。
呆然と見ている間に，店内に突き刺さるガラスが横殴りの雨粒のようになって降り注ぎ，あたり一面を水浸しにしていった。
俺も何が起こったか分からないままズブ濡れで立ち尽くしていると，外からの悲鳴が目を覚まさせる。

「な，なんだ，今の」
「判んない。けど……まだ何か，来る」

吹き抜けになった壁から，風が舞い込む。道路からの悲鳴や怒号が，現実離れしたこの場を夢ではないと知らしめる。
テーブル向こうの水野に手を貸し，立ち上がらせる。

「何か来るんだ。ここから，離れたほうが，いいかも」
「何かってなんだよ」
「聞こえるだろ。この酷い音」
「聞こえねぇよ。何？　ヤバイ音か？」

水野との会話を聞いているのだろう。周りの人々が何も言わずに

立ち上がり，ジワジワと壁があったはずの場所へ近づく。人間の好奇心というものは，恐怖心を凌駕するらしい。

気味悪げに投げかけられる視線。気付きながらも，視線は噴水広場から離せられない。

俺にだけに聞こえるような音。まるでそれは，チューニングをしないまま始めたフルオーケストラに似ている。

幾つかの音が奏でる旋律は美しかったはずだ。リズムも，整えれば美しいはずだ。

でも聞こえるのは，指揮者なしで初見で勢いのまま演奏をしてしまった素人のような，無秩序で乱暴な音の固まり。

胸の奥の不安や苛立ちや怒りを，ざわりと逆さに撫でていく不快感。

「あぁ……咲く，花が咲く……通じる」

「お，おい？」

脳裏に，フラッシュのように幾つモノ映像が焼き付けられて消えていく。

青い蓮。零れる光。稜線を描き広がる地平線。白い山々の頂。抱きしめる温もり。見上げる宇宙の空の藍。藍。藍。

3　宙駆ける獣

白い珊瑚の砂浜。打ち寄せる波の音。鼻先を掠める青々とした香りと潮のニオイ。見上げる入道雲。金色の瞳。漆黒の刀身。広がる波紋。零れ落ちる雫。

「関口！」
「……っ」

腕を強く揺さぶられ，現実に引き戻される。
目に飛び込む惨状に，どちらが現実か迷う感覚。思わず額を押さえる。
今見たのは，何なんだ。瞬く光のように見えたアレは，何なんだ。

「大丈夫か？」
「あぁ……」

正直，大丈夫ではない。さっきから，何かおかしい。飛び散るガラスの破片を水に変化させた事も信じられない。
今までの俺は，モノを動かしたり繋げたりは出来た。でも，物質の粒子の配列を変えさせる事なんて出来なかった。明らかに，レベルアップしてる。それに，さっきから頭にフラッシュしてくる光景。どれも鮮明で見たことのない光景のはずなのに，心の柔らかい部分を締め付けられる。堪らなく，いとおしく懐かしい感覚に捕らわれそうになる。
どうなってるんだ，俺は。

「みなさん，お怪我はありませんか？　こちらに避難くださいー！」

ようやく店のスタッフが正気に戻ったんだろう。幾人ものホールスタッフが，慌ただしくお客の誘導を始める。

「火事かよ」「ガス爆発かな」「事故？　事件？　」

そんな言葉を零しながら，ずぶぬれの人々が去っていく。誰もガラスが水に変化した事を追及してこないのは幸いだ。

そりゃそうだ。非科学的。根拠のないこと。それでも，直前に声を出したからだろう。明らかに俺が何かをしたと，疑い気味悪がる視線を感じる。

「お客さま，こちらへ避難を」

「ちょっと待て……逃げるなら，裏口に誘導しなきゃ駄目だ」

誘導をしようと駆け寄るスタッフに，思わず零していた。

途端，周りの空気が変る。不安を形にしてしまった俺に，一歩引かれる雰囲気が漂いだす。

何故だろう。満員電車に吐きそうな人がいると，どんなに満員でも直径一メートルの空間が出来上がる。本能で危険から遠ざかろうという仕草。あれに似ている。

一メートルの中心は俺だ。危険人物。不吉な出来事を予言していく不審人物。

自分でもわかっている。こんな事を言わずに，黙って逃げればいい。でも，危険が差し迫っているのを感じながら無視は出来ない。

不快な大音響は，確実にクライマックスに向けて加速している。フォルテ，フォルティシモ，フォルティシシモ！

「建物の裏に行ける階段がいい。表に出ちゃ駄目だ」

「しかしですね，非常時の規則では」

「マニュアルなんていいだろ！　どうせフロアに誘導されても，避難する人が多くて動けなくなるぞ。早くここから出れる階段へ誘

導しろ！」

野球部顧問の水野の一喝に，辺りのスタッフが痙攣した。迫力ある喝に，周りの客のブーイング。慌てて厨房への通路が開かれていく。

水野の日焼けした手が，俺のリュックも掴む。避難する人の最後尾に並ぼうと歩き出す。

その途端だった。

夕焼けの赤い光を，何かが遮った。十二階の壁の向こうを，何かが飛び去った。

その異変に，店内に残った僅かな人が立ち止まる。恐怖ではなく，ありえないものを見定める為に。人間というものは，かなり好奇心が強いというコト。

震えるように互いの身を寄せ合いながら，吹き抜け状態でビル風が舞い込む壁の穴に近づいていく。

その光景に，首筋の毛が逆立っていく。思わず，傍らで動き出した水野のスラックスの裾を掴んだ。

「……行くな……」

「関口？　お前，真っ青だぞ」

「来る。何か，来る……そっちに行くな！」

俺にしか聞こえない不快なオーケストラは，鼓膜を限界まで震わしていた。噴水広場の異変は続いている。何か，起きている。

動揺しまくった頭と足を奮い立たせ立ち上がる。同時，生臭いニオイの風が舞い込んだ。

風と共に，壁面に現れたのは馬ほどもある動物らしき獣。

十二階に，浮かんでいる。空を翔るように移動していく。その太く逞しい四肢には大きな爪。茶やら黒やらの長い体毛に覆われた体は虎のようにしなやかで。左右でいびつに大きさが違う目には，野

生の獣の光を宿して。ある獣は歪んだ角を勇ましくのせている。
一頭ではない。まるでパラパラ漫画のように，次々と獣が飛んでいく。
ありえない絶景に，空気が固まる。

「う，うわぁぁあ！」

誰のかも判らない絶叫が，凍りついた時間を砕かせる。
悠々と飛んでいた獣達の数頭が，宙を蹴る足を止める。ドミノのように，次々と頭を向きをビルの中に向ける。獲物を見つけた獣の獰猛さを撒き散らし，咆哮と同時に俺たち目掛けて駆けてくる。
悲鳴と絶叫がパニックを起こす。
それまで固まっていたと思えない動きで，厨房へ向けて人々は走り出す。
水野が馬鹿力で二の腕を引っ張ってくる。それを振りほどき，息を吸い込む。
俺は，何をしようとしてる？
冷静に，そう考えている自分を感じながら喉から音を響かせていた。

『耳を傾けよ　吾らが父なるエンが　母なるナンムが囁く言葉に』

その音を，知っている。
この旋律を知っている。
この感覚を知っている。
体の粒子が騒ぎ出す。まとう空気が，動き出す。巻き上がる風に，自分の中で動き出す，俺が知らない意思を感じていた。

『全てを包み込む風よ　そなたは美しい　この世を駆け巡る風

よ　その最も強い力よ　』

真っ赤な口を見せて駆けてくる獣を見据え，唄う。巻き上がった風は，辺り一体の空気を全て巻き込む勢いで空気の壁を作り上げる。鋭い突風が獣達に向かって吹き荒れる。

『　吾らを護れ　』

まるでガラスに激突した雀のように，巻き上がった風の壁とぶつかると獣達は音もなく下へ落下していった。

まるで殺虫剤をかけた虫の最後のよう。そう思えるほどのあっけなさ。

そのありえない光景に立ち尽くす水野の手を引っ張る。ここが危険なのは変らない。

「階段どこ?!　早く誘導して！」

「は，はは，はいっ」

訳の分からないまま，スタッフが機械仕掛けの人形のように厨房へ走り出す。その姿に，居残った人々が小走りに動き出していく。

頭は動かなくとも，体は動くのだろう。呆然とした顔のまま，導かれるまま動く。すでにフロアから悲鳴と絶叫が聞こえる。

厨房の冷蔵庫の前を通り，ダンボールの積み上げられた狭い通路を走り抜けると，関係者用らしき階段が現れた。

無言のまま吸い込まれるように駆け下りていく人々。その流れに水野を押しやる。

「裏通りを使って逃げろ。出来るだけすぐ地下鉄に飛び込んでそんまま帰れ！」

「帰れる訳ねーだろ！」

人波に逆らって階段を駆け上がろうとする俺に，水野の罵声がかけられる。
誰も止めない。我さきへの混乱の中，水野は駆け下りる人波に逆らいつつ俺の手を掴む。

「どこ行くんだ」
「屋上。確かめたいんだ」
「馬鹿かお前」

率直な水野の意見に苦笑しながら，階段を上へと駆け上がる。
本当に，馬鹿だ。命が危険に晒されるだろう状況なのに何をやっているんだろう。そう叫ぶ頭の中の声に頷く俺。
反面，細胞から湧き上がる衝動に体は突き動かされていた。確かめなければ。この目で見てみなければ。きっと，この騒動と無関係ではない。確信していた。
何故，いきなり自分の力が変化したのか。脳裏にフラッシュされる光景は何か。
狭い階段を数階駆け上がると，ドアに当たった。屋上だ。

「クソッ。鍵かかってるぞ。どうする」
「ぶち開ける。下がれ」

水野が背後に下がったのを確認して，ドアノブに手をかざす。鋭く吹いた口笛は，再び風を巻き起こした。アルミの安っぽい扉が紙粘土のように凹んで弾き飛ばされていく。

「すげ」
「なんだこりゃ」

目の前に広がった光景に，間抜けた感嘆詞しか出てこない。
夕焼けで赤く染まるビルの谷間を，何十頭もの獣が宙を駆けあがっていく。風と悲鳴を巻き起こし，飛び舞っている。
危険も忘れて，俺たちは屋上に飛び出る。ある意味幻想的な光景に飲み込まれていた。
無機質で人工的なビルという森に，ありえない進化を遂げた動物らしきものが空を飛んでいる。
さらに吹く風に乗って，半透明な小人が飛んでいる。長い髪をなびかせて，中性的な細い顔に微笑みをうかべて飛んでいる。幾人もの小人が俺の周りを回り，笑い声を立てている。
妖精か？　だとしたら，俺，妖精まで見えるようになったのか？

4　扉　開く

恐ろしい非現実的な絶景を前に，立ち尽くしていた。
耳を突き破るような騒音はまだ鳴り響き，階下の地上から悲鳴と怒号が起きている。少々の事では驚かない都市の人々が，命がけで必死に逃げ惑っている。遠くから鳴り響くサイレンの音に，我にかえる。

「これ，関口がなんとかするのか？」
「出来るかよ」
「だ，だよな……でも，今日のお前変だぞ」

それは認める。こんなに能力を使うなんて。唄まで唄ってしまうなんて。妖精まで見えるなんて。
横からの視線に気付き，首を振る。水野には見えてないか，妖精の一人が水野の短い髪を引っ張っているが気付いていない。これについては……黙っていた方がいいだろう。

「俺も訳判んない。急に唄が浮かんで唄ってたんだよ」
「何語だよ。聴いた事ない言葉だったぞ」
「俺も知らん」

英語ではない。第二言語で履修したドイツ語でもない。水野も知らないという事は，水野の第二言語のフランス語でもないという事か。

「でも，唄って風を動かしたよな。あのバケモノを弾き飛ばしたぞ」
「うん……でも，こいつら全部相手に出来る度胸はないぞ」

「また唄が浮かんでこないのか？」
「そんな都合よく出来ない」
「なんだよ。役に立たないなぁ」

その通り。まったく役に立たない。屋上に出たものの，何も出来ない。その事を痛感しただけだ。
どうする。このまま，逃げるか。いや，出来る事はないんだろうか。
この騒動とともに，俺の中で変化が起きているのは確実。ＲＰＧゲームの勇者気取りのつもりは全くないけれど，何か理由があるのなら，出来る事があるのならば，やるべきかもしれない。
空とぶ獣を警察が何とか出来るとは，到底思えない。一頭ずつライフルで撃つには，危険すぎるし時間がかかりすぎる。他の場所に逃げ出したら被害が広がる。
風を，また操るか？　さっきの唄を，再び唄うとか。いや，でも……。
頭の中を，色んな考えが堂々巡り。あぁ，この調子はずれの騒音の中で考えがまとまらない！
思わず頭をかきむしった，その時だった。
耳を支配しかけていた騒音の中に，一筋の音が混ざる。
それは，強くしなやかに響き渡る。灰色の雲間から差し込む光のように，天使が舞い降りてくるように，清らかに美しい。
知っている。これは『正しい音』。これは，調律の音。乱れた世界の音を紡ぎなおす，縦糸。ならば，もう一つ音が必要だ。縦糸には，横糸。世界という布を織り上げる，秩序を作り出す，もう一つの音は和音を作り出す。
この音を響かせるのは……そう，この音だ。
唇を狭め，音を奏でる。空気の振動が広がる。水面に雫を落として広がる波紋のように。そうして，めぐり合う。もう一つの音と触れ合った途端，新たな響きが生まれだした。

聞いた事のない音。でも，この音を聴きたかった。その感情だけが体中に湧き上がってくる。そうだ。俺が聴きたかったのは，この響きなんだ。

心地よくて体も心も溶けていく。至福の音。

互いに求めるように，音はさらに大きくなる。響き渡る。

飛びまわっていたバケモノ達が，金縛りにあったように宙で止まっている。風にのって踊っていた妖精は，うっとりと漂いだす。

「関口，あれ！」

水野の指差す方角から，より強く音がやってくる。噴水広場の中心のシンボル，競泳用プールほどの広さのガラスの池が青く光りだしていた。水面から無数の光が舞い上がり大きな蕾を作り出していく，そんな幻想的な光景に目を奪われて。至福の音がこれ以上なく大きく膨らんだ瞬間弾け跳ぶように，蕾の花弁が開き崩れるように，青い光が霧散していく。その青い光と共に，真っ白な鷹と人影が飛び出して宙を駆けてくる。

あやうく，口笛の音がぶれそうになる。必死に音を保ちながらも，目を奪われた。

赤毛の大きな鹿に騎乗している女性が見える。いや，鹿にしてはたてがみがある。しいていえば，ビールのラベルにある麒麟（きりん）の絵に近いかもしれない。そう。古代中国の想像上の霊獣，麒麟（きりん）。

その麒麟（きりん）にまたがったっている女性は，流鏑馬の侍のような格好。ただ，薄汚れた胸当てや所々に赤い染みがある袴が妙に実戦の雰囲気。後頭部で結い上げた漆黒の長い髪が，美しく風になびいている。

『……！？』

女性の叫び声が聞こえる。何か問われたようなニュアンスだけど，意味は判らない。ただ，明らかに異質の響きに思わず水野と顔を合

わす。

『……！』

再びの声と共に，上空をすり抜け様に何かを落とされる。思わず反射的に駆け出し，手を伸ばして受け取っていた。

手に落ちる異様なほどの重み。時代を感じさせる黒い鞘と柄の紐。知っている。この刀を知っている。漆黒の刀身。刀であって，これは刀でない。

俺は，知っているんだ。

『抜くがいい。唄うがいい。お前は，唄う為に生き抜いたのだろう？　待っていたのだろう？』

頭に響く声に，目の前のネオンの看板を見上げる。先に見た純白の大鷹が見下ろしていた。金色の瞳を，楽しむように細めている。

『時と空間を越えて，再び会えた。さぁ，大黒丸（だいこくまる）を抜くがいい。』

獣が空を飛んで，妖精が見えて，鷹が喋って，麒麟（きりん）に乗った女性から刀を投げよこされて。俺の頭の中は真っ白だ。

でも，これは判る。この刀は，抜かねばならない。獣を停止させた『正しい音』は，確かにこの刀から響いているのだから。

『唄え』

一拍だけ，息を止めた。唇をかみ締め，ゆっくりと鞘を抜いていく。黒い刀身が，夕焼けの赤い光すら吸い込むように輝きだす。宇宙の深みのような，何処までも黒い光。

見えていた光景が消える。暗闇の中，柄を強く握る自分の存在だけ，心臓の音だけが大きく聞こえた。
光を。暗闇の存在に相対する，偉大な存在を。この響きを。この唄を。

『　八百万（やおよろず）の神々の　住まう天地　深淵（しんえん）の果て　全てに響かせ轟かそう　』

浮かぶままの言葉と旋律を空気に乗せていく。丁寧に，響いていく感覚さえいとおしむように。
見上げた夕闇の中に，一番星が微かに見える。
何故だろう。見慣れた空のはずなのに，はじめて空を見上げたように感じる。胸が高鳴る。細胞の一つ一つが激しく身震いしていく感覚。体中を雷のように予感が走り抜ける。全てが変る，そう叫んでいる。

『　天地合わさる果てにまで　全てを包む風にのせ　汝の僕（しもべ）　関口晴貴は唄いましょう　』

風が舞い上がる。屋上いっぱいの置かれた冷房装置のファンから巻き上がった温かい空気を巻き込みながら，風が巻き上がる。妖精たちが踊りだす。
音が，一音一音輝きだす。空気を輝かせながら響いていく。様々な色の光の粒になり，空間を染め上げていく。
これは，きっとただの唄じゃない。まるで，光の呪文。全てを輝かして，ゼロに戻す呪文。それでも，このゼロは何もないわけではない。すべてをニュートラルに戻していくゼロ。プラスでもマイナスでも，『無』でもない。これはきっと，始まりの唄だ。
獣達の気配を，強く感じる。肌に感じるのは，悲しみの感情。怒りの感情。

あぁ，そうだ。きっと帰りたいんだ。叫ぶ咆哮は，嘆きの叫び。迷子で泣いているんだ。見知らぬ場所に来てしまって，怖くて暴れていたんだ。

帰ろう。帰ろう。ウチへ，帰ろう。

君たちのウチは判らないけど，何処に帰るのか判らないけど，俺に出来る事は唄うことだけ。なら，唄おう。丹精込めて，この唄を唄おう。

見上げる空は，見る間に青く暗くなっていく。日が沈み，新たな世界が広がっていく。

きっと，俺の中の何かも変る。先までの，俺ではなくなる。

見知らぬ言葉，聞き覚えのない旋律，見覚えのない光景。ほら，また頭をよぎる。

それは青。透き通る，微かな青。零れ落ちる雫。あぁ，空の色だ。

『　この音は音でなく　神の御息吹なり　鼓動なり　』

抜いた刀身を，再び鞘に収める。鍔（つば）が立てた音が静けさに響き渡った。最後の波紋が広がっていく。獣達が次々に光に包まれ落下していく。音もなく，ただ輝いて漂うように落ちていく。

「す，すげ……全部，全部，光ってくぞ。退治したのか？」

「退治，じゃない，な。戻しただけだ。ただ，戻しただけ」

足が笑っている。唄い終わった途端に，全身の力が抜けていく。とっさに刀を落とさないよう胸に抱きこんだまま，温かいコンクリートの床に倒れこむ。

「関口！」

「だ，大丈夫……は，はは……すんげー気持ちいい」

「大丈夫か，おい」

水野が不安そうに，俺を支えて座らせる。肩で息をしながら，リュックからペットボトルを取り出す様子を見ていた。

体は大丈夫だ。ただ，酷く疲れている。そして，とてつもなく気持ちよかった。大音響のヘッドホンでお気に入りのテクノとかを聴いて踊りまくったような，ハイテンション。心が空のように広がって解けて，世界中の全ての存在と交わったような，精神的開放感。体中の細胞を作り変えたような快感。

5　次への一歩

まだ荒い息のまま，差し出されたペットボトルを傾ける。生温い緑茶だけど，すきっ腹にアルコールで過度な運動をした体には，心地よい。

「大丈夫か」

「……サンキュ。助かった」

濡れた口周りを手の甲で拭い，立ち上がる。

刀を，返さねばいけない。

さっき，宙を駆けて刀を落としてよこした女性が，麒麟（きりん）を従えて歩いてくる。

冷房の外気ファンで巻き上がる生温い風に黒髪を揺らめかせ，歩く姿には空気すら引き締まる様な威厳があった。まだオレより少し若いだろうに。整った顔は張り詰めた凛々しさがあるが，かえって僅かに残った幼さが見える。

あ，オレと同じ青い瞳。

視線が合わさって，瞳の色に気付く。彼女も気付いたのだろう。黒い髪に，青い瞳。まるで魅入られたように，見詰め合う。微かに茶が混じった彼女の青は，何を見ているんだろう。俺の，何を見つめてるのだろう。怖いぐらいの，まっすぐな視線。

「あ，あの，これ，ありがとう」

見詰め合っていたことに気付き，慌てて刀を差し出す。彼女も慌てて目をそらした。そして，刀を差し出された事に気付いた途端，大きく首を振った。

『……！　……，……』

予想していたとはいえ，全く言葉が理解出来ない。聴いた事もない発音で返される。

「要らん，言ってるっぽいな」

「そんな感じだけど。でも，これ彼女のだろ？」

『これは誰のものでもない』

突然割り込んだ言葉に，水野も息を飲む。どうやら水野にも聞こえたらしい。口を酸欠の金魚のように動かして，ネオンの看板に止まっている白い鷹を指差す。

「せ，せき，関口，喋った！」

「うん。さっきから喋ってる。あぁ，彼女にも聞こえるみたいだ」

「つーか，拝んでるぞ」

彼女は，コンクリートの床に平伏していた。深く頭を下げた姿に，本来白い鷹が喋ったら拝むのが普通だなと思う。威厳を威厳と思わずに，異質のモノだと見なして驚くだけの俺達は不遜極まりない蛮人と思われているかもしれない。

『その刀は大黒丸（だいこくまる）。クマリ族が伝える秘宝だ。我ら世界の天地創造の瞬間に零れ落ちた天からの一滴。どうやらハルは，大黒丸（だいこくまる）の価値に気付いてないようだ。ミル，そなたが預かっていろ」

「……，……？」

『ふむ。ではこうしよう。繭玉（まゆたま）は我が連れて帰る。それでよかろう』

白い鷹は，彼女をミルと呼んで会話をしている。まるで奉行様が

白州の上で平伏する罪人へ話しかけるような。少し例えが違うかもしれないが，圧倒的な恭しさすら漂っている。

『我は先に帰る。さて……どうするかは，自らの意思で決めよ。ハル……関口晴貴よ』

「オレの名前，知ってるんですか？」

豆鉄砲を食らった鳩のように，白い鷹は目を瞬いた。

『これはまた……記憶がないか？　まぁよい。いずれ思い出す。その時が楽しみだ』

白い鷹が大きな羽根を広げる。途端，獣が変身した光の繭が引っ張られるように鷹を目指して浮かび上がっていく。地上へ落ちたものも，巻き戻しをリアルに見ているかのように浮かび上がっていく。それは，明らかに非現実的な美しさ。

『こちらで治安を守る兵達が，そこの階段を駆け上ってきているぞ。逃げるなら今のうちだ』

「治安……警察？！　ちょ，ちょっと！　俺たちはどーすれば」

『また，会おうぞ』

必死の声に，白い鷹は目を細めて笑った……気がした。途端，流れ星の如く空へ駆け上っていく。無数の光が，煌めきながら空の一点となっていく鷹を目指して吸い込まれるように飛びあがる。まるで地上へ落ちた流れ星が舞い上がっていくような，そんな幻想的な美しい光景。数多の光が空の星へと消えていく。

全ての疑問と問題を残したまま，鷹が一人で喋って消えてしまった。

残されたのは，俺と水野と，言葉が通じない女性と。

バクバクと心臓が早打ちを始める。多分唯一の階段は警察が駆け上ってくる。止めようにも，扉は俺がすでにぶち壊した。ここは二十数階の屋上で，両隣はここより高いビル。屋上へ飛び移るなんて技は出来ないし。乱立した冷房の外気ファンの物陰に隠れても，数分の時間しか持たないだろうし。

「捕まったら，ヤバイよな」

「免職だろ。教員免許取り上げで失職」

早口の言葉に，自分でも冷や汗が流れるのを感じる。

それだけは，避けたい。そうなれば，ここから逃げるしかない。

逃げるには，どうするか。

視界に入った麒麟（きりん）に駆け寄る。考えてる暇なんてない。

「これに乗らせてくれ！」

『……？！』

「水野，来い！」

何語か判らないが，ミルと呼ばれた女性が止めようとする。大切な相棒なのかもしれないが，この際使うしかない。お礼なら，後でするから。

戸惑う水野の腕を掴んで麒麟（きりん）の背へと押す。「コレに乗るのかよ！」とどもりながらも，水野はこの非常時にきちんとカバンを背負っている。しかも，俺のも。

妙な几帳面さに苦笑いしながら，麒麟（きりん）の首を撫でてあやす。大丈夫。水野は冷静にコイツの背にまたがって飛べる。

意外なほど触り心地のよい毛足の長い麒麟（きりん）の首を軽く叩いて，女性を促す。

「ほら，頼むよ。水野乗せて飛んでくれよ。でないと，俺も飛べ

ないよ」

「関口，飛ぶつもりか?!」

「どう見てもコイツの背中は二人乗りじゃん」

「っつーか，関口は空飛べるのかよ！」

「やってみないと判んない。けどお前より飛べるだろ」

馬鹿な確率だけど，賭けるしかない。俺が風を操って浮きながら麒麟に捕まれば三人でここから逃げられるかもしれない。

明らかに麒麟にまたがった水野に三日月の眉を潜めた彼女に，懇願する。もう，手はない。時間もない。

「頼む！　コイツを乗せてくれ！」

『……？』

貴方は?

そう聞こえた。そう，思った。

思わず彼女の手を握る。俺は大丈夫だから。

だから。

「ミル！」

ビクンと，彼女の細い肩が震える。同時，階段から複数の足音が雪崩のように近づいてきた。地響きのような音で促されるように，ミルが軽やかに水野の後へまたがる。

『……！』

ミルの掛け声と共に，麒麟が走り出す。

「ひょえっ」と間抜けた合いの手のように水野が声を出して麒麟の首にしがみついた。俺もたてがみを掴んで走り出す。

早くなる助走。目の前迫るネオンの看板。なだれ込む沢山の足音。
静止を命令する怒号。
迷うな！　飛び込め！

「うおおお！」

俺の叫び声で，ミルは僅かに麒麟（きりん）の胴を蹴った。
そこに階段があるように麒麟（きりん）は宙を駆け上がる。ネオンの看板を踏み台にするように蹴り飛ばす。

「風，吹けぇ！」

足の下に，豆粒ほどの人影とミニカー並の車が見える。次の歩みはない。強く強く息を音として吐き出す。芯をもった口笛が鳴り響く。
重力が俺の足を引っ張った瞬間，爆風が下から吹きつけた。
大きくバランスを失いかけたまま，麒麟（きりん）ごと俺たち三人が空へ巻き上げられる。
出来る。出来るかもしれない！
風の妖精なのか，長い髪をたなびかせた小人達が大笑いしながら俺の周りを飛びまわりだす。まるで初めて空を飛んだ雛鳥をあやすような感じ。
事実，俺の体を掴んだ重力の力は感じない。まるで風の一部になったように，俺の体は麒麟（きりん）の横で浮いている。

「行こう！　このまま飛んで行こう！」
「せ，せ，関口，下，下見るなよ！　落ちるなよ！」

ドモリまくりの水野は，必死の形相で麒麟（きりん）の首にしがみついてる。
麒麟（きりん），可哀そうに苦しくないだろうか。

苦笑いで口笛を吹きながら，ミルを振り返る。
ミルも，笑う。光が零れる。

「このまま旋回して。あの沢山の高いビルを目指して！　街から出よう！」
『……！』

今，言葉は通じてる。きっと，大丈夫。
心に確信。彼女は，味方だ。きっと，俺の何かを知っている。
大きく旋回しだした麒麟（きりん）を操りながら，茶色交じりの青い瞳で俺を見つめた彼女は微笑みながら頷いた。

『……，ダショー・ハル！』

何か，騒ぐ。
ミルの零した言葉に，心の奥底がザワリと揺れる。細胞が，身震いをした。
ダショー・ハル。
それは，誰？
鳴り響く風の音に包まれ，ミルの笑顔に目を奪われながら，星のように瞬きだした都会の夜景を足元にして，俺は空を飛んでいる。

6　騒がしい朝

今話は最後のみ，少し痛々しい表現があります。
『血』や『怪我』の描写すら苦手な方はお気をつけ下さい。
＊＊＊

その後，どしたんだ？　意識朦朧で酔って帰った夜は，水飲んでソファで倒れこんでて，朝になる。その習慣通りに俺は動いたようだ。で，寝てしまった俺に困って，彼女は洗面所からバスタオルを見つけて掛けてくれたんだろう。目を閉じてみよう。夢だ。これは夢だ。夢に違いない。

僅かな希望と戸惑いをもって，呪文のように唱えてみる。ほら，目を開ければ，むさい俺の家だ。日常のはずだ。

いる……やっぱ家に女の子がいる！　安らかな寝息を立てる彼女は，先と同じ場所で同じ姿勢で寝ている。

昨日の騒動は，酔った上での夢で，彼女は『お持ち帰り』なんてオイシイ状況とか……。そう思いたいけど，『お持ち帰り』ではない。明らかに異世界からの訪問者だし，銃刀法違反の状態だし。

が，女性であることに変りはない。こういう場合，起した方がいいのだろうか。

もう暑いほどの日差しが差し込む明るいリビングで，床に座ったまま寝てる彼女。昨夜の威厳ある姿とは違い，驚くほど無防備な寝顔に吸い込まれるように近づいてしまう。

日焼けした肌は，健康的だ。無駄な脂肪なんかついてない，すんなりと長い手足。閉じられたまつ毛は長くて，ほんの少し開けられた唇は桃色で。目鼻立ちははっきりしていて，髪の色は黒で肌も象牙色だけど，東洋人とも違う雰囲気が漂っている。そりゃ，そうだ。異世界の人種に東洋人とかなんてないだろう。その異質な雰囲気と顔立ちで，まるで芸能人でも見てるような感覚。お茶やミネラルウォーターのＣＭで微笑む女の子みたいだ。こんなキレイな子，見たことない。

「……」

吸い込まれるように，彼女に手を伸ばしていく。その肌は，その髪は，その唇は，どんな感触？

指先が頬の触れるその瞬間，玄関から猛烈なチャイムの連打音。
飛びあがる心臓を押さえ，慌てて後づさる。
お，俺，何しようとしてたよ？
いや，やましい事は考えてなかった！　けど，うわぁ……心臓がバクバクだ。

「関口，せーきーぐーちー！　いるんだろ！」

玄関から聞こえる遠慮なき水野の声に，あたふたと立ち上がる。
年代モノの玄関の扉を叩く大きな音で彼女，起きたりしないだろうか。
そんな心配しながら，慌ただしく玄関の鍵を開ける。疲労困憊でも，しっかりと鍵はかけていたようだ。

「おはよう。昨日はちゃんと家に帰れたか？」
「お，お前，そんな冷静になってんじゃねーよ！」

いや。俺は冷静じゃない。
そう言いたいが，水野は猛烈な勢いで話し出す。
昨日から幾度もメールした事。返事がないから，朝から電話かけまくった事。それでも連絡がつかないから，心配でたまらず来たとの事。今頃，リュックの中のケータイは点滅しまくりだろう。

「あぁ，すまん。寝てた」
「みたいだな。昨日のまんまの格好だし。で，どうなんだよ」
「何が」
「彼女だよ」

心臓がバクンとリズムを変えて動き出す。
開けた口から，言葉が出ない。感情だけが頭をひらめくように駆

け巡る。
女性が家にいる驚きと，戸惑い。彼女の可愛らしさと，その美しさに見蕩れてた自分への羞恥。それから，嬉しさと照れくささと。
これじゃあ，高校生のガキと変らない。それは判っているんだけれど，動揺する自分を立て直す事が出来ない。
パクパクと口だけ開けて赤面する俺の様子で，全てを察したのだろう。水野は短い頭をガシガシとかきむしった。

「あぁ，判った，いるんだな？　でもって，困ってるんだな」

本当，女に免疫ないんだな。
水野の最後の言葉に俯く他ない。と，足元にもう一つの影が入ってくる。薄ピンクのマニキュアがきれいに塗られた，真っ白な小さな足。細い紐が編みこまれた女性物のサンダル。
思わず顔を上げると，初めて見る女性が心配げな顔で立っていた。

「あぁ，その，オレの彼女」
「初めまして。山口由美子と申します」

水野による簡潔な紹介で，ペコリと下げられた頭。ショートカットの髪から，花の香りが漂う。暑苦しい夏の空気が，一瞬穏やかになる感覚。慌てて名乗って頭を下げる。
おそらくは，デートに出かける所だったんだろう。水野の服はいつも会う時より小奇麗な事に気付く。

「車で待ってろって言ったろ」
「だって，いつも話に聞いてる水野さんじゃないの。挨拶しない方がオカシイよ」
「そうだけど今日は別なんだって」
「なによ。私，親友に会わせたくもない彼女ってこと？」

「そうじゃないんだってば。あぁ，つまりさ，キチンと」
「キチンと何よ」

そうやら由美子さんは，白のワンピが似合いそうな華奢で小柄な容姿から想像できないほどエネルギッシュな女性らしい。威勢いい水野が，すっかり劣勢で押され気味なのを呆然と眺めてしまう。真っ黒で立派な体格の水野と，小柄な由美子さん。大型犬のゴールデンレトリバーが，小型犬のスピッツにやり込められてる印象すらする。

止めることも出来ず立ち尽くしていると，二人が突然に俺の背後を見て黙り込む。

まさか。

『……，……？』

彼女が，立っていた。

流鏑馬の侍の如く腰に大小をさげて着物姿の彼女。黒い髪に，茶交じりの青い瞳。手にあるのは，黒い鞘の刀。

本能で，由美子さんの手を掴んで玄関に引き込む。水野も物言わずに素早く玄関の扉を閉めた。素晴らしき連係プレイ。やってしまった事に気付き二人で目を合わせたところで，由美子さんの冷静な声がかかる。

「関口さん，そういう趣味なの？」
「そういうって，どういう」
「コスプレでプレイ」

爆沈。

プレイって，プレイってなんですか。飛び出した言葉の過激さに絶句。この流鏑馬サムライの格好でするプレイを想像しかけて現実

に戻る。冷静になれ，俺。
追求する由美子さんの鋭い視線は，真実を追究する検事のようだ。目がすわってる。
救いを求め，目玉だけ動かして俺は水野を見た。ダメだ。水野，すごい汗かいて立ち尽くしている。
なんて女，彼女にしたんだよぉ。泣き言を心の中で叫んでしまった。

「ってな訳，ないわよね。彼女，誰？　何処の国の人？」

つぶらな瞳が，鋭く素早く俺たちとミルを見比べる。追求の言葉が厳しくなってくる。不自然さを感じ取っている言葉の雰囲気に，言い訳を考える頭が空回りばかり始める。あぁ，どうしよう。

「で，なに？　答えられない事したんですか？」
「えー，その」
「うん，まぁ，ほら，関口っ」

俺に振るなっ。こんなに怖いのは，小学生の時ばあちゃんに宿題を誤魔化したのがばれた以来だ。
キリキリと，由美子さんの整えられた眉が上がっていく。目が見開いていく。限界点まで到達した途端，ミルの体がガクリと床に崩れ落ちた。

「ミル！」

慌てて抱き起こす。首を支えようと後頭部を手の平で包んだ途端，ありえないほどの熱さを感じる。酷く汗ばみ，呼吸が荒い。
どうしたんだ。
じっとりと汗ばんだ細い首筋に手を伸ばしかけて，慌てて顔を上

げる。

「熱がある。水野，足持って。とり合えず，横にしよう。由美子さん，そこの洗面所からタオル持ってきて」

抱き上げると，軽い。こんな華奢な体で異世界のここに来るなんて，よほどの事情があったんだろうけど。

ただの疲れならいい。

あちこちに血の滲んだ着物を見て，嫌な考えが浮かんでしまう。

「ゆっくり，せーの」

声を掛け合い，ゆっくりとリビングのソファに横にさせる。察しよく濡れタオルも用意してきた由美子さんが，ミルの顔を優しく拭きながらも心配そうに額に手を当てた。

ここに女性がいるのだから，偶然居合わせた由美子さんに頼むしかない。チラリと水野を見てから，背を向ける。

「……由美子さん，着物を緩めてあげて。出来たら，怪我がないか見てくれないかな」

「うん。じゃあ，ごめんなさいね」

言葉が通じないミルに一声かける。僅かな衣擦れの音。そして小さな悲鳴。

「なにこれ……何でこんな怪我してるの?！」

由美子さんの言葉に，思わず振り返っていた。答えは残酷に現実を突きつけた。

真っ白な小さな肩に抉ったような穴の傷。そう。矢のように刺さ

った何かを抜いたら，そんな小さく鋭く抉った傷が出来るだろう。
その周辺だけ固まった血が張り付き，肌がどす黒く腫れ上がっている。そのグロテスクな光景に俺達三人は立ち尽くした。

7　癒しの唄と現実と

最初のみ，傷の描写があります。
血や怪我が大ッ嫌いな方，お気をつけください。
＊＊＊

拭いてやる。
彼女は，ミルはどんな理由があってココに来たのだろう。獰猛な空飛ぶ怪獣も連れてやってきた訳とはなんだろう。

「ねぇ。病院，連れていきましょうよ。どんな事情であっても，こんな酷い怪我だもん。とり合えず診察してもらおうよ。その後どうするかは」
「病院には，連れていけない」

由美子さんの言葉に返事をしながら，自分に覚悟を言い聞かせる。そうだ。昨日の出来事が全て本当なら，彼女を病院に連れて行くなんて出来ない。ミルは，俺と同類だ。あの化け物を光の繭に変える唄は，彼女の唄う最初の音がなかったら出来なかった。ミルは，明らかに化け物を封じ込める為に，唄っていた。俺と同じく音でモノを操る力を持っているのは間違いない。
戸惑う由美子さんを正面に見て，告白をする。これが現実と自分に覚悟を決めるためにも，はっきりと言う。

「昨日の騒動が掲示板でどう言われてるか知らないけど，ガス爆発じゃなかった。確かに噴水広場から化け物が飛び出した。ミルも一緒にね」
「関口，喋るのか？　バラすのか？」
「水野が嫁さんにって惚れた彼女にいなら，大丈夫だろ？　ここまで見たら，真実を言ったほうがいい」

俺は信じてる。水野を信じている。信州で俺が唄った時，お前は俺の全てを受け入れて信じたじゃないか。

「今度は，俺がお前を信じる番。由美子さん，これから話す事は全部秘密にしてほしい」

俺が唄う音でモノを動かせる能力がある事。昨日の化け物や怪獣が消えてしまった訳。ミルも同じ能力があるらしい事。

全てを話し終ると，痛いほどの沈黙が訪れた。

動揺してパニックになってくれた方がどれだけ気が楽だろう。由美子さんは水野に手を握られたまま，じっとミルを見下ろしている。

沈黙を埋めるための言葉も浮かばずに，俺はただミルの頬を撫でた。

汗に濡れ，苦痛に眉をひそめた顔なのに綺麗だと思う。気高く，美しいと思う。

薄桃色の唇が，わずかに動いて言葉を零す。茶色混じりの青い瞳に見つめられる。

『ダショー・ハル……』

灰色の雲が流れる夜空。細く輝く月。流れる水。

固く固く握り合う手。細く長い指を絡ませるように，二度と離れぬように。

栗色の髪をそっと撫でると，緑の瞳が開かれる。何かを囁いた口元に浮かぶエクボ。愛しい少女。僕の，大切な人。

ダイジョウブ。ダイジョウブ。ボクガツイテルヨ。

「……っ」

まただ。脳裏にフラッシュされる見たことのない影像。それだけじゃなく，感じたこともない感情すら浮かびあがってくる。

こんな記憶，覚えがない。まるで自分の体が自分ではなくなる感覚。

思わず目を固く閉じる。昨日から変だ。

元々あったとはいえ，不可思議な力が強くなっている。同時に，

覚えのない影像が頭の中に蘇る。何が起こっているんだろう。このありえない状況に関係しているのか。しているとしたら，何の意味がある？　判らないことだらけだ。

何か異変に気付いたのだろう。ミルが，そっと手を差し出して俺の手を包み込む。

『……。精霊の加護を願い給う。　月の神シンと大地母神へ願い給う。　我は汝の僕ミル。最後のクマリの巫女　』

ミルの囁きと同時，眩暈のような感覚と共に再び影像が蘇る。震える空気の振動が心地よい。唯一の法則にそって，統べていく。そうだ。俺は知っている。憶えている。頭の中に響く音と旋律を知っている。

「『　その御力の周りを巡る星。雌鹿の小道を歩く者　』……そうだ，そう……」

「関口，これって，この唄って！　」

「昔唄ったよな。これ，お前がバイクでこけた時の唄だよ。ようやく歌詞が判った。そっか，そうなんだな」

今なら，あの唄の意味が判る。あの時は音を口笛で紡ぐだけだった。溢れる旋律を音にするだけで精一杯だった。でも，今は違う。その音が意味する事も，言葉の振動の動きすらわかる。必要な音と，リズムと，言葉の力。三つが生み出す力が，感覚でわかる。

傍からみたら，おかしくなったと思えたんだろう。水野の慌てる顔に微笑んで頷く。

「やっぱ俺はミルと同じなんだ。この唄はさ，癒しのだよ。免疫を高める響きだ。そうか。この唄，唄わなきゃな」

「関口，まさか唄うのか」

「唄わなきゃ，彼女は死ぬ」
「そりゃ，そうだけど」
「昨日から変だ。急に力が強くなってる。水野だって感じてるだろ？　俺，知らない言葉で唄いだしてる。風を操ってるし，空飛んだし。見えるんだよ。昨日から訳判んねー映像が頭ん中に出てくるんだよ。俺の知らない俺が，見たこともない場所にいるんだよ。唄を唄ってるんだよ。その唄を唄う度に」
「やめろ！」
「唄って。関口さん，唄わなきゃダメだよ」

じっとミルを見つめていた由美子さんが，まっすぐに俺を見た。

「彼女はこんな怪我してまで来たのは何か訳があるんでしょ？　関口さんに会いに来たんじゃないの？」
「まさか，そんな馬鹿げた事」
「同じ不思議な力があるんでしょ？　彼女を病院に連れて行って，力がバレるのは駄目でしょ？　なら関口さんが助けなきゃ誰が助けるのよ。水野くんが助けるの？」

この地球上に，音の響きをかりて物質を変化させる術なんてない。それが出来る自分は何者なのか。何で今まで深く考えてこなかったのだろう。
その俺を『ダショー・ハル』と呼ぶ，明らかに異質の女性が目の前にいる。俺の前で横たわっている。伏せている。
水野と由美子さんの言い合いを聞き流しながら，はっきりと確信する。
ミルと俺は，同類だ。
そして，ミルを助けられるのは同類の俺だけだ。
目を閉じて深呼吸。ゆっくりと，もう一度ミルを見つめ，手を握りなおす。

教えて。俺はなんなんだ。キミは知っているんだろう？　こんな危険を負ってまでこの世界にやって来たキミなら，きっと知っているんだろう？

教えて。君は何者なんだ？　俺は，なんなんだ？

「『　精霊の加護を願い給う。　月の神シンと大地母神へ願い給う。我は汝の僕ハルキ。その御力の周りを巡る星。雌鹿の小道を歩く者　』」

口が驚いている。喉が戸惑っている。初めての発音，馴染みない音の運び，リズムの取り方。

それでも，体の奥底で歓びに震える自分に気付く。ずっとこの音を望んでいた。この音を感じたかった。そう叫ぶ自分が存在している事に，驚く。

心地よい。これは体だけじゃない。精神まで振るわしてる音。

「『　振るえ　その星の響きはシンの響き　ゆらゆらと振るえ高らかに鳴り響け　この身に宿るは月の欠片　大地の心　』」

『ダショー・ハル……』

俺の名前は，ダショー・ハルじゃない。そう俺を呼ぶキミは，何者だんだ？

湧き上がる体の奥からの振動が，繋いだ手から伝わっているのだろう。

ミルの茶色交じりの青い瞳から，涙が一筋零れ落ちていく。

それは，とても美しくて。何故か，俺の気持ちをかき乱した。

「由美もこれぐらい料理上手いといいんだけどなぁ」
「俺は自分でやらなきゃ飢え死にするからな。人に期待する前に自分で自炊しろよ」
「あ，そういう訳？　由美がいなきゃ，女が家に居るって動揺しまくってた奴がさ」
「……その点は感謝してるよ。ホント，風呂やらトイレの使い方なんて教えてやれなかったよ。ビール飲むか？」
「や。運転しなきゃいかんし。由美の運転怖いから」

茹で上がった枝豆を摘みながら，水野は麦茶を希望する。
俺の家を覗いたばっかりに，デートを遅らせて日常に滞在している彼ら。
でも，水野が彼女の由美子さんを連れて来てくれなかったら……どうなってたんだろう。そう考えるとぞっとする。
あれから唄い終わり，そのまま寝てしまったミルを前に由美子さんは本領を発揮した。
「服はあるのか」「女性用下着はあるのか」。その質問に絶句した俺を見下ろし，由美子さんは颯爽と近所のショッピングモールへ車をかっ飛ばした。一時間後，雑誌やテレビで見ていた流行の婦人服を大判の袋三つ分。洗面用具や色鮮やかでレースがふんだんに使われた下着を紙袋いっぱいに買い込んで，蛇のように長いレシートを差し出された。

「彼女を助けたって事は，責任持って一緒に住む覚悟があるんでしょ」

その言葉に，思わず頷いていた。そうだ。彼女にこの世界で行く場所なんて，ないんだ。そう気付かされた。
が，そのレシートの金額に驚いた水野が由美子さんと言い合いになっているとミルが無事に目を覚ました。そして，突如深く礼をし

たと思ったら外の庭へ向かって歩き出し，窓ガラスに激突。
強く鼻骨をぶつけたんだろう。うずくまるミルに全員言葉を失った。唐突な行動はもちろん，その結果に驚いて。
何のために庭に出ようとしたかは判らないけど，ガラスに向かって思いっきりぶつかった様子はガラスの存在に気付いていなかった感じだ。
さらに間が悪い事に，慌てて駆け寄った俺のポケットから携帯電話のメール着信音が鳴った。途端，ミルは獣のように視線を辺りに走らせて素早くソファに置いていた刀に飛びついた。今にも鞘を抜き放ちそうな様子に，俺が慌てて駆け寄り通じない言葉で説明をした。
身振り手振り。心をこめて。
そして確信。ミルの世界には今の日本ほど科学も技術もないのだろう。身につけた服でなんとなく予想はしていたけれど。
点滅する携帯電話を見せ，害のない事を説明し，刀を仕舞わせて，溜息が漏れる。
言葉も通じない。文化も違う。生活習慣も違う。そんな相手にどうしろと。そう，俺が途方に暮れかかった途端だ。
「言葉が通じなくてもイケル！」と宣言して由美子さんが立ち上がったのだ。男二人より早く，現実を見据え開き直った彼女の行動は早かった。

「とにかく，トイレとお風呂は使い方教えるから。何かご飯用意してあげといて」

そう言い放ち，戸惑うミルの手を引いて二人でトイレに入っていく。その後の事は……言うまい。向こうはすでに女の世界だ。意味不明な言語と関西弁の，明らかに互いを非難し罵る声が聞こえる所へ駆け寄る勇気はない。水野は真顔で首を振り，無干渉と決め込んだ。

そういうわけで，俺はメシを作っている訳で。
正直，体を動かしていると気分は必要以上に落ち込まない。

8　現実は甘いのか

炊飯器から熱々のご飯を取り出し，ボールに移す。炊きたての米の甘い蒸気に台所が包まれる。

「でもさぁ。お前，本当に彼女と生活するんか？　女に免疫ないのに」

「じゃあ水野が住んでくれるのか？　」

「勘弁。結婚が流れる」

「じゃあ，しょうがない」

冷蔵庫から明太子や佃煮を取り出しながら。水を張ったボールに手を浸し，蒸気を立ててるご飯を手に取り，リズムを取って握っていく。痛いほどのご飯の熱さが，夢じゃないと諭していく。

「しょうがない，で一緒に住めるかよ。言葉も通じないし文化も違うし，この世界の常識ないし。留学生をホームステイさせるのとは違うぞ」

「だよなぁ。刀持ってるし。熱つつ」

「そこだよ。まずは法律に違反してる……いや，法律すら知らないぞ」

携帯の音に反応して刀を振り回しかけたのを思い出し，苦笑い。たしかに強敵だ。

この日本で，戸籍もないミルの存在は危険だ。日本人でもなく，海外渡航者でもなく，どの国の国民でもない。おそらく昨日まで地球に存在しなかったんだから。身分証明書がまったくない宙に浮いた存在。存在がバレたら，大騒ぎですまない。逮捕されて事情を追求されるだろう。どこにも帰る国がない事，恐らく地球人でない事

が知れたら，どうなるんだろう。
　下手な対応では，俺も被害を被るのは確実。握り飯を握って真っ赤になった手の平を見ながら頷く。火傷する。致命傷な程の，火傷をする。俺も不可思議な能力を隠して生活しているんだ。自分にかかる火の粉が，さらに倍増するんだから。
　手を水に浸して，新しいご飯を再び手に乗せる。痛いほどの熱さを耐え，急いで鮭フレークを詰めていく。

「昨日からさ，不思議なんだ。ミルはなんでここに来たんだろうって。来た目的が知りたいし。なによりさ，ミルを見てると色んな映像が頭に出てくるんだ」
「あぁ，昨日から何か見えるって」
「多分ミルと俺はさ，何か関係あるんだよ。……熱っ」
「関口，生まれはここだろ？　日本国籍あるだろ」
「もちろん。出産の瞬間をビデオに撮ってもらってるし。そこんとこは間違いない」

　マメだった父さんのお陰で，出生の秘密は俺にはない。リビングの壁一面の本棚の一角に飾った昔のスナップ写真の中で微笑む両親を見る。そうだよな。俺はあんた達二人の息子だよな。

「宇宙人とお前が，どういう関係になるんだよ。そりゃさ，色々とお前のその力が似通った感覚をもったとしてもだよ？生まれも育ちも間違いなく地球人のお前と，どう関係があるんだか」
「その宇宙人ってのは何だよ。関係は判らないけど，本当に色々頭に映像が出てくるんだよ」
「それは関口の記憶なのか？」
「じゃあ誰の記憶なんだよ。俺の頭ん中に誰の記憶があるんだよ」

　水野が「オレに聞くな」と握りたての握り飯を奪っていく。

しゃもじを持ったまま，水野を見つめる。
頭に浮かぶ映像は，まるで俺の過去のように感じている。映像と共に体中を駆け抜ける感情が，全感覚に『思い出せ』『過去の記憶だ』と叫んでいた。苦しさと懐かしさ，愛おしさや憎しみも，苛立ちや慟哭のような激しい感覚すら，生々しく俺の意識を支配する。気をつけないと，今の俺の感情が乗っ取られそうな恐怖を抱いてしまうほどに。前世があるのなら，そんな記憶なら，楽な話なのに。
ミルがどんな世界から来たのか，わからない。どうやってこの世界に来たのかも判らない。何も判らない。そんな中で，はっきりとした事もある。

「訳が判らないけど，ミルが来てから俺の中で色々思い出すような出来事が増えてるんだよ。水野がバイク事故の時に吹いた口笛の旋律って，確かにさっきミルに唄った唄だろ？元々俺はあの唄を憶えていたんだよ。ただ，急にミルが来てから歌詞まで頭ん中で流れるんだよ。急に映像が出てくるのと同じようにさ」
「もう，訳がわからん。歌詞は知らなかったけど，唄のメロディーは知ってたって事か？　そりゃ，オレが怪我した時に唄った唄は，さっきの唄と同じようだったけど」
「同じだよ。急に，歌詞が浮かんだんだよ。ただその歌詞だって，日本語じゃなかっただろ」

唄と同時に，光の粒が宙から湧き出してミルの傷を包んでいくのを見た。見る間に傷口を癒していくのを見た。
嘘のようだけど，確かに昨日は空も飛んだ。幻じゃない証拠に，洗面所からミルと由美子さんの，罵りでなく互いを理解したような声が聞こえる。夢じゃない。俺は唄を唄ったし，ミルはいる。全て現実だ。
これって，どういう事なんだろう。地球生まれで日本人してる俺と，明らかに違う世界から飛び込んできたミルが，同じ唄を記憶し

ている。これが何を意味するのか。
頭に蘇る映像が何を意味しているのか。
俺の持つ不可解な能力は，何の意味を持っているのか。
今まで深く考えなかった自分自身の事が，大きく謎になって行く
手を塞いだ感覚だ。湯気をたてるご飯を睨んで，奥歯をかみ締める。
毎日，食うためで一生懸命だった。生き抜くためで精一杯だった。
父さんが死んだ３０歳を乗り越えようと，それだけ考えてた。
俺が力を持っている不思議なんて，考える事もなかった。

「関口が何でもさ，お前はお前だからさ」
「うん」
「そう，深く考えるなよ」
「……」

水野，お前は俺が何者であっても，友達でいてくれるのか？
例え，俺がミルと同じ世界の住人だったとしても？　異星人であ
ったとしても？　とんでもなく，異質な存在でも？
水野の顔を思わず，見つめた。願うように，見つめた。

「おっ待たせしましたぁ！　見て見て，可愛いでしょ？　」

唐突に空気が破られた。廊下から濡れ髪の由美子さんが飛び込ん
でくる。風呂の使い方を教える為に一緒に入ったのか，辺り人工的
な花の香りが漂う。普段使っている男性用ではないところを見ると，
先の買出しで買っていてくれたんだろう。
先の緊迫した空気が入れ替わった事に，ホッと笑みが零れる。

「いやぁ。磨き甲斐あるよ。素材がいいからねぇ。ほら，変じゃ
ないからおいでってば」

一拍置いて，新しい人影がリビングに飛び込んできた。
まだ湿気を含んだ艶やかな長い髪を流した女性。ほっそりと少女の面影が残る体のラインを見せるTシャツに，伸びやかな足のラインがはっきりなジーンズ。ずっと隠されていたのだろう肌の色は光を吸い込んで輝く白磁のようだ。市松人形がいきなりビキニになったような衝撃。

「毛先がバラバラだったから，洗面所のはさみで少し切ったよ。それだけでこんなに垢抜けちゃうんだもん。黙ってたら，その辺歩いてる女子高生より可愛いと思うな」
「確かに，いい線いってるよなぁ」
「でしょ？　いい仕事したでしょ」
「でもまずいって。関口みたく女に免疫ない奴に，こんな可愛いの見せたら……」

青交じりの茶色い目を丸くして自分を見つめ，恥じらいを見せるような微笑を浮かべたミルから，視線を動かせずに立ち尽くしていた。しゃもじを持ったままで。
何も聞こえない。何も見えない。ミル以外，何も見ていなかった。

「パーカッションは一拍目をも少し強く。みんなをリードする気持ちで。クラリネット，スタッカート効かせて。フルートとピッコロも。金管組，主役だから目立っていいんだぞ。マーチなんだからさ，全体的に元気よく切れ味出さなくちゃ」

たった一週間休みにした途端，この気だるい演奏。目の前の生徒達に指示を飛ばして譜面を睨む。体育祭の最初の全体練習に間に合うか。いや，間に合わせなきゃヤバイ。

吹奏楽は文化部に分類されるけど，やってる事は体育会系に近い。夏と秋は体育会系に負けず劣らず忙しい。コンクールは夏休みにあるし，秋は体育会や文化祭で重宝される。コンクールの曲が終わったと思ったら，マーチをこなし文化祭向けのポップスをこなさなくてはいけないのだから。

夏休み明け初日の今日だって，夏休みの提出課題のチェックをこなして部活に顔だしている状態だ。

生徒から提出された膨大な数の宿題をチェックするのは，また一苦労。とり合えず，提出をチェックしてハンコを押す作業に追われてしまい最終下校時間が近い。時計を見て携帯を見て，少し冷や汗。

俺は出来るだけ早く仕事を終わらせたいんだ。すっかり予定時間が過ぎている。俺は早く帰りたいんだよ。

ミルは，一人で過ごせているだろうか。すっかり秋の夕方らしく赤く染まりだした校舎を見ながら，指揮棒の先で思わず頭をかいてしまった。

あれから夏休みの最終日まで，俺はミルに生活習慣を教え込むことに費やした。そして，ミルが生きていた世界が違うという事を思い知らされた。

時折大きな音を立て遥か上空を飛ぶ飛行機の音でさえ酷く怯えた。車やバイクの爆音には，テーブルの下に潜り込み刀を構えようとした。ミルにとって過酷な日々だったと思う。が，彼女は非常に飲み込みが早かった。まるで猫のように注意深く全ての音に耳を澄ましていた。俺の発する言葉に。テレビの会話に。家電を扱う仕草まで，食い入るように見つめていた。さらに，言葉を憶えようとしだした。

明らかに，何かを伝えたいのだろう。何か目的があってココに来たのなら，何かを伝えたいんだろう。

だから，俺は早く家に帰りたいんだ。言葉を覚えたミルは，何を語り出すんだろう。それが待ち遠しい。最初に口にする言葉は何だろう。その瞬間に立ち会いたいんだ。

けど，ちゃんとお昼を食べただろうか。冷蔵庫にサンドイッチを

入れて「これを食べて」と身振り手振りを加えて伝えたつもりだけど。「夕方には帰るから」と伝えたけど。ガスを触って火事とか，外で何かの拍子に出ていないだろうか。刀を振り回してしまって警察沙汰とか。

あぁ，恐ろしい嫌な考えしか浮かばない。

何しろ，ミルを一人にするのは初めてだから不安だ。心配だ。

「この合奏で今日はラスト。気合い入れていくぞ！」

俺はさっさと帰りたいんだ！

前髪をかきあげ，指揮棒を構える。目の前の生徒達がノッソリと楽器を構えるスローモーションに溜息を零して脱力。

怒らない。苛立たない。今日は早く帰るんだ。

念仏のように唱えてながら指揮棒を振り下ろすと，音がノッソリと動き出していった。怠惰な音が，校舎を埋めていく。

9　嘘と美少女

「先生，良い事あったの？」
「なんで」
「だって，ねぇ」

薄暗くなった廊下を早足で歩いていると，部長と副部長がにんまりと顔を合わせて笑い出す。箸が落ちても笑い転げるお年頃の女の子は，俺から見れば一種の異世界の生物のようだ。何を考えているのか判らないところもある。まぁ，小林と東のコンビが天然不思議キャラってのもあるけど。これで学年上位の優等生というのだから，さらに不思議だ。

「先生，時計ばかり見てたじゃん」
「そうそう。ダメ出し多かった割に，下校時刻十分前に終わらせてくれたし」

鍵の束をジャラジャラと鳴らしながら俺の後を付いて来る彼女達は，夕闇の廊下にパステルカラーの花を咲かせていくような朗らかな笑い声をこぼしていく。時々すれ違う運動部の男子どもが二人の姿を確認すると，一瞬緩んだ顔に何気なさの仮面を被りさりげなく砂埃を払っているが，そんなイジラシイ姿を小林と東は気付いてないんだろう。軽やかな歩みを止めずに行く。

「これはアレですねぇ」
「そうですねぇ。関口先生のファンとしては，無視できませんなぁ」
「なんだよ。気味の悪い喋り方して」
「先生，彼女出来たとか」

「お前ら，そんな事聞くために施錠の手伝いと荷物持ちするって付いてきたのか」

内心の動揺を隠すために，わざとそっけない声を出す。

確かに，俺はミルの事を考えてた。部活中ミルの事ばかり考えていた。まさか，それを生徒に悟られようとは。い，いや，ミルは彼女じゃないし。

思いなおし，渡り廊下の扉を閉める。慣れた手つきで鍵を閉める彼女らの姿を見ながら，そっと溜息。もう，こいつらも女性なのかな。カンの良さは，今まで友人として付き合った女性達と変らない鋭さだ。

「先生，夏休みにステキな出会いがあったんですねっ」

「夏休みはお前らと毎日顔会わせてただろ」

「お盆に実家に帰った時にお見合いがっ」

「お見合いしてないし。実家ないし」

「じゃあ，コンクール後の休みで私達が宿題してた間に合コンしてっ」

「研修行って勉強してた」

研修帰りにミルと出会った訳だけど。まぁ，それは内緒。非常識な出来事だから，まず知られる事はないだろう。

「つまんなぁい」と言う彼女達の声を背中で受け流して，薄暗い校内で唯一明るい職員室のドアを開ける。ふんわりと漂ったコーヒーの香りに安堵。荷物を片付けたら，今日はさっさと帰ろう。

「二人ともお疲れさん。ほら，気をつけて帰れよ」

小林と東の荷物を受け取ろうと振り返った途端，俺の背中に「ちょっと関口センセイ！」と濁声がかけられる。聞き慣れた用務員

の加藤さんの声に，反射的に肩をすくめる。
お昼に配られた土産物のお菓子をおかわりしたのがマズかったのだろうか。
そう思った俺の目に，小林と東の満面の笑みが見えた。

「ほら，あんたの言う『何とかハルキ』って関口センセイの事かい？　あの人かい？」

続く濁声の言葉に，恐る恐る振り返る。職員室に残っていた幾人もの同僚達の興味深そうな視線が突き刺さり，その中に一番会いたかった顔を見つける。
何故かチェロケースを抱えて，職員室の片隅の応接セットに座るミルとエプロンおばちゃんの加藤さんが目に飛び込んできた。

「ゴミ出しに行ったら，関口センセイの車の横でこの子座り込んでいたのよ。日本語通じないけど『何とかハルキ』って名前繰り返すし。ハルキなんて名前，センセイぐらいだからねぇ」

程よく肥えた腰に手を当てて立ち上がる加藤さんは，すっかり説教モードになりつつある。川東中学校の独身教員にとって，用務員の加藤さんは職場の母のような存在なわけで。

「センセイ，この子とどういう関係なの」
「きゃあ！　やっぱ彼女出来たんだぁ！」
「可愛い！　マジ可愛いよー！」

お寺の前の仁王像並の睨みをされて凍りついた蛙状態の俺の背後から，小林と東の黄色い叫びが奇襲攻撃と援護射撃をかけてくる。
違う，違うんだ!!
突き刺さる同僚の視線がさらに尖っていく。俺が八年かけて築き

上げた「真面目な印象」が崩れ落ちていく爆音が聞こえる。

「先生，プライバシーに関わる事なんですが少しお話ししましょうか」

白髪を撫でつけながら教務が立ち上がり，俺の頭は高速回転で言い訳を考え出す。外国人証明書を携帯してないってだけでもヤバイ。パスポートすらない。先の街中でも騒動との関係を感ずかれてもマズイ。どうする。

「あの，誤解を受けているようなんですが。彼女，私の祖父が里親支援していた子でして」

「先生，家族が……」

「えぇ，死んだ祖父です。遺産で支援を続けるようにと遺言で」

事務さんからの鋭い指摘に，口からデマカセを続ける。

これは俺のイメージにかかわる壮大な嘘だ。

背中に流れる妙な汗に気づきながら，笑顔を浮かべてみる。何でもない。これは，何でもない事だ。

「その後，地域で紛争が起きて身寄りが亡くなってしまって。えぇ，キルギスやタジキスタンの国境辺りが故郷だそうです」

以前見たドキュメンタリーから勝手に話を作っていく。大丈夫。変ではない。多分，不自然ではない。身寄りがないミルは，支援を続けてくれた祖父を頼り見知らぬ日本に来た。祖父が亡くなっている今，俺がミルを引き受けた……と。不自然はない。ないはずだ。

「仕事が始まって，しかたなく留守番させてきたんです。まだ日本語が出来ないし，日本の街にも慣れてない状況でして。不安で歩

いて来たんだと思いますが。ご迷惑をお掛けして，申し訳ありませんでした」

笑顔で，そしてやや困った顔をつくり，ペコリと頭を下げる。

さぁ，どうだ？　上手くいくか。いかないのなら，次なる手を打たなければ。

この微妙な沈黙が怖い。その途端だった。

『……，……！』

チェロケースを抱えたミルが，何か叫ぶようにして俺の前に飛び出した。差し出されたチェロのケースを思わず受け取ると，その軽さと僅かな物音で中身に気づく。

大黒丸と呼んでいた黒身の刀が入っている。物置のような祖父の書斎から古びたチェロを取り出し，刀をケースで隠して持ってきたのだろう。

確かに外出する時も刀を片時も離そうとしないから，俺がチェロケースに入れて持ち運べる方法を教えた。けれど，学校にまで届けようとするとは思わなかった。

呆然とミルとチェロケースを見比べていると，見る間にミルの目に涙が溢れ出してくる。

『……！』

言葉は通じなくとも，それが謝罪の行為なのは明白で。床に伏せて，懸命に言葉を尽くしている美少女の姿に疑いを抱く人間はいないわけで……。

助かった。

不謹慎だけど，チェロケースを抱えた俺は心の中で安堵した。

外見で人を判断してはいけない。そういう教訓があるってことは，人は反対の行動を取りやすい，という事。逆説もまた真実なり。

身寄りない美少女が泣いていれば，強く注意できないのが人の性。加藤さんはアイスミルクティーを作ってあげるし，教務も教頭も『若いのに苦労してきたんだね』と涙ぐむし。

まぁ，同僚には羨ましがられて冷やかされた。曰く，「絶対に手を出すな」。

俺はやましい事はしていない。そりゃ異世界から来て正体不明な女の子だけど，可愛い女の子と一つ屋根の下で暮らす事になった事には幸せ感じたし，それなりに妄想もした。一応，健全な青年だから。でも，手は出してないし覗き見もしていないし，その辺りは当然だ。

そう，嘘ってつけるものだ。真実を織り交ぜた嘘というものは，けっこう信憑性が出てくるらしい。

ミルはタジキスタン辺りの少数民族出身にしてしまったし，亡くなった祖父は里親支援という慈善行為をしていた事にしてしまったし。嘘八百もイイトコロ。地獄に行ったら閻魔大王に舌を抜かれて針山からバンジージャンプさせられるの間違いない。

それでも，とり合えずの急場はしのげた。ミルの純朴な行動により，適当な俺の嘘を全て信じてくれたし。俺が美少女を手篭めにしようとしていると，変な妄想や噂を広げられる事もないだろうし。多分。

もっとも。異世界から来たミルの目的も判らない今，なるようにしかならないけど。

天地がひっくり返ったような職員室から，残業する予定だった書類やら参考書をカバンに詰め込んで飛び出して，ようやく一息をついた。

空には明るいお月様。どこからか，カレーの香りまで漂ってきた。

住宅地だから，日が沈むと急に静かになる。誰も居ない校舎裏の駐車場に，二人分の足音だけがする。一番北端の俺の定位置までくると，本当に薄暗い。手探りでポケットを探りキーを探す。

「すっかり遅くなったなぁ……」

「ごめん，ちゃい……」

真っ黒な壁となってそびえる校舎を見上げて知らずに呟いた俺の背に，聞いたことのない言葉が投げかけられる。俺の後を歩いていたのは，ミルだけだ。

ゆっくり振り返ると，チェニックの裾を握り締めて立っていた。口元をわななかせ，茶色交じりの大きな青色の瞳から涙を零していた。

「ごめん，ちゃい。ダショー・ハルキ。ごめんしゃい」

初めての，日本語。つたなく，幼子が使うような言葉をミルは繰り返していた。

10　温もりの感触

車のキーを取りだそうと彷徨っていた手で，慌ててポケットを探る。入れっぱなしだったハンカチしか見つからないけど，まぁしょうがない。

「えぇっと，その，泣かなくていいよ。ね？」

大きくシワのあるハンカチを無理やり広げて差し出す。ミルは受け取る事もせず，首を振った。

「ダショー・ハルキ，……。おしごと。……，……。ミル，『大黒丸』……，だめ。ごめんちゃい。ミル，だめ，……」

幼児番組で耳にした日本語を駆使して，必死に何かを伝えようとしている。けど殆どが通じない言葉だから，意味は判らない。でも，その表情と僅かな単語で染みるようにミルの気持ちが伝わる。

勝手に学校に来た事を謝っているんだろう。まさか，こんな騒動になるとは思わなかったんだろう。知らない人に囲まれて，不安だったんだろう。たった一人で，ここまでどうやって来たか判らないけど，怖かっただろう。

……いや，違うかもしれない。

ミルは一人で異世界に来るぐらいだ。ここ一週間の共同生活で判ったのは，ミルは精神的に強い事。言葉も文化も違う世界で，彼女は涙一つ不安げな顔一つ見せなかった。そのミルが初めて泣いた。ポロポロと，大粒の涙で頬を濡らした。俺が思う以上の理由があるのかもしれない。

月に照らされたミルの影まで，心細そうに伸びている。校門の桜がザワリと揺れる。いつの間にか涼しくなった風が，俺とミルの間

を駆け抜ける。

「ごめんちゃい。ごめんちゃい。ダショー・ハルキ，ごめんちゃい。……」

「もう，いいよ。怒ってないから。だから泣かないで」

「ごめんちゃい。ごめんちゃい……」

「ミル，もういいから」

言葉じゃ，伝わらない。伝えられない。

思わず，手を伸ばしていた。恐る恐る，ミルの肩を抱いていた。想像以上に華奢なミルは，すっぽり俺の腕の中に入ってしまった。ミルは慌てて身を引こうとしたけど，俺は思わず腕に力を入れていた。

言葉じゃ，伝わらない。心が伝わらない。もどかしい思いは，こうする以外に伝えられない気がした。

大切な事を，伝えたいんだよ。体温で，伝えられるのならいいのに。触れ合う感触で，ミルの気持ちも俺の気持ちも伝えられるのならいいのに。

「俺こそ，ごめんな。一人にしてごめんな。仕事だから，どうしようもないけど，それでもミルを不安にしてごめんな」

「ダショー・ハルキ」

「ハルキでいいよ。ダショーなんて知らない。俺はハルキだよ」

ほんのりと温かい。ミルの髪に，そっと顔をうずめてみる。

きっとミルは，何か知っている。俺に関する何かを，知っている。だから，こんなにも泣いているんだ。あの白い鷹の言った事が本当ならば，俺は何かを忘れているらしい。

研修帰りのあの日，異世界と接触したあの時から俺の頭に蘇る映像の欠片は，忘れた記憶の欠片なんだろう。バラバラのピースだけ

溢れ出ている状態だけど，全体の絵が完成する時がくるんだろうか。そしたら，どうなるんだろう。俺は俺じゃ，なくなるんだろうか。

ミルが呼ぶ『ダショー・ハルキ』になるんだろうか。

ダショーという言葉が，何を意味するか知らないけれど，そんな名前で俺を呼んで欲しくないんだ。俺は関口晴貴で，ダショーなんて言葉はつけて欲しくないんだ。

今の俺を見て欲しい。今の俺の名前を呼んで欲しい。何者か判らない俺の事を呼ぶんじゃなく，今の俺を呼んで欲しい。

オカシイな。これじゃあ。俺はミルの事が好きみたいじゃないか。異世界から来た，正体不明の女の子なのに。何も知らない相手なのに。

思わず空を見上げる。

澄み切った秋の夜空は黒々とした闇を広げてる。その底なしの暗闇に平然と光り輝いている月。

そうだ。何も判らない不安の中で，ミルの事を考える気持ちだけは煌々と存在している。偽れないほど，輝いている。ミルの事を考えるだけで，こんなにも苦しいんだ。悲しいんだ。ドキドキするんだ。

ミルにどんな秘密があるか判らない。何で泣いているのかも，心の中の本当の理由まで判らない。俺は何が出来るか判らない。どうしたら，ミルが泣き止んでくれるかも判らないんだ。

言葉は伝わらない。思いも判らない。ならせめて，温もりの感触だけは伝えたいんだ。

「大丈夫だよ。そんな顔すんなよ。大丈夫。だから，笑ってよ。ミル，笑ってごらんよ」

俯いたミルの顔が，俺を見上げた。茶色交じりの青い瞳から，涙が一筋零れ落ちる。

笑って。あの月のように微笑んで。俺は，それだけでいいんだ。

ただ，ミルに笑って欲しいんだ。

「ハル，キ。ハルキ。ハルキ」

軽い音がして，俺の背に温かい感触がしがみついた。
足元に転がったチェロケースを見て，一瞬目を疑った。
今まで片時も離さずに持っていた大黒丸（だいこくまる）を，離している。白い鷹ですら，ナントカの宝と言っていた大切らしい，その刀を放した。
その手で，俺にしがみついてくれた。

「ミル」
「ハルキ，ハルキ」

言葉が足りない。温もりも足りない。もっと，もっと，心の中身を見せたい。伝えたい。この気持ちを全て与えたい。
爆発しそうな感情で，ただ強く抱きしめる。
そうだ。俺は，ミルが好きなんだ。大好きなんだ。
思いっきり，ミルの黒く艶やかな髪に頬をうずめた。華奢な肩を強く抱く。ほんのりと甘いシャンプーの香りと，仄かな体温が心地よい。
心臓のドキドキは，心地よい速さに変っていく。満ち足りていく。
大好きだ。やっぱり，大好きだ。
俺，ミルが大好きだ。
その瞬間，場違いな音が低く長く響く。
聞き覚えのある音。僅かに俺の腹部に伝わる振動。
まさか。
そぉっとミルを離しその顔を覗き込むと，色白な頬も首筋も見る間に熟れたプラムのように，赤く赤く染まっていった。

「ひょっとして，お昼，食べてないの？」

俺の質問に返すように，再び低く鳴る音。明らかにミルの腹部から盛大な腹の虫が空腹を訴えている。

可哀そうなぐらい真っ赤になったミルに，思わず微笑みがでる。なんて，かわいいんだろう。あぁ，俺，重症だ。腹の虫を響かせる姿も可愛く思えてしまうなんて。

思わず笑い声が溢れると，真っ赤になったミルが俯いてしまう。見下ろす艶やかな天使の輪が浮かぶミルの頭を，何度も何度も撫でた。

知りたい。どんな事でも知りたい。ミルのどんな事も知りたい。見たい。

「ごめんごめん。じゃ，行こう。ごはん，たべる，いく。いいね？」

「ごはん，たべゆ。うん。うん……ごめんちゃい」

「ごめんなさいは，いらない。遠慮しないでいいから」

「えんよ，ない，いいから」

「……そこは真似しなくていいから」

まだ溢れる笑い声を抑えきれないまま，地面に転がったチェロケースを拾い上げてトランクに押し込める。

助手席にミルが乗り込むのを見ながら，キーを回す。

エンジンがかかる。俺の中の何かも，動き出した。

ミルの秘密が何でアレ，俺はきっとこの気持ちのまま突っ走るだろうな。

ギアをあげてクラッチを離す。アクセルをゆっくりと踏んでいく。

俺とミルの関係は，何か変った。多分，そう思ってるのは，俺だけじゃないと思う。

チラリと助手席を見ると，俺の顔を見ていたミルと視線が絡み合う。ライトの光と街路灯の微かな灯りの中で，ミルは微笑んだ。

うん。俺の妄想じゃ，ないと思う。
何か，変った。

「おひさしぶいです。」
「日本語判るようになったんだね。雰囲気変わったなぁ」
「チェロ背負って，どうしたのさ」
「中身はアレだよ。あの刀」

落ち葉舞い散る動物園。
動物の彫刻を前に，ブーツにツイードのコートでチェロケースを背負うミルは，黙っていれば育ちのよさそうな音大生。久々に会った水野と山口さんも驚いている。
そのチェロケースを僅かに揺らして，中の音を聞かせると目を丸くした。
俺達の周りを歩く人たちも，まさか刀が入っているとは思っていないだろう。音大生風で清楚に見える女性が，立派に銃刀法違反してるなんて思わないはずだ。

「なんで？　そんな危ないもの置いてこればいいのに」
「だいじ。『大黒丸（だいこくまる）』，『クマリ』，だいじ。もってる」

元々，このチェロは演奏者になれなかった夢を俺に押し付けようとしたじいちゃんの物だ。じいちゃん，こんな風にケースを使われるとは思ってもいなかったと思う。ごめん。でも助かってるよ。
死んだら，じいちゃんに謝っておこう。なんか，そういうの多くなってきたけど。

「さっさと中に入ってケーキ食おうぜ。学校の近くにメチャ美味い店が出来たんだよ」

『大黒丸（だいこくまる）』という名前らしい刀は，かなり大事らしい。夕方の学校で抱き合った時以来，刀を落とす事はしていない。あれが例外だったようで，外出する時は必ず担いでいる

まぁ，それはともかく。

ケーキの紙箱を見せて，思わず顔が緩む。

合唱コンクールの細案も提出し，期末テストの問題も作り上げた休日は素晴らしい。テスト週間だから，外出しても生徒に会う心配は殆どない。遠慮なく，水野達と動物園に来た。北風が吹く動物園なら，人もあまりいないだろう。人込みに不慣れはミルに配慮して，寒空のお出かけ。それでも，買い物以外で外に出かけるのは新鮮なのだろう。ミルは朝からソワソワしていた。

いや，俺もソワソワしているかもしれない。こういう，デートらしい事はしなかった。あえて，してこなかった。

好きな相手と一つ屋根の下。だけど，好きな相手を何一つ知らない。知ろうにも言葉は通じないし，知る事は，俺の場合は怖い事でもある。

手を繋ぐ事もしていない。肩を抱いたのは，あれっきり。

それでも，ミルが傍にいてくれる幸せ。

水野達のデートに付いてく名目で，ダブルデートもどき。

必死で過ごしてきた俺への，ささやかで密かなご褒美。

11　蘇る呪詛

木枯らしが吹く中で，白熊が嬉々として水に飛び込む。オットセイが寒空に叫ぶ。テーブルのコーヒーは湯気を立てて，急速に熱を奪われていく。

こんな寒い行楽だけど，来てよかった。少なくとも，シマウマの前で「そら，とばない？　なぜ？」とのたまったミルの誤解は解けた。

ミルの世界では，四本足も空を飛んでいるのだろうか。最初に空飛ぶ麒麟（きりん）に乗ってきたミルにとって，空飛ぶ動物は鳥類のみという事実は衝撃だったらしい。目を丸くして「とばない？　これ，とばない？」と聞いて園内を駆け巡った。こんなに動物園が面白いなんて思わなかった。

いい年して象やカバやペンギンに大歓声を上げて，高台の休憩所に陣取った俺達は傍からみれば小学生の遠足状態だっただろう。十二月の午後は予想通りに人も少なく，遠慮なくテーブルにケーキを並べてはしゃいでる。

「うま！　サイコー！」

紅芋のタルトに特製モンブラン，アーモンドとリンゴのパイ。これほどの幸せはない。あぁ，冬って最高！

「関口の緩みきった顔，普段から想像出来ない」

「別にいいじゃん。人の幸せな時間を邪魔するなよ。それより，式場とか決まったのか？」

「なんとかね。春休みに式を挙げるよ」

「へぇ。じゃ，今忙しいんじゃないの？」

「まぁね。住むトコも家電も揃えなきゃいけないし大変だよ」

大変だよ。そう水野はいうけれども，由美子さんと頷きあう顔は嬉しそうだ。結婚って，そういうものなんだろう。苦労は半分，喜びは二倍になるって，誰が言っていた言葉だろう。同僚の結婚式に行った時，どっかの親戚のおじさんだったか。

水野達の結婚は，もう始まったのかもしれない。一年もしたら，子どもが生まれたりするんだろうか。そしたら，そしたら……。

今みたいに，ダラダラした付き合い出来るだろうか。

「そうそう。こないだ衣装選びしたの。ミルちゃんも見て見て」

「すごいぞ。これで半日終わったんだから」

バッグから取り出されたデジカメの液晶画面に，色鮮やかな衣装をまとった由美子さんが現れる。

少し照れ気味な白無垢姿，色内掛けにカクテルドレスにウエディングドレスと変っていくたびに，誇らしげにお茶目に変化していく。水野が撮っているんだろう。カメラアングルも遊びが入り，どアップまである。幸せの悪乗りだ。なんだか，家庭をもっても，二人のこのノリは変らない気がする。

僅かに将来の水野家が予想できるカット集。

「これ，ユミコさん？」

「どれが一番可愛いかな。私はこのドレスが可愛いと思うんだけどなぁ」

「おひめさま？」

目を真ん丸くしたミルは，首を捻って考え込む。つと，立ち上がって近くの売店の軒先に立って売り物の一冊の絵本を指差した。白鳥の湖。幼児用にデルフォメされた表紙の絵には，魔女の呪いで昼間は白鳥にされたお姫様が書かれている。白いウエディングドレス

に，ティアラのお姫さま姿。もしかして，由美子さんを絵本のように城持ちの姫様と思ったんだろうか。

一瞬，水野達三人で顔を見合わせてしまった。確かに，結婚するからとこんなドレスを着るのは変だ。当たり前だと思っていた事を，どう説明すべきか。

「結婚する時にね，女の人がお姫様の格好するのよ。女の人の人生の晴れ舞台でしょ？　お姫様みたいに大事にしてねって」

そう説明するか。由美子さんの妙に説得力ある解説に，ミルはもう一度首を捻る。北風が，艶やかな黒髪を揺らしていく。

異世界の人間でなかったら，ミルは大学生ぐらいの年齢だろう。そんな子が首を捻るのはやや子どもっぽいかもしれない。それでも，懸命に考える仕草は可愛らしい。

俺は携帯を取り出して，写真のフォルダを液晶画面に出した。27年前の父さんと母さんが，赤ん坊の俺を抱いて微笑んでいる。

「これ，ダレ？」

「これは俺の父さんと母さんの」

「ハルキの？」

「そ。こうやって結婚して，子どもが出来て，家族になってくんだよ。俺ん家は両親とも早く死んだから，一人暮らししてるけど」

「お前，こんな写真入れてるのか？」

「死んだばあちゃん新しいもの好きでさ。ばあちゃんの携帯の中に入れてあった写真がもったいないから，メモリーカードへ移したんだよ。それから結局消せれなくてさ」

こういうものって，なかなか消せられない。新し物好きだったばあちゃんのパソコンやケータイから，遺品整理の時に膨大な量の写真が出てきて当時はずいぶん驚いた。が，ばあちゃんが大事に思っ

ていた想いまで消してしまうような気がするから，今ではお守りのように持っている。
親指を動かすと，次々に写真が出てくる。久しぶりに見る写真は，自分の過去でも新鮮だ。

「赤ちゃんかぁ。いいよなぁ。可愛いよなぁ」
「気が早いって」

ウットリと自分の世界に入る水野と，現実に引きとめようとする由美子さんが，早くも夫婦漫才をはじめだす。その騒動を横目で見ながら，ミルの表情の変化が気になる。じっと両親の写真を見つめる表情は，あまりに真剣だ。それも，衝撃を受けたような表情。

「わりと両親に似てると思うよ。鼻筋は父さんだし，目元は母さん似だし。目は俺だけ青なんだけどな」
「……ハルキ，このふたりのこども？」
「うん。まだあるなぁ」

何年ぶりだろう。最後に見たのは，ばあちゃんの遺品整理の時ぐらいかも。となると，何年ぶりか。
うっすらと細かい埃を被っていたような，記憶。夫婦漫才を中止した二人が，好奇心で光らせた目を向けていた。

「見せモンじゃないぞ。えーと，これが一歳の誕生日だろ。これは……」

はちきれそうなまん丸のピンクの頬にエクボを作っている赤ん坊。一本の蝋燭が立てられたケーキがあるから誕生日の写真だろう。自分ほどの大きさのクマのぬいぐるみに抱きついている写真。母親に抱かれて電車に懸命に手を伸ばしている写真。ヨチヨチ歩きで鳩を

追いかけようとしている写真。
　両親が俺に残してくれた，最高のプレゼントだ。俺は，この二人から沢山の愛情を貰っていた事が判る。生まれた俺が何故か青い目だから二人は悩んだと思うが，愛情を注いでくれたのは判る。赤ん坊の俺が主役のアルバムで，僅かに小さく端に写る両親は，穏やかな笑顔をしているから。
　水野と由美子さんは，すっかり「赤ちゃんが出来たらきっと……」という仮想の話で盛り上がっている。が，ミルは思い悩むように重い雰囲気。

「ハルキ，こども？　うまれた？」
「そうだよ。こうやって，結婚して，子どもが出来て，家族になるんだ」

　なんだか幼稚園児が小学生に『赤ちゃんはどこからきたの？』と質問されたような，妙な焦りに困ってしまう。まさか，こんな説明がいるとは。ミルの世界では違うんだろうか。チラリとそう思ったが，とても聞く勇気はない。

「とにかく，結婚ってこういう事」

　フォルダを閉じ，話題を変えようとした途端だった。
　ミルの手が俺の手首を掴んだ。その強さに，思わず顔を上げる。怖いほど真剣なミルの視線が，俺を見ていた。

「ちがう。ハルキのとうさん，かあさん，ちがう」

　日本語が，判らなくなったんだろう。そうに違いない。

「しんだ。『後李帝国』，クマリへ来た。クマリ，しんだ。わた

したち，だめ，した。でも，だめ。さがした。ハルキ，さがした。みつけたハルキ，しらない？　おぼえてない？」

痛いほどつかまれる手首が，現実を叫ぶ。見つめるミルから，視線が外せない。穏やかだった茶色混じりの青い瞳の中に，今まで見たことのないほどの怒りが見える。その怒りは，俺に向けられている。けど，ミルの話が全く判らない。言葉はなんとなく判るが，意味が判らない。

「ハルキ，きぼう。わたしたちの，だいじ，きぼう。でも，ぜつぼう。でも，だいじ。だから，ダショー・ハルキの」

「俺はダショー・ハルキじゃない！」

気づいたら，ミルの手を払いのけていた。携帯が飛んで，テーブルのカップを倒す。湯気を立てて褐色の液体が広がっていく。感情が壁をぶち破っていく。今まで抱えていたモヤモヤが，言葉となって広がっていく。

「いくら俺が唄を唄えても違う！　俺はダショー・ハルキでも……ダショー，ダショー，えあしゅています，なきあ，でもなくて」

土煙を上げて崩れ落ちていく日干し煉瓦の壁。耳をつんざくような赤ん坊の泣き声。腹の底からわきあがる憎悪，苛立ち，悲しみ。紅に染まる大海原へ響く，狂ったように奏でる弦の音。愛しくて，苦しくて，泣くような歌声が水平線へ消えていく。

激情が，何処からともなく湧き上がる。俺の抱いた一瞬の苛立ちの感情が誘い水だったように，おぞましい程の負の感情が映像と共に噴出してくる。

頭の中にフラッシュされる記憶に俺の意識が飲まれる。これは誰だ。この感情は，誰の記憶だ。俺じゃない。俺じゃない誰かのもの

だ。今まで見ていた記憶の欠片ではない。
怖い。怖い。怖い！　俺の中に何かがある！

『　その半身に父祖の血がある者よ，この大地に流れていく限り，恐れろ，怯えよ，命乞いをしろ。私の雷が五臓六腑を焼き尽くそう。末代までの苦しみを与えよう　』

口が呪詛を唱えていく。異界の言葉であっても，ソレが身の毛がよだつほどの意味が判る。
水野が由美子さんを庇うように立ち上がる。
違う，違うんだ！　これは俺じゃない！　俺なんかじゃない！

12　魂の履歴書

「『　その大地に一滴の血を零す事なく，命を絶てばよい。その魂は還る事なく，永遠の闇を彷徨うがよい。二度と光を見ることなく失せろ。劫火よ燃え上がれ！　焼き尽くせ！　』……違う，違う，違う，俺じゃない！　これは俺じゃない！　『許さぬぞ。ナキアを穢した者を許さぬ！　その男を父祖に持つ一族全て許さぬ！　白王家，エリドゥ王家，マリ王家もメロヴィン家も，その血族全てを許さぬぞ！　』……止めろ，止めろ，止めろ！　」

感情が爆発する。迸る呪いの言葉と共に，感じたことのない熱さが湧き上がる。見下ろす俺の手から，青い炎が燃え上がっている。恐怖に身を竦めた途端，一瞬の隙をついて無意識から新しい怒りの感情が噴出した。同時，周りの空気が爆ぜる。何もない空中から，真っ赤な炎の固まりが飛び出す。空気の間から，真っ赤に燃えた髪の小人が，威嚇するように激しい踊りで飛び交っていく。

頬に熱を感じる。本物の炎。まるで漂っている可燃性のガスに引火したように，風が炎を纏ってうねる。テーブルの上のケーキが僅かに触れただけ炭化した。真っ黒な固まりが風に吹かれて崩れていく。

燃やされる……自分が出した炎で，全てを殺してしまう。背筋に流れる汗が凍りつく。体中が脈打つように震える。ダメだ，抑えられない。噴出す感情のまま，このまま燃やされてしまう。

「ハルキ！　」

僅かな衝撃。柔らかな香り。温かな感触。

「ハルキ，ハルキ！　」

繰り返される名前に，心が落ち着いていく。鼻先をくすぐる甘い微香が，噴出す感情へ大きく重い蓋をしていくように心が静まっていく。纏っていた青い炎が消えていく。炎を帯びた風が消えていく。

胸に飛び込んできたミルが，強く俺にしがみついていた。その事に気づいた途端，体中の筋肉が緩んでいく。緊張がほどけていく。先の恐ろしい負の感情が意識の底へと隠れていく。

「俺……俺，あれは，俺じゃなかった」

「わかる。あれは，ダショーのきおく。『始祖エアシュティマス』のきおく。もう，だいじょうぶ。あなたは，ハルキだから」

「ミル……ありがとう」

「そこ，すわる。やすむ」

あまりの脱力感で動けない俺の額の汗をそっと拭いながら，ミルはゆっくりと椅子へ座らせてくれる。

運の良いことに，周りに俺達以外の入園者もスタッフもいなかったようだ。ただ，異変を察知したのだろう。遠くからライオンの雄たけび，鳥類コーナーからけたたましい鳴き声が園内に響き渡る。真冬の午後，人気のない動物園に咆哮だけが響き渡る。

「誰も，見てなかったみたいだな。ラッキーだよ」

「……あぁ」

「お前，火事はいかんぞ」

「やりたくてやった訳じゃ，ない。もう……訳わからん」

テーブルの上のケーキとコーヒーは，残らず炭化してしまっていた。気を取り直した山口さんが，素早く売店へ駆けて行く。その後姿を追いながら荒い息を整える。横のミルも，荒い息で座り込む。よく見れば，胸の前で硬く祈るように組んでる両手が細かく震えて

いる。

「なんかね。えらい動物達が騒いでるねぇ」
「ホント何でしょうね」
「地震でも，起きるんでないかね？　嬢ちゃん，早く帰りぃよ。私も寒いで帰りたいわ」

ゆっくりと奥から出てきたおばちゃんは，かなり勤労意識の薄い口調で熱々の肉まんとあんまんを包む。
何食わぬ顔で会話をし，シラをきって笑顔で戻ってきた山口さんは苦笑いをしていた。

「ばれてないよ。このケーキ，捨てとこ」
「ありがとう」
「でも，関口さんには驚かされっぱなしだよ。最初にミルちゃんを治した時も驚いたけどさ」
「今回は，俺も訳わかんない」
「でも，ミルちゃんは知ってるんだろ？　関口の暴走を止めたんだから。止めれたんだから」

水野の言葉には，強さがあった。責め立てる色があった。まっすぐ睨むような水野の視線を，ミルは正面から受け止めていた。
祈るように手を組んだまま，まっすぐに受け止めていた。

「まだ，聞いてないよな？　関口，お前はミルと話をしてないのか？」
「……話って，なんだよ」

心臓が，さっきとは違う理由でリズムを変えた。ビートが早まる。
耳元で脈打つ音がやかましい。繋いだ手に，再び汗が滲む。

「判ってるだろう？　ミルがここに来た理由だよ。お前目掛けて来た理由だよ。関口と何の関係があるのか，聞いてないのか」
「だって言葉が」
「もう通じてるだろ。ミルちゃん，　もう話せるよな」
「水野！　」

聞かなくていい。そんなのは要らない。ただ，一緒にいたいだけだ。横で笑顔を見たいだけなんだ。ささやかな，俺の幸せなんだ。

「このままじゃ，マズイだろ。お前，今みたいな事学校でやったらどうなる？　人目がなかったから良かったけど，今回はたまたまだぞ。また同じように火を噴出してみろ。お前が大事にしている平凡が消えてなくなるぞ！　」

水野の言葉が突き刺さる。それは，判る。そうだけど，知りたくない事だってあるんだ。このままでいたいんだよ。
唇をかみ締めて，横のミルの横顔を見つめる。
どうしてだろう。どうして，俺はキミに恋してしまったんだろう。こんなに苦しいのに。矛盾を抱えなくちゃいけないのに。
怖くて苦しいのに，こんなに恋しいんだよ。
男でもビビるような水野の強い視線を受けていたミルの顔が，ふっと和らぐ。泣きそうな微笑みを浮かべて，ミルは俺を見つめた。

「すべて，はなす。だから，て，つないで」
「うん」

ミルの細く小さな手を，しっかりと握る。
どんな衝撃にも，耐えれますように。
ミルは，空を見上げて話し出した。

「ながい，ながい，はなし。むかしむかしの，おはなしです」

いつだったか，俺が読んであげた童話の冒頭を真似ながら，ミルは囁くように語りだした。

拙(つたな)い日本語で語られる物語は，とても判りにくかった。それでも，ミルは伝わるまで懸命に言葉を紡いでいく。

ミルの世界には，御伽噺(おとぎばなし)のように魔法が存在する事。魔法使いが英雄のように存在する事。ミルも，魔法使いである事。

話を進められるほど，頭の中が悲鳴を上げる。動物達の咆哮は，ますます激しくなる。

「それで，魔法使いがいる世界から，なんでコッチに来たの？」

「……ハルキ，さがすから，きた」

「なんで関口なのさ？」

「ダショー，だから」

水野の責めるような疑問に，ミルはまっすぐに答えていく。そして出た単語に，思わず眉間に皺を作ってしまう。その単語は，最初から大きな疑問だ。

思わず，握っていた手に力が入る。

「ダショーって，最初の頃から言っていた言葉だよね。それ，どういう意味なんだ？」

「むずかしい……ダショーは，ダショー。う，ん」

首をかしげ，ミルは宙を睨む。猛回転で頭の中から単語を探しているのだろう。慎重に，口を開いていく。

「たいせつ，ひとつだけ，さいしょ，ぜんぶのうえ。ダショー，

せかいつくった，ひと。さっきの『エアシュティマス』，ダショー」
「ダショーってのは，尊称かな」
「名前の前につけるヤツ？　あぁ，それなら話が通る」
「じゃあ，『えあしゅています』ってのは人名か。人の名前だね。魔法使いの名前かな」

俺の言葉に，カクカクと頷く。日本語を理解するのは，ほぼ出来るようだ。

「ちょっと待てよ。じゃあ，関口さんは異世界の偉い人？　ミルちゃんの言うとおりなら，その『えあしゅ』なんとかって人の記憶が関口さんにある事になるよ？　関口さん，りっぱな地球人でしょ。何で異世界の人の記憶があるわけ？」
「立派かどうかは疑わしいけど，そういう事だよな」
「そこでツッコムなよ。でも，だから俺，さっきみたいな事おきるのかな」

異界の言葉を喋ったり，唄を唄ったり，炎を噴出したり。どれも非常識な事だから，ここは常識を取っ払った方がよさそうだ。

「ダショー，さいしょのひと，きおく，おなじ。『エアシュティマス』きおく，こころ，おなじ」
「どういう事？」
「『エアシュティマス』のきおく，『ハルンツ』うけとる。ダショー・『ハルンツ』，なる。つぎ，ダショー・『ラインハルト』。つぎ，ダショー・『コウエン』。つぎ，ダショー……」
「ちょっと待った！　ダショーってのは，『エアシュティマス』の記憶を持つヤツの尊称なのか？　そんなに『エアシュティマス』って奴の記憶を持っている人間がいるのか？」
「そうじゃなくて……同じなんだ」

ざわり。
心の中が揺れる。ここ三ヶ月ほどで勝手に頭に湧き出る映像や感情に，ミルの拙い単語が引っかかる。
動揺を，口の中の生唾とともに飲み込む。

「俺が，『ハルンツ』なのか？　『ハルンツ』でもあって，『ラインハルト』でもあって『コウエン』でもあるって事か？」
「何だよそれ」
「『エアシュティマス』ってのは，さっき火を出した最初の魔法使いだ。その記憶が俺の中にあるんだ。いきなり記憶が出てきて火を噴いたんだけど。そいつの記憶を持っているのが，ダショーって尊称をつけた『ハルンツ』で『ラインハルト』とか，色々。ただ，『エアシュティマス』以外の人間は全部同じ奴だ。名前が変わって体が変って，まるでどんどん生まれ変わっているけど，そいつは『ハルンツ』なんだよ。俺は，俺は関口晴貴って名前で，この意識を持っているけど，『ハルンツ』の……そうだ，魂が同じなんだ」

普通だったら，こんなアブナイことは言わない。自分がかなり荒唐無稽で恐ろしい事を言っているのは判っている。でも，三ヶ月で湧き出てきた映像のパズルが一気にはまっていく音を聞いた。
俺は，『エアシュティマス』の記憶を継いだ『ハルンツ』の魂を持っている。
何度も，何度も何度も生まれ変わって，膨大な記憶を抱えて，俺はここに生きている。

「土壁が崩れるのを見た。真っ赤な海に向かって，唄を唄ってた。それは何か夢のようで……これが『エアシュティマス』の記憶かな。だけど他の記憶は凄く生々しいんだ。感覚があるんだ。真っ白な入道雲を突き抜けて空を駆け下りてた。河の中で，誰かと手を繋いで

いた。迷路のような細い裏路地を駆け巡っていた。砂浜に立って，真っ青な空を見上げてた。真っ暗な夜空に流れる灰色の雲も見上げてた。タイルの壁に囲まれた部屋で，水に手をつけて世界を覗いていた。その生々しい記憶の方は『ハルンツ』の魂が記憶していった思い出なんだ，多分」

13　心の行方

「判らん。理解不可能。いきなり何の話なんだ」
「うん。俺もよく判らんけど，ヤバイな……俺って地球人なのかな」
「今更さぁ，地球人だろうが火星人だろうが，関係ないんじゃないかしら」

悩む男二人を尻目に，由美子さんはあんまんを頬張る。
口から湯気を出しながら，ミルにも薦めながら平然としている。

「由美子……こんな時によく食えるなぁ」
「火を出したり怪我を治したりするのより，ずっと受け入れられるよ。あぁ，アリかなぁって。だって，おとぎ話じゃない。力のある魔法使いが，何度も生まれ変わったんでしょ？　魔法使いじゃないけど，チベット仏教の転生とかと同じじゃないの」
「あれと同じじゃないと思うけどね」

チベット仏教で使われている後継者を決める為のシステムは，本人が次の転生についてヒントを出していたはずだ。来世の自分を見つけて欲しいというシステムだ。
だが，俺の記憶の中に埋められた感情は違う。映像の断片や感情の残りから感じるのは，囚われているという感覚。
記憶の中の感情は，ただ解放を願い空を見上げるものばかりだ。
思わず眉間に皺をよせて，ミルを見る。

「何で今までのダショーは，ダショーとして生まれてるんだ？」

首を傾げるミルに，疑問をどんな風に伝えようか。

「つまりさ，魂なんて目に見えないものだろ？　名札をつけてる訳でもなし。偽者が出る可能性だってある。チベットの転生制度だと，自分の生まれる境遇を予言するっていうけど。なんで，どうやってダショーって見分けるんだ？　俺の事，どうやって見分けてるんだ？」

そう。もしかしたら。

「俺は偽者かもしれないぜ？」

この能力も，記憶も，偶然で。こんな壮大なおとぎ話に，自分が関わっているはずがない。目が覚めれば，いい。ミルだけ，いればいい。

じっと俺の目を見つめたミルは，ゆっくりと首を振った。

「ほし，そら，かぜ，みず，ひかり，ぜんぶ，このみち。『主様』のみち，ここ。わたし，みた。あのひ，そらとぶ『主様』とひかり，みた」

それは当然だ。

ミルの目がはっきりと断言している。言葉が不十分でも，ここまで確信を持って言われると否定出来ない。

しかも，「わたし，みた」とまで。見たというのなら，まぁ，そうなのだろう。ミルは嘘をつかないのは，よく知っている。

思わず溜息をついてしまう。本当に，おとぎ話のようだ。自分が関わっていないのなら，おとぎ話で笑ってすむんだけれども。

これは困ったな。そう視線を外した先に，作業着や白衣を着た男性達が小走りにやってくる。

「ライオン舎で，一頭が外堀に落ちたらしいぞ」
「お前達，オラウータン舎まで行って立ち入り禁止の柵張ってこい。あそこの飼育員だけじゃ，手が回らないからな」

遠くから猛獣の咆哮が響き渡る。美しい声の鳥達も，音程外れの叫び声を繰り返している。

この騒々しさは，全てがおとぎ話ではないと叫んでいるのかもしれない。人間より本能が残っている動物達は，おとぎ話のような存在を感じ取ってるんだろう。呪詛を吐き火を噴く魔法使いの気配を野生の勘で嗅ぎ取って，檻から逃げ出そうともがき叫んでいるのだろうから。

俺には，警告にしか聞こえない。おとぎ話ではない，と。これが現実なんだ，と。そう突きつけられたように聞こえた。

女と男というものは，別の生き物に違いない。

総じて，女は逞しい。そして男はロマンチスト。自尊心が強く，弱い。

ネイティブアメリカンでは，女が戦をする決定権を持っていたらしい。男が面子をかけて勝手に他の部族と戦をするなんて，もっての他だった。霊的な意味もあっただろうが，日々の糧と毎日の生活と命を守る為の制度だったんだろう。戦をしないほうが，繁栄する。名誉やら余計なモノを超越した，極めて合理的で強者の考え方だ。

そう。女は逞しい。

昔読んだ本に書かれた一説を思い出して，俺はカフェラテをすする。

さっきより北風が強くなっている。思わず厚手の小さなカップを包み込んだ。

「なぁんで女はこんな寒いオープンカフェに来たがるんだ」
「しかも，本人達はお店の中だし」
「温かそうだなぁ」
「だよなぁ」

恨めしげに視線を向けると，気づいたらしい。
煌びやかな店内の二人が笑顔で小さく手を振ってきた。反射的に笑顔で手を振り返すも，寒さで頬の筋肉が固まっている。
ミルはチェロケースを背負ったまま，山口さんと器用に店内を散策している。
あの後動物園を逃げるように出た俺達は，近くの洒落た通りへ足を伸ばした。オシャレなカフェに，可愛い輸入雑貨店，ネイルサロンと高級という数多のお店。歩く人も散歩中のワンコも，どこかセレブな通りだ。多分，俺には縁がなかった場所。面白い本屋が出来ない限り，ここには来なかっただろう。
北欧中心の輸入雑貨店だそうで。俺はよく判らないけど，ミルが楽しそうに店内を散策しているから，まぁいいや。

「こんなセレブな場所，オレ浮いてるよぉ。関口が一緒でよかったよ」
「何で俺と一緒でいいんだ」
「お前は黙ってても絵になるからな」
「なんだそりゃ」
「関口は本屋がないから退屈だろうけど」
「うん」

さすが親友。よく判っている。

「でもさ，今日は来てよかったな」

「うん。ミルも動物見て喜んでたし」
「違うって。お前の事が色々と判っただろ」
「あぁ……その事か。でも，本当かどうか」
「火を噴出しておいて何を言う。ミルちゃんの言ってた事は本当だろ」

まさか。冗談だろ。
そう笑おうとして水野を見て，口を閉じる。
水野の目がまっすぐに俺を見ていた。いつも笑っている顔が，珍しく真顔だ。

「なんで自分の事になると，鈍いんだよ。はっきりとミルちゃん言っただろ。お前を探しに来たって。お前がダショーって奴だって。間違いないって」
「そうだとしてさ。そうだとして，俺はどうすればいいんだよ」
「決まってるじゃん」

目の前を横切っていく通行人の波が収まるのを待って，水野は低く声を抑えて言い放った。

「お前がミルちゃんの世界に行くか，行かないか。二つに一つだ」

何を言っているんだ。灰色の空を見上げて笑おうとしたが，笑えない。
唐突に頭に瞬く映像。荒涼とした大地，視界一杯の灰色の空。真っ白な鷹。

「っ！　あぁもう，紛らわしい」
「また見えたのか」

気遣わしげな水野の言葉に答えず，カフェラテを飲む。もうぬるい事に，溜息をついてしまう。
そんな俺に，水野は生徒に言い聞かせるように話しかけてくる。

「今までの話をまとめると，お前はミルちゃんの世界では結構な重要人物らしい。何も判らないコッチに乗り込んでくるぐらいだからな。そうなると，目的は一つだろ？　関口をどうにか連れ込む為じゃねぇーの？」
「何の為にさ」
「知らねぇよ。勇者になって世界でも救いに行けばいい」
「馬鹿馬鹿しい。誰かに救ってもらおうなんて他人任せな考え持ってる世界に，行くつもりはないね」
「じゃあ，ミルちゃんはどうするんだよ」
「それは，そう，ミルに聞いてみなきゃ……判らない」
「お前さぁ」

珍しくワックスでセットしたらしい髪を，ガッシガシと掻き毟り水野はうなった。
俺と言えば，話の流れが恋愛がらみになってきた事に戸惑っていた。こういうのは，苦手だ。

「いいか。関口がミルちゃんをどう思っているかは置いといて，だ。ミルちゃんは関口の事好きだぞ」
「……そんな事，判らないんじゃ」
「判る。オレは判る」

俺の言葉を遮って，水野は断言した。

「今日の様子を見てたら判る。関口の事ばっか見てたぞ。お前の笑ったの見て，すんごくいい顔してたぞ。おい，にやけるな」

「にやけてなんか」
「だって，火ぃ噴出したら普通は逃げるぞ。オレも逃げたけど。ミルちゃんは迷わず関口に飛び込んだんだ。体張ってお前を助けたんだぞ。これを好意ととらずにどう説明するよ？」
慌てて顔を背ける。視線の先に，商品を覗き込み笑い合う由美子さんとミルがいる。
「ミルちゃん，この先どうなるんだよ。ダショーのお前を連れて還るつもりだったんじゃないのか？　でも，オレが促さなきゃ今日までミルちゃん側の事情は話さなかった。って事は，お前を連れて還るのに戸惑っているんじゃないのか？」
「なんでだよ」
「お前の為にならない，とか」
「人違いとか」
「火を噴出しておいて，そういう事言うなよ。関口，いい加減に決めろや」
言葉を有る程度話せても，今日までミルは事情を話さなかった。その事は，ミルの中に戸惑いがあるからなんだろうか。俺の事を考えていてくれてるんだろうか。
もし，そうならば。もし，ミルが俺といる事を優先してくれているなら，俺は誤解してしまう。
ミルも俺の事が好きなんだと，そう考えてしまう。
「俺はさ，ミルと一緒にいたいだけなんだ」
見知らぬ世界の事なんか，知らない。知った事じゃない。関係ない。

「ただ，ミルが横にいてくれればいい。一緒に過ごせたら，それでいい」

こんな力も，俺の中の誰かの記憶も，何もいらないんだ。

ガラスの向こうから，視線が重なる。屈託なく笑うミルの笑顔に，微笑かえす。

キミが好きだ。

14　スキ

ガラスの向こうで笑っているミルを，ただ見つめた。
こんな気持ちになるなんて，出会った時には思いもしなかった。
想像も出来なかった。
異世界……そう断言していいだろう，異世界から来たミルを好きになっていた。それまで一人で生活するのが普通だったのに，ミルがいない生活は考えられない。真っ暗でダイレクトメールと領収書しか待ってなかった家に，手料理を作ったミルが待っている毎日になっていた。一人で見ていた深夜のニュース番組は，ミルの「これなに？」の質問コーナーになっていた。休日，本を読んでいるとミルが隣で図鑑を広げていた。ただ，傍に居てくれるだけで満ち足りていた。
そのミルが，異世界に還る事なんて考えられない。今の生活が消えてしまうなんて，考えられない。

「もっと，一緒にいたいだけなんだ。一緒に映画見たり，ドライブしたり，遊園地行ったり，散歩でもいい。ただ，一緒にいたいだけなんだよ」
「じゃあ，さ」
水野の声が，潜めるように囁く。
「ミルちゃんが関口を連れて帰りたいって言ったら，どうするよ」
「そんなの……」
一緒にはいたい。でも，ミルの世界はまるで中世のおとぎ話だ。魔法使いが実在して，刀を振り回して，喋る鷹がいる世界で暮らしていく自信なんてない。地球生まれの俺が，違う世界に行くなんて，

想像も出来ない。
ただ，別れるのは，嫌だ。こういう考えを，自分勝手と言うんだろう。俺のわがままだろう。
ミルは，どう考えているんだろう。

「判らない。そんなの，判らない」

俺はこんなにも弱虫で，優柔不断。そんな俺が，ダショーとかいう魔法使いの記憶を持っているからと，ミルの世界で偉大な事が出来るはずもない。ミルが俺を連れて行かなくても，誰かが世界を救うだろう。大事な用事は済ませられるだろう。
これ以上考えるのが怖くて，カップを置いて歩き出す。ミルの声が聞きたい。別れる事なんか，考えたくない。
自動ドアが開き温かな空気に包まれても，満足出来ないんだ。たった数歩先のミルの傍に，いられればいいんだ。
ずっと，一人で平気だった。ずっと，一人で生きていくんだと思っていた。俺は，他のヤツより孤独に慣れてると思っていた。それなのに，いつの間にか俺はこんなにも寂しがりやで弱虫になっていた。

「あ，関口さん。これ可愛いんだよ」

俺に気づいた由美子さんが声をかけると，古びたチェロケースの影からミルの華奢な体が振り返る。ようやく見られた笑顔に，頬の筋肉が緩むのを実感。暖房が，心の中にまで染み渡る。

「由美子，そろそろ終わるぞ　」
「うーん。時計，買ってこうよ。新居に合いそうなのがあるのよ。あ，そうそう」

後からきた水野に駆け寄ろうとしていた由美子さんが，俺の耳元で囁く。

「ミルちゃん，青い指輪をじーって見てたよ。買ってあげたら？」

「え……」

言葉の意味が判らず，振り返った俺の肩を水野が叩く。

「じゃあ，あとはお開きって事で」

「水野？」

「思いっきり悩め。でもって，青春しろや」

「答えになってないだろ」

「オレが答え出してどーすんの。じゃ，そーいう事で」

爽やかな青春ドラマ並の笑顔を残し，「まだミルちゃんと遊びたいのにぃ」とぐずる由美子さんを引きずって，店内の奥へと消えていく。

答えは自分で出すしかない。

それは，判るけどさ。出ないから悩んでるんだよ。

「はぁ……」

思わず溜息をついて顔を上げると，ミルにじっと見つめられていた。その視線で，胸の中のモヤモヤまで言い当てられてしまう気がしてしまう。茶色まじりの青い瞳には，魔力があるのかもしれない。こんなにも，好きになってしまったんだから。

「これ，綺麗だね」

心の感情を読まれないように，ミルの目の前に並べられている指輪へ話題を移す。

銀細工で細く複雑な紋様をつくる指輪の中に，青い石が蔦に絡まるようにデザインされたものがある。小さな小さな，シンプルな指輪。由美子さんの言っていたものは，コレだろう。

「なんの石だろうね。トルコ石？」

「ハルキ，わからない？」

「うーん。俺，こういうのな苦手なんだ。でも，綺麗だな」

「ハルキのめのいろ，おんなじ。きれい，あお。そらより，きれい，あお」

「そうかな？」

今まで疎ましかった自分の目の色をそんなに綺麗と褒められたら……あぁ俺，頭の中が沸騰しそうだ。体中の血液がボコボコと沸騰してるんだ。だから，冷え切った手が熱くなってるんだ。

目の合った店員さんが，にこやかな笑顔で「指のサイズ，測りましょうか」という申し出をしてくれたのを，上の空で聞いて頷いていた。

ロクに値札を見ないで「買います」と言って財布からカードを出していた。

正気が戻ったのは，北風吹き晒す店の外に出てからだ。

興奮して火照った頭が冷えた。寒空の下で，ようやく理性を取り戻す。

「ハルキ，これ，いいの？」

「うん。ミルに似合う……けど，少しサイズ大きいかな。ブカブカしてない？」

「だいじょうぶ。ありがとう」

ミルの細い指で，指輪がクルクルと回っている。一点ものの手作り。似たデザインの指輪があったが，「このいし，いい」というミルの言葉で即決。歩きながら右手の薬指を眺めるミルは，少し困ったような笑顔を浮かべている。

何故だろう。ミルは，時々こんな顔をする。嬉しいけど，その前に大きな感情が邪魔している表情だ。素直に喜べない，そんな事を言っている顔だ。最初の頃は遠慮しているのかと思った。生活を全て俺に依存しているのだから，素直なミルは遠慮しているのだと思っていた。でも，今日の告白を聞く限り，そんな簡単な訳だけではないと確信する。

俺に隠している事がまだあるんだろう。それが何なのか想像も出来ない。大きな重い事情を細く小さな体に押し込んで，平然を装うミルから無理には聞きたくない。きっと，俺もミルも傷ついてしまうから。

このままじゃ，いけないんだろうか。

二人で，何もなかったことにして，この世界で生きていったら駄目だろうか。

落ち葉が積もった通りを並んで歩いてる俺達は，周りのカップルと何も変らない。何も変らないのに，抱えたものが重過ぎる。屈託なく笑うミルの顔が，見てみたい。

「ねぇ，この後どこ行こうか」

「ゆみさんとみずのさんは？」

「急に用事が出来たみたい。また，こうやって出かけたいね」

「うん。どうぶつえん，おもしろかった」

「そっか。……ミルは，行きたい所ある？　山とか，海とか」

「ハルキ？」

沢山の時間を共有したいよ。もっと沢山の表情を見てみたいよ。

そんなのは，当たり前の感情だと思うけど，俺とミルには許されな

いんだろうか。
小洒落た通りと街路樹の向こうに，灰色の雲。重そうな冬の雲の切れ間から一筋の光が差し込む。あの光のカーテンは，どこに当たってるんだろう。
俺達を当ててくれ。天から差し込むその光を，俺達に当てて下さい。
あの光の先に神様なんていないと知ったのは，いつだろう。そんなに現実甘くないと知ったのは，いつの頃だろう。
神様なんて，信じてなかった。けど，今なら信じるから。ミルと出会わせてくれた存在を信じるから。
だからどうか，俺からミルを取り上げないでくれ。
何処にも，行かないで。

「いっぱい，行こう。色んなところ，ミルと見てみたいんだ」

細い手を思わず繋いだ。指先に触れた指輪の冷たさが，切なくなる。手を繋いでも，言葉を尽くしても，ミルの心を変えるにはどうすればいいのか判らない。

「クリスマス，一緒にケーキを焼こうか。ばあちゃん仕込みの特製チーズケーキも作ろう。正月はさ，初詣しよう。屋台でたこ焼き買ってさ。おみくじもしよう。あと，節分もしよう。海苔巻きの丸齧りも。水野達の結婚式も出ような。で，桜が咲いたら花見しようよ。弁当もってさ」
「ハルキ……」
「だから，だから，一緒にいよう。一緒に，暮らしていこう」
「ハルキ……」

返事は，ない。
俯いて，歩くミルが答えを俺に突きつけていた。

繋いだ手が，強く強く握られる。
信じていいのか？　その手の強さを，信じていいのかい？　繋ぐ手の強さがミルの本心だと，信じていい？

「ハルキ，やさしい。とても，とっても，やさしくて，どうすればいい？」

震えた小さな声が，零れた。黒髪の影でミルの顔が見えない。

「わたし，ひどいこと，してる。なのに，ハルキやさしい。なんで？」

15　涙の理由

枯葉で覆われた歩道を流れるまばらな人波に逆らって立ち止まる。流行の服に着飾った男女が，楽しげに歩いていくのを背景に，俺達は立ち止まっていた。華やかな会話や店から微かに漏れるクリスマスソングの音色が，別世界のよう。誰もが浮かれるこの場所で，俺達は本心をさらけ出そうとしていた。

「わたし，ひどいこと，してる」
「俺は，ひどい事されてるって，思ってないよ」
「ほんとう，いってない。ダショーのこと，だまってた」
「うん」
「さっき，エアシュティマス，ハルキ，とられそうだった。あぶなかった」
「でも，ミルが助けてくれた。体張って抱いてくれたから，俺は正気に戻れたんだ」

俯いた顔は，艶やかな黒髪が覆われている。コートの端を握り締めて，怯えるように声を絞り出すミルは，崩れる寸前の砂の山のようだ。ほんの少し，突付いたら崩れそう。今，水をかけたら流れてしまいそうな脆さ。すでに，砂粒がサラサラと表面を零れているかもしれない。ほら，雪崩が起きそう。

「ハルキ，おしごと，してた。せんせい，してた。いっしょうけんめい，いきてる」
「うん」
「なのに，かってにココ，きた。わたし，じぶんたちのことだけ，かんがえてた。ただ，ダショーをとりもどしたくて」
「うん」

「ダショー，きぼう。わたしたち，だいじ。ハルキ，わたしたち，きぼう。ダショーいたら，きっとうまくいく。そうおもってた」

「だから，あの時泣いたのか？　学校に来ちゃった時，職員室で泣いたのか？」

夏休み明けの初日に，突然に学校に来たあの時の事だろう。泣きながら謝っていたのを思い出す。

あの時から，そう思っていたんだろうか。俺が普通に生活している事に気づいて泣いてくれたんだろうか。

ずっと，悩んでいたんだろうか。

判るはずもないのに。

異世界に住んでる相手に，生活があるなんて，普通は考えもしないもんだろう。ましてや，事情持ちで必死なミル側に，俺が平凡に生活しているなんて思わないだろう。

「ミルは優しいな」

そんな事考えないで，俺をかっぱらう方法だってあっただろうに。

俺の事なんか考えないで，異世界へ連れてけばよかったのに。

もっと自分達の事優先していけば，いいのに。

俺の事を優しいと言うミルは，優しいと思う。相手が傷つくなら，自分が傷ついて構わないなんて。

「ミルは強いな」

俺は，ただ一緒にいたいと，それだけ考えてただけだ。

自分本位で。離れたくない一心で。俺の気持ちを，優先していただけで。

俺こそ，自分の事しか考えてないよ。思わず，口の中で苦笑いをかみ殺した。

情けないのは，俺の方。
この一言も言えず，俺も俯いて尋ねる。
ミルは，この世界に来た理由を言ってくれた。本当の理由を，言ってくれた。
最も，認めたくない事だったけど。でも，それを確認しなくてはいけない。逃げられない現実になってしまった今，ミルにもう一度確認したかった。

「ミルは，俺を取り戻しにきた？　って事は，俺は，本当にミルの世界にいた？」

俯いたまま，頷く。揺れる長い黒髪の奥から，ポタポタと涙が零れて歩道のタイルに丸い跡が出来上がっていく。

「そっか。そうか。本当に，そうなんだ」

白い鷹が最初に残した言葉を思い出した。
『潮時ぞ』。あれは，こういう意味だったのか。
ミルの世界は，かなり事情持ちのようで。
異世界にいったダショーなる俺を，必死の覚悟で連れ戻さなければいけない訳があるんだろう。
たった一人の存在が希望になってしまうなんて，危うい世界。他に希望はないんだろうか。なんとか出来なかったんだろうか。こんな女の子一人を送り出さなきゃいけない程，イカレテるんだろうか。
無茶苦茶だ。
涙を零し続けるミルの姿に，訳の判らない苛立ちまで感じてしまう。

「ミルが気にする事じゃない。全然ミルは関係ないよ」
「ちがう。ミル，『クマリ』。さいごの『大連（おおむらじ）』。なんとかする，

あたりまえ」

「……よく判んないけどさ。一人で抱え込まないでいいんだよ」

何で，こうも一人で抱え込むんだろう。ミルは，それなりに責任ある立場なのかもしれないけど。いや，異世界に来るぐらいだから，それなりに向こうでは相応しい地位や役目を持っていたんだろう。

「ここでは，ミルはただのミルなんだから。俺，一緒にいたいよ。だから，ミルの悩みも一緒に持ちたい」

あぁ。誰かの結婚式で見知らぬおじさんが言っていた言葉って，こういう事だったかもしれない。

苦しみは半分。喜びは倍に。

一緒に悩めば，その苦しみは半分になるだろうか。これが，一緒に生きていくって事だろうか。

なら本望じゃないか。

俺の中で，何かが決まる。

ミルの顔に，そっと手を添えた。

流れる髪を分けて，顔を向かせる。

真っ赤な目をして，涙で濡れた顔。綺麗で，清らかな，大好きなミル。

「一緒に考えよう。どうすればいいか。ミルの心配が何なのかまだ判らないけど，きっと方法がある」

「ハルキ……」

「俺，ミルが好きだから。大好きだから。一緒にいたいから。だから諦めない」

そうして決めた道なら，きっと後悔しないだろう。俺の中の，ミルが好きな気持ちは，一番大事なものだ。一番，譲れない事だから。チョークで荒れた俺の親指は，ミルの柔らかな肌には少し痛いかもしれない。

でも零れる涙が綺麗で，全て受け止めたくて。見下ろした濡れたミルの頬を流れる涙を，ささくれた指で拭っていた。

何度も，何度も。

ミルは，じっと俺を見上げて涙を零し続けた。

「きっと，方法があるよ。一緒にいられる方法があるよ」

「……うん」

「だから，だから」

一緒にいさせて。傍にいさせて。何時も，横にいて。

「だいすき」

薄紅色の唇が，短い言葉を零した。

「だいすき」

世界が，止まった。心臓の音が，消える。雑踏の気配も，感じない。

全ては，腕の中のミルだけ。愛しい，その存在が全て。

「ハルキ，まもる。なにがあっても。だいじ，ハルキ。だいじょうぶ」

それは俺の台詞だろ。

気づいたら，抱きしめていた。

投げられる好奇の視線なんて，関係ない。人目ある陽の下だなんて，関係ない。

腕の中のミルを失わないように。その心が逃げてしまわないように。今のこの瞬間が消えてしまわないように。

強く強く。ミルの腕も俺の首の後をかき抱いていた。

「ハルキ，まもる。だいすき」

「うん……愛してる」

「だいすき」

「大好き」

大好き。愛してる。これ以上を表現する言葉があれば，いいのに。胸に溢れ出てくる気持ちを，もっと表現できればいいのに。

だから，こうやって抱き合うのかもしれない。ただ，肌を触れ合わせたいと，思うのかもしれない。

俺とミルは，じっと抱きしめあった。

露骨な視線も，よそよそしく避ける気配も，無視して。

だって，世界にいるのは俺とミルだけなんだから。

坊さんが走るほど忙しいから，師走。

いつの時代も忙しい時期らしい。冷静沈着であるべき僧侶も走ってしまう十二月。もちろん教師の仕事も忙しい。

冬休みなんてのは，部活がない人が満喫するものだ。

期末テストを終わらせ成績を出して保護者会をして一安心と思ったら，休み中の課題を用意。ようやく休みに入っても補習の準備や新学期の準備に追われている。冬休み明けに早々と実力テストもあるし，三年生の受験も本格化する。俺の担任クラスは二年だけど，

三年の授業も受け持っているから休み中の補習もある。もちろん部活も。休む暇なんてない。冬休みに入ってからも，朝に学校行き仕事と部活をして，夜に帰る生活は変らない。

「ふぁああ」

特大の欠伸で大きく口を開いたところで，カウンター向こうのキッチンにいるミルと目があう。

「ハルキ，ねむたい？　おふろ，はいる？」
「うん。そうだなぁ。でも，この本読んでおきたいし」
「しごと？」
「仕事の一つかな。今度の授業のネタ探しだし」
「しごと，しすぎ。すこし，やすむ」

少し眉を寄せるミルの顔に苦笑して，本を閉じる。
なんだか，すっかり家族みたいだ。キッチンから淹れたてのお茶を持ってきてくれるミルは，新妻……い，いや，そういう連想はヤバイ。

「お，お茶ありがと。風呂から上がったら飲むからおいといて」
「でも」
「じゃ，先に寝てていいよ。おやすみー」

あたふたと，用意されていたパジャマを掴んで脱衣所へと飛び込む。
あぁ，ヤバイ。
先週，動物園デートでミルの告白聞いてから，意識しすぎだ。好きな相手と一緒にいられるのは幸せだけど，一つ屋根の下で暮らしながら何も進展がないのは，苦痛をともなう忍耐が必要なわけで。

水野はそんな俺の相談を聞いて，呼吸困難になるほど電話口で笑いこけるし。これから先の展開は，難しい。
複雑な思いが混ざった溜息をついていた。

16　願い

遠くから救急車のサイレンが聞こえる。
築四十年の家は，外の木枯らしの寒さも音も完全には塞げない。湯上りの体から急速に熱を奪っていく。まだ濡れた髪をタオルでガシガシとかき回しながら，灯りがついたリビングの扉をそっと開ける。ミルは，もう寝ただろうか。

「あれ？　まだ起きてるの？」
「あぁ，うん。その，みてた」

基本，早寝早起きのミルが十一時過ぎまで起きてるのは珍しい。リビングの暖房もまだついたままで，その温かさにホッとすると同時に首を傾げる。
「お茶を入れ直す」というミルの後姿を何気なく追いながら，ミルが座っていた椅子に座ってみる。視線の先には，隣の仏間。壁の本棚に置かれた両親のスナップ写真が見える。これを見てたんだろうか。

「寝れなかった？」
「うん」
「思い出してた？」
「なに？」
「家族の事。ミルの家族の事，思い出してた？」

驚いた顔のミルが，二つのカップを持って戻ってくるのを笑って迎える。
本当に，ミルは何も言わない。言わないで，何かを抱えている。俺には，頼りなくて話せないのだろうか。辛すぎて，話せないの

だろうか。いつか，何でも話してくれるようになるだろうか。

「ミル，そういえば家族の事話してないよね」

「なんで？」

「俺の家族の写真見て，何か考え込んでいたんじゃない？　最近，何か変だよ」

「へん，ハルキ，いっしょ。さっきも」

「さっきは，その，アレさ」

やぶ蛇だった。

「ミルのお父さんとお母さんって，どんな人なの？」

どうにか話の向きを変えよう。そう振った途端，ミルは小さく口元で笑った。

「すこし。あまり，おぼえる，ない。わたし，しんでん，そだった」

「しんでん……神殿？　神様を祭る，神殿？」

「わたし，クマリ，さいごの『大連（おおむらじ）』」

先週聞いたような単語。半乾きの髪を思わずかき上げる。『大連（おおむらじ）』というのが，ミルの地位なのだろうか。

「じゃあ，お父さんともお母さんとも，あんまり一緒じゃなかったの？」

「三つで，しんでん，いった。八つで，ぜんぶ，きえた」

「……消えた？」

「しんだ。クマリ，なくなった。みんな，しんだ」

「……そうか。ごめん」

「ごめん，ちがう。わたし，ちゃんという」

何て事を軽く聞こうとしたんだろう。そう思ってカップを持って立ち上がろうとした途端，ミルが手を押さえた。

冷たい手に，青い石の指輪が光っていた。

「ハルキ，しって。きいて。わたし，はなす」

「ミル……辛かったら，無理しなくていいんだよ」

「はなす。はなす，する」

茶色交じりの青い瞳が，まっすぐに俺を射抜いた。心を摘まれたまま椅子に座り直した俺は，壮大な話を聞いてしまった。

八つで，ミルの生まれた『クマリ』という国は滅んだ事。

隣の『後李帝国』に攻め入られ，ミルが人質のようにいた神殿が治める国『聖エリドゥ法王国』に助けを求めたが，援軍すら出してもらえなかった事。

僅かな家臣と神殿を抜け出し『クマリ』に着いた時には，全てが燃やされた後だった事。

八つの女の子が，何が出来るのだろう。まだ大人に保護してもらう年齢じゃないか。

大変だったね。辛かったね。

そう声をかけても，楽になるのは自分の心だけだ。必死にその時間を生き抜きてきたミルに，何て言えばいい？　沈黙しかないじゃないか。

カップを包んでいた俺の手は，ミルの手を包んでいた。

ただ，心に触れられるよう。そう思って。

「クマリついたとき，みた。そら，のぼる，ひかり。『主様』，ダショーのいのち，はこんだ。それ，ハルキ」

「『主様』……あぁ，最初に会った白い鷹だね？　あいつ，俺を

地球へ運んだって事か」

数ヶ月前からの記憶の欠片が，再び音を立てて組み合わさっていく。

荒涼とした大地。灰色の薄暗く重たい空。空を駆け上がる感触。

この記憶が，その時のものだろう。

目を閉じて，その光景を思い出す。俺，一度，死にかけたんだ。

それを助けてくれたんだ。

あおの白い鷹が『忘れたのか』と驚いたのも，無理ないかも。

「だから，ハルキ，おとうさんおかあさん，ふたりいる。クマリと，ここ」

「ミルの世界での俺の両親かぁ。不思議な感じだな。ミルは，その俺の両親には会った事あったの？」

「おとうさん，ない。でも，はなし，きいた。おとうさん，かたなつくるひと。とても，とても，ちから，あった」

ミルの目が，微笑む。

ようやく，柔らかな表情をして見つめてきた。

動物園で俺の両親の写真を見て「ちがう」と言ったミルは，この事を伝えたかったんだろう。

両親は，もう一組いると。俺の為に死んだミルの世界の両親を，無視するなと。沢山の人が死んだという，その光景を忘れるなと。

そんな無茶苦茶な話，簡単には信じられないのに。でもどうしてだろう。今の俺は素直に信じていっている。

微かに残っていた記憶の欠片のせいだろうか。繋いでいるミルの温かさのせいだろうか。

「おかあさん，さいご，わたし，みた。うつくしい，きれい，ひと。おなかのハルキ，『主様』にあずけた。なまえ，つけた。なに

か，わかる？」

「ミルが看取ってくれたのか？　名前，つけてくれたのか？　その……ミルの世界の，俺の母親？」

口にする単語，おかしくないだろうか。ミルの世界の俺の母親。俺の知らない，知らなかった母親。もう一人の母親。その人が，死ぬ間際につけた俺の名前はなんだろう。

息を飲んだまま見つめる俺に，ミルは泣きそうな顔で微笑んだ。

「ハル。ダショー・ハルンツの，ハル。こっちのなまえ，ハルキ。ハル，いっしょ。すごい」

「……そう。そうか」

こんなのは偶然だよ。

そう言いそうになるのを，飲み込んだ。きっと，ミルはこの言葉を伝えたかったんだろう。この言葉を信じてきたんだろう。異世界にいった俺の名前にも『ハル』がついている偶然を，必然として信じていたいんだろう。だからこそ，ミル達を救ってくれると信じてきたんだろう。

沢山の期待と希望。俺の名前を知ったミルの心に，どれだけの希望が生まれたんだろう。その後，俺がこの世界で足つけて生活している事を知って，どれだけ自分を責めたんだろう。どれだけ絶望して葛藤したんだろう。自分の世界と，俺の幸せと，一緒にいたいという思いと，引きちぎられそうになったんだろう。あの日，職員室で流した涙は重かったんだ。こんなにも想いや願いが詰まっていたんだ。

押しつぶされそうな想いを，否定できない。とてつもない絶望を耐えるために信じてきた希望を，打ち砕けない。

ミルが押しつぶされそうなら，俺もその絶望を背負おう。けど……。

「じゃあ，俺は本当に，ダショー・ハルキなんだろうね」
「うん」
「少し，恥ずかしいけど」
「ダショー，しんでんのぬし。『聖エリドゥ法王国』のおうさま。じしん，もつ」
「いきなり凄い話なんだけど」
「うん」

世界を救う勇者になんか，なれない。
王様になんかにも，なれない。
出来るのは，ミルの手を握る事だけ。
そんな俺が，何を出来る？

「ハルキ，あえてよかった。こっちのおや，ハルキそだててくれた。ありがとう，きもち，いっぱい」
「俺も知らなかった。ミルの世界で，一度死にかけたんだな。両親が，いたんだな」
「ハルキ……いきてて，ありがとう」

ミルの瞳が，まっすぐに俺を射抜く。
俺は，どうすればいい？　異世界に，行くのか？　何も知らない世界へ。ただ，ミルを想う気持ちはあるけど，それだけでトンデモナイ世界へ，行くのか？
魔法が存在して，魔法使いがいて，四本足の動物も空を飛んでて，どうやら戦争してて，治安が悪そうで科学も進んでなさそうな場所へ？

「びっくりした？　おどろく，した？　ハルキ，だいじょうぶ？」

「あぁ，うん。驚いたけど，大丈夫だよ」

笑った顔が，僅かに遅れたのに気づかれただろうか。思わず顔を伏せて，ミルの手を離す。

怖いんだ。恐ろしいんだ。自分がどうなるか，怖いんだよ。

こんないい大人になって，知らない世界へ飛び込む事が，怖いんだよ。

きっと今，人生の選択の崖っぷちに立っているんだ。その事が怖いんだよ。

そんな事にビビる俺の顔を見せたくなくて，偽りの笑顔をのせた顔を上げる。

ごめん，ミル。俺は怖いよ。

「ねぇ……ハルキ。わたし，おねがい，ある」

ミルの口から零れた『お願い』の言葉に，思わず体を固くする。

まさか。

「いっしょ，ねて。てをつなぐ，ねて。はなしたくない」

「……は？　手を繋いだまま，寝たいの？！」

てっきり，一緒に私の世界に戻って欲しいと言われると思った俺は，口をぽかんと開けた。

手を繋いだまま一緒に寝る……一緒に寝る？！　一緒に寝るって？！

「おねがい……だめ？」

困ったように首を傾げるミルを見て，俺の体温が急上昇する。

そ，そりゃ，寝たいよ。寝たいけど，手を繋いだままっていうリ

クエストの意味は，「手を出すな」という事でしょ。その，いや，明らかに未成年で，そーいう関係はいけないし。

違う！　俺，何考えてる！

でも男にそのリクエストは難題だろ！

僅かな間で悶絶する俺を見て，ミルは俺の手をとった。

「ハルキ，おおきいて，だいすき。やさしい，て。あったかい。きっと，ねれる」

「そ，そっか。うん。じゃあ，手を繋いだまま，寝ようか」

ミルに邪心はない。煩悩だらけは俺の頭だ。

幼い子どもが，寝れない時に母親の温もりを求めるようなものだ。

そう，そういうものだ。

でも……今夜は寝れそうにない。

17　北風吹く先

「年末年始でも，生活リズムは崩さない。手洗いうがいで，風邪予防。少しずつでも毎日勉強。休まず焦らず風邪引かず。いい年過ごせよ。以上！」

毎年恒例になった文句と共に，今年最後の補習を終える。

伸びをするように立ち上がる生徒達の顔には，安堵感が漂っている。難関コースの生徒も，平凡コースの生徒達も，ほんの僅かな息抜きの年末年始を楽しみにしているのだろう。朗らかな笑い声が，チャイムと共に隣の教室からも聞こえる。

「センセー，ばいばーい」

「こういう時は「良いお年を」って挨拶」

「ジジくさぁ」

「親戚のおじちゃんにはそう言っとけ。お年玉倍増計画だ」

一際明るい声を上げて笑う生徒達に助言すると，とびきりの笑顔で教室を飛び出していく。

来年も，みんな元気に会えますように。

そう願いながら，教室を去っていく生徒達に「学校閉めるから，忘れ物してくなよ」「車，気ぃつけろよ」と声をかけながら，戸締りをしていく。

今日は部活はないし，最後に気になる生徒達の家に電話かけたりして，後は……家に帰るか。

快晴となった冬の陽の中，温かくなった教室で大あくびをして黒板の源氏物語を消していく。

結局，昨晩は寝れなかった。大好きな相手と，布団を並べて，手を繋いで，平常心で寝れる訳がない。窓に白い光が滲むまで，悶々

としていた俺は，定刻に鳴り響く目覚まし時計にたたき起こされた。
ミルの「いってらっしゃい」で送り出されるまで笑顔で通したものの，学校についてから気を抜くとアクビが止まらない。

「ふあぁぁあ」

ガラスに映るマヌケ顔の俺の目の下には，立派なクマが出来上がっている。それでも，ミルは嬉しそうだったからいいか。
手を繋ぐ。
視線が合う。
それだけで，俺達は布団の中で笑いあった。視線で，沢山の想いを交わしたような気がした。手を繋いで，こんなにも満ち足りた気持ちになれるなんて。ゆっくりと目蓋が閉じていくミルの寝顔は，とても可愛かった。あぁ，やっぱり大好きだ。何度もそう思った。
そう思って，悶々と苦しんだわけだけど。
家に帰ったら，約束していた年末の大掃除をしよう。明日は，年末の買出しだ。
注連縄に，松や千両を買おう。おせちも買おう。甘口のスパークリング・ワインも。ミルも一緒に飲めるといいな。それから，一緒に年越しソバ食べながら紅白見て。N響聞いて初詣行って。
やりたい事は沢山ある。
今までは，たった一人で過ごしてきた年末年始。二人だと，どう変るのだろう。
今年のクリスマスは，大好きなミルと一緒にケーキを焼いて食べて過ごせた。ただ相手がいるだけで，何気ない事がとても楽しかった。何をしても楽しかった。
一年の中で一家団欒や恋人同伴を強調される大嫌いだったこの時期が，今年は凄く楽しみだ。
木枯らし吹く渡り廊下を施錠しながらも，鼻唄が出てしまう。

「お疲れ様ーっす」
「あぁ，関口先生。補習ご苦労様」
「北館，渡り廊下も施錠しときました」

教務に鍵束を渡して，机に座る。
前日までの仕事の資料が山積みだ。ある程度片付けないと，用務員の加藤さん「机が拭けない」って怒るだろうな。
慌てて引き出しに入れだすと，聞き慣れた声が飛び込んできた。

「関口センセー，一緒に昼飯どうっすか」
「……なんで水野がここにいるんだよ」

和やかな陽だまりの応接セットに，アイスバーを咥えた水野が笑顔でソファに座っていた。

「野球部の練習試合」
「水野先輩と関口先生，お知り合いなんですか？」
「悪友」
「親友でしょ，親友」

新任の体育教師，栗山先生が初々しい顔に驚きの表情。世間は狭いもんだ。
そっちこそ，知り合い？　そう俺が聞く前に「高校の後輩」と水野はアイスバーを口から出して答える。
確かに，部活してたんだろう。埃っぽいジャージを身に纏っている。が，十二月にアイスバー。アイス好きにも，程がある。

「関口も食う？　ガリガリくん」
「食べない」
「プレミアチョコ味だぜ」

「俺はこっち。学生ん時から変らない味覚してるんだなぁ。年取ると冷えて大変だぞ」
「まだ若いからいいんだよ」

水野と栗山先生がバリバリとアイスバーを齧るのを横目に，マグカップにコーヒーを注いで応接セットへ向かう。

「こっちにくるなら，一声かけてくれればいいのに」
「急に決まってさ。しかも部活ラストの日。お前さぁ，もう少し余裕くれよな」
「す，すみませんっす。あ，体育館の施錠しなきゃ。ごゆっくりー」

水野の攻めに，栗山先生が逃げていく。その後姿を笑いながら見送る。

「あいつ，大丈夫かよ」
「それなりに。生徒にナメられてないし，指摘はよく聞いてるし。俺は二年の国語担当で，あんまり接点ないけど，いい人だよね」
「まぁ，な。で，どうよ，どうよ。ミルちゃんとは上手く……」
「その話題は，外にしてくれよ」

以前，ミルが学校に来たと話した事を思い出したのだろう。
水野は苦笑いをして，人様の学校の冷凍庫から新たなコンビニ袋を取り出して歩き出す。
どことなく休み前で浮ついた職員室を出て，人気のない屋上へ向かう。
マグカップのコーヒーだけが，湯気をさかんに出している。

「あれからどうよ。動物園デートで愛を確かめ合った二人は，ど

うよ」
「どうよって……進展はないよ」
「ない？　何か話したんじゃねぇの？」
「いや，話はしたけどさ」

古びた扉を開けると，緑のフェンスに囲まれた絶景が広がる。狭いグランドの向こうにそびえる，家の屋根の海。その彼方にそびえる，ターミナル駅の摩天楼。そびえるガラスの塔の数々が，冬の柔らかな日差しを乱反射して輝いている。

「あの日，あそこを飛んだんだよな」
「おう。今でも信じられない」
「もう四ヶ月経ったんだよね」
「だなぁ」

緑のフェンスに寄りかかり，息を吹きかけながらコーヒーを啜る。水野は袋からソーダ味を取り出しながら，ぼんやりと頷いていた。

「昨日さ，ミルが色々話してくれたんだよ」

下校していく生徒達を見下ろしながら，ポツポツと話していく。ミルの家族の事。祖国が焼け野原になった事。俺のもう一組の両親の事。

相槌も打たず，黙々とアイスバーを食べてる水野。名残惜しいのか，食べ終わってもアイスの棒を咥えたままだ。

「やっぱりさ，俺を連れ戻しに来たらしい。俺，半分はミルの世界の人間だったらしいけど」
「そんな事出来るんか」
「あの白い鷹が運んできたらしい。俺はその辺りはよく憶えてな

いけど，確かに……空を飛んでく記憶や感覚はあるんだよ。あれが，ソレなら，本当なら，そうなんだろうけど」

「あれがソレで，これがあれ，か」

「茶化すなよ」

「うん。まぁ，事実，関口の力って人間離れしてるもんなぁ」

「はは。未確認能力だったっけ」

「ソレソレ」

夏の研修帰りにふざけながらの会話を思い出し，二人して笑いあう。

あの時は笑っていた事が，こんな未来に繋がっていたなんて。想像もしていなかった。

水野もそう思ったのか，アイスバーの棒を咥えたまま黙ってしまう。

乾燥した北風が，何もない屋上を吹き荒れていく。年末に向かって浮かれ出した世間の雰囲気が，空気に溶けて伝染しているのかもしれない。帰宅していく生徒達のはしゃぎ声が，いつもより明るく甲高くリズミカルだ。そんな世間の中から出てしまったのか，俺達は屋上からの絶景をぼんやり眺めていた。

「ミルちゃんの世界，行くのか」

「……判んないよ」

「でも，ミルちゃんは全部話したんだろ？　あとは関口が決めるんじゃね？」

「それはそうだけどさ。水野だったら，いきなり異世界に行けるか？　戦争してて，科学も進んでなさそな世界だぞ」

「……でも，関口は魔法使いなんだろ」

「だった。過去形。それにさ，魔法使いって言うより……唄使いとか精霊使いとか，呪術師って雰囲気じゃないか？　ミルは言葉を知らないから魔法使いの単語を使ったけど」

「そうだよなぁ。関口があんな服着て魔法使いってのは……想像するもおぞましい」
「どういう想像してんだよ」
「や，でもミルちゃんがあーんな露出度高い服着るのは歓迎かも……」
「妄想やめろっ」

とりあえず，アブナイ妄想を始めた水野を叩いて溜息。
そう。俺の前の人格は魔法使いやっていたんだろう。ダショー何とかだったんだろう。でも，俺は，関口晴貴は違う。普通の成人男性で，公務員で，国語教師で。
俺に魔法使いを求められても，困ってしまう。ＲＰＧのゲームに入っていくには，年を取ってしまった。いや，新しい環境に飛び込む勇気が，もうないんだ。ようやく掴んだ安定を失いたくないんだ。かといって，今のままではミルに対して中途半端になってしまう。この冬休みに答えを出すべきかもしれない。でも……。

「行かないなら，ミルと別れる事になるし。一緒にいたいのなら，あっちの世界に還る事になるし……」

俺が向こうに行けないように，ミルにはこの世界は居心地悪いかもしれない。

「もし，もしも行くのなら，色々と整理して行きたいし。家とか整理して，退職して引継ぎして……やっぱり，そんなの出来ないかな……」
「行くのも行かないのも，いいけどさ。とにかくオレの結婚式には出席してからにしろよ」
「まだ何も決めてないし……でも，行くなら，水野の結婚式には出るよ」

「おう。二次会のマジック，頼むぞ。山ちゃん，安西先生にも声かけたってさ。吉田先生と来るかも」
「前代未聞のマジックを披露してしんぜよう。まかせろ」
「あんま張り切るなよ。関口のマジックは本物なんだってば」
「ははは」

水野との軽口に，何度救われただろう。何度，絶望から救い出して貰っただろう。
こうやって，何度もくじけそうな気持ちを救い出してもらった。孤独に耐えられた。
そろそろ，ひとり立ちなのかな。ミルという人を見つけられたのだから。水野は伴侶を得て道を進んでいくのだから。
俺達の道は，こうやって進んでいくんだろうか。
互いに支えあった学生時代，独身時代から，こうやって伴侶を得て互いの声の届く所でレールを敷いて進んでいくんだろうか。
俺の敷いていくレールは，何処へ延びていくんだろう。
この北風が吹いている所だろうか。それとも，まだ感じた事のない風が吹く所なんだろうか。
灰色の雲を風が突き飛ばした，晴れ渡った青い空を見上げていた。
ずっと，ずっと。体が冷えるまで見上げていた。

18　走れ！

校舎から出てくる生徒も，いつの間にかいなくなっていた。手にしたカップは空になり，すっかり冷たくなっている。
そろそろ，職員室に戻るべきかもしれない。

「昼飯，一緒にどうだ？」
「近くに煮物が美味い定食屋あるよ。そこでいいか？」
「いいねぇ」

栗山先生も，そろそろ仕事が終わった頃だろう。飯を食べて，仕事納めして，とっとと帰ろう。
大あくびと伸びをして，回れ右をした途端だった。一陣の風が吹き荒れる。

『風が吹くぞ』

懐かしい声に，とっさに閉じた目を開ける。見上げる緑のフェンスのてっぺんに，懐かしい白い鷹がいた。

「『主様』……」

思わず零れた言葉に，鷹は金色の瞳の瞳孔を細めた。
何でここにいる？　その疑問に答えるように，音なき音が頭をつんざく。
夏の再来のように。

『クマリの娘は行く末を決めたようだ。残念な事だ。ワシはあの娘を気に入っておったのだが』

夏の比じゃない。とてつもなく音程ハズレな爆音が弾けるように押し寄せる。
その音源の先を見ると，ターミナル駅のビル群一帯から霧のようなものが噴出すのが見える。
もや？　違う，あれは……。

「なんだあれ！？　」

本物の風が吹き荒れる。音源の摩天楼付近から猛風が押し寄せ，同時に周辺の鳥達が一斉に飛び立っていく。その羽ばたきがさらに風を作り出していくようだ。
摩天楼から逃げるように，カラスもスズメも鳩も，ありとあらゆる鳥が飛び立っていき，住宅地から犬の遠吠えや猫の叫び声が響いていく。
逃げろ。天変地異のはじまりだ。そう，叫ぶように。まるで，あの日の動物園のように。

『さて。お前はどうする？　関口晴貴として生きるのか？　ダショーとして生きるのか？』
「何，言ってるんだよ」
「関口，ミルちゃんが昨日お前に色々話した理由，言ってないのか？！　」
「……まさか」

水野の声に，体中の筋肉が固まる。まさか，まさか。
この爆音は，この風は，この騒動は。
あちらの世界の扉が，開くのか？
昨晩からの事が頭の中をかけめぐる。
急に，ミルは自分自身の事を話した。

手を繋いでいたいと，せがんだ。
「いってらっしゃい」と，玄関の外まで見送ってくれた。とびきりの笑顔で。
全て，別れを覚悟していたからなのか？

『こっちに来るのに大層な手間をかけておったからな。深淵の輩ども，玉獣を殺させて神苑を穢しよった。還るのはさほど手間はかからぬはずだったが，わざわざ歪みを大きくしよったわ。これでは，代償を払わねば帰れぬぞ』
「還る……ミルが，還る？」
『おう。さて，代償として何を頂こうか』

毛づくろいするように，何度も羽を広げ，純白の羽に鋭いクチバシを差し入れる。

『白く緩やかな脚線を描く足にしようか。美しくさえずる声か。澄み切った瞳でもよいな』
「何言ってるんだよ！」

代償ってなんだ。ミルをどうするつもりなんだ！

『穢れない魂がよいな。あれは本当に美しい』
「何するつもりなんだ！　ミルに何かしてみろ！」
『それなら，ハルキが行なえばよい。お前が還るのなら，筋が通る』

呆然と立ち尽くす俺と水野を見下ろして，白い鷹は悠然と羽ばたく。

『お前なら，扉は容易に開けられる。お前自身が歪みだからな。

ハルキが還るのであれば，ワシが力を貸す筋も通る。何しろ，ワシがこちらを説得してお前を入れたのだからな』

「筋とか何とか……判らないけど，けど……ミルは何をしてるんだ！」

『判っているのに，ワシから言わせるのか？』

全く面倒な。

そう呟いて，飛び立つ。

一瞬の羽ばたきの後，宙に消えてしまう。目標を失った視線が，宙を彷徨ってしまう。

そういう事だ？　何が起きてる？　ミルは？　ミルはどうなる？

俺は？

「関口！」

水野の一喝に，ハッと正気に戻る。

けたたましく泣き叫ぶ動物の声に，現実を感じる。

夢じゃない。幻でもない。だから，俺が何とかしなくちゃダメなんだ。

あの夏の日の続きをしなくちゃ，いけないんだ。

「俺，俺……」

「お前が決めろ！　後悔しないように，お前自身で決めろ！」

「水野，俺……」

水野の結婚式。お前と由美子さんの赤ん坊。挑戦してみたい授業。

ミルと過ごしたかった時間や場所。一緒に正月して，桜を見上げて，

それから沢山の事。

胸に言葉があふれ出す。やりたい事が，頭いっぱいに浮かび上がる。

でも。でも，その全てにミルがいないのは，想像ができない。
ミルが，いなくなる？

「ごめん……俺，行く！」

空っぽのカップを水野に押し付け，走り出す。
突っかけのサンダルのつま先に力をこめて，埃だらけの階段を駆け下りる。

「凄い風ですなぁ。関口先生？」

職員室に飛び込んだ俺を見て，教務が暢気な声をかけてくる。自分の机の上に置きっぱなしの携帯と車のキーと財布を掴んで，思いっきり頭を下げる。

「すみません！　今日付けで俺，退職します！　ご迷惑をおかけしますが，今までありがとうございました！」

それだけ叫んで，職員室を飛び出る。
背中に投げられる教務のうろたえた声を無視して，グランドまで駆け下りていく。
間に合え！　間に合え！　間に合え！
花壇を飛び越え，飛び越え，駐車場の自分の車に倒れこむように，シートに座り込む。
携帯と財布を助手席に放りだし，車のキーを差し込もうとして自分の手が震えている事に気づく。
息が乱れてるとか，疲れているとかじゃない。
俺は怖いんだ。
ミルがいなくなる事が，何よりも怖いんだ。

「間に合え！　」

自分に気合いを入れ，クラッチとブレーキを思いっきり踏んでエンジンをかける。間に合え！

爆音を出して回転数を上げるエンジンに励まされるように，クラッチからアクセルを踏み込む。間に合え！

車線が増えるたびに，幹線道路に入るたびに，交通量は増えていく。

万年渋滞のポイントを避けて，勝手知ったる裏道をスピード違反承知で爆走していく。古いビルや民家の道を駆け抜け，摩天楼への入り口のような都市高速の高架下を走り抜け，とうとうオフィス街で通行止めに当たってしまった。

すでに何十台もの車が止まり，クラクションが鳴り響いている。頭の中に響く不協和音と重なり，頭痛がおきそうだ。

『さても，不便なものよな』

「……っ！　」

『油を爆発させ四つの輪を転がし走るとは，考えたものだ。だが，止まってしまってはただの鉄の箱』

前方を確認しようと運転席から降りた途端，屋根に止まっていた『主様』から痛烈な批判を受けてしまう。

『おう。後も数珠繋ぎに止まっていくな。これでは動かせまい。さてはて。どうするのか？　』

「他人事みたいに」

『さて，急がんと間に合わぬぞ』

あれから何十分経っているだろう。腹が立つが，『主様』の言う事はハズレではない。

思わず舌打ちして，携帯と財布を取り車道から歩道へと走り出す。車を置いていく俺を見て周りのドライバーから非難の声が出るけど，しょうがない。

待ってられない理由がある。後の事なんか考えてない。ただ，この不協和音が鳴っているうちはミルがいる。この世界にいる。

それだけ信じて走るしかない。

Yシャツに汗が滲むのが判る。サンダル履きでは，もどかしいぐらい走れないのが苛立つ。

日頃運動なんかしてないのも後悔しながら，ビルの谷間を走りぬけるしかない。

日陰のオフィス街を駆け抜け，騒動が大きくなっていているんだろうか。ビルから出てくる人々は，何か興奮するように話しながら一つの方向を指差す。不協和音の音源だ。

もう，キツイ。でも，あと少し，ソコまであと少しだ。この坂を上りきれ！

夏の続き。ミルと出会った，あの噴水広場だ。あそこが音源なのは間違いなさそうだ。

このブロックを，忌々しいビルの区画を三つ越えたら，その大きな通りを越えた所に，ミルがいるはずだ。

吐く息が切れ切れにのろくなった足を無理やり動かした俺をあざ笑うように，手の中で握り締めていた携帯が電子音をたてる。

握り締めてた財布をズボンのポケットにねじ込み，携帯を開く。

殆ど，早足状態の歩みだ。

《もしもーし！　おおーい》

水野だ。

「……今，走って，る……」

もはや，歩いてる速さになってるけど。

ネクタイを緩め，ビルに切り取られた細長い冬の空を見上げる。

《交通止めだろ！　今，どこら辺だ？　》

「キャッスル，ホテルと，さくら大通の，西の，交差点で，車捨てて，テレビ局の，ビルの前……」

《えーっと……切るなよ。回線込んでて，ようやく繋がったんだからな。切らないでそのままにしとけよ。えーと》

何かを調べているのだろうか。職員室のざわめきだろうか。幾人もの人の話し声が受話器越しに聞こえる。

テレビ，つけろ。他のチャンネルも映せ。

《あぁ……判った。その先の若宮大通，交通規制かかってる！　》

「その向こうなんだよ！　」

《ミルちゃん，そこなのか？　》

「夏の続きだよ！　」

水野の声に，少し元気がでる。

あと少し。

心臓が壊れてもいいから。肺が破れてもいいから。

あと少し。

耳に当てた携帯から，水野が何か言っている。

あと少し。

「俺の，銀行の，暗証番号……太宰治の誕生日だから！　」

《はぁ?!　関口，何言ってるんだよ!》
「パソコンの暗証番号，夏目漱石の誕生日！」
《おい!》
「机の右上の引き出し，の，奥！　弁護士の名刺，入ってるから！」

あと少し。　上りきった坂の向こうへ。
目の前の若宮大通に，人垣が出来上がっている。
警察の拡声器の声が響き渡る。リアルに，これは現実なんだ。

「あと，頼むから！」
《関口！　切るな！　電話，切るな！》

あと少し。
ミルまで，あと少し。
この世界にいるのも，あと少し。

「まだ切らない。あと少しだけだから」

この人垣を，越えなくては。
黒山の人だかりを前に，俺は息を整える。
俺の中の『エアシュティマス』。すんごい野郎なら，今すぐ俺に力を貸せ。
お前の世界に帰ってやる。俺の体，少しだけ貸してやる。
だから，その力を，貸せ!

19　還ろう

「若宮大通りは封鎖中です！　速やかにここから退去して下さい！　警告します！　原因不明の事故により，若宮大通りは封鎖中！」

苛立つ色を隠さず，警察の拡声器を通した警告がビルの谷間に響き渡っている。

その声が呼び水のように，野次馬をひきつけている気がする。周辺のビルには，ガラス越しに様々な人々が高みの見物に入っているのが下から見えた。

「日本刀持った女の子がいたらしいぞ」

「撮影じゃね？　雑誌とかの」

「じゃ，あの風なんだよ。すげーぞ。噴水公園辺り，竜巻みたいなんだって。事故じゃないね」

「見た見た。リアルＣＧすげぇ」

お気楽で危機感の欠片もない会話が，人垣の合間から聞こえてくる。

間違いない。この向こうにいるのは，ミルだ。

この人垣を越える？　警察に捕まらないで，どうたどり着く？

手の中の携帯を握り締める。野次馬に囲まれたまま，空を見上げる。この空は，見納め。

目を閉じる。

さぁ。俺の中の『エアシュティマス』。お前に俺の体を貸してやる。

思い出せ。あの時の音を思い出せ。

「……『　耳を傾けよ　吾らが父なるエンが　母なるナンムが囁く言葉に　』」

早送りのように，様々な映像が頭の中を駆け巡る。どうしようもなく悲しくて切ない感情が弾け飛びそうで，思わず目を開ける。俺は，ここにいる。大丈夫。

そう言い聞かせ，息を整える。大丈夫。動物園の時のように乗っ取られはしない。

あぁ，それなのに。世界を作る程の力を持った人物が，何故にこんなに悲しいんだろう。憎しみを抱かなくてはいけないんだろう。いいよ。それでもいい。その激情で俺の気持ちを切り裂いてもいい。体だって，貸してやる。

だから，ミルを助けさせてくれ。俺を，あっちの世界へ連れてってくれ。

心地よい響きと共に，体の周りから青い炎が立ち上る。

格闘モノの漫画の主人公のように格好よくないのが悔しいな。これじゃ妖怪じみた光景。巻き上がる風に，野次馬の悲鳴が混ざっていく。人垣が崩れていく。

「『　この世を駆け巡る風よ　その最も強い力よ　吾らを護れ　』」

音を立てて，風が舞い上がる。

細い幹の街路樹が大きく揺れ，枯葉を撒き散らしていく。季節外れの小型台風のような風の中で青い炎をまとった俺の姿を見て，野次馬が逃げ惑う。

目の間の人垣が次々と逃げ去り，警察官とパトカーと非常線がようやく見えた。

噴水公園は，吹き荒れる風の壁に包まれている。猛烈な不協和音は，ここからだ。

「と，止まりなさい！　ただちに止まりなさい！　警告を無視して……」

「どけぇえ！　」

警告を無視して，走り出す。その向こうへ。

飛び越えろ！

警棒を抜き出した警察官の必死な顔を見て，思わず鋭く口笛を吹く。ここで捕まる訳には行かないんだ！

突風が俺の体を持ち上げる。その瞬間，強く踏み込んで四車線を飛び越える。巻き上げた落ち葉を踏みしめるように，宙をクロールで無茶苦茶にかき出すように，空を飛んでいく。

足元で警察官が口を開けて見上げているのを，スローモーションで見下ろしながら吹き荒れる風の壁にぶち当たる。

「ちくしょぉおお！　」

吹き荒れる風の壁に弾かれそうになったのを，腕を差し込んで渾身の力を込める。

鋭い風が腕を切りつけていく。目の前でYシャツが千切れていく光景に，寒気がする。切り刻まれるのか？

「ミルーーっ，おわ！　」

思わず上げた絶叫と共に，風の壁が一気に俺を引きずり込む。

まるで洗濯機に放り込まれた靴下状態で，宙を何回転かさせられて中央の噴水へ盛大な水柱を上げて着水。

真冬なのに全身濡れてしまった。これじゃ，体を張った芸人並のアクションだ。

火照った体が急速に冷えていく。携帯を握ったままなのを思い出

し，慌てて立ち上がり気づく。
目の前に，いた人影。

「ハルキ……」
「よ，よかった……間に合った……」

茶色交じりの青い瞳を見開き，胸の前で刀を握り締めたミルの姿に脱力。
再び噴水の中に座り込んでしまう。
足も，瞳も，声も，全て，あった。
ミルにまた会えた。
息を切らして，水の中を這うようにミルの傍へ歩み寄る。
抱きしめさせて。その感触で，俺に安らぎをくれ。
夢中で，ミルの腰に抱きついた。

「勝手に還るなよ！　約束したじゃないか！　どうしたらいいか考えようって！」
「でも，でもハルキ，つれてく，だめ」
「一緒にいたいって，そう言った！」
「こわかった，ちがう？　いやだった，ちがう？」
「それは……うん。ミルの世界に行くのは，怖いし嫌だった」

温かな感触に，ようやく俺の気持ちが落ち着く。水が滴る前髪をかき上げて，立ち上る。
そうだ。俺は怖かった。
今持っているモノを失うのが怖かった。職業も資格も，僅かな財産や家。周りからの評価。
今まで積み上げたモノを全て失うのが怖かったんだ。
」
「だから，ダメ。　ハルキ，ここでいきる！　もどる，だめ！

しぬ！　いいことない！」

「そこはね，ミルが決める事じゃない。俺の人生だから，俺が決めるんだ」

「でも，ミル，かんがえた。ハルキ，だいじ。ミルの，だいじ。しなせない。まもる。だから，ここ，いい。かえるは，だめ！」

「ありがとう。だけど，俺も考えたんだよ。判ったんだよ」

ミルは俺の身の安全を一番に考えてくれたんだろう。きっと，動物園の日から，最善の方法を考えてくれたと思う。俺を連れて還らなかったら，きっとミルの立場が危うくなるのだろうに。

自分の身より俺を案じてくれた。そんなミルの気持ちはとても嬉しい。けど，俺は判ったんだ。

掴んだ安定な生活を失うより，ミルがいなくなる事が怖いんだ。ミルがいない世界で生きていく事が，何よりも恐ろしいんだ。

「俺はこんな力を持ってるから，ずっと一人で生きてくつもりでいた。それで，いいと覚悟してた。でも，ミルに出会えたんだ！聞こえる？　水野，聞こえてる？」

携帯を耳元に，ミルを瞳を見続ける。茶色交じりの大きな青い瞳に，涙があふれてくる。

君が教えてくれたんだよ。二人で過ごす心地よさを。一人ぼっちは悲しいって事を。

「なのにミルが還ったら，また俺は一人になっちゃうよ。そしたら俺の人生，空っぽになる。何しても，楽しくない時間を過ごしてくと思う。悲しい気持ちさえ，きっと無くなる。ミルがいないこの世界にいても，決断しなかった瞬間をずっと後悔しながら生きていくと思う。それなら，俺は，ミルのいる世界に行く」

不可思議な力が跋扈(ばっこ)して，刀で戦争してる世界だとしても。帰り方も判らない異世界だとしても。

ミルがいない世界で何事もなく生きるより，ずっと幸せだと思う。例え命の危険があっても。どんなに悲劇的な結末を迎えても。どんなに辛い試練があろうとも。

愛する人と同じ空の下で生きていければ，幸せだ。

どんなに辛くても，キミが傍らに居てくれるのなら。俺がキミを支えていけるのなら。

二人で分け合えば，どんな運命だって乗り越えられる。

「俺は，俺の幸せを自分で決めるんだ。他人から見たら，どうしようもなく要領悪く見えるかもしれないけど。これが不幸な境遇に見えたとしても，俺が幸せだと思えばどんな結末になろうと満足なんだよ。俺，自分の事幸せだと思ってるよ。好きな人を見つけられたんだからさ」

「ハルキ……いいの？　いいの？　だって，しぬかも」

「いいよ。だって，ミルが守ってくれるんだろ？」

こんなに好きだからこそ，俺達は反対の事を考えていたんだろう。例え死んでも，傍に居たい俺の気持ち。自分が辛くても，俺を守ろうとしてくれる気持ち。

どちらがいいのか判らない。もしかしたら，事情を全て知っているミルの意見の方が正しいかもしれない。

けど，さよならなんて，嫌だ。

何度も何度も，ミルの頬を撫でる。

涙で潤んだミルの瞳に力強い光が満ちてくる。見つめる瞳に，生き生きとした表情が現れる。

そうだよ。キミが守ってくれるんだから，キミの傍にいられるのなら，俺は何も怖くない。

「水野，あと頼む」
《……行って来い。後は，何とかするから。絶対，ミルちゃんの手を離すなよ！　しっかり掴んどけよ！　》
「判ってる」
《気が向いたら還ってこい。待ってるから》
「うん……ありがとう。色々，ありがとう」
《おう，じゃあな。またな》
「さよなら。またな」

ありがとう。その言葉より，沢山のありがとうの気持ちを込めて，さようなら。
いつか，また会おう。いつか。
通話ボタンを押して，俺の二十八年の人生を終わらせた。
ありがとう。水野。お前も幸せになれよ。
言えなかった言葉が頭の中を駆け巡る。もっと伝えたい事もあったけど，大丈夫。あいつなら，全部判ってくれる。
そう，甘えさせてもらおう。
手の中の携帯をポケットに仕舞い，ミルに笑いかける。

「還ろう。ミルの生まれた世界へ，一緒に還ろう」
「……うん。うん」
『出立の準備はできたようだな』

唐突に，二人しかいないと思っていた空間に現れた白い鷹。
羽ばたく事もしないで俺達の頭上に浮いている。こいつ，何時からいたんだ。

「……ミルに代償を払ってもらうとか何とか適当な事言いやがって！　」

『おや。覚悟を決めれただろう？　』

こいつ，こんなに性根悪くて何で神様みたいな事出来るんだろう。
腹立つ気持ちも，悠然と見下ろす金色の瞳を見ると萎えてしまう。
これは敵わない存在。

「お前の正体，鷹じゃなくてサギだろ。絶対」
『ホッホッ。良いな良いな』

俺の苦しい言葉すら，楽しんでる。
そんな俺達の会話を聞いてうろたえているミルを，強く抱きしめて俺も笑う。
きっと，俺はこいつら神様の駒かもしれない。
俺達の嬉しさも，苦しさも，ちっぽけなものだろう。俺はきっと，こいつらの小さな駒。それなら，精一杯に駒を演じてやろう。
喜怒哀楽しまくって波乱万丈な人生を送ってやろうじゃないか。
ミルが一緒なら，怖いものなんてないから。
さぁ，唄おう。
陽の光の音，風の音，植物がそよぐ音，水のせせらぎの音，アスファルトで覆われた大地が脈打つ音。全ての音に重なるように。全ての音を紡いで織り上げていくように。
『エアシュティマス』の記憶，『ハルンツ』の記憶，過去の記憶から溢れ零れる想いも込めて。

「　この想いは　星の想い　幾千年と響き渡る唄　宇宙の果てまで震える唄は……　」
『　震える唄は　祈りの光り　』

体の粒子が震えていく。蛍火のように水が光り，宙へ螺旋を描いていく。溶けていく。光の粒になって，ミルの体と溶け合って，空

へ昇っていく。
行く先は天国か地獄か。俺が決めてやる。
意識だけが，空から世界を見下ろす。
コンクリートとアスファルトに覆われた，この世界。
見上げる冬の空は，太陽の陽の光で溢れている。
還ろう。キミと，還ろう。
真っ白な眩い光に包まれ，全身でミルを感じながら，全てに身を委ねた。

20　最初の一撃　～二章　パンドラの光～

空気が変っていく。
俺の知っている，どの空気でもない。
湿り気も，車の排気ガスの酸っぱい臭いも，雨が降る前の土埃の匂いも，青々とした畑の匂いも，稲の葉がそよぐ田園の匂いも，当てはまらない。
卒業旅行で行ったＬ．Ａみたいな乾燥しきった荒野の匂いでもない。東京のような様々な匂いを強制的に消した臭いでもない。
感じる空気の変化に，心拍数が上がっていく。
肌に触れる空気から五感全てで異世界の気配を感じ取りながら，意識の裏に猛烈な勢いで流れ出した映像を見ていた。
まるで井戸の底から見上げる小さく切り取られた青空。
強い香草の匂いに囲まれて，眩しい日差しを浴びていた。
真っ暗の中で流れる河の上を疾走していた。
全ての映像は，精一杯生きたであろう，俺とは違う，それでも俺の遠い記憶。
俺，還って来たよ。俺も，お前達みたいに精一杯生きるよ。
だから。

『　愛しい子よ　貴方の成すべき事を　やりぬきなさい　』

唐突に女性の声に包まれた。
それは，泣きたくなる程に優しく包容力に満ち溢れた響き。
心の奥底で求めていた響き。

『　おかえり　ハルンツ　』

遠い記憶の映像が止まる。そこは，夕日で照らされた砂浜。世界

の全てが赤く染まったかのような光景。真っ赤な海を見つめていた男の背が振り返る。

スラリと背の高い若い男。逆光で影になった男の顔で，僅かに目元が青く光った。

こいつが，エアシュティマス。俺の中で憎悪の感情で眠っている記憶の主。そう気づいた途端に今までの比でない膨大な映像があふれ出す。

意識のあちらこちらのディスプレイで一斉の再生ボタンを押してしまったような流れ方。

その中で，一つの映像に目を奪われる。

透明で清らかな水の流れに足を入れ，まっすぐに空を見上げていた。穏やかな日差しを受け，そよ風に髪を揺らしながら，澄んだ声で朗々と呪詛を唱えていく。それは，魂を縛る唄。繰り返す生命の営みを自ら断ち切る唄。その代償に願う永遠を唄っていく。

恐ろしい意味の唄なのに，こんなにも晴れ晴れと迷いなく唄いあげていく記憶。これは，誰の記憶？　エアシュティマスなのか？

でも，これじゃあ……自分で自分に呪いをかけているようなものだ。

何でこんな事をしているんだ。

『　もう充分，頑張ったよ。この苦しみを終わらせよう　』

唐突に，夕日に染められた砂浜の場面に戻っていた。

青い瞳に見つめられたのは，一瞬。その一瞬に，膨大な記憶を見ていたのか？

エアシュティマスが，その瞳を細めて笑った。

『　この世界を　終わらせよう　』

泣きたくなるほどの，激情が体を貫いた。

これは誰の記憶？　俺の中の誰の記憶？

嬉しさも，悔しさも，悲しさも，歓びも，誇らしさも，恨めしさも，全ての感情がエアシュティマスの言葉に反応して溢れ出す。
何が起きているんだ。俺は，俺の記憶は，俺の感情は，俺のものだろう！
俺の人生を邪魔させない！　俺の意思で歩いていくんだ！

『俺は……っ』
『ハルキ！』

鼓膜を震わし耳で聞こえる声に，意識が急にはっきりと起き上がる。
目を開けて飛び込んだ光に，今までが夢だったと気づく。何て夢だったんだろう。
目の前で心配げな顔で俺を覗き込むミルに笑いかけると，その大きな瞳が微笑み返す。
ミルがいる。その安心感に大きく息を吐き出してから，辺りをうかがう。
そこは真っ白な世界。

『ハルキ，だいじょうぶ？』
『あぁ，うん……ここは』

ミルの世界に着いたのだろうか。
くるぶし程の浅い水から起き上がる。噴水広場からずぶ濡れだが，ここではさほど寒さを感じない。むしろ，暑くて水の中が心地よいぐらいだ。
玉砂利が敷き詰められた水底から，炭酸のように次々と水が噴出してくるのを手の平で感じる。澄み切った泉の中で寝ていたようだ。
澄み切った空気がゆっくりと流れ，辺り一帯に漂う乳白色の濃淡がうごめいて，乳白色が霧である事が判る。

『ここは何処？』
「ここは天鼓の泉ですね。ここが扉なのです」
『……？』

ミルの口から，理解不能の言葉が飛び出る。思わず顔を凝視してしまうと，ミルが慌てて言い直す。

『ここ，天鼓の泉。だいじ，ばしょ』
『天鼓の泉……天国みたいだ』
『うん。わたしたち，クマリの天国。「クマリ族にとって，ここは聖地です」。『だいじ，ばしょ」』
『ミル，日本語がぐちゃぐちゃだ』
『ごめんなさい。なんだか，へん』
『変じゃないさ。だって，ミルの世界へ還ってきたんだ。そうだ，還ってきたんだね』

互いの手を取り合うように，水の中から立ち上がる。
静かな空間だ。俺達の体から滴り落ちる水音と，湧き上がる微かな水音以外は音がない。霧が微風で蠢くその動きにすら，音があるように感じられる静けさだ。
目を凝らすと，そこが森の中だと判る。霧の切れ間から，大きな幹や茂る大枝の影が見える。まるで神社の境内に近い。途方もなく長い年月で作られた静けさの光景だ。
ここが，異世界。ミルが生きてきた世界。俺が生きていた世界。
その妙な感覚に囚われた時，俺の鼻が聖地らしからぬ匂いを感じ，首を傾げる。
酷く懐かしさを誘う異臭が僅かに鼻先を漂っていく。昔，子どもの頃に嗅いだような臭い。いや，学生の時も強烈に嗅いだような記憶がある。あやふやな思い出の蔦を必死に手繰り寄せた。

ミルも感じたらしい。俺の腕を引っ張り，泉から出て周囲を警戒しだす。

その僅かな物音すら聞き逃すまいと，鼠を探す猫のように耳と第六感を研ぎ澄ますのを感じる。

辺り一帯は，濃い霧に包まれている。乳白色な視界の向こうに，何があるんだろう。

そうだ。あの時は真っ暗で視界がなくて，それで，夏のキャンパスで水野と馬鹿やってたんだ。

『ミル，これ……花火の臭い？』

硝石と硫黄の独特の臭い。

夜中に忍び込んだキャンパスでロケット花火を乱射した大学二年の夏を思い出し，臭いの正体に気づいた途端だった。

ミルが突然，足元の水面へ指を走らす。

波立つ水面に刻まれる文様は，流れ消える事なく氷の彫刻のように刻まれる。曲線と幾何学模様で出来上がる美しい絵。

「優しき父よ，水の父神エンリに願う。吾が友，雷光の召還を」

短い唄と共に，水面から懐かしい獣が湧き出してくる。

『き，麒麟（きりん）？』

「ハルキ，乗って下さい！」

『は？』

「雷光に乗って下さい！『のる！』後李（こうり）の軍が近くに来てます！」

乗る。その単語しか判らないまま，麒麟（きりん）にまたがる。夏以来の麒麟（きりん）に驚いていると，ミルがコートを脱いでいた。

チェニックの下から，真珠のような小さな珠を取り出し息を吹きかける。

「吾が名と息吹をもって契約を施行する。吾が名は昴（すばる）　ミル」

七色に乱反射する小さな珠が，シャボン玉のように半透明になり膨らんでいく。

ミルは膨らんでいく珠を脱いだコートへ着せるように素早く中に入れて，宙へ飛ばす。途端，まるで透明人間いるように，コートがヒラリと宙を飛んでいく。

風がコートを着て空へ散歩を始めたような光景に見蕩れかけると，俺の背後にミルが飛び乗り麒麟（きりん）の腹を蹴り上げた。

その慣れた動作と同時，雷光と呼ばれた麒麟が猛烈な勢いで飛び上がっていく。

宙に足を出し駆け上っていくスピードは，ジェットコースターが宙返り目指して疾走するようだ。耳元で風を切り裂く音が鳴り，乳白色の霧の中を突き進む速さで，上下も左右もわからない感覚。思わず指の間をなびく手触りの良い鬣（たてがみ）を掴んでいた。

視界のない状態で，訳も判らず猛スピードで進む事に恐怖を覚えた瞬間だった。背後で突然，爆音が弾けて突風が襲い掛かる。

突風は熱を持ち，視界全てを被っていた濃霧の幕を引きずり払っていく。露わになる視界に，俺は宙を翔ける感覚に恐怖していたのを忘れていた。初めて見る異世界の光景に見入っていた。

飛び立った泉。それはまるで，神様が戯れに地表に巨大な鋭い岩槍を突き刺したような光景。そこは天空に突き出した大岩の先端だった。

地表を覆う緑。そびえる槍のような岩山の頂の森，そこに湧き出していた清らかな泉。

地球ではありえない絶景の中，爆音と共に紅の炎が立ち上っている。　その事に気づき，俺は雷光にしがみついた。

はるか下の天鼓（てんこ）の泉で爆ぜる火柱と，吹き荒れる爆風は，一帯の霧をなぎ払って状況を強制的に露わにしていく。

飛び立つ寸前に飛ばしたコートは囮だったと，今気づいた。

火柱を上げ大岩の欠片を落としながら崩れ行く天鼓（てんこ）の泉の周りから，雄たけびや罵声のような声が轟きわたる。誰かいる。友好的でも平和的でない，大勢の人間が辺りにいるのは確かだ。

「後李（こうり）帝国は神をも恐れぬのか……天鼓（てんこ）の泉も壊してしまうというの？！」

ミルの悲鳴のような声は理解出来ない。けど，そこに激しい怒りを感じた。

あの場所を壊す。それが恐ろしい行為だというのは判る。

そして，俺は完全に『コチラ』へ来た道を失った事に気づいた。

21　はぐれたネジ　一個

次々と爆ぜる火柱が，峰を襲っていく。
巻き上がる爆風が，濃霧を払っていく。
見下ろした乳白色だった世界に，幾多の船が姿を現していく。静かな境内のような光景が消えていく。
濃霧の向こうから現れたのは，宙に浮かび要所要所を金属で補強した，帆船。簡略化して四つの動物が書かれた帆を勇ましく掲げた船は湖に浮かぶ観光船ほどの大きさだが，その外観は極めて戦闘的だ。金属の筒が備え付けられている物々しさに，ファンタジーもロマンも感じられない。それは，空飛ぶ軍艦なのだろう。翼もなく，プロペラもない異様な船が，何十隻も宙に浮いて天鼓（てんこ）の泉を取り囲んでいた。

「法王軍……法王軍がいない！　法王国はクマリを見殺しにするおつもりなのか……！」
『ミル，一体何が起きてるんだ！』
「私達を狙って後李（こうり）が挙兵したのです！　異世界の扉が開くのを，ここで待ち構えていたのでしょう！　捕まって下さい！　安全な場所まで移動します！」
『ミル……うわっ』

興奮しているミルは，自分が日本語を喋っていない事にも気づいてないのだろう。素早く雷光の姿勢を安定させ，軍艦群のはるか上空を全速力で疾走させていく。
囮のコートを爆破して勝利を勘違いしているのだろう。兵士達の雄たけびが微かに遠くなっていく中，俺はもう訳もわからずしがみついていた。
耳元で風鳴りが響き，頬を冷気が切り裂き，あまりの風圧で酸欠

状態。
再び魂の記憶が脳裏に蘇る。再び意識が朦朧となり，映像の底へ落ちていく。

『ハルキ，だいじょうぶ？』
『……多分。大丈夫。しばらく，休ませてくれれば，大丈夫……うっ』
『きょう，ここでやすむ。ゆっくり』
『あ，ありがとう』

こみ上げる吐き気と戦いながら返事をすると，ようやくミルの顔が綻ぶ。
あれから二時間は上空を爆走してたどり着いた深い森の奥の渓流で，俺は岩に座り込んで動けない。
まだ体が飛んでいるような感覚。ぐらりと視界が揺れ動いている。すっかり乾燥した服に，今度は冷や汗が染みていく。絶叫系のアトラクションは強いほうだったのに，この有様だ。というか，ミルは何故に平気なのだろう。
ヨレヨレの風体の俺を見て，ミルは折り紙のように折って作った木の葉のカップで澄み切った渓流の水をくみ上げる。

「本当は温かいものを用意したいのですが……『すこし，のむ。これ，すっぱい』」
『うん』

木の葉のコップを受け取り，差し出された小さな赤色の木の実を齧る。目が覚めるような強烈な酸味で，乗り物酔いが微かに消えて

いく。
心配げなミルに渋い顔のまま笑いかけると，ようやく安心したように微笑んだ。
ここがミルのいた世界だと，叩きつけられる。
ここがどういう場所かも判らない。今，自分の身が安全なのかも判らない。言葉も判らず，何を食べれば安心なのかも判らない。
すでにぶら下っているだけの状態のネクタイを引き抜き，乱暴にスラックスの尻ポケットに突っ込む。異世界に来てまでネクタイしてるなんて，可笑しな話。
そうだ。今まで俺が持っていたものは，何も役に立ちはしない。
ミルが作ってくれた木の葉のコップを見て苦笑してしまう。俺は，このコップの作り方も知らない。雷光と呼ばれていた獣の操り方も知らない。辛うじて風の唄を唄えるぐらいだ。
陶器のコップで清浄された水を蛇口から取り出せたのは，先人からの知恵を活用し社会がモノを作り上げるシステムの中にいたから。
自動車を運転出来ても，自動車を作り上げる事は出来ない。タイヤの仕組みも，エンジンの仕組みも，沢山の部品を組み立てるネジの作り方すら，俺は知らない。
沢山の人々が知恵と力を出し合い，組み上げているのが工業製品。工業化された社会。その仕組みからはみ出した俺は，ただのネジにすぎない。
たったひとりでは，何も出来ない。木の葉でコップを折る事さえ思いつかなかった。
その事実を突きつけられたショックで，溜息をついてしまう。

『ハルキ，まだ，きもちわるい？』
『あぁ……それは大丈夫だよ。コレ，効くね。だいぶよくなったよ』

ドングリ程の木の実の残りを，一気に口に入れて無理して飲むこ

む。この木の実は，確かに乗り物酔いに効く。
強烈な酸味に顔を歪ませると，ミルは声を上げて笑う。今日，ようやく笑った顔を見れた気がする。
当たり前の日常が続くと思っていた朝から，異世界で爆発に巻き込まれそうになって逃げてる今の状況が信じられない。
俺は昼前までコーヒーを飲んでたのに，今は渓流の生水を飲んでいる。不思議な感覚。

『わたし，ちいさいとき，のんだ。ほんとう，きく』
『ミル，この辺りで育ったの？』

思わず，着陸寸前の緑の光景を思い出し驚いてしまう。辺り一帯は，遠くにエベレストのような大きな山脈の麓に広がる樹海そのものだった。人家など，ありえない程に深い森だった。

『わたしのくに，なくなった。そのあと，すこしだけ。ここ，クマリ，だいじ，ばしょ。だれも，こない。あんぜん』
『ここはクマリの土地なのかい？』
『クマリ，まもる，ばしょ。クマリのもの，ちがう。ここ，だいじ，ばしょ。「言い難いですね。クマリ族が守り預かっている場所であって，クマリの地ではないのです。……そう」『神苑』いいます。かみさま，『精霊』いるばしょ』
『神苑？　精霊？　クマリの人にとって，聖地のような感覚？　エルサレムみたいなもんかな？』

信仰で守られた場所なのだろうか。
ここにたどり着いた天鼓の泉の絶景も，神が宿る場所とされても不思議じゃない迫力に満ちていた。
そうなると，クマリの人にとって聖地なのだろうか。この世界の信仰を持つ人にとって，ここは踏み込む事も躊躇わす聖地なのだろ

うか。

『判らない事ばかりだな。そんなに大切な場所なのに，さっきドカーンと天鼓の泉は爆発しちゃうしな』

『あれは「後李帝国」。クマリ，なくした，つぶした』

『あの軍隊が？　ミルの国を滅ぼした後李帝国……』

『はい。おぼえる。後李帝国，きけん。ダショー，ゆるさない。ハルキ，きけん』

真顔で言うミルの口調に，大げさなものは感じない。

つまり，さっきの爆発はココに還って来た俺を狙ったという訳だ。いきなり命の危険に晒されていた訳だ。

衝撃的な事実に眩暈がしそうだ。なんてドラマチックな俺の人生。

『この世界で生き抜く為に，憶えなくてはいけない事だらけだなぁ……』

『だいじょうぶ！　わたし，おしえる。ハルキ，まもる』

胸の前で拳を握るミルが力強く宣言した。茶色交じりの青い瞳には，力が漲っていた。

『わたし，にほん　きたとき，たくさん，おしえてくれた。もの，つかうこと。あぶないこと。せかい，おしえてくれた。わたし，うれしかった。あんしん，した。こんど，わたし，ハルキ，たすける！』

『ミル……』

「ハルキに会えなかったら，私はどうなっていたんでしょう……。本当に，頼もしかった。ハルキの傍で過ごせたあの時間は，とても幸せだった。安全が保障された世界は初めてだった。クマリの地が，この世界がハルキにとって危険な現状だという事が申し訳ないほど

です。でも，私は精一杯，ハルキを守りますから！　『こんど，わたしが，ハルキ，たすける！　』」

『……うん』

そうだ。ミルが最初に日本に来た時も不安だったんだろう。

俺も，あの時のミルのように頑張ればいいんだ。

言葉を覚える。生活習慣を覚える。世界情勢を知っていく。そうやって，一つ一つ問題をクリアしていこう。今度は俺がミルに教えてもらえばいい。

あの時のミルが物事を覚えていく幼児のように。俺も幼児のように，物事を真似して覚えていこう。やれる事をこなしていこう。

少しずつ，道を切りひらいていこう。

『じゃあ，まず何をしようか』

『とりあえず，ごはん。たべるもの，さがす』

『そう，だな。コンビニなさそだし』

俺が思わず零した言葉に，ミルは苦笑して頷いた。

『こっち，なにもない。がんばる』

『よっしゃ！　頑張るぞ……って，俺，何にも持ってないよ』

千切れてボロボロなYシャツを巻き上げて立ち上がって気づく。俺が持ってるものは，今や役立たずのガラクタと化した携帯と財布だけ。汚れた靴下に、校内の上履きだったサンダルをつっかけている間抜け姿だ。

と，唐突にミルは背負った大黒丸を肩から下ろして，ニットのタートルセーターを脱ぐ。現れたのは白い柔肌ではなく，半袖のTシャツ。そして，チェニックに隠された腰元に下がったシザーバッグ。家にあったはずの果物ナイフが，頭を覗かせていた。

あんぐりと口を開いた俺に，まるでアクション映画のヒロインのようにミルが『大丈夫』と微笑んだ。

「私が，ハルキを巻き込んだのです。この運命に，この世界に巻き込んだのだから，私がハルキを護ります。全力で，護り抜きます」

22　現世の鏡

静寂という意味を，俺は初めて知った。
風がそよぎ，木々の葉を揺らす音。冷たい清流が流れる音。夜の闇の中で蠢く生き物の気配の音。かすかな虫の羽音。そして，満天の星空で震える星の瞬きの音。
時折聞こえていた救急車のサイレンの音も，車やバイクの音も，近所から漏れてくるＴＶの音も，夕食のニオイも，存在しない世界。
エンジンも，スピーカーも存在しない世界。産業革命以前の世界は，きっとこんな静けさがあったんだろう。
見上げる夜空には，電波も飛んでいないはず。きっと，この星は静寂に包まれている。地球のように電波や衛星で覆われていないこの世界は，真の静寂を湛えて宇宙空間を漂っているんだろう。

『あたたかいもの，ない。ごめんなさい』
『いいよ。今，火を使ったら居場所を教えるようなもんだからね』
『おなか，いっぱい，なった？』
『大丈夫だよ。オーガニック食品で満腹なんて贅沢な晩ご飯だったよ』

渓流のそばの大岩の上で，俺達はささやかな晩餐を終えた。
あれから，ミルは手際よく森の中を散策しながら木の実を摂ってくれた。本当に，一時ここに住んでいたのだろう。何が食べられるのか，似たモノでも毒があり何に注意が必要なのか，丁寧に俺に教えてくれた。果物ナイフを鮮やかに使いこなし，収穫した果物や木の実やキノコを手の中で切り分けていく。深い森の中でも迷う事なく，的確に安全な道を歩いていく。
慣れているな。そう思わせる動きだった。

『夏でよかったなぁ。冬だったら，野宿もキツイよ……いや，ここって季節あるの？』

ひんやりと心地よい夜風に吹かれ，慌ててミルに問いかける。地球の常識はどこまで通用するのだろうか。

『いま，なつ。だいじょうぶ。あつさ，さむさ，あまりかわらない』

『そ，そっか。よかった』

とりあえず，破けたYシャツでも過ごせそうなのは助かる。

安堵した俺に小さく笑いかけて，ミルは夜空を見上げた。渓流を挟んでそびえる大樹の森の切れ間から，満天の星空と細い月。そこには，点滅する灯りを点して夜空を横断していく飛行機もない。何も邪魔することのない，本物の星空。飛行機が飛び回っている地球では，絶対にありえない星空。

空気も澄んでいるからか，黒い布に銀の粒をまき散らかしたような星空だ。もはや，星座とか判らないほどの星の量。いや，異世界の星空に夏の大三角形も北極星もないはず。それに星を知らない俺が星を見ても，意味はないか。

そう気づいて苦笑いしてると，ミルが小さく声をあげた。

横で，俺と同じように空を見上げているが，大きく見開いた視線は一点を見つめていた。

『どうしたの？』

『……ほし，あたらしい，ほし』

煌めく星の中，確かに一際強く輝く星がある。冬のシリウスよりも，強く明るい星。

『見間違いじゃない？　星が簡単に増えるはず……ココはあるの？』

『ない。でも，ほしやそらは，みらい』

さすがに，いくら異世界でも星が増える事もないらしい。

考えれば当たり前だけど，そんな事に安堵した俺にミルは言葉を続けた。

『あたらしい，あのほし。たぶん，ハルキのほし』

『……はぁ？！』

ミル，おかしくなってしまったんだろうか。異世界の移動ってものは，脳に激しい衝撃や負担を強いるんだろうか。

恐る恐る見つめたミルの横顔は，紅潮していた。

「この星の配置や月の欠け具合からみて，私が地球へ移動してから数日という所ですね。その短い時間で新しい星が生まれている。これは，ハルキが還った事を現しているんですよ。やっぱり，ハルキはダショーなのですね。この世界にダショーが還って来た事を，星が現しているのですよ！」

『ミ，ミル，頼むから日本語でお願い。日本語で喋ってくれ』

俺の指摘でようやく異世界語を喋っている事に気づいたらしく，日本語で早口で事のあらましを説明し直してくれた。

この世界では星空は未来を示す事。新しい星は俺の帰還を表している事。

それは，科学を信じてきた俺にとって，到底信じられる事ではない。

くしゃくしゃと前髪をかきあげ，大きく息をつく。

『喜んでいるのに悪いけど，新しい星は超新星だよ。年老いた赤色恒星が爆発した光なんだ。何光年先の星が死んだ時に放つ強烈な光なんだ。偶々，俺がココに来た時期に近かっただでさ。あれは，ただの死んだ星の光なんだ』

『うん。にほん，そういうかんがえ。でも，ちがう』

俺の説明に頷いて，ミルは微笑んだ。

「ハルキの世界の考え方は，そうでしょうね。遠くの世界の事も詳細に判る技がありましたから，事の真相はそうなのかもしれません。『あのひかり，しんだほしのひかり。そうかも。でも，なぜ，いま，ひかりがある？　なぜ，ハルキかえった，いま，ひかる？』」

『それは偶然だよ。偶々，俺がココに来た時に何光年も前に爆発した先からが届いた。それだけさ』

『ぐうぜん，ない。「偶然というものは，ないのです。どんな事も，大きな力が働いている。夜空の星は，それを現している鏡。私達は夜空の星を見上げて，その予兆を探るのです。そうやって，過ごしてきました」ハルキ，かえったいま，ひかり，とどく。それだけ？　なぜ，ぴったり，とどく？　そこに，かみさま，いない？』

『そこに，その偶然に神はいないのかって事？　そんなのは，それは，うーん』

俺が思わず口ごもると，ミルは微笑んだ。

それは，幼子を優しく見つめる母親のような微笑。

ミルの世界では，信仰や神という存在が大きいのだろうか。超新星に意味を見出すのは当たり前の事のようだ。そうやって文明を築いてきたんだろう。魔法が存在している世界だ。地球の考えなんか，通用しない。無信仰の国で育った俺からすれば，あまりに非科学的。考え方まで，天と地がひっくり返ったような世界。

『俺，何にも判んないなぁ……ホント，何にも判らないよ』
『だいじょうぶ。ミル，いる』
『そうだな。ミルがいるもんな』

俺，なんて小さいんだろう。
当たり前だけど異世界に来た今，俺は何も知らない事を思い知った。
食べ物も，言葉も，現在位置も，世界事情も，生活習慣も，判らない。俺の知っている常識も，川端康成も伊勢物語も，この世界には意味がない。今までの知識は，役には立たない。
星空で一際眩しく輝く星が俺を現してると言われても，俺はこんなにチッポケな存在。なんて非力。なんて惨め。
自分の小ささを嘆きながら，ミルと星空を見上げていた。
渓流のせせらぎをＢＧＭに，大岩に二人して寝転んでいた。
昨晩のように，手をつないで顔を合わせて，そっと笑いあって。
何やら危険な逃走中のはずなのに，二人で居られる事が嬉しくて。
互いの体温を手の平で感じながら，ずっと零れ落ちてきそうな星の煌めきを眺めた。

指先に，軽い感触。細やかに揺らぎながら，その感触は俺の指をゆっくりとなぞっていく。

『……ミル？』

細い指先でこしょぐるような，甘い甘い感触で意識が夢から起き上がっていく。

右手から，手首へ。手首からゆっくり，じらすように肩へ向かうその感触。甘美な動きに思わずドキドキと興奮してしまう。

ミルってば，なんて大胆な。こんな子だったけ？　いや，俺としては大歓迎なんだけど。

そう思ってまどろんでいたら，突如として頬を触れる感触。

思わずキスという単語が浮かび，慌てて目を見開いてしまう。あぁ，勿体無い事した。そう思ったのは男の性。

が，視界一杯に広がるのは白み始めた朝の空。覚醒した耳に，渓流の流れとそよ風が挨拶。

あ，そうか。俺，異世界に来たんだった。そう思い出してから気づく。

さっきの甘い感触は何だ？　そう思って頬を撫でると，軽い物体が指先に絡まる。

まだ眠気が残る目を擦り擦り，その指先を鼻先に持ってきた瞬間だった。

目に飛び込んだのは，黒と黄色の縞々模様。細く長い八本の足。

微風に乗って，見えない糸が俺の鼻先に引っかかり，ソイツは俺の鼻先へと素早く移動して……。

『ぎゃあああ！』

色気もない俺の断末魔が，静かな朝の森に響き渡った。

『そんなに笑わなくても』

『だって。ハルキ，さけぶ。ぎゃあああ！って』

『苦手なの。蜘蛛は苦手なの。蜘蛛だけは絶対にダメなんだってば。しかも寝起きに蜘蛛だしさ』

俺の顔を見てはクスクス笑い，叫び声を真似されてしまう。
その事に少々の恥ずかしさを感じながらも，ミルが笑っている事に安心する。
本当は過酷な逃避行のはずなんだけど，雰囲気が重くないのはいいかも。
俺の朝の大絶叫は，朝食を探していたミルを大いに慌てさせたらしい。
全速力で戻ってきたミルは，一人で絶叫して腕を振り回す俺の様子を見て，助けを求める叫びを無視して立ち尽くしていた。
そりゃそうだ。蜘蛛と格闘しているなんて，相手が小さすぎて見えないだろう。
とにかく，『蜘蛛，蜘蛛ぉお！』と腰が抜けて阿鼻叫喚状態の俺を見下ろし，ミルはポカンとした顔でその蜘蛛を指先で摘んで吹き飛ばしてくれた。

『ハルキ，きらいなもの，あった。びっくり』
『俺だって嫌いなものはあるよ。ミルだって，電話もカメラも嫌いだったじゃん』
『……あれ，きゅうに，なる。かお，みえない。でも，ここにはでんわ，ない。カメラ，ない。すごく，うれしい』
『なんで異世界にも蜘蛛がいるんだろうなぁ。反則だってば』
「ふふ……ふふふ」

俺の狂態を思い出したのだろう。ミルはまた肩を震わして，笑いながら先を歩いていく。
あぁ，何で異世界に来てまで蜘蛛がいるんだろう。

『でも，あんしん。うれしい。ハルキも，にがて，あった』
『安心？　うれしい？』

「私だけが知っている，ハルキの秘密ですね」

『……？』

ミルの微笑みと言葉が判らない。

ただミルは，俺を見詰めて微笑んだ。とても，嬉しそうに。

23　凋落の城

『つまり，俺は後李（こうり）　帝国に狙われている訳？』
『とりあえず』
『じゃあ，えーっと，エリドゥ法王国に助けを求めるのは？』
『……法王国，きてない』
『じゃあ，どうすればいいんだ？』
『いま，むかってる。クマリの，しりあい』
『って，誰？』
『まだ，わからない』

まるで禅問答。
神苑（しんえん）と呼ばれる深い森の中を，ミルは迷う事なく進んでいく。雷光の背に乗り，木々の茂みの間を低く飛んでいく俺達の目的地は，一体どこなんだろう。
どうやら，俺の立場というのは，非常に危うく曖昧のようだ。
ミルの説明によれば，俺すなわちダショーという存在は国によって正反対の立場を持っているらしい。
ミルが一時過ごした聖エリドゥ法王国では，大神官という最高位。この世界の信仰や信頼を集める魔術呪術の，最高峰。かつ，宗教の中心である神殿を形作ったエアシュティマスの記憶を継いでいる人として，ダショーは信仰されているらしい。
対して，ミルの国クマリを滅ぼした後李（こうり）帝国は，その信仰が最も薄い国。魔術よりも，科学的なカラクリに国力を注いでいるらしい。確かに，天鼓（てんこ）の泉を爆破したのは火薬。あれだけ大量の火薬を製造して空飛ぶ軍艦を作り上げる技術があるんだから，考え方は無信仰で科学を信じる現代日本の感覚に近いのかもしれない。
『じゃあさ，なんで後李（こうり）はクマリを攻めてダショーを狙う訳？』

「それは色々ありますが一つは、。恐れでしょうね。『まほう，こわい。きらう。クマリ，とくべつなばしょ。とくべつなひとびと』。クマリの民の力を何と言い表しましょうか……」

雷光にしがみつく俺を見て，しばし言葉を考えたミルが雷光の腹を僅かに叩く。

すると，緑の茂みを突き抜けて樹海の上に飛び出る。緑の地平線が広がり，進行方向にあった白い頂の山が近くになっている。いや，山に見えたけど，山ではない。陽の光を僅かに反射した瓦に気づき，人工の建築物だと判る。

あれは，岩山の上に建てられた城のようだ。白い漆喰の壁が，まるで高い山の頂に残った雪のように見えていただけ。近づくほどに，青の窓枠や巨大な城の周りに巻かれた色とりどりの小旗が見えてくる。

『クマリのひと，まほう，すこしだけ，つかう。そらとぶ……』この雷光がそうなのですが』そらとぶ，いきもの，つかえる。玉獣，いいます。とても，たいせつ。すくない』

『この雷光は，玉獣っていう生き物？　それをクマリの人は扱えるのか？』

『そう。玉獣，べんり。でも，ふつうのひと，つかえない。玉獣，神苑だけ，うまれる。たいせつ。たかくうれる。あと、クマリのむこう、エリドゥ法王国。いくさ、しやすい』

『後李は法王国と戦争したい訳？』

『ふたつのくに、なかわるい。でも、クマリ、もの、たくさん。ひと、たくさん。玉獣もいる。神苑もある。だから、後李も法王国も、ほしがる』

『……性質悪いな』

『ほんとうに』

何となく判ってきた。

つまり，魔術が主な技術のこの世界。車もなし飛行機もなしでは，空飛ぶ玉獣は貴重な移動手段。しかも，クマリの神苑でしか生まれず，扱える人材もクマリの国民だけ。クマリを手に入れれば世界の動向をある程度は手中に収めやすくなる。

その上、科学を発達させている後李帝国は呪術的なクマリや聖エリドゥ法王国を恐れている。神苑を持つクマリを滅ぼして法王国と喧嘩する気満々だ。

聖エリドゥ法王国も腹黒のようで、クマリの神苑を手に入れようとしているようだ。人質のようにミルを預かりながらも、クマリ復興の為に軍隊を派遣する気もない事から明らかだ。

まったく。厄介な事になっている。

ミルに確認すると，大きく頷いた。

『それに，ダショー，ハルキがうまれる，後李帝国，きづいた。だから，十ねんまえ，クマリ，せめた。おんな，こども，すべて，ころした。『何度もクマリは攻め入られていて，すっかり国力も劣っていましたから，もう耐え切れなかった』。後李にとって，ダショー，ころせる。クマリ，てにはいる』

『一石二鳥か。でも，それじゃあ，俺がクマリで生まれようとしてたから，クマリが攻められたのか……？』

「それは違います！　いえ……『きにしない』。確かに，そうですが……『しょうがない。きにしない。クマリ，とめられなかった。それ，わるい』」

『……』

俺がいなかったら，クマリで生まれようとしなかったら，ミルの故郷は無くならなかったんだろうか。そうしたら，ミルは両親と暮らせたのだろうか。

喉元まで出かかった言葉を，飲み込んで雷光にしがみつく。

俺は，知らないうちに多くの人の運命を変えてしまっているんだろうか。

ミルは，俺が存在する事で幸せなんだろうか。

不安は連鎖反応を起していく。

心の中が重くモヤモヤとした曖昧な気持ちで満杯になったまま，雷光は樹海の上を疾走していく。

『あれ，クマリのたてもの。雲上殿。たぶん，なかま，いる。天鼓の泉で、ハルキをむかえにいく、みんなでしていた。クマリ、やりなおしたくて、みんなであつまった。でも、後李帝国、きづいて、いくさ、してきた。みんな、にげた。いきてたら、雲上殿であう、やくそくした』

『仲間がいるのか？　その雲上殿っていう建物に？』

『はい。「十年前のクマリの乱と呼ばれる戦で，唯一残った建物です」もう……あれだけ。あのむこう，クマリのまち，あった』

『町？　だって，向こうにあるのは……』

雲上殿と呼んだ建物は，樹海への入り口のように存在していた。

雲上殿の向こうは，茶色の大地と地平線が続いている。

まるで砂漠のような光景に，ギョッとする。

あそこにかつて，町があった。静かにそう告げるミルの言葉は，過去形だ。

『すべて，もやされた。後李帝国，うばう，ころす，もやす。すべて，きえた』

遠目にも，充分に荒涼とした土地だと判る。

広大な場所にかつてあったクマリの町は，大きな都市だったのだろう。それを燃やして消し去る戦とは，一体どれほどのものなんだろう。

想像も出来ない規模の話に，背筋が強張っていた。
雷光は速度を落とし，再び緑の茂みに入っていく。

『雲上殿（うんじょうでん），いきます』

ミルの声は，先と変らないままに予定を告げる。
キミは，辛い感情はないのか。
そう問いたくなる気持ちを，心の中で打ち消した。
辛くないはずは，ない。悔しいはずだ。悲しいはずだ。腹立つはずだ。
それでも，過去の事実を告げるミルの声に感情の色が入らない。
それは数え切れないほど，自分の中の激情と戦った証拠。俺が知る事の出来ない，ミルの心の闇なんだろう。

宮殿。
そう呼んだ方が相応しい建物だった。
これも過去形。それは，建物が死んでしまっているから。
ここに人はいなくなって，どれだけ経つのだろう。十年前の戦で，人も消えてしまったんだろううか。
ひっそりと，ただ埃と時間だけが流れた空間。流れた記憶までにも，埃を被せた静けさ。
かつて純白だった名残りはあるが，壁の漆喰も薄汚れたり所々に欠けて崩れている。また，幾つかの場所に乱暴にモノを倒した跡が目に付く。金目のものを奪った跡だろうか。
そうだろう。これほどの巨大な建物を作った国ならば，金銀財宝で飾られていても不思議はない。
木造で作られる，最大級の建物。その中に沢山の小部屋が連なる

最下層から進んで，幾層も上がり，ようやく巨大な空間が広がる大広間にたどり着く。

『……凄いな……』

思わず，声を潜めていた。もちろん，伏兵を恐れて慎重になっていたけど，それ以上に圧倒されてしまった。

見上げるばかりの高い天井には，雲間を翔ける数多の玉獣（ぎょくじゅう）や人々が描かれていた。躍動する命。美しい自然。楽器を手にする伶人。妙なる音の調べが聞こえてきそうな壮大な天井画は、創世の物語を描いているんだろう。描かれた英雄や聖女らしき麗人達を、息を止めてみつめる。

まるで大聖堂だ。

『ここ，玉座の間。ハルキ，みてほしい。「あなたに，どうしてもクマリが繁栄していた残像を見て欲しかった。こんなに，この国は栄えていたのです」』

ミルの声も，静かに囁いた。

俺達の潜めた声が，立ち並ぶ太い柱の間を流れていく。

それは，畏怖をも抱かせる，かつての繁栄の跡。

壁や柱の間を伝う薄絹は，かつての鮮やかだったろう色を潜めて虫食いの穴だらけになっている。

柱に彫られた精巧な彫刻の溝には，埃が蓄積されている。

正面奥に鎮座する，一つの椅子。

天井から銀細工の鷹が包み込むように広げた翼の下に，その椅子はあった。

それが，クマリの玉座なのだろう。

俺は，あの白い鷹の意味が何となく判った。

あの鷹は，クマリの護り神のような存在なのかもしれない。あの

白い鷹の存在があって，玉座が存在するんだろう。いや，白い鷹が玉座に座るものを名指ししていたのかもしれない。

今は埃を被った巨大な鷹の彫刻に，その存在の大きさを知った。

２４　記憶の再生

整然と立ち並ぶ巨大な柱の間に，俺達の息遣いが響く。
遺跡のような玉座の間で，呆けたように繁栄の虚像を眺めていた。
俺の傍らで静かに見詰めているミルの心に，どんな感情が渦巻いているんだろう。もし，国が滅びなかったら。もし，両親が生きていたら。もし，もし，もし。
そう，思っているんだろうか。いや，そう思っているに違いない。
俺がいなかったら。クマリの地で生まれようとしなかったら。俺の存在さえなかったら，きっとミルの運命は変っていただろうに。
ミルは，何を失ってしまったんだろう。

『ここは，静かだね』
『うん。もう，だれもいない』

もう，誰も居なくなってしまった国。その国を背負うようなキミは，どこへ行こうとしているのだろう。俺は，何をしてあげられるだろう。
ミルの小さな背中を見て，俯く。俺は，何が出来るんだろう。キミのお荷物になってはしないだろうか。

『なぁ，ミル……』
『……しっ』

俺の問いかけに，ミルは素早く口元で息を切った。
野生の動物のように全神経を研ぎ澄ます気配に，口を閉じる。何か見つけたのだろうか。
木の床を歩くミルの足音が、消えた。

『ハルキ，そばにいる』

言われなくても離れません。

只ならぬ様子に，俺はミルの邪魔にならない距離を保ちつつ後を追う。

人が潜むには，うってつけの場所だ。

太い巨大な柱が立ち並び，沢山の出入り口がある大広間。物陰も逃げ道にも，困る事はない。

ミルは音もなく果物ナイフを取り出して，胸の前で構えた。重心を前に，気配を消し去り鼠に飛び掛る寸前の猫のような動作に，俺の心臓が早撃ちをはじめる。

俺の知っているミルではない。いつも優しく微笑んでいたミルではない。

生死をかけた勝負を駆け抜けてきた者だけがもつ，研ぎ澄まされた動作と精神の使い方をしていた。

「……っ」

俺の吐く息の音が邪魔だ。そう，鼓膜を震わすのは，風が揺らす布の音と相手の気配の音，そして俺の呼吸の音のみ。

この場に，俺は足手まといでしかない。

そのせいでミルが怪我をしたらどうしよう。そう考えた途端だった。

立ち並ぶ柱の影から，足が見えた。横になった人間の足。薄汚れた大きな足。

瞬間，ミルの気配が変る。息遣いが感じられる。押し殺していた気配が，ようやく解き放たれた雰囲気。

そして，ミルにしか判らない何かを確認したんだろう。音を立てて一歩を踏み出し，慌てて踏みとどまる。

まるで，ボールを追いかけて道路に飛び出しかけた幼児のよう。

思わず理性で踏みとどまり，素早く柱の影に身を潜め周囲を見渡す。
でも，それも僅かな間だった。一瞬後，耐え切れないように影から飛び出し，その人影に走り寄る。

「テリン……テリン！」

ミルが素早く抱き起こしたのは，中年の男性だった。
薄汚れ，随分とやせ細った腕が見える。ただ，その腕は後ろ手に縛られていた。
ヒゲが生え，青痣に出血や腫れた顔は，正気なく土色に近い。

『何て事を』
『大丈夫。まだ，いき，してる。「テリン，テリン！　しっかりなさい！　何が起きたのですか！」』

ミルが素早く縄を切り，男の頬を軽く叩く。その刺激で，テリンと呼ばれた男の目が僅かに動いた。
いや，目を見開こうとしたのだが，目蓋が腫れて出来なかったのが正しい。
微かに青が混ざった茶色の瞳が，意思を持って動く。あ，ミルと同じ色の瞳だ……。
その視線は，ミルと背後に立ち尽くしている俺を捕らえた。
腫れた目蓋が，僅かだけ見開かれる。

「姫宮様……ここは危険でございます！　早く，早くお逃げくだされ！」

テリンの言葉に，空気が蠢いた。
柱の影から無数の気配が動き，強烈なお香のニオイが流れだす。
そのニオイがついた風に釣られるように，周辺の妖精のような姿を

した小人が引き寄せられていく。

「精霊が……っ！」

『……せいれい……精霊?!』

ミルの言葉が，俺の頭の中でピースをはめる。

知っている。これは，この光景を見たことがある。コレに似たような状況に遭った事がある。

いつだ？　そう、昔だ。俺が俺でない、遠い昔。

記憶が一瞬で途方もない過去へ戻る。意識が過去の記憶に繋がり、俺の口から見慣れぬ旋律と言葉が流れ出す。

『八百万の神様，いや，……「八百万の神々の　住まう天地　深(しん)淵(えん)の果て　全てに響かせ　轟かそう……」』

「大祓(おおはらい)！　大祓(おおはらい)だ！　下がれ！　全員，下がれ！」

柱の影から，フードを被った人影が次々に出てくる。

その手には小さな香炉だろう。きついニオイのする紫煙を漂わせ，口々に低く寒気のする和音を唄っている。

知っている。これは精霊を呼び寄せ使役する唄。精霊の意思も気持ちも無視し，意のままにしようとする唄。

薄暗い床をよく見れば，淡い光の線が浮かび上がりつつある。

規則性をもち，意匠化された曲線でかかれた円陣は，見事にテリンを中心に描かれており，俺達は円陣の中に誘い込まれた形だ。

これは罠。

こちらが使役できる精霊を気味の悪いその唄で吸い尽くし，俺達を円陣の中に閉じ込める算段なのだろう。

真空パックされてたまるか！

腹に力をこめ、意識を過去へうつし、声を響かせ唄っていく。

細胞が震える。心が歓喜する。全てが震えていく。

『「　天道そびえる十二の宮　巡り巡り六十支　永久の契約の下
吾は叫ぼう　」』

初めてミルと出会った時の唄だ。そう気づいた時に，俺の中の記憶の光景を思い出していた。

≪　濡れて重くなった砂浜で唄っている。空には無数の水の精霊。
あぁ，なんてアンバランス。そう思った俺は，朗々と空へ向かい唄っていた。土砂降りの雨の中，両手を広げて唄っていた。
さぁ，戻ろう。君たちが居るべき場所へ。あるべき形へ。美しい，その形へ。研ぎ澄まされた感覚を解き放ち，その響きに震えていこう　≫

真っ白な砂浜。視界の殆どが海。背後に迫る急な斜面の山々。
狭い閉ざされた空間が，全ての世界。チッポケな，世界が全てだった。そう，これは，俺の記憶。

そうか……これ，物事の並びを正常に戻す唄だ。
どんな半端な唄よりも，コレに勝る美しさはない。
何て，心地よい響き。体の粒子はもちろん，この振動が響き渡る範囲は全て清める響き。無敵の唄。
思い出していた。そう，これは，大祓（おおはらい）。全ての始まりの唄だ。
これは，ハルンツの記憶だ。古い古い，記憶の底で眠っていた思い出。これは，旅立ちの記憶。

『「　これをもって，全ての終わり，全ての始まりとする　この拍手は拍手でなく　神の息吹なり　鼓動なり　」』

夏のあの日は，最初の音がとれなかった。大黒丸とミルの奏でた

音で，俺の中のイメージが調律された感覚だった。でも，今は違う。
俺は俺の記憶の中から音を生み出していた。最初から音は判っていたんだ。
そう……俺の中の記憶が，鮮やかに蘇っていた。唄い終わり光の粒が広がっていく自分の手を見て，自分が関口晴貴だと確認してから拍手を打つ。
空気が輝くその美しさに，確信。
なんて不思議な感覚だろう。俺は確かに関口晴貴だけど，ハルンツの辿った人生が記憶にある。過去の人物だけど，遥か昔の記憶の断片が鮮やかに蘇ってしまった。
思い出してしまった。判ってしまった。
ハルンツが，その人生で感じた苦悩や喜びや，悲しみの感情まで。きっと，蘇ったのは印象的な場面。それでも，自分と同じ魂の記憶に戸惑う。記憶や感情の蔦は繋がっているけど，それが別人だという事に，ひどく戸惑う。まるで，自分が多重人格になったかのような。それでいて，いとおしい。とても，懐かしい。涙が零れそうな感覚。これを何と表現しよう。

『……あぁ，そうか。俺，ハルンツだったんだ』

漂う紫煙は，光の粒によって清められる。呆然と立ち尽くす男達に，俺は思わず溜息を零していた。
その手にする香炉には，勾玉や蛇をモチーフにデザインされている。
勾玉も，蛇も，深淵（しんえん）の大神殿のシンボル。そして，記憶の底のハルンツは深淵（しんえん）の大神殿の大神官をしていたのを思い出す。
紫の袴，凝った刺繍で重く長い袖で動きづらい紺色の着物。泉湧き出る部屋から見上げる，小さな小さな丸い天井。

『俺を……また閉じ込めるつもりなのか？　あの水底へ縛り付け

るのか？』

猛烈な勢いで，過去の光景が蘇る。感情が迸る。

『深淵（しんえん）へは，もう，もう戻らない！』

「ダ，ダショー様，ダショー様だ！」

「なんと，本当に光臨なされた！　この大祓（おおはらい）は，ダショー様の為せる御技！」

『わ，訳わからん事を叫ぶな！　さっさとどけよっ』

フードを被った深淵（しんえん）の神官達の言葉は判らない。それでも，大祓（おおはらい）を行った俺に対して，一歩一歩と恭しい仕草をしながら近づく。その姿に悪寒がはしる。

何だ，こいつら。

見えない糸が見える。見えないはずの，蜘蛛の糸。透明で，それでいて確実に獲物を絡め捕らえ，絞め殺していく細い糸。

俺を縛っていた，思念の細い蜘蛛の糸。閉じ込められたように過ごした小部屋に仕掛けられた，無数の蜘蛛。

罪の自覚なく，じわりと絞め殺していく，無邪気な糸。

錯綜する記憶と感情で，足がもたつく。恐怖で，俺は倒れこんでいた。

25　空から降ってくるもの

思わず後ずさり，ミル達にぶつかって倒れてしまう。

『ハルキ！』

『こ，こいつら……何でここにいるんだっ』

「テリンをお願いします！『はなれる，にげる！』」

ミルが俺にテリンと呼ぶ男を預け，果物ナイフを抜き取る。

薄暗い室内に，ナイフの鈍い光が反射する。その途端，神殿の男達が一斉に離れる。

それは，油を落としたよう。一定の距離を開けて飛びのきながら，周りからジワリと様子をうかがっている。十数人はいる男達が有利だ。

『無理，無理だっ……！』

このままじゃ，真っ先にミルがやられてしまう。

そう直感した時に，倒れた拍子にしたたか打った尻に感じた違和感を思い出す。

そして，迷わずソレを取り出した。

薄暗い室内に潜んでいた奴らになら。

科学を知らない奴らになら。

それは，一か八かの勝負。

『ミル，目ぇ閉じろ！』

日本語で叫び，尻ポケットから取り出した携帯電話の小さなボタンを押す。

途端，俺の手の中から暴力的な白い閃光が真昼の太陽以上の輝きで現れる。

『どけぇえええ！』

ボタンを押し続け，室内は稲光のような連続するフラッシュに光に照らされた。

まるで獣のような悲鳴を上げて，男達は顔を抑えうつぶせていく。

口々に許しを請うような，懺悔のような声を呻いて倒れる前を，俺はテリンを引きずりながら小走りで走っていく。

手の中の携帯電話の液晶画面には，パニックになった男達の姿が写真になって『保存しますか』と表示がでていた。

『こ，こっち！』

混乱から素早く立ち直ったミルが，果物ナイフを片手にテリンの肩を担ぐ。

息絶え絶えのテリンを乱暴に，二人で担いで引きずって走る。

出口へ。外へ。

まるで夢の中の逃避行のように，まどろっこしい足元。思わず舌打ちすると，背後から足音が追ってくる。初めてカメラのフラッシュを浴びた割には，復活が早いじゃないか。

映画やドラマみたいに，都合よくいかない。

さらに，現実の厳しさを屋内から外へと目の前に広がった絶景で確認した。

『何だコリャ……』

「テラス……お披露目の間だなんて……何てことっ」

「ダショー様，クマリの姫宮，お待ちくだされ」

荒い息と共に，声をかけられて振り返る。
それは，悪夢。
目の前に広がる，茶色の砂漠。地平線まで，荒涼と物陰一つない砂漠が続いている。
背後には，神殿の男達。巧みな彫刻が施された柱の影から飛び出してきた。
統一され無駄のない動きに，手の中の携帯電話を思わず投げ捨てる。
液晶画面に表示されたバッテリー残量は，残り僅か。どちらにせよ，電波も存在しないこの世界では無用の物となってしまった。

「妙な魔術は，お使いなされますな……。そう，身の為ですぞ」

丁重な言葉遣いの裏に，隠し切れない苛立ちを感じる。
人をボロ雑巾のように痛めつけ，囮にする考え方気に入らない。
相手に下手に出てるように接しながら，自分達の意思を強引に押しすすめる手段も，気に入らない。
自分達が正義だと言わんばかりの，その考え方全てが，腹立だしい。

『お前達の思い通りにいってたまるかよっ』

何か手があるはずだ。何か，何か！
このまま捕まる訳にはいかない。そうだ。俺は何時だって、縛られていたんだ。俺が欲しいのは，自由だったんだ。

『《……自由を，ボクに自由を……深淵に落ちたボクは，見上げていた。小さな，小さな，青い空。その向こうへ行きたくて。広大な空を下を駆け巡りたくて》……黙れ，黙れ！　今はそうじゃない！　でも』

頭の中で誰かが叫ぶ。

《自由が欲しい。野山を駆け巡る風になりたい。大海原へ漕ぎ出す風を感じたい。世界を巡る風に乗りたい》

狭い世界に落ちた我が身を嘆き，ただ風の青い匂いに恋焦がれる激情に体も精神も支配されかかる。

『お，お前ら……俺に何しやがった！』

湧き上がる過去世の想いに，怒りが爆発しそうだ。

そうだ。コイツラに，俺の人生を何度も滅茶苦茶にされたんだ。

思い出したぞ。

『俺は何度生まれても，深淵に落とされたんだ！　何度も何度も，お前達の術から伸びる蜘蛛の糸に絡め取られて，俺は深淵のあの小部屋に閉じ込められたんだ！　俺の意思は無視されて，何度生まれてもダショーをやらされたんだ！』

『ハルキ……』

『もう嫌だ！　絶対にお前達に捕まりたくないんだ！　だから……エアシュティマス，俺の中のエアシュティマス……あっ』

『ダメ！　「ダメです！　体を貸してはなりません！　エアシュティマスの記憶に囚われては，貴方の精神が消えてしまいます！」』

「何と……エアシュティマス様の御記憶を自在に引き出せるのか？！」

「はよう覚醒せぬうちに！」

俺は。俺はその時、何も聞いてなかった。

目の前の危機と周囲の怒号は、まったく眼中外になってしまっていた。

生き物の気配のない茶色の砂漠と青い空。今目の前に広がる景色と重なって蘇る記憶のワンシーンに興奮していたから。

ミルと初めて出会った時に，最初に思い出した映像。

アレは，この場所へ落ちる場面だった。大神官を最初に名乗ったハルンツの，この場所での記憶だったんだ。

青く澄み渡った空の白い入道雲。広がる大海原。青い蓮。零れる，一滴。

あの夏の日，青空を突き破るように伸びた入道雲から，世界へ向かって飛び降りた。愛しい人を腕に抱いて，雲から飛び降りたんだ。世界を変えるために。大好きな人たちの幸せの為に。歪ませたくない，信条の為に。

ハルンツが空から見下ろした世界は，青かった。大地は黄金色に輝いていた。流れる河は銀色の糸のように煌めいていた。人の営みは，世界に心地よい音を響かせていた。風は緑の薫りを含んでいた。そう，玉獣（ぎょくじゅう）の乱舞の中を通り抜け，俺はこのテラスに舞い降りたんだ。大神官を名乗るために。

あぁ……全てが美しかった。

ハルンツの時代から，何が世界をこんな姿にしたんだろう。

「さぁ。ダショー様，おとなしくこちらへ」

『……』

空を見上げたまま，過去の記憶に流されかかった俺に，男が少しづつ近づく。

ミルが果物ナイフを前に突き出す。その小さな手を，片手で包み込む。

空を見上げたまま，俺はミルの肩をそのまま抱いた。テリンごと，抱き込む。

『あの日の再来だ……』
『あっ』

見上げた天頂に光が一つ。いや，いくつもの光が，大きくなっていく。増えていく。
何かが，光りながら猛烈な勢いで落ちてきている。
アレは、あの日の俺だろうか。
そんなはずはない。じゃあ，爆弾だろうか。まさか。
段々と大きく，そして増えていく空の光に気づいた男達が，腰を抜かしていく。座り込む者，立ち尽くす者。皆が口を開けたまま，目を見開いたまま，動けずにいた。

「どうやら，間に合ったようじゃな」

真っ白に輝く光が，雷のように床へ突き刺さっていく。猛烈な風と衝撃を伴って周囲に光の塊が着弾していく中，聞きなれた音無き声を聞いた。

「……主様！」

ミルの声に，眩しい光の中に目を凝らす。
光と同化してしまった白い鷹が，金色の瞳を細めてテラスの欄干に止まっていた。

「おや。ずいぶんと汚れておる」
『お，お前が俺をココに飛ばしてから大変だったんだぞ！　今まで何処行ってたんだよっ』

思わず罵ってしまう。さっき玉座で思ったことは，とりあえず横

に置いといて文句の一つは言いたい。
異世界に人を移動させたんだ。飛ばしっぱなしは困る！　アフターケアぐらい，してくれ！

「ふむ。時間を合わせるのが難儀でな。娘を地球へ移動させた時も，十年以上ずれてしまった。そう思えば，今回は可愛いものであろう」

周辺の光の塊がゆっくりと形を成していく。消え行く光の中から，輪郭が見えてくる。

「あの時の妖獣(ようじゅう)を，そのまま神苑(しんえん)に置いてコイツラに悪戯されても困るのでな。玉獣(ぎょくじゅう)に変化するまで置いといてあったのよ」

どこに，何を置いておいたんですか。
その問いを飲み込み，光の塊から現れたソレに，息を飲んだ。
テラス周辺に落ちた光の隕石から，獣が現れていた。
鮮やかな紅色の翼を広げた大きな鳥。逆立つたてがみをもった獅子。光沢ある大きな角を抱いた大鹿。翼を持った馬。
それは，神話に登場する霊獣達。これが，玉獣(ぎょくじゅう)？

「この子らが急に変化すると駄々をこねるので落としてみたらまぁ，成る程。恩人の危機に駆けつけたかったのだな」
『恩人？』
「あの時も同じ唄を唄ってやっただろう。最初にワシが来た時だ」
『あのときの，そらとぶ，どうぶつ！　ひかり，した，あのこたち！　「最初に出会った時，私と一緒に噴水から出てきた獣達です！　あの時の妖獣です！　なんて美しく変化したのでしょう！」』

ミルの言葉に，深淵(しんえん)の神官達がどよめき後退した。

26　死神の気配

他の玉獣より，一回りは体が大きな玉獣が俺達の前へ歩む。
獅子のようなたてがみをなびかせ，両肩の筋肉を美しく動かし，
深淵の男達に向かって低く唸る。
深淵の男達は，真っ青な顔をして立ち尽くしていた。辺りを囲う
玉獣は，牙をむき出し爪を出し，今にも襲い掛からんとしている。

「吾が名と息吹をもって，契約を施行する！　吾が名は昴　ミル
！」

男達が怯んだ瞬間だった。
ミルは素早く，ポケットから取り出した二つの小さな珠に息を吹
きかけ宙へ放った。
虹色の光を零す真珠のようなモノが，宙で弾ける。
それは，物理で説明できない光景。炎の竜が飛び出し，吹き荒れ
る風にのって男達へと襲い掛かった。熱風が頬を撫でていく。肌を
焼く熱さで，夢のような光景が現実味を持つ。

「雷光！」

ミルの叫びに，宙を翔けて麒麟が走り飛んでくる。どこかで呼ば
れるのを待っていたんだろう。その忠臣の背に二人がかりで手負い
のテリンを乗せる。
ミルも素早く雷光に跨り，俺は肺一杯に息を吸い込む。欄干に足
を乗せて風の唄を唄おうとした途端，最前列で威嚇していた玉獣が
俺の横へ駆け寄る。
神社の前に置かれた狛犬。ある意味デフォルメされた狛犬を，リ
アルにさせた動物。で，虎なみにデカくした玉獣に鋭い爪を隠し僅

かに前足を折り，恭しく頭を下げられる。その行為に浮かぶ一つの言葉。

『……乗れってことか？』

思わず口にすると緑の瞳が瞬き，濡れた鼻先が動く。

早く乗れよ。

そんな声が聞こえ，手を引かれるように金色の肢体に跨る。ライオンより大きなコイツは，燃える炎のように長い体毛を逆立て吼えた。背後で絶叫を上げる男達への宣言のように轟かす。

天罰だ。

そう聞こえた。

「行きましょう！　雷光，先達を！」

『お，うわっ』

ミルの一声で，跨った玉獣も宙へ飛び出す。

いきなり足元に広がった樹海の絶景に，手元のたてがみを思いっきり引っ張りしがみついた。

低い唸り声を上げられたが，俺は手を緩める余裕なんかない。

昨日のようなジェットコースターな逃避行の始まりに，生唾を飲んで覚悟を決めた。

ミルと，この新しい玉獣に全てを任せるほかは，ない。

薬くさいのに微かにトイレの悪臭が混ざった病院の空気が，嫌いだった。

白く塗られた壁も，常に拭き掃除がされて清潔なはずなのに薄汚れた印象がある床も，嫌いだった。

真っ白で糊が張りすぎたシーツも嫌いだった。

小さな窓では，空が見えない。風を感じる事も出来ない。音といえば，誰かの生存を主張する心拍数の音。それと，何かの終了を告げるタイマーの電子音。

こんなんだから，じいちゃんは具合が悪いんだ。

柔らかなお気に入りのシャツに身を包んで，心地よい風が吹く空の下で，大好きなチェロの音で満たしてあげれば，きっと癌も治るに違いない。

そう思ったんだ。

あぁ，俺は夢を見ているんだな。

意識が二つ。

夢を自覚している俺と，じいちゃんが亡くなる前の，うろたえた俺がいる。高校三年生の，夏服を着た自分。

俺と，ばあちゃんは悩んでいた。

俺の不可解な能力を使えば，癌は治るかもしれない。確信はないけど，それで治るなら使いたい。じいちゃんが使うなと言っていた能力だけど，それで治るなら使いたい。

ばあちゃんも，そう思っていたようだった。けど，じいちゃんの意思を尊重していた。あと，俺の安全を。息子夫婦の忘れ形見の孫の俺の身を案じていた。

何度も，何度も相談した。日々，やせ細っていく姿を見て奥歯をかみ締めていた。僅かずつだが確実に侵食してくる絶望に，気力を削られていた。

「唄は唄わない。でも，せめて大好きなチェロは聴かせてあげたい」

悩んだ末に，出した結論。
学校から帰宅して、着替える間も惜しくチェロを担いでばあちゃんと病院へ急いだ。何故だか一刻を争う気がして，タクシーの運転手を急かして。
そして慌ただしく陰気臭いエレベーターを降りた途端，そこに死神がいた。
梅雨が明けたばかりの暑い日だというのに，黒のシャツに短めのタイトスカートに身を包んだ中年の女性。
じいちゃんが倒れてから初めて顔をあわせるようになった，じいちゃんの弟の娘という人が，立っていた。
汗でも滲まないだろう分厚い化粧が塗られた顔が，大きく歪んでいる。悲しみと慎みという仮面を大急ぎで被せた表情の奥で，嘲りの感情が揺らめいている。

「死んだわよ」

ほんの数秒なのに，とても長く終わりないような感覚だった。
ポーンと事務的な電子音と共に，扉が閉まっていく。
動けない俺とばあちゃんの前で，扉が閉まっていく。
ようやく，動くものを見て言葉の意味が染みていく。
死んだのだ。じいちゃんは，死んだのだ。
慌てて，エレベータのボタンを押してドアを開ける。

「さっき，死んだわよ。何担いできてんのよ。そんなんだから死に目に会えなかったのよ。馬鹿じゃないの」

さっきと一寸変らず姿勢で，抑揚なく，突き刺さる言葉を発した。
何故，何故，俺達は哀れみを装った視線を送られなくてはいけないんだ。

何故，遺産目当てに急に現れた親戚にこんな事を言われなくてはいけないんだ。
何故，こんな女に看取られて，じいちゃんは死ななくてはいけないんだ。

世の中というのは，非常に，理解しがたく，絶望に満ちている。
なんて非情で，不可解なんだろう。

ばあちゃんが嗚咽を押し殺すように呻いて座り込むのを、視界の端っこで眺めていた。
再び閉まっていくエレベーターの扉を，俺は呆然と眺めていた。
扉に隠れていく中年女性の姿をした死神を，呆然と眺めていた。
全身の力が抜けていく。
死神というものは、存在する。死と絶望と嘆きを連れてくる死神は，存在する。
大鎌を持っていなくても、ねずみ男のような黒いローブを纏っていなくとも、そこに存在するのだ。
扉の前に現れたあの女は，死神だ。

「とりあえず薬草もつけたし，これ以上は見守るしかありませんね……ハルキ？」

ミルの言葉に、慌てて顔を上げる。機械的に動かしていた手によって、すり鉢の中の薬草が跡形もなくペーストになっていた。

「大丈夫ですか？　何だか，元気がありませんが……『ハルキ，まだ気持ち悪い？　』」

『あ，あぁ……うん大丈夫。うん，「だいじょうぶ」』

何となく憶えた言葉で返すと，心配げなミルの顔が綻ぶ。

ようやく嬉しそうな表情を見せた事に安堵しながらも，俺は別の事を考えていた。

満身創痍のテリンを見ていたら，何故かじいちゃんの死に際の事を思い出していたようだ。

思い出したくもない，あの死神。忌々しいあの女の記憶が出てきた事に気が滅入る。まったく。

今頃，あんな事を思い出してしまうなんて。余程，疲れが溜まっているのだろう。

そうでなかったら、すり潰したこの薬草が消毒薬のニオイと似てるから、だ。

『テリンさん、助かるかな』

『たすける。かならず』

『そうだな。必ず、助けよう』

病院もないこの世界で、どうやって重傷の人間を助けるというんだろう。

無責任な奴だな。そう言う水野の言葉が聞こえる気がした。あぁ、でも、希望を口にしないと、絶望に喰われそうになるんだよ。

深淵（しんえん）の神官達から逃げて、俺達は森の中に佇む古い木造の建物に倒れこむようにたどり着いた。

まるで江戸時代の旅籠のようだと言ったら、ミルに頷かれて驚いた。

なんでも、後李帝国と国交があった時に使われた街道の宿泊施設らしい。大きな間取り、大きな竈（かまど）、住居にしては高い天井。

戦が始まった十年前までは使われていたらしい。そうミルが解説しながら、すばやくブーツを脱いで奥へ入っていくのには驚いた。

埃とカビくさい布団を引っ張り出し、窓を全開にしてタンスを物色して、大きな樽を転がし裏へと飛び出していく。
俺といえば、例の玉獣酔(ぎょくじゅう)いでへばっていた。板間に横にされたテリンの横で座り込んでいた。
ミルは、たった一人で水を汲み生活空間の確保に働き、両手に薬草を抱えて戻ってきた。例の赤い木の実を齧ってから、俺はミルの手伝いを慌てて申し出たのだけれども。
あぁ、情けない事この上ない。

「今日はここで休みましょう。僅かですが、米がありました。今から脱穀して食べられる分を用意しましょう」
『ここで、休めるのか？　あぁ、なら、食べ物を集めてこようか』

何となく、ミルの言っている異世界語を理解して返事をする。さっき、『ハルンツ』の記憶を本格的に思い出したからだろうか。それに日本にいた時からミルの言葉を聴いて異世界語に馴染んでいたから、聴き取る耳は出来ていたのだろう。超スピードで洋画を字幕なしで聴き取っている感覚で、曖昧に大体な感覚で、少しだけ理解出来るようになっていた事にさっきの騒動で気づいた。
あてずっぽうに言ってみたが、見当はずれではなかったらしくミルが微笑んでくれた。

「そうですね。教えた木の実や果物を取ってきて頂けますか？わかる分でいいですよ」
『木の実と、果物だね。でも間違えてたらマズイから、ミルが確認してくれるかな』
『わかりました。でも、きけんあるとだめ。玉獣(ぎょくじゅう)といっしょに、いく』
『こいつと？　』

思わず、指差してしまった。
土間のような、板間の下の場所で寝そべっていた獅子もどき。俺に指差されると、不服そうな顔をしてから大あくびをしている。
雷光は、ミルが何か唱えて命じると、ミルの足元に消えていく。こいつは野良だから、消えることなく土間に居座っていたのだろうか。というか、存在を忘れていた。

「この子、ハルキが好きみたいですね。どうですか？　双子星になりますか？」
『……は？』

ミルの言葉が、理解できなかった。いや、こいつが俺を好きだとか、そう言った気がしたけど、まさか。
聞き間違いだ。

『このこ、ハルキがすきみたい。こんなにつよいこ、ひとのそばにいたがる、めずらしい。すごく、めずらしい。このこ、ハルキがすき。たぶん』
『そ、それは、どうも』
『だから、わたしの雷光みたいに、いっしょ、いいとおもう』
『えぇ？』
『きょうだいになる。ちからづよい。きっと、ハルキたすけてくれる』

ちょっと待て。
犬とか猫を飼うみたいに、簡単に言わないでほしい。
こいつが口をあけたら、おそらく俺なんか軽く食べちゃう存在だ。
それを、兄弟になるとは、どういう事なんだ。
でも。

『助けてくれる、か』

もう、こいつには助けてもらっている。

確かに、神官達を退けさせたうえに、ここまで乗せてもらった。

こいつに、懐かれてるのかな。

戸惑っていると、緑色の瞳に睨まれているのに気づいた。

のっそりと起き上がり、俺から視線を外すことなく傍らまで来て

ペロリとざらついた舌で手の甲を舐める。

いや。サイズが違うだけで、犬や猫と変わらないのか？

27　陽気な仲間

『ボッボレローボレボレボレロー』

しなやかに伸びる尻尾が愛想よく振られる。
俺のリズムに乗って、右、左、右、左。両肩の筋肉や骨の動きも、尻尾の動きも、とても滑らかで美しい。

『ポレポレロー』

今頃、日本は正月だろうか。
こちらの世界に来てから二日だから、時差があってもそろそろ正月だろう。
今頃、スパークリングワインなんかコタツで飲んでた予定だったんだけど、俺は鬱蒼とした森の中を大型獣を引き連れて歩いている。
思わず口にしてリズムを取っていたボレロを、こいつは気に入ったようだ。緑色の瞳が何となく笑っているようにも見える。
ラヴェルの、ボレロ。名曲だ。カラ元気を出して歩くには、ちょうどいい。

『ボレボレロッレロレー』

右、左、右、左。ゆらり、ゆうらり。

『ボレボーボレロー』

俺、何やってるんだろうなぁ。
異世界に来た途端、いきなり襲われるし。何も出来なくて、ミルの足を引っ張ってばかりだし。いや。引っ張ってしまう事は判って

いた。それでも、何も出来ない自分にはうんざりだし。
ため息のかわりに、ボレロを口ずさみながら森を歩く。
見つける木の実やキノコを、手にした籠に投げ込みながら。
水野は、どうしてるかな。教務は、怒っているかな。生徒達は、俺の事をどう思っているだろうか。
突然、失踪した俺を。行方不明になった俺を。
聞こうにも、もう聞けないだろうけど。この世界に来た天鼓（てんこ）の泉は破壊されたし。
もう、地球にも戻れないかもしれない。戻れないだろう。
覚悟はしてきた。でも、その結果、俺は何をやっているんだろう。
実力テストは作っておいたけど。受験前の三年生も担当してけど。あいつらには申し訳ない。難関公立校を目指す生徒達用の対策授業、出来ないなぁ。あぁ、それから。
単調でどことなく陽気なリズムを適当極まる作詞で歌いながら、仕事の事なんか考えている俺は滑稽だ。
仕事の事を思い出さないと、教師としての俺を思い出さないと、俺は自分か無力すぎる事を痛感してしまう。何も出来ない俺。それを認めるのは、とても辛い。

『俺、何やってるんだろうな』

そう呟いた途端だった。
背後に気配を感じて足を止める。
口ずさんでいた適当ボレロを止めると、前を歩いていた玉獣（ぎょくじゅう）が振り返ってくる。その緑色の瞳に『何で止めたんだよ』という怒りを感じたのは気のせいだろうか。
僅かだけソイツに恐怖を感じながら、俺は背後を振り返る。
足が、すくんだ。背筋の筋肉が、凍りつく。
木々の陰から、何十頭もの玉獣（ぎょくじゅう）が歩いてきていた。大きさも、種類も様々な玉獣が、俺の後ろについていたらしい。

『う……うわぁ！』

食われる！

本能で足は猛スピードで動いていた。不摂生な生活を送ってきた俺の心臓は、恐怖と急激な駆け足で破れそうなほどに脈打つ。

全速力で、ミル達がいる建物に逃げ帰る。

『ミ、ミル！』

「どうしました？！　……あら」

俺の叫び声で外に飛び出してきたミルは、慌てる事もナイフを取り出す事もしない。

それどころか、にっこりと笑った。

日向で干した布団に顔を近づけて、カビや湿気のニオイが消えているのを確認。十年前の布団も使えそうだ。

俺とミルは、日向に並べた膨大な量の布団や布を取り込んでいく。

例の玉獣（ぎょくじゅう）は、もはや定位置のようになった土間の片隅で呑気に尻尾を揺らして大あくびをしている。

『つまり、ハルキのうた、きもちいい。この子達、精霊そのもの。精霊のかたちのひとつ。だから、ハルキのうた、だいすき』

『そう言われても、困るなぁ』

『わたしも、すき。ハルキのうた、だいすき』

穏やかな日差しを受け、縁側で布をたたむミルが笑いかけてくれる。

……可愛い。可愛いすぎるよ。
ミルがそう言うなら、俺は唄っちゃいましょう。
そして庭を振り返れば、何十頭も大型獣が寛いで尻尾を揺らしている。
現実に引き戻されるなぁ。まるでサファリパークに迷い込んでしまったような光景だ。

完全に食われると必死の全速力で逃げ帰った俺に、ミルは笑顔で説明してくれた。
ミルが言うには、俺の存在は少し変わっているらしい。
この世界で俺がダショーと呼ばれ特別視されるのは、俺の声に大きな魔力があるから。
声は、その人の魂の響きそのもの。
だが、声の振るえだけでは通常では精霊は動いてくれない。
その為、万物に存在し力を持っている精霊に力を貸してもらう術が魔術。
精霊が動きやすい場を造る為に、香を焚く。
こちらの願いを判りやすく伝える為に、精霊文字を宙や地面に描く。
精霊の気持ちを和ませる為に、舞を踊る。
唄いながら、様々な手段を用いて精霊の御力を貸してもらう。それが魔術。
ところが何故か、俺の魂は精霊に好まれているらしい。即ち、俺の声も心地よく好意的に受け取られる。そうなると、魔術の効率は良いに決まっている。なるほど。ダショーと崇められるわけだ。
だから精霊のひとつの形として扱われる玉獣にとって、俺の唄は最高に心地よい存在なのだとか。
つまり俺が唄った適当すぎるラヴェルのボレロも猫にマタタビ状態，ブレーメンの笛吹き男とネズミ達状態になってしまった。
なんてこった。

簡単には信じられない事だが、何十頭もの玉獣達を餌付けするように連れて来ていた事実。
信じるしか、なさそうだ。

『しっかし。あいつは態度デカイな。一頭だけ土間に上がりこんでる』
『あの子、すごくつよい。だから、ほかの子、こわくてちかづけない。ハルキ、きょうだいする、いいとおもうけど』
『どうやって兄弟になるわけ？』
『なまえ、つける』
『そんだけ？』
『なまえ、つける。つけた人のモノになる。これ、いちばんかんたん、まほう。「名前という言葉で、その者の魂を縛るのです。呪術の基礎ですよ」』

ミルの説明に、唸る。
簡単そうで、これは難しい事だぞ。こいつ、いい加減な名前でもつけたら俺の事喰っちゃいそうだし。
でも、まぁ、面倒くさいからここは……。

『じゃあ、ポチとか』
『だめ。タマもだめ。ちゃんとかんがえる』

真顔で注意してくるミル。
それは、日曜夕方のアニメの猫ですか？　何故、知っている？
とにかく、俺の性格を熟知したミルに先手を打って否定されてしまった。まいったな。
しばらく唸り、今まで溜め込んだ雑学を駆使して単語を見つけ出す。

『シンハ。獅子、ライオンの別称。これならいいだろ？』
『ほんとう？』
『サンスクリット語で獅子。本当だってば』

疑いの眼差しを受け、必死に弁護に入ると突然、獅子　玉獣（ぎょくじゅう）が立ち上がる。
言い合う俺達は思わず固まってしまう。
俺の腰ほどの高さがあるソイツは、本当に恐怖を感じるほどに気迫がある。
やばい。今のやり取りを聞いてたんだろうか。怒って俺を食うことにしたんだろうか。冗談じゃない！

『お、俺の側にいたいんだら、お前の名前はシンハ！　誇り高き王者、シンハ！』
『けっ。しけた異世界の名前つけやがって』

今、何と言いました？
鼓膜を震わさずに聞こえた音に、耳を疑う。

『もうちょっと、かっこいい名前付けろよな。まぁいいや。おめぇ、何て名前なんだよ』
『……』
『名前きぃてんだよっ』
『せ、関口晴貴！』

鋭い牙が並んだ口を見せられ反射的に答えると、目の前の獣は俺の頭からつま先までをじろりと睨みつけた。
まるでコンビニの前でカツアゲに遭遇したような気分なのは，何故なんだ。

『ふーん。じゃあ、ハルルンって呼ぶぞ』

は？

『ハルルンがまたボレボレの唄、唄ってくれるんなら、お前の双子星になってやる。ボレボレ、唄うか？』

ボレボレとは、ラヴェルのボレロの事だろうか。

ハルルンとは、俺の事だろうか。

訳の判らぬまま、俺は首を縦に振る。とりあえず、このカツアゲ状態から逃れたくて。

『しょうがねぇ。今日からハルルンとは双子星だ。仲良くやってこうぜ。とりあえず、夜露死苦っ』

時として、ハッタリは危機を救う。が、新たな問題をも生む。

ミルの手前で回れ右して逃げる事も出来ず、「お座りっ」のように指差した人差し指に、濡れた鼻先をくっつけて、ソイツは言葉を発した。

明らかに肉食獣という口を開き、鋭利な牙を見せ、まるで一昔前のグレた中学生のような口ぶりで決め台詞を吐いた。

何が、起きていた？　今日から双子星、と聞こえた。夜露死苦って、そう聞こえたぞ。

悠然と尻尾を動かし定位置に戻って、そして土間の定位置で横になった。

「す、すごいです！　説明も補助もなく、あれ程の玉獣を一回で双子星にしてしまうなんて！　『やっぱり、ハルキ、ダショー！』」

どういう事なんだ。
俺が，名前をつけてシンハを縛ったんじゃないのか？　それとも，俺が名前をつけられて縛られたのか？
しかも，小学生がつけたような半端なニックネームみたいなもん，つけられたし……。
納得しないまま，感動してるミルの横で頭をかかえてしまう。
なんだか，厄介な奴と知り合いになってしまったようだ。
異世界に来てまでグレた中学生ぽいキャラと仲間になるとは、神様の悪戯なのだろうか。

27　陽気な仲間（後書き）

28　揺らぐ記憶の炎

弦を弓で擦っていく。弦が細かく震えて、抱えた胴体で共鳴していく。弦の震えが、大きく空気へと広がっていく。

空気の震えは、心地良い？　じいちゃん、心地良い？

カノンは、好きだったっけ。バッハのカノン。繰り返されるメロディ。振動であるはずの音が、まるでキラキラ輝く粒のように零れていく。形見のチェロから零れる音は、芯が強いのに柔らかい。まるで、淡く輝く真珠のようだ。

あぁ、なんて心地良いんだろう。

チェロから、じいちゃんのニオイがするんだよ。

大好きだった、タバコのニオイがする。よく腰に張っていた湿布のミントのニオイがする。

まるで包まれているようだ。

小さな頃、こうやってチェロを教えてもらったよね。

じいちゃんが、弦を押さえて。俺に弓を持たせて。恐る恐る弓を持った俺の手を包むように、じいちゃんが手を添えて。まるでじいちゃんに抱きしめられるように、腕の中でチェロの弓を弾かせてもらった。

そうだ。あの頃の俺は、両親を亡くしたばかりで。

交通事故。

運が悪かった。

『晴貴くんが無事だっただけでも』

そんな心ない言葉を我慢しても、どれだけ泣いても、両親が帰ってくる事はなく。

難しい事は判らなくても、喉に血が滲むほど泣き叫べば、両親に会えない事が幼子でも判った。

唯一の父方の祖父母に引き取られても黙り込んだ俺に対して、じ

いちゃんはチェロを弾いてくれた。
その音がとても美しくて。とても綺麗で。俺は一日中、チェロを弾かせてもらった。
朝から寝るまで食事の時間以外はずっと、じいちゃんとチェロの音に包み込まれていた。音の向こうから、ばあちゃんのうれしそうな笑顔が見える。
ここで生きていける。そう思ったんだ。そう感じたんだ。

沢山の人が弔問にきている中、俺はずっとチェロを弾いていた。
入院する前まで所属していた市民オーケストラの人、退職してからも非常勤で顔を出していた会社の関係者、学生時代からの友人というご老人達。
それから。
真っ黒な喪服の波の向こうに、見えた真っ赤な口紅が微笑む。
死神が、まだいた。
遺産目当てで、遺族面して、ばあちゃんの側に立って笑顔で弔問を受けていた。
視線をそらせて、祭壇前の蝋燭を睨みつける。音を奏でる手に、力が僅かにこもってしまう。
ここで炎が操れるのなら、あいつを燃やしてやるのに。今すぐに。

俺は、また昔を思い出していたようだ。同じ炎なのに、こんなにも印象が違うのに。あんな事を思い出してしまうなんて、俺かなり疲れてるな。
軽く頭を振って、目の前で踊る炎を見つめる。
囲炉裏のように板間の中に作られた開放的な暖炉が、力強く質素な部屋を照らし出す。

最後に炎の明かりを見たのは、高校3年の誕生日ケーキか。いや、仏壇に蝋燭を灯す時とか。

仏壇の前で揺れる炎は、とても小さく暗かった。頼りなかった。誕生日ケーキの蝋燭も、細くて消えそうだったけど。

それは電気の明かりの下だったからだろうか。

真っ暗な闇を経験した今、炎の明かりはとても明るかった。そして、温かい。

炎は景気よく燃え上がり、五徳のような金属の器具に置かれた鍋を熱している。

鍋からは穀物を煮る甘い香りが漂っていた。明るさと、温かさ、食欲を満たす食べ物の存在。今まで当たり前だったものが、これほど有り難いとは思わなかった。

ミルの作ってくれた山菜入りの雑炊は、かなり和食に近く素朴で甘く温かかった。体の奥から疲れが滲み出てきて、今まで緊張していた事に気づいたぐらいだ。

まだ温かさが残る木の椀を包み空腹が満ちたところで、俺は疑問を慎重に異世界語に変換する。

『こんなに明るいと、後李（こうり）や法王国の追手に見つかるんじゃないのか？……えぇっと、「これ、だめ」あぁ、その』

「大丈夫です。この建物に陰の呪術をかけておきましたから。『だれも、ここ、みえないはず』」

『かげの、まじゅつ？　いや、でも、魔術使ったら腹黒の法王国にバレるだろ？　うーん。「法王国、わたし、だいじょうぶ、おもう、ない。法王国、まじゅつ、つかう。あぶない」』

異世界語を早く習得したくて、ミルに出来るだけ異世界語で話しかける。

昼間の逃走劇で蘇った記憶のせいか，僅かに異世界語の単語が浮かんできていた。

ミルも察してくれて出来るだけ異世界語を使ってくれるのだが、ややこしい事になってしまっている。
半端な異世界語と、半端な日本語の会話。時間がかかる上に、意味が通じているのか不安になってきた。

『法王国、魔術つかう。でも、玉獣のこわさ、しっている。このまわり、玉獣いる。こわくてちかづけない。「後李帝国は魔術に詳しくありませんし、法王国は玉獣を恐れてここ周辺へ深入りは出来ません。大丈夫だと思いますよ」』
「わかった。だいじょうぶ」

ミルが言うのなら、大丈夫なのだろう。それに今さら目の前から囲炉裏の炎とお鍋を取り上げられるのは辛過ぎる。
火箸で燃える薪を動かす。鍋下の火の調節をしながら、ミルは俺に笑いかけた。

「古い米しかなかったので、少し臭みがありますがお代わりしますか？　少し落ち着いたら、里へ買出しに行きましょう」
『うん……』
「食べにくいですか？」
『え？　あぁ、「たべる、だいじょうぶ」その……テリンさんの怪我、いいのかな』

板間の端に寝かしたテリンに視線をやると、ミルは柔らかな曲線の眉をひそめた。

「心配ですが、テリン自身が起きないと何も出来ないのです。『いっしょに、うたう。からだのなかから、ひびく、ひつよう、ある』」
『そっか。うん。「わかった。まつ」』

体中に打ち身や切り傷だらけのテリンに癒しの唄を唄おうとしたのだが、意識のない相手には癒しの唄は効果が無いらしい。
確かに、ミルに唄った時は一緒に唄ったし。だが、水野に唄った時は俺だけで治した。それを話すと、意識があり聞く耳がある事が大事らしい。
どうも、呪術とか魔術というのは不思議なものだ。

「テリン、おきる、まつ」
「えぇ。早く起きてほしいです。聞きたいことは、山ほどあるのですから」

匙を運ぶ手を止めて、ミルはテリンを見詰める。
聞きたい事は、俺も山ほどある。

『雲上殿で他の仲間と待ち合わせたって言ってたけど、他に何人の仲間がいるの？』
「『たくさん。でも、天鼓の泉まで辿りついたの、すくない。十人ほど』。後李の攻撃は、激しかったですから」
『そっか。辛い事聞いて、ごめんな。「ごめんなさい」。でも、どうしても聞きたい事があるんだ』

仲間を思って目を伏せるミルに、俺は問いかける。
残酷なのかもしれない。ミルの心を傷つけるかもしれない。でも、この事は早くに聞いておかなくてはいけないと思うんだ。
お椀を持つミルの手に、青い指輪が淡く光る。
大丈夫。あの指輪がある限り。俺の気持ちがミルに届いている限り。大丈夫。

『クマリは、俺をこの世界に呼び戻して何をしようとしてる？』

「ハルキ？」

『俺が、ダショーの存在がこの世界で鍵になるのは、判った。俺を連れ戻したのはクマリだっていうのも判った。じゃあ、俺は何をするんだ？　何を求められてる？　こんな事を聞くのは可笑しいかもしれないけど、俺がこの世界に来たのは、世界を救う立派な志があっての事じゃない』

茶色交じりの青い瞳が見開かれる。

『クマリの惨状は見た。後李帝国やエリドゥ法王国も、何となく判った。危険なのに俺を連れ戻したのはクマリなんだろ？　俺は、クマリに何を求められてる？』

俺は、ミルを傷つけるかもしれない。

でも、曖昧なままには出来ない。

ハルンツの記憶を強く思い出して、この世界での俺の立ち位置が見えてきた。謎も出てきた。

おぼろげな記憶では、危険を誘うかもしれない。全てを、早く知っておかなければ。

『俺は、ハルンツの魂を持つダショーは，深淵（しんえん）に囚われていたのを思い出したんだ』

『とらわれる……？』

『理由はまだ思い出せない。けど、俺の意思なんか関係なく深淵（しんえん）は俺を神殿に閉じ込めたがっていた』

『まさか』

『昼間の騒動で少しだけ思い出して、深淵が、聖エリドゥ王国が俺の味方じゃないのは判った。あいつらが俺を欲しがっても、俺は自分の意思で法王国に行く事はない。でも、クマリは何で俺を必要としてるんだ？　それが判らないと、俺は何も出来ない』

俯いたミルの瞳が、酷く不安で揺れていた。
でも、それは一瞬の事。
再び俺を見つめてきた茶色交じりの青い瞳は、力をみなぎらせていた。
強い光を、宿していた。

『クマリは、ダショー・ハルキ、いる。「そうです。クマリの民はダショーを求めて、僅かに残った力で後李帝国に挙兵しました。天鼓（てんこ）の泉を抑えていた軍に立ち向かいました。全ては、ダショーを我らクマリに取り込む為です」クマリのちから、おおきくする。だから、ダショーがほしかった』
『戦を、するのか？』

思わず口にした言葉に、ミルは薄桃色の唇を噛んで白くした。

『クマリの人、すこし。みんな、ばらばら。「十年前の戦で、クマリの民は二割ほどしか生き残らなかった。残された女子供も、多くは売り飛ばされて、もうどれだけの人が生き残っているかも判らない。国を失った民の行く末は、惨めです。せめて生き残った民をまとめたい。身を寄せ合えば、僅かに誇りを取り戻せるかもしれない。生き残る可能性を上げられるかもしれない。小さくとも、クマリここにありと宣言すれば、遠く異国で虐げられている同胞に勇気を与えられるかもしれない。小さな希望を掲げたい。あなたが、ハルキが希望なのです」。ダショーなら、クマリ、つくれる。きぼうだから。クマリのきぼう』
『でも、ダショーは聖エリドゥ法王国の大神官なんだろ？　王様なんだろ？』
『ダショー・ハルンツ、もともとはクマリの血族。エアシュティ

マスは、わたしのいえ、「クマリの守り人」大連（おおむらじ）の一つ昴家（すばる）のひと」

『

今度は、俺が目を見開く。

俺の中の記憶に、クマリがあるのか？　ミルの故郷が，あるのか？

28　揺らぐ記憶の炎（後書き）

という訳で。連載再開です。
でもその前に。

連載休止中に突然，前触れなく，前作を消してしまって申し訳ありませんでした。
3月に起きた『小説家になろう』でのR指定問題。
この『見下ろす～』はこれまでR指定的な「アハ～ン」な描写は露骨にありませんでした。個人的にも，描く予定はありません。
が，社会人が主人公な今作。正直，前作の『千夜を越えて』より踏み込んだ恋愛感情を描くのは確かです。予定に入ってます。そうなると，ですね。少しオマセさんな小学校の女の子には「恥ずかしい」「ドキドキ」な場面があるやもしれません。
小学生は対象外で描き始めた為，今回のR指定には慌てました。
正直，最近の少女マンガの方が露骨な描き方してるので「このぐらい大丈夫」と高をくくっていました。
が，改めて小学生でも読めるという事を意識した時，このまま野放しで公開していてはいけないと思いまして。子供を持つ，親の立場で作品を見詰めると念のためにR指定をかけるべきだと，そう思い直した次第です。

その為，連載休止中でしたが「一刻も早く子供の目から避けられるべき」と思い，予告なくR指定前の作品を削除してしまいました。
お気に入り登録をして下さった方々。突然，作品が行方不明になるという惨劇を起こしてしまい，申し訳ありませんでした。
コメントを書いて下さっていた御三名様。消えてしまった事，本当にすみません。消えてしまいましたが，大切に脳内にしまってあります（涙）。ゴメンなさい。

今回の件は，私の思慮の浅さで起きた事です。この場ですが，深く謝罪します。
すみませんでした。

休止中に読んでくださった方，新たにお気に入りに登録していただいた方，ありがとうございます。こんな騒ぎを起こした私ですが，読んでくだされば幸いです。

29　蜘蛛の糸

パチパチと、薪が燃える音が間をつないだ。
ダショー・ハルンツは、俺の中の最初の頃の記憶だ。
昼の雲上殿（うんじょうでん）の騒動で、僅かに蘇った記憶を辿ってみる。鮮明に浮かぶあの町並みはクマリの物だろうか。確かに、この宿場の建物と似通っている。

「ダショーは、私達クマリそのもの。世界の秩序を唄い整える存在は、クマリの存在と重なります。その存在は、過去の栄光思わせます。深淵（しんえん）の大神官となった歴代のダショーも、クマリの民と名乗っていました。クマリの誇りでした」

難しくて、半分も判らない。それでも、クマリにとってダショーの存在が重要なのはわかった。希望なのは、よく判った。
お椀を置いて、ミルは少し座りなおす。そして、額を板間につけるほど深く頭を下げた。

『ずるい、いってもいい。ハルキがわたし、すきといった。それ、しって、いうのはずるい。おこっていい。「どうぞ罵ってください。軽蔑して下さい。ハルキが私の事を好きと思っている事すら、私は利用したい。どうしても、クマリの民を考えてしまう。私を卑怯と罵倒しても構わない。……嫌いになってもいい」。きらい、それでも、いい。どうか、どうか、クマリのひとたち、たすけてほしい。きぼう、なってほしい！　もっと、はやく、いわなくちゃ、いけない。でも、でも』
『怖かったから、聞けなかったんだ。でも、聞けてよかった』

卑怯じゃない。軽蔑なんか、しない。

それは、俺だから。

『俺も、ずるいよ。俺は、この世界の事なんか、考えてない』

ミルの顔が、跳ね上がる。その途端，大きな瞳から涙が幾筋も流れ落ちていく。

『この世界の事は、まだ判らない。世界のパワーバランスなんて、知ったことじゃない。でも、俺はミルの事が好きだから、ここにいる。ミルのそばにいたいから、コッチに来たんだから』

ミルが望むなら、クマリの希望になるよ。誇りにでも、なるよ。
ミルが望むなら、なんだってやるよ。
俺にとって、大事なのはミルなんだ。
ミルにとって、俺は大事？
クマリという国と俺、どっちが大事なんて無意味な事はしないけど。無意味な比較はしないけど。愛してる事は、比べられないけど。キミが好きだから思わずにはいられない。
俺が大事と，言ってくれ。こんな自分勝手な俺でも，好きだと言ってくれ。

『ミルの望むように、俺はクマリの希望になる。なんでもする。だから、俺のそばにいて。そしてら、俺はミルの望むままになるから』

「ハルキ、ハルキ、私は貴方を利用しようとし」

『俺は、ミルの願いを叶える。ミルの気持ちを知って、ミルを縛る。だから、俺を都合よく使っていいんだ。だから、俺を好きでいてほしい。ミルは、俺の事好きでいて欲しい。俺は、すごく残酷な事してる。それでいい？』

「違う……それは、私の言葉です。残酷なのは、私の方なのに…

…」

キミのそばに、いさせてくれるのなら。
俺を道具として扱えばいい。自分を卑下しないで欲しい。その心を、傷つけないで欲しい。
ミルの為なら、俺は何でもするよ。何だって出来るんだよ。そう。俺は何でも出来る。どんなに残酷な事も。
俺は，キミが思うほど綺麗じゃない。優しくない。聖人君主じゃ，ないんだよ。
だから，俺に気を使う事はないんだ。キミは，いつだって清らな高みにいて欲しいんだ。
だから。

「だから、なく、ない。『ミル、泣かないで。笑って』」
「ハルキは、優しすぎます。優しすぎて、私、どうすればいいか判らないのです」
「わからない？　『じゃあ、笑って。ミル、笑ってよ』」

ミルの気持ちが零れていく。
零れる涙が綺麗すぎて、もったいなくて、気づいたらミルの頬を流れる涙に唇をつけて舐めていた。
口の中に染みる涙は、少ししょっぱくて。
ミルが驚いたまま、固まっている。
僅かに開いた唇が、薄桃色の唇が、とても美しくて。
引き寄せられるように、唇を合わせていた。
薄い皮膚を通じて、体温を感じる。
温かく、しょっぱい、キミの心。

暗闇は苦手だ。
常夜灯もなく、月明かりも届かない闇の中、目が覚めてしまった。
ようやく屋根の下で眠れてカビ臭いとはいえ、布団の中で眠れるのに。
寝返りを打つと、ミルの寝顔が見える。思わず、口元が緩んでしまう。唇を、軽く触る。
初めて、キスしてしまった。
とても柔らかなキスの後、見詰め合っている間にミルの顔は真っ赤になってしまった。
うろたえた視線が宙を彷徨う様も、頬に両手を当てる様も、全てが愛らしくて。
俺も初めてだったけど、ミルも初めてだったんだなと、そう思ったら嬉しくて。
も一度しようと顔を近づけたら、真っ赤な顔で「片付けをする」とお椀を持ってシンハの眠る土間へ降りてしまった。
まぁ、いいや。
これから少しづつ、進めていこう。大好きと、たくさん伝えよう。愛していると、側に寄り添っていこう。
その為に、ここに来たのだから。
闇になれた目で、ミルの寝顔を見つめた。このまま、もう一度眠りに落ちるまで見つめていよう。
これで、闇は怖くない。ついでに、その手を握ろう。
そう思って、布団から手を出して気づく。
指の間に、何かを挟んでいる微かな感触。糸くず、だろうか。何せ、十年も使われていない布団だし。
手探りで指に絡まった糸を摘む。何気なく、目の前に持ってきて目を凝らした。
淡く、光るソレ。淡く微かに、輝いた。
青い、糸。

『糸？』

思わず、呟いた。

その途端、布団の中で無数の何かが体をまさぐりだす。細かい何かが、無数の何かが、俺の体に絡み付いてくる。

恐怖で体が強張ったまま、背筋を駆け上がる悪寒に耐えながら、落ち着けと何度も頭の中で叫ぶ。

どうせ、虫だ。十年間の間に布団に巣くった虫だ。

そう固まる俺の目の前に、一匹の蜘蛛が横切る。

青い糸を尻から吐き出しながら、横切っていく。

無数の糸が、見る間に体を包んでいく。俺だけを。目の前のミルには一匹も近づかないで、俺だけに糸を絡ませていく。

嫌だ……嫌だ……蜘蛛は、その糸は嫌だ……その糸で俺を縛るな……吾を束縛するな！

『い、い、いっ』

恐怖で声が出ない。蜘蛛を払えない。いつの間にか、布団からあふれ出した蜘蛛が吐き出した糸に、繭のように包まれようとしていた。

嫌だ！　誰か、ミル、助けてくれ！

「おいらのハルルンに手ぇ出すんじゃねぇ！」

獣の咆哮と共に、鋭い一喝が空気を震わした。その途端、蜘蛛が消えた。

体を覆うところだった青い糸も、体中を這い回っていた無数の蜘蛛も、消えていた。

「あぶねートコだったな。安心しな。おいらが側にいてやるよ」
先の声が柔らかな声色になって耳元でささやく。
誰？
「大丈夫だよ。クマリの姫様も守ってやるからさ」
声はそう囁くと、ざらついて生暖かい何かがベロリと頬を舐めた。
「だから、明日はボレボレの歌をたくさん歌えよ」
指先に、ふわふわの毛が触れた。視界を遮るように、枕元に大きな影が座り込む。
あぁ、そこに座ったらミルの顔が見れないじゃないか。
「おっ、命の恩人より恋人を優先するのかよっ」
当たり前だろ。ミルの寝顔、見れなくなる……。
もう大丈夫。そう思った途端に、意識が遠くへ飛んでいく。
誰かのため息を聞きながら、俺は不満を感じながら気を失った。
今のは、何だったんだろう。

思わず上げた叫び声に、両岸の木立から小鳥が飛び立つ。
のどかな昼前の陽の下で、俺は手の中の泡に感動していた。
桃太郎のおばあちゃんの如く、川で洗濯をしにきた俺は異世界を満喫している。
ミルに渡された、木のタライと大量の洗濯モノの中にあった木の

皮を入れた小さな布袋。
使用方法が判らずにいたら、態度のでかいシンハが「水に濡らして揉め」と教えてくれた。
朝起きてから始終ついてきて困っていたが、シンハがようやく役に立った。

『すげっ。これ、面白いよ』
「能天気だなぁ。そんなに面白いか？」
『俺のいた世界は洗濯なんて機械がやってくれたからね。木の皮から泡が出るなんて考えられなかったし』
「機械が洗濯？　なんじゃそりゃ。とにかく、包泡（ほうほう）の樹皮なんて常識だから驚くな。早くボレボレの歌を唄ってくれ」
『何で唄わなきゃいけないんだ』
「約束したんじゃボケェ！」

今日は洗濯掃除の日となった。
雲上殿（うんじょうでん）から逃げてきたが、怪我をしたテリンが動けるまではあの宿に留まる事にした。
そうなると、居住環境を整える事が先決。今日の目標は屋内のかび臭さを取って、風呂を使えるようにする事らしい。
張り切ったミルは、朝から宿の中にあった布という布や畳、ゴザを外に運び出して日光消毒している。
俺も手伝おうとしたのだが、顔を合わせるたびにミルは赤面してしまった。
昨晩のキスは、刺激が強かったのだろうか。でも、脳みそまで溶けてるんじゃないかという程に、ミルは顔を赤らめていた。
可愛いんだけど、可哀そう。
出来れば、ミルのそばにいたいんだけど。しかたない。
口の悪い大型肉食獣と一緒に小川で洗濯だ。ひときわ大きな岩の上で、真っ白く泡立てたタライの中に持ってきた着物を突っ込んで

かき回す。

「見てらんねぇな。そんなんじゃ綺麗になんねぇよ！」

『洗濯機はクルクル回してた』

「信じられねぇ！　いい歳なのに洗濯も出来ねぇのかよ！」

『したことないな。シンハ、出来るのか？』

「こうやるんじゃボケェ！」

トロイんじゃあ！　脳ミソ勝ち割ってかき回したろか、オラァア！

台詞は物騒だが、シンハは四本の足を器用にタライに突っ込みタップダンスを踊るように飛び跳ねる。

タライからシャボン玉が飛んで、白い泡が見る間に薄汚れていった。

衝撃の映像、洗濯をする肉食獣。

シンハは、口は悪いが面倒見がいい。そして、単純。威厳ある巨体を泡だらけにして洗濯に夢中のシンハは、可愛らしいものだ。

スラックスを膝上まで折りあげて川に入り、綺麗な水をくみ上げる。このまま着ている服も洗濯してしまいたい。このシャツ四日目で、かなりニオイがきつくなってきた。

流れる水に頭を突っ込み、顔を洗う。ヒゲが伸びてザラリと手を擦っていく感触に息を吐き出す。二日三日ヒゲを剃らなくても平気な性質だが、さすがに伸びてきたらしい。

風呂に入れるのなら、新しい服と髭剃りをしたい。服……この世界だと、着物みたいなアレだろうか。

ふとミルが着ていた侍モドキの格好を思い出していると、シンハが叫ぶ。ようやく気づいたか。

「し、しまった！　つい本気になってしまった！」

『次はすすぎを頼む』

「ハルルンの仕事だろうが！」

『洗濯したことない』
「じゃあ、洗濯するなんて引き受けるなよ……。いいのか？　姫さん、夜の蜘蛛使いと一緒に留守番させててさ」
『蜘蛛使い？』
その言葉に、昨晩の悪夢を思い出して凍りつく。
あれは、夢じゃないのか？　あんな恐ろしい事、夢じゃないのか？
川の中で動けなくなった俺を見下し、前足についた泡を払いながらシンハは鼻を鳴らした。
「やっぱり寝ぼけてたか。蜘蛛だらけで糸に飲み込まれそうになったのを、俺の一喝で術を解いたんだろうが。あのテリンって奴、気ぃつけな」
『テリンが、あの蜘蛛の糸を出したのか？』
だって、テリンはクマリの民だろ？　ミルの仲間なんだろ？
「あいつは、危険だぜ」
なんで、テリンが蜘蛛の糸の呪術を使うんだ。あれは、深淵（しんえん）の神殿がダショーを束縛するための呪術だ。
なんで、クマリの民テリンが俺を束縛しようとしているんだ。

30　敵か味方か

「なぁ、ボレボレの歌」
『そんな気分じゃないよ』
「昨日助けてやった時に約束したじゃねぇかっ」
『覚えてない』
「約束したんじゃボケェ」

水を含んだ洗濯物を積み上げたタライは、ひどく重い。
フラフラと歩きながら、シンハの催促に適当に答える。シンハが俺の脚を尻尾で軽く叩くと、まだ濡れたスラックスから水しぶきがはねる。
空高く昇った陽の位置と腹の空き具合からして、もうすぐ昼だろうか。
俺の記憶は、酷く曖昧だ。
ハルンツの記憶が僅かに蘇った。けど多分、生前に印象深かった場面や感情、日常で見ていた光景を思い出したに過ぎない。
蜘蛛使いが怖い記憶があっても、蜘蛛の糸が怖くても，具体的な訳が判らない。何で束縛されなくちゃいけないのか。その理由が思い出せない。
その時の感情も、凍りつき気絶して楽になりたいような、深淵（しんえん）で俺の魂に対して行われていた壮絶な恐怖の断片しかない。
一体、俺の過去世に何があったんだろう。深淵（しんえん）の神殿で、何が起こっていたんだろう。
重要なポイントだと思うのに、思い出そうとすると恐怖が邪魔をする。
しかし……俺の蜘蛛嫌い、まさか過去世が原因だったとは思ってもいなかった。

『何がどうなってるんだかな……』

「ボレボレー！　ボレボレを唄ってくれよぉ」

テリンは、何者なんだろう。ミルの知り合いなのは間違いないのだけれども、どういう人物なんだろう。深淵（しんえん）と関係があるんだろうか？

湧き出す疑問。思い出せないもどかしさ。深いため息をついていると、足が軽く叩かれる。

ボレロ禁断症状でも出てきているのか、シンハは尻尾を足に打ち付けていた。まったく。

しょうがない。唄ってやるか。

もったいぶって思った時、慌しい足音に気づく。思わずシンハを見ると、涙ぐんだ緑の瞳で俺を凝視しているままだ。相手は危険ではないのか。

「ハルキ、ハルキ！」

木陰から駆けてきたのはミルだった。

掃除の途中だったのだろう。汚れた雑巾を握り締めて全速力で駆けてきた。

「目覚めました！　テリンが起きました！　今すぐ癒しの唄を唄ってください！『うた、うたって！　はやくきて！』」

テリンがどうして俺を捕らえようとしたのか。それは判らないけど。

助ける事が危険につながるかもしれないけれど。

ミルがそれほど慌てる程に大切に思っている人物ならば。

俺はタライをその場に置いて、ミルに向かって全速力で駆け出した。

「おいっ。こんな所にタライ置いてどーすんだよっ。つーっか、ボレボレ唄えってんだ！　このボケェ！」

シンハの哀しみの絶叫を背中で聞き流し、サンダルを踏みしめて走る。

周辺で牧場で寝そべる牛のようにまどろむ玉獣達が、何事かと顔を上げていく。その中を全速疾走。

開け放たれた板間の窓から、サンダルを跳ね飛ばして部屋に飛び込む。

ミルは、土間へ入って、ブーツを脱ぐのに手間取ってている。その間に、薄い布団の上で横になっているテリンの側へ走り寄る。

乱暴な俺の足音に気づいたのだろう。テリンの目がうっすらと開いていく。

ミルと同じ茶色交じりの青い瞳には、戸惑いが浮かんでいた。でも、その戸惑いという影を知性の光で隠した。

まるで、じいちゃんみたいだ。

まだ中年の、そう、生きていたら俺の父親ぐらいの年齢に見えるテリンに対し、俺は死んだじいちゃんを思い出していた。

「うぅ……あぁ……」

「だいじょうぶ。だいじょうぶ。はなす、ない。『ミル！　水を用意してあげて！』」

「はい！　」

俺の姿を確認した途端、起き上がろうとするテリンの上半身を押さえつける。

全身打撲のアザだらけ、所々に浅く深く傷もある体のどこに、起き上がる力があるんだろう。

「だいじょうぶ。『今から、唄いますから。だから、大きく息を吸って。落ち着いて下さい。俺は、貴方を助けますから』」

ミルの大事な仲間なのなら。
俺自身の息も整え、意識をテリンの中へと向ける。
俺を捕らえようとしたとしても。ミルが安心するのなら。

それからテリンが目覚めたのは、日が暮れてからだった。
植物性らしい油を入れたカンテラ状の明かりを灯し、囲炉裏の鍋から雑炊の甘い香りが漂った頃に、テリンは目を覚ました。
そして俺と目が合った途端、唐突に布団から飛び起きて板間の端まで走る。
時代劇の後半山場を生で見ている気分だ。
事件を解決しようとしている人物が、じつは身を隠した高貴な人物だったという、あのお決まりパターン。俺は貧乏旗本の三男坊でも、全国縦断の旅の最中の副将軍でもないんだけどな。

「テリン。そんなに遠くては会話が出来ませんよ。本調子ではないのですから、横になりなさい」
「ダショー様を前に横になるなど！　そ、そんな失礼な事はっ」
「ハルキ様の世界では、身分が無くそのような平伏に慣れておりません。却って恐縮されますよ」
「身分がない？！」
「ハルキ様は、お優しい方です。安心なさい」

ミルとテリンの高速異世界語の会話が、まだ聞き取れにくい。
板間の端で頭を床にくっつけて土下座しているテリンの様子に、

思わずあの光景を思い出して呟く。

『そういえばミルは唄の後で起きた時は、同じ様子で走り出してガラスに顔面強打したんだよなぁ』

『ダショー、だいじ。だからとおくはなれて、おじぎするからはしった。ガラス、しらなかった。これ以上、いわない』

簡潔に、そして強引な終了宣言。

思わずミルの顔を振り返ると、凍りついた無表情の顔の中、ギラギラと輝く茶色交じりの青い瞳が睨みつけた。

よほどの失態なんだろうか。消し去りたい過去の失敗なんだろうか。俺は、本能で首を激しく縦に振っていた。

ミルは、本気を出すととてつもなく怖い。ここ数日の緊迫した場面を思い出せば明らかだ。

俺の従順な姿勢を確認して、ミルは頭を下げたままのテリンに寄り添い上着を肩にかけた。

『テリン、大連（おおむらじ）のひとつ　室家（はつゑ）の南分家のうまれ。わたしのせんせい。うたも、けんも、テリンにおしえてもらった』

『ミルの先生？！　』

「お初に御目にかかります。室南（はつゑ）分家のテリンと申します。こちらへのご帰還、真に有り難く……われらの姫宮にも寛大なお心を砕いて頂き恐縮の極み。その上、この老いぼれの命を助けていただいた事、一生の大恩。このテリン、ダショー様に一生御仕えいたしまする」

何だか、話す言葉に酷く癖があってよく判らない。ここ数日水分を取っていなかったのだろう。掠れて弱弱しい声だったが、低く落ち着いた声色だ。

姿勢を正して、正座でペコリとお辞儀をした。

ミルの先生なら、大事な人だ。

『関口……「せきぐち　はるき　いう」。関口晴貴と申します。まだ記憶が曖昧なのであまり役には立ちませんが、よろしくお願いします』

「ダショー様は、あちらの世界で関口晴貴と名乗っていました。ハルキ様と、お呼びしています。あちらでは子供達に文学や器楽を教えていらっしゃいました。テリンと、少し似ていますよ」

「何と……では、本当に姫宮様は異世界に行かれたのですな！」

「ハルキ様とご一緒なのですから当然ですよ。異世界で何も判らない私に、言葉も生活の仕方も教えてくださいました。あちらでは半年ほど経っていましたが……私が異世界へ行ってから、どれだけの時間が経っているのですか？」

「半年も異世界でお過ごしになったと？　恥ずかしながら拙者、深淵の者どもに捕らえられてから時間が曖昧ですが……恐らく七日ほどかと」

「そう……。やはりそれぐらいですか。では、他の者達の行方も判りませんか」

「申し訳ござらぬ」

二人の間に、深い哀しみの空気が流れる。

他に、どれだけの仲間がいたのだろう。天鼓の泉で見た後李帝国の空飛ぶ軍艦群に、どれだけの人数で挑んだのだろう。玉獣がどれだけ強いか知らないが、クマリが火薬を使わないのなら鎌倉武士とモンゴル帝国の元寇と大差ないんじゃないだろうか。ミルと最初に出会った時、肩に毒矢を受けていた状態だった。身に着けていた大小の刀と大黒丸（だいこくまる）。あれで、鋼の軍艦に立ち向かったのなら勝ち目などないだろう。

惨敗、か。

『とにかく、ゆっくり休もう。テリンの怪我は治ったけど、まだ体力が戻ってないし。その間に、他の人たちと連絡を取ろう。もう一度、態勢を整えよう』

「そう……そうですね」

「姫宮様、ハルキ様は何と」

「テリンの体力を回復させようと。ゆっくり休み、クマリの態勢を整えましょうと、そう仰っているのです」

「おぉ。なんと……ではハルキ様は、ダショー様はクマリの旗頭となって下さるのですな」

テリンは、決して俺と視線を合わせようとしない。

それは、ダショーという存在に恐れを抱いているからか。敬意を表しているのか。

それとも。怪我を癒したばかりの胸の中に、深淵への思いがあるからか。俺への罪悪感があるからか。

蜘蛛使い。深淵の束縛を図る者。テリン、あんたは何を考えてるんだ。

部屋の端でミルとテリンが高速で異世界語で会話するのを見つめながら、ふとミルから離れた距離を思う。

ミルの師匠というテリン。ミルは大事な仲間なんだろう。けど、俺にとっては不安そのものだ。

その正体も。その存在も。俺を縛る敵なのか。ミルを奪う障害か。

「しかし、ハルキ様はまだ言葉が違いますな。まさに異世界で生まれ育った証拠ですが」

「しかたありません。でも、今日で三日目ですが聞く耳は大分出来ていますよ。私は一月はかかったのですが」

「そうでしょうな。姫宮様は深淵言葉を覚えるのすら、大分遅かったですからな」

「それは秘密ですっ。テリンしか知らない事にしておいて下さい

よ」

楽しそうな二人の会話に深淵（しんえん）の単語を聞きつけて、思わず反応する。

途端に、ミルが真っ赤な顔になっていく。

「おそかった……？　深淵（しんえん）このは？　それは何？」

『かんけいないっ。ないしょ、ひみつ、ひみつです！』

「大丈夫ですよ。テリンは、姫宮様が七つになっても布団を濡らしていたなど言いませぬ」

「テ、テリン！」

『七つ、濡らす？　まさかミル、七つになってもおねしょ』

『ないしょですー！　「これ以上話さないで！」ひみつですー！』

耳まで真っ赤で湯気が出そうなミルが、両手を伸ばして俺を耳を塞ぎ、そんなドタバタな様を見たテリンが笑い出し咳き込む。

慌てて茶碗を差し出す俺に、テリンは笑いすぎて涙を浮かべた目を向けた。

深い知性を見せていた目が茶目っ気たっぷりに笑いかける。

この人は一体、何者なんだろう。

敵か、味方か。

３０　敵か味方か（後書き）

31　それは秘密の攻防戦

焼け石を入れると、猛烈な水蒸気が風呂場に立ち込める。

「もう少し入れましょうか。ハルキ、熱いお湯が好みでしたね」

『すごいなぁ。ガスも電気もないのに風呂に入れるのかぁ』

「ハルキの家とは、かなり違うので勝手が判らないと思いますが、大丈夫ですか？」

『大丈夫、かな。だいぶ昭和のニオイがするけど』

改めて風呂場を見て、考え込む。

巨大な木のタライのような湯船。大人が一人は入れそうだ。

そこには、生温かい湯がなみなみと注がれていた。寂れても宿場だけある。遠くの源泉から管を使い引き込む仕組みがあったらしい。それを一日で直したのだから、ミルの風呂に賭ける情熱が感じられる。

だから俺が一番風呂をもらっていいものか戸惑ったが、ミルはまだテリンと話があるようだ。

有り難くいただこう。

「着替えは、こちらに用意しておきました。単衣ですから着れると思いますが、大丈夫ですか？」

『うん。大丈夫。「だいじょうぶ」。髭剃りとか、あるかな』

「こちらに。泡は、この包泡と青涼草の布袋を泡立てて使ってください。体もこれで。後は」

手際よく、隣の脱衣所に置かれた籐の籠の中身を説明していく。

湯上りの着物は、浴衣のようだ。旅館で着たことあるから、まぁ、大丈夫だろう。髭剃りは、床屋で使う本格的な剃刀だったが何とか

なる。
お湯もいい具合に熱くなってきたのだろう。ランタンに照らされた風呂場が湯気に包まれていき、山奥の温泉宿に来たような雰囲気だ。

「何か困った事がありましたら、声をかけてくださいね。あら、シンハも入るの？」

脱衣所から、不機嫌な緑の瞳が俺を睨んでいる。
こいつ、まだ機嫌が悪いらしい。
昼間、テリンが目覚めた時に俺が洗濯物を放棄して帰ってしまった。
ボレロの唄を聴きそびれ、結果的に洗濯をさせられ、重たいタライを引きずって夕方に帰ってきたシンハは、俺を睨むだけで喋る事もない。
あれだけ饒舌だった奴が喋らないのは、気味が悪い。
そりゃ、悪い事したなとは思う。でも、しかたなかったし。そこまで怒らなくてもいいのにと、思うわけで。
のっそりと風呂場に入ってざら板に座るシンハに、ミルは笑いかけた。

「シンハは本当にハルキが好きなのね。二人でゆっくり入って下さいね」
『こ、こいつも一緒に?!』

思わず非難の声を上げると、ミルは当然と頷いた。

『だって、ミルの玉獣の雷光は影に入ったきり出てこないじゃないか。こいつ厚かましい』
「雷光は、強いシンハがいるから影に入っているのです。だって、

雷光よりシンハの方が強いんですもの。それに、「ハルキ、きけんある。だから、シンハ、かげにならない。そばにいる。そこは、ありがとうです。そんなにいや、しない』」

自分の味方だと判るんだろう。シンハは、ミルの太ももに頬を擦り付ける。

ゆ、許せん。

大人気なく嫉妬の視線を向けると、シンハは鼻で笑う。

怒りのあまり言葉を失ううちに、ミルはシンハの頭を撫でて「ごゆっくり」と、出て行ってしまった。

「あの姫さんはいい子だな。ハルルンとはえらい違いだぜ」

『そりゃ悪かったな』

ペットの小型犬をわが子同然で育てる大石先生が、風呂も抱っこで入れてやってると話していたな。

ふと職場の同僚の話を思い出して、深くため息をついてシャツを脱ぐ。ベルトを外す。服を脱いでいく。

ペットを飼った経験がない俺からすれば、異次元の話と思っていたが。まさか本当に異世界へ行ってソレをやる羽目になろうとは。しかも、相手はライオン並みの大型獣だ。空飛ぶ獣だ。

人生、何があるかわからないもんだ。

布袋を泡立て、適当にシンハに撫で付けてやる。俺は俺で頭っからつま先まで、入念に洗う。

おっかなびっくりだったが、ヒゲも剃る。うん、さっぱりだ。

木桶で湯を汲んで、床に落ちた泡で遊んでいるシンハにも不意打ちでかけてやる。泡が流れてしまい盛大に文句を言ってきたが、気にしない気にしない。

俺も頭から湯を浴び、清涼感に大満足。泡の布袋に入れた香草の香りだろうか。爽やかな香りが全身から漂い心地よい。

さて、濡れた顔を拭おう。
濡れた前髪をかき上げ、引き戸を開ける。
確か脱衣所の籐籠の中に手ぬぐいがあったはずだ。
手触りの良い布を探し当て、引っ張り出す。
ちょうどフェイスタオルほど幅の白い布で顔を拭き、髪を軽く拭き、勢いよくタライ湯船へ身を浸す。
あぁ、気持ちいい。極楽極楽。
思わず声を出して幸せに浸っていると、シンハが緑の目を見開いて俺を見ている。

「ハルルンは異世界の人間だから、少々変わっていると思ってたけどさぁ」
『何だよ』
「ハルルンの国では、下帯で顔を拭く風習があるのか？」

俺は、シンハの言葉の意味が判らずに固まる。
いや、意味は判った。けど、思考回路が焼き切れる寸前になった。

「この世界じゃあ，人間が股間に巻きつけてる布だぜ？　おいらは、それで顔は拭きたくないけどさ」

下帯。下帯。それって、言い換えると、ふんどし？　あの、尻が見える、古来からの伝統下着の，アレか？
俺は、ゆっくりと手の中にある布を観察した。
何度も洗いこまれた，柔らかい繊維の布。厚くもなく，薄すぎる事もなく，使い勝手のよさそな，何の変哲もない布。
立ち上がり、布を湯につけないよう、慎重に広げていく。
俺の身長の倍程の，長い布。これだけの長さの布を，着替えのセットに入れておく理由を考える。
バスタオルのように体を拭く為？

否。答えは明白だ。

『ーーーーーっ！』

俺、顔拭いた。髪も拭いた。

声にならない悲鳴。なんてことだ。なんたることだ。

さっきまでの爽快感が、一気に生理的嫌悪感に変わる。

「いやぁ。驚いたなぁ。下帯も知らねぇのかぁ」

『知ってたら早く教えてくれっ』

慌てて湯船から飛び出し，下帯を放り出して顔を何度もすすぐ。

頭ももう一度洗いなおす。

この宿の残っていた古着でも，綺麗なものを用意してくれたと思う。綺麗に洗いなおしてくれたものだろう。ミルは，そういう心配りをする子だ。

あの下帯は決して汚いものではないだろう。そう判っていても，清めるような気持ち。

俺の慌てぶりが面白いのか，シンハは床を叩くように尻尾を揺らして水しぶきを上げている。

「そうかそうか。じゃあ，下帯の締め方なんか知らないよなぁ」

『知る訳ないだろっ』

「教えてやろうか？」

思わず，振り返る。

雫の向こうに見えるシンハが，輝いて見える。

生意気な大型獣は，緑の瞳をキラキラさせて言い放った。

「まず一つ。ボレボレの唄，唄ってくれること」

『……』

思わず黙り込んだ俺に，千切れんばかりに尻尾を振って要求を続ける。

「も一つ。おいらに対する今までの扱いを変えてくれるなら，下帯の締め方を教えてやるよ」

『今までの扱いって何さ』

「モノを頼む時はお願いします。間違ったらごめんなさい。これ常識だろ。獣扱いすんなってことだ」

獣を獣扱いして，何が悪い。

黙り込んだ俺に，鼻の頭に皺を寄せて牙を見せた。まるで凶悪な笑顔。

「別に教えなくてもいいんだけどな。そしたら，ハルルンは下帯つけないままで過ごす事になるんだぜ。それとも，さっきの汚れた異世界の下帯，また穿くのか？」

『よ，汚れた下着なんか穿くか！』

思わず言い返してしまい，唇をかみ締めた。

そうだ。争うまでもない。

この長い布を股間に巻きつける術を俺は知らないのだ。

プライドを取って拒否すれば，俺はこの世界で下着を身に着けずに生活する事になる

かといって，穢れないミルに下帯の装着方法の教えを請う事も出来ず。まだ面識のないテリンにお願いするのも，恥ずかしすぎる。

たかが下着。されど下帯。

激情を押し殺し，素っ裸な俺は流し場に突っ伏して肩を震わせた。

敗北だ。

「随分と仲が良くなりましたね」
『……色々あってね』

縁側で延々と唄を唄う俺に，ミルは盆に水差しに湯飲みを持ってきた。
湯上りに星を見上げて，ボレロとトルコ行進曲，桃太郎に浦島太郎と金太郎の唄までオンパレード。
深い夜の森の暗闇から，玉獣達（ぎょくじゅう）のあげる喜びの咆哮が夜空へ消えていく。

「ほら，あの唄も聴きたいです。車の中でよく流していた曲」
『あぁ，昔の映画のサントラ集のかな』

ミルの肌から漂う甘い香りに，少しうっとりする。
足元でまどろんでいたシンハが，尻尾で俺を打つが気にならない。
浴衣のミルは，とても綺麗だ。
差し出された水を一口飲んで，俺は往年の名曲を口ずさむ。
異世界の月と超新星を見上げながらの宴は，まだまだ続きそうだ。

31　それは秘密の攻防戦（後書き）

え，えと……お馬鹿なお話ですみません（汗）。
私の密かな疑問だった『異世界で異文化に戸惑う主人公が，下着を身につけるという恥ずかしい問題をどうやって解決しているんだろう』というお話です。

だって，絶対に一悶着起こしてる問題だと思うんですが（笑）。
人に聞くに聞きにくすぎる問題ですもん。

ちなみに……下帯で顔を拭いてしまうというのは，私の実体験です（爆）。
お願いですー洗面所の横に，鏡の横に綺麗に伸ばして干しておかないで下さい（涙）。いや，本当に，凄い体験してるなぁ，私（失笑）。役に立てたけどさ。

基本は毎週　水曜日に更新していく予定です。よろしくお願いします。

32　忘れてしまった大切な事

早朝の涼しさは消え，立っているだけで汗が噴出す暑さになってきた。

田んぼなのだろうか。腰丈の植物が整然と水が張られた農地に植えられている。濃い緑の葉が，僅かな風にそよぎ波をつくっている。

あぁ。風が吹き出したのなら，涼みたいな。

思わずきつく締めた顎紐に手をやると，やんわりとミルに止められる。

「ここから先，決して笠を取らないで下さい」

「きびしいね」

「言葉もかなり喋れるようになりましたが，まだ日本語の訛りがあるので喋らない方が良いですね。言葉に不慣れな者は，隣の大陸からの移民ぐらいですから」

隣の大陸からの移民。

ミルの言葉に興味をそそられたが，向かいから農具らしきものを担いだ集団が近づいたのに気づいて目線を地面に落とす。

着ている着物は俺達の法衣より薄く粗末で土に汚れていた。農民だろうか。

「こりゃ雲水様，暑い中お疲れ様でございます」

「ご苦労様です」

軽く笠の端を抑えて会釈するミルとテリンの仕草を真似すると，彼らはひざを折ってお辞儀をしていった。

「雲水（うんすい）は深淵（しんえん）の神官なんです。神殿を離れて修行中という身分で

すが，実際は神殿でも勢力争いに巻き込まれて地方に飛ばされたり，自分から避難してきた者もいます。とりあえず，学問を修めていますから尊敬の対象なんです」

『世俗から離れた場所のはずなのに勢力争い？　「ここにも，嫌なけんか，あるんだ」』

「それでも，深淵（しんえん）の信仰が民衆に支持されているのは雲水（うんすい）達の働きが大きいですな。子供達に読み書きや勘定，人々に簡単な医術を施すのを仕事にしとります」

「そうですか」

社会的な地位，道徳心，様々なものが存在しているようだ。文化的な成熟度も高そうだ。

テリンの解説に頷き，農民達の後姿を見送る。

今日は，これから雲水（うんすい）を隠れ蓑にして人里へ。

この世界に来てから半月ほど。テリンの傷の癒えた今日，ようやく動き出した俺達。植物の繊維で編んだサンダルのようなものを履き，勾玉を下げた杖を手にして笠を深く被った俺達の姿は，まるでお遍路さんにも似ている。ミルが縫い上げた袈裟（けさ）に似たニセモノの法衣に身を包み，背の籠には山菜や薬草香草を摘んできている。人里離れて修行している雲水（うんすい）が，ちょいと買い物に出かけているように見えるだろうか。

人間が暮らすには，それなりの金銭が必要となる。それにクマリの人々の動向も気になる。何時までも影に隠れても進展はない。

朝早くに旅籠を発ち，街道からやや離れた森まで玉獣（ぎょくじゅう）で飛んできて街を目指している。

この異世界に来てから初めて，人が生活する集落が見れる。不謹慎だが，俺はその事に少し興奮していた。

どんな町並みだろう。旅籠が江戸時代みたいだったから，やっぱりお江戸な感じだろうか。

人々は，どんな格好なんだろう。どれだけの人がいるんだろう。

その営みから聞こえる会話は，どんなものだろう。
俺は，何を感じるんだろう。何が見れるんだろう。

「あまりキョロキョロされないで下さいね」

そんな俺の心の内を読んだようなミルの言葉に，思わず蛙の鳴き声のような音を出してしまう。

「だめ？　」
「駄目ですよ。雲水（うんすい）に変装ですからね，落ち着いた風情を出してください。それに，目元を見られては困りますから」
「あぁ。顔，みられる。よくないか」
「そうではござらぬ」

テリンの低く落ち着いた声が諭すように空気を震わした。

「ハルキ様の目は浄眼（じょうがん）ですからな。その深い青色を見られてはなりませぬ」
「じょうがん？　この世界には，青はめずらしい？　」

思わず目元を押さえると，ミルがテリンから引き継ぐように解説を始める。
テリンは，微笑んでミルを促す。
愛弟子を見るというより，出来のよい自慢の娘を見詰めるような仕草だ。

「いえ。単に色が青いなら存在します。この大陸の西北，メロゥイン公国には青や紫も珍しくありません。エリドゥ法王国の民にも多いです。ただ共生者の力が強い者の瞳には，青混じりの色が多いのです。よって，青色を持つ者は強い呪術が扱えると考えるのが普

通なのです」
「共生者（きょうせいしゃ）……あぁ，この力か」
唄で，精霊に力を借りて不可思議な現象を起こせる，この能力。
こちらの世界では，不思議だった俺の能力に名前がついていた。
その事に素直に驚き，納得した。なるほど俺がいた世界か，と。

「ダショーが歴代，美しい青の瞳だった事はこの世界の常識です。
もちろん先に申し上げたとおり，共生者（きょうせいしゃ）でなくとも青い瞳を持つ者もいて直ぐにダショーと思われる事はないですが，とても注目されますから」
「ダショーは，ずっとこの目の色なんだ」
「えぇ。何故でしょうね。共生者にも青混じりが多いのも，不思議な事です。さぁ，人の通りも多くなってきた様子です。深く笠を被って下さい。決して顔を上げないように」

馬のような生き物の背に，荷物の山を絶妙なバランスで積み上げた商人らしき集団が近づいていた。
まずテリンが先頭になり，堂々とした風情を作り出す。
さすがは武人。蜘蛛使いの件があるが，あの夜以来，不審な事は起きていない。シンハは気をつけろというが，信頼しきっているミルの姿に杞憂と思う事にしていた。
街道に入るために影に入る事を最後まで文句を言っていたシンハは，苛立っているだろう。けど現に，この状況で一番場慣れしてるのはテリンだ。
ミルは俺の背に入りながらも，辺り一帯に気を配る。
二人に挟まれながら，俺は俯いて足元を睨みつけた。
俺の目が青い訳が，酷く気になる。青い色混じりの瞳と，共生者の力。そこに何かの秘密を隠したような気がする。とても，大切な事を忘れているような気がする。

お出かけ前に，ガスの元栓を締めたか。そんな曖昧な記憶に苛立つようなこの感覚。
俺は，まだ大切な事は思い出せていないようだ。
昼前なのに，太陽は遠慮なく地面を焦がしていく。砂利道に落ちた俺の汗の雫が，乾ききった地面に吸い込まれていった。

砂埃と煙に燻された街。
舗装されていない道を，絶え間なく行過ぎていく人々。その足元から舞い上がる砂埃で，着物も手の甲も薄化粧をしたよう汚れていく。
人波の間を馬や荷馬車が歩いていく大通りの両端には，大きな店が軒を連ねている。その様子は，やっぱりお江戸のようだった。
瓦屋根に，木造の建物。漆喰の壁。ただ，大きな店ほどガラスを多用している。看板も色鮮やかだ。
そして，建物の下半分を石材を積み上げている建物も混在している。
これぞ，異世界ロマン。

「そうさね。銀貨五枚ってとこかな」
「冗談だろう。まぁ良い。他をあたろう」
「お，おいおい。そんなに慌てなさんな。買わねぇとは言ってねぇよ」
「では，この茸の正当な値をつけれるのか？」
「雲水様，きびしーですねぇ」
「滋養強壮にこれ以上の珍品はないぞ。当たり前だ」

テリンの言葉に，店主が慌てて腰を上げた。

まるで観光地にある古寺の門前町のような，活気付いた市場だ。
ここは後李帝国の端にある都市らしいのだが，それでもこの人の多さに驚いた。
正直，ミルや旅籠の設備からして現代日本より未発達だと思っていた。それが，末端の都市であってもこの繁盛ぶり。この人口密度。
確かに，江戸末期は百万の人口を抱える大都市が東京を含め存在していた。不可能ではない。
都市の大通りの裏には，畳二畳ほど幅で隙間なく立ち並ぶ商店が迷路のように存在していた。干した海産物を売る店，ど派手な香辛料の粉末を売る店から，猛烈なニオイが人々の熱気と混ざり合って襲ってくる。
動物の頭が棚に並び，巨大な肉片を見事な包丁裁きで素早く切っていく職人。その凄技を口を開けたまま見ている子供。かと思えば，前合わせの着物を肌蹴させ，露わになった乳房に赤ん坊がしがみついている状態で店先に座り売り声をかける女性もいる。
逞しすぎる。活気に溢れすぎている。
ニオイと，強烈な光景と，人々の熱気でぼんやりとしている俺の前で，テリンは店主相手に猛烈な交渉をし続ける。

「これほどの猿耳茸（さるみみだけ）なら，十年ものだ。銀貨八枚とは，ありえん」
「向こうの店で金一銀五で買い取りをしておりました。そちらへ行きましょう」
「そうだな」
「ま，待ってくれぇ」

ミルまで助っ人で入りだし，テリンが体の向きを変えると慌てだした店主の様子に，見物人になった周りの人垣から笑いが起きる。

「判った！　金一銀三だ！　おまけで盆糖をつけるっ」
「これがおまけか？　」

「しょうがねぇ。盆糖つけて金一銀五だ！」

店主の掛け声に，人垣から拍手とどよめきが湧き上がる。
これはテリンを称えているのだろう。いや，店主もか？
お互いに笑顔で握手を交わして，商品と硬貨を交換する。その姿はフェアプレーを称えあう試合後のスポーツ選手のようだ。

「いやぁ。雲水（うんすい）様には負けましたよ」
「お互いに良い買い物が出来た。ありがとう」
「毎度おおきにー！」

店主の張りのある声に見送られ，再び人波にもまれるように歩き出す。
背中の籠も軽くなり，テリンの懐に金貨が何枚も蓄えられた。
商売は成功したのだろう。あまり表情を変えない穏やかなテリンの口元が綻んでいる。

「疲れたでしょう。昼飯を食べて行きましょう」
「何か食べたいものはありますか？」
「うーん。どんなもの，あるのか」

判らない。
そう言おうとした途端，目の前の人波が真っ二つに別れていく。
素早くテリンとミルに引っ張られ，道端に押し込まれた人垣の中にもぐりこむ。

「笠を深く。しばし，ご辛抱を」

テリンの言葉に，身を固くする。繋いだミルの手が，強く俺の手を握る。

何が起きたんだろう。
困惑する俺の前を，猛烈な煙と爆音を響かせて巨大なモノが走っていく。
幾つもの何かが通り過ぎてから視線を上げると，砂煙と硫黄臭い煙の向こうに見覚えがある物影が消えていくところだった。

「歩兵の移動のようですね」

ミルの言葉に，口があんぐりと開いてしまう。
西部劇に出てきそうな荷車に，煙突がついて自走していた。
暗緑色の揃いの服と防具に身を包んだ若者を十数人と乗せ，後部についた煙突から猛烈に蒸気と煙を吐き出しながら，砂煙とともに疾走していく乗り物。
あれは，蒸気自動車か？

３２　忘れてしまった大切な事（後書き）

異世界の様子を描きました。
中に金貨が出てきましたが……詳しく設定していません（汗）
経済は苦手で逃げてきたから，いい加減です。そうですね。『千夜を越えて』では金貨一枚で日本円で２５万～２７万の価値でしたから，３０万程にしましょうか。いい加減です（苦笑）。すみません。

次回，２８日水曜日に更新予定です。

33　戦の足音

「あれは薪と炎石（えんせき）を燃やしているんです。驚きました？」
「すっごくおどろいた」

目の前に置かれた茶碗の水を一気に飲み干して頷く。
砂埃の積もった頬を軽く拭きながら，悪戯っぽく微笑んで話すミルに苦笑いしてしまった。
あの自動車もどきを見た俺が驚くのを予想して，今まで自動車もどきがある事を言わなかったんだな。
戸板に椅子の足をつけたような素朴な腰掛で，ようやく一休憩だ。
昼食は，焼きソバに似た何か。炒めた麺の上に内臓らしき肉片が香ばしく焼かれていた。日本語にすれば多分『ホルモン焼きソバ』。
食べる物も，着る物も，想像から激しく逸脱したものはないようだ。何だかアジアの奥地に迷い込んだような感じにさせられる。
でも，そんなものかもしれない。
五本の指を持って，二本足で歩行する動物が進化した世界。そうなれば使う道具も環境も，さほど変わる訳はない。
さらに，街でみた蒸気で動く車が存在する。
蒸気機関が存在する，という事は。

「つぎは，『近代化かな』」

思わず日本語が出てしまった口を押さえて，目の前の往来と屋台の周辺の客に目を走らせる。
そんな俺の慌てっぷりを，テリンは静かに微笑んだ。どうやら，ここは安全らしい。
そんなテリンとは正反対で，ミルは好奇心で溢れそうな大きな目を向けてくる。

「『近代化』とは，何ですか？」

ここで，ワットの蒸気機関の説明から始めるのは大変だ。

飛行機雲なんて存在しない夏空を仰ぎ，排ガスにも黄砂にも汚染されてない空気で深呼吸。

屋台からだろう。食べ物の甘い香り，香ばしい焼き物の香り，油の香り。

「むかし，いぎりすでおきた。そこから，からくりがすすんだ。かんがえ，かわる。よのなか，かわる」

日本語が使えたら，もっとスムーズに説明が出来た。

手際よく何かを焼いたり揚げたりしているカウンターの向こうを眺めながら，慎重に言葉をつづる。

「ものを，もやす。ゆげ，もくもくでる。その力をつかう。そこからすすんで，みずのうえ，はしる。そらをとぶ。つきへいく。たべもの，たくさんつくる。たくさんのひと，うまれる。まちで，くらす。せかい，かわっていく。みんなで，よのなか，うごかしていく」

ここで君主制の崩壊なんて言ったら，不敬罪なんだろうな。

曖昧に言葉を濁して誤魔化したが，テリンはその意味が判ったようだ。

声にならない空気を口から吐き出すと，軽く頭を振った。

「そのような事が可能とは……。随分と違う世界のようですな」

「呪術がなく，からくりが進んだ世界でしたからね。私も最初は随分と戸惑いました」

「でも，そらとぶの，あった。ほら，天鼓（てんこ）の泉で」
「宙船（そらぶね）は，半分は呪術です。風の精霊を閉じ込めた虹玉（にじだま）を用いているそうです」
「にじだま」
何だろう。そう思っていると，ミルが手の平の上で息を吹きかける真似をした。
あの炎や風が飛び出した真珠のような珠だ。
思わず指を鳴らしてしまう。
謎が解けた。そして，確信する。
ここは，現代日本よりは科学は進んでいない。けど，科学と呪術を混ぜた独自の文明を発達させている。
軍艦が空に浮いていたのが呪術の力だったという事は，車以上の馬力は作り出していないという事。そして，呪術と科学を組み合わせた独特の技術は，主に軍事に使われている事だ。
「虹珠（にじだま）は南方の海で採れるんです。それも，夏の大潮の晩だけ。とても貴重なものなんですが，後李帝国はユカタ諸島にも勢力を広げていますからね。流通を牛耳っているんです」
「すごいな」
物流もあり，経済も発展しつつある。
これは，本当に近代化の夜明けなのかもしれない。俺，この世界の歴史的転換期に来たのかもしれない。
胸が高鳴りだした俺だったが，テリンは笑顔でミルを促す。
「話は楽しいが，ミルは買いたい物があったのだろう？　ハルキ殿とここで茶でも飲んでおるから，早く行きなされ」
「そうでした。では，テリン，しばらくハルキ様をよろしくお願

いします」
「てつだう，しようか」
「いえ，これは私の買い物ですから」

何故か顔を赤くして人波の向こうへ走り出すミルを見送りながら，変な事を言ったかと首を傾げる。
でも，お年頃の女の子だ。逃亡中といえ，買い物を楽しみたいだろうし。
その合間にテリンは売り子のおばさんに声をかけ，なにやら注文をした。

「甘いものはお好きですかな」
「だいすきですっ」

この世界に来てから，食べたものは果物や雑炊や，何かの焼いた肉だったり魚だったり。野趣溢れるものばかりだった。デザートが食べれると思っていなかった俺としては，喜びで顔が綻んでしまう。

「それは良かった。しかし，ハルキ様からみればこの世界，随分と遅れているようですな。色々とお困りではありませんかな」
「みんな，むかしのよう。でも，テリン，いる。ミル，いる。こまること，ない。大丈夫」

大丈夫。そう，この言葉の発音はどんどん上手になっていく。
不安に思うことは山ほどあるけど，戸惑う事も多いけど，ミルがいる。いてくれる。怖いものなど，何もない。
そう言い切った俺を，テリンは穏やかな目を僅かに見開いて見詰めた。

「強い御方だ……。では，我々の目的はご存知なのですな」

「ごぞんじ，です。おれ，きぼう，なる」
「ほう……希望になると，明言されますか」

国を失ったクマリの民の希望になる。
これはミルと俺の約束。俺がミルを繋ぎとめる契約。ミルが俺に罪悪感を抱いてまで繋ぎとめる契約。
ミルが好きだ。
ミルの為になら，俺は多くの人々の想いすら利用する。どんなに罵られようとも，構わない。

「見たところ，ハルキ様はミル様を好いている様子」
「すいてますよ。すきです」
「ほう」

茶色混じりの青が，微かに光った気がした。

「すきだから，きぼう，なる。なんでもする。だから，ここにいる。ここにきた」

じいちゃんに似た，この穏やかな茶色に青の瞳は全てを知っている。
ミルはテリンの事を先生と言ったが，父親に近い感覚なのだろう。
それなら，宣言をしなくては。

「では，ミル様がハルキ様をお嫌いになったら如何しますかな」
「それで，いい。おれは，きぼう，するだけ」
「何故です？　それは裏切りでしょう。ならば，嫌いになりませんかな」
「したくてする。それで，きらい，それで，いい」

慌しく行き来する人々。その往来を眺めながら，俺は思わず笑みがこぼれていた。

そうだ。俺が尽くしても，ミルの心が変わってしまう可能性はある。そうならないよう，努力もするけど。心を尽くすけど。

例え，沢山の想いを裏切るようにミルの心を縛っても，ミルの心が離れることだってあるのだ。

でも。そうだとしても。俺の自己満足だったとしても。

俺は好きな相手に尽くしたいだけなのだ。

好きだから，何だって出来る。

見返りを求める訳ではないけど。いや，求めてるんだけど。

相思相愛という見返りが得れなくなっても，俺はミルが好きだから尽くしていくだろう。それで嫌いに思われたら，俺が至らなかったという事だ。

人を愛すって，こういう事なんだろうか。

目の前で流れていく人は，心の中にこんな激情をも抱いていける。いや，俺より想いを抱えて日常を送っている人だっているだろう。

人間は哀れで，そんな人間が営む世界は，こんなにも美しい。

和歌に描かれた世界が，異世界に来てようやく感じられた。

「強い御方だ。ミルは，貴方様のような御方に慕われ，幸せですな」

しみじみといった感じで，テリンが呟く。

こういう場合は，この世界では謙遜していいんだろうか。西洋文化圏のように，当然という形で受け止めるべきなんだろうか。

態度を取りかねていると，タイミングよく売り子のおばさんが茶と「何か」を持ってくる。

「はい，クシの実入りの蜜饅頭二つね。茶はお代わり自由だよ」

繁盛した店の雰囲気は，異世界でも一緒だ。
通りのよい大声でお盆の上の食べ物をテリンとの間に置くと，慌しく走り去っていく。
その素早さにあっけに取られていると，テリンが笑顔で饅頭を渡してくれる。

「お口にあえばよいですが」
「あ……ありがとう」

自然に出された饅頭を受け取り，流れのまま齧りつく。蒸した粉の柔らかな生地の中に，プチプチと弾けるような感触。中からとろりと甘いシロップが出てきて，新しい食感に目を丸くする。

「少し，蜜が少ないですな」
「雲水様，仕方ありませんよ。なにせ，蜜も麦粉も何もかも高くなっちまったもんでさ」
「まだクマリへの討伐は続くんかねぇ」
「今年の年貢もキツイしなぁ」

テリンの呟きに，周りの客や売り子のおばさんが同調していく。
どうやら，民衆はお上を良くは思っていないようだ。どこも一緒だな。

「先日，神苑（しんえん）へ進軍したと聞きましたが，本当ですかな」
「あぁ，天鼓（てんこ）の泉の事かい」

おばさんが持っていた盆で，軽く肩を叩く仕草をしながらため息をつく。周りの客も途端に声を落とした。

「ありゃひでぇよ」

「オイラもそんなに信心深くねぇけど，あの天鼓（てんこ）の泉ってのは世界の中心なんだろう？」

「昔は，あそこはダショー様の故郷なんだろ？　壊したらマズイんじゃねぇのかい？　壊しちゃったんかね？」

「しかも，ダショー様の星が出てきた日に壊さなくっても，なぁ」

「本当に，ダショー様は還ってこられたんかな」

「俺達ぁ，お上の考えが判んないよ。戦してもよ，ダショー様を敵にしちゃマズイんじゃねぇのかい」

「でも，法王国に対抗するにゃクマリの領土が必要だぜ」

「だからってよ」

集まった人々の中，一際汚れた身なりの男が苦しそうに言葉を吐き捨てた。

「大体，ダショーって本当にいるのかよ。いたら，何でこんな世の中を変えてくれねぇのさ」

その言葉に，一瞬で群集が口を閉じる。

終わらない戦。不足する物資。その苛々は，ダショーという信仰対象を罵倒するところまで高まっていた。

その事実に，俺は群集を見詰める。

俺は，甘かった。

今までミルやテリンが大事に扱ってくれる事に慣れていた。俺の存在はこの世界で求められていると思い込んでいた。

でも。

ダショーとしての役割も果たしてない今，俺の存在を疎んじる人だって多くいる。

それは，当然の事だ。判る。

でも。

存在を罵られるってのは，結構キツイんだな。

引き締めた口元が，僅かに痙攣した。

33　戦の足音（後書き）

ワットの蒸気機関やら近代化との単語が出てきましたが，これはファンタジー。

ＳＦに走る予定はございません。軽くスルーしてください（汗）。

３４　小部屋の記憶（前書き）

少々，暴力シーンあり。
苦手な方，注意してください。

34　小部屋の記憶

酷く痩せこけた手を握り締め，男がダショーへ疑いの言葉を吐き出して。それを止める人はいない。
否定はしないけど，相槌は打てないけど，同意はする。そんな雰囲気だ。
殺伐としている。この世界は，一体どうなっているんだろう。
口々に帝国に対する不安や不満を言い募る人もいる。もちろん，擁護する人も。
どの意見も，筋がある。感情的に抽象的にしか言えない人もいる。反対に，凄く整然と論理を展開する人もいる。
無学な労働者も，学のある商人や学者らしき者も，思い思いに討論していく。

「反対する民もいるようですな」
「テリン，どうおもう？」

真剣な討論をする人々の中に，饅頭を食べながらの俺達の会話に興味を持っている人はいない。
聞くなら今だ。

「テリン，後李（こうり）帝国，どうおもう？　法王国，どうおもう？」

何故，俺に蜘蛛の糸をかけたのか。
ミルがいない今，聞いておくべきだ。
甘ったるい蜜と，やたら口の中の水分を奪っていく生地を飲み込みながら，俺をテリンを見つめた。

「テリン，くものいと，つかう。なぜ，つかえる？」

「蜘蛛の糸を使う？　蜘蛛とは，あの蜘蛛ですかな」

太く骨ばった指で，宙に昆虫の蜘蛛を描いた。
わさわさと蠢く，あの八本の足を表現した。
そして，訳が判らないと困惑した顔をした。
精悍な不精ヒゲをはやした口元は，への字に下がってしまっている。

「私が蜘蛛の糸を使うとは，何でしょうな……こう，機織ですかな」

「ちがう。深淵（しんえん）のくも。俺をしばる。つかまえる，いと。なんでテリン，つかう？」

「深淵（しんえん）の蜘蛛と？　何故にハルキ様を捕まえねばならんのでしょうか？」

本当に困惑していた。
質問した俺も困惑してしまう。あの晩，蜘蛛の糸で確かに襲われた。そして，蜘蛛の糸で俺を束縛するのは深淵（しんえん）の神官だ。
記憶が蘇る。その時の感情も蘇る。
苦しいく，途方もない絶望が神経を喰い漁っていく。

見上げる空は，小さな窓の向こう。丸い小さな，高い窓の向こう。
煌く星のささやきも聞こえない。木々を揺らす風の音も聞こえない。
規則正しく落ちる雫の音。ぶ厚い壁の向こうから聞こえる詠唱。
体に侵食するように焚きこめられた，乳香の香り。

ココハ，イヤダ。イヤダ。ボクヲ，シバラナイデ。オウチニカエシテ。

何度も繰り返す言葉に，何度も聴かされた言葉が返ってくる。
ぶ厚い壁の向こうから，濃い乳香と共に。

≪　辛抱なされませ。ここがダショー様のお家でございますよ。貴方様はここにいなければならないのです。≫

やけに響く低音の男声。その心地よい音で，魂を縛る。真綿のように，やさしく窒息させる。細く紡いだ糸のように，魂に食い込ませて縛り上げてくる。

≪　エリドゥの都と深淵（しんえん）の繁栄の為にだけ，貴方様は存在しているのですよ。辛抱なされませ。これが貴方の宿命なのですよ。　≫

俺の存在理由？　繁栄の為？　これが俺の宿命？
何度生まれても，蜘蛛の糸に絡め囚われてしまう。違う。俺が生きる理由は繁栄の為じゃない。
今度こそ。今度こそ，蜘蛛の糸に捕まらないようにしなくては。
あぁ，どうか。
オウチヘ，カエシテ。アノソラヘ，トキハナッテ。クモノイトガトドカナイ，トオクヘイキタイヨ。
ヌシサマ，タスケテ。

「……ルキ様，ハルキ様？　大丈夫ですかな？」
「あ，あぁ，うん」
「酷く顔色が悪うございますな」

「すこし，おもいだした。大丈夫」

あれは，一つ前の記憶だろう。この世界を追われた時から，一つ前の記憶。

まだ子供の自分が，小さな小部屋に閉じ込められていた。人々が平伏していても，豪華な法衣を身に着けていても，自由がない。存在する事が仕事。

前世の記憶があり，自分の一生が籠の鳥と知っていた。

だから，あの後，小さな子供だった俺は自分の命を自ら絶ってしまった。

これから続く，長い苦痛と孤独を知っていたから。耐え切れなかったから。全てを悲観して逃げてしまった。

死んでも，青い蜘蛛の糸から逃れられる事はないのに。

足元の地面が消えて，星の中心まで沈んでしまいそうだ。

逃げても逃げても，生まれ変わっても，この絶望は追いかけてくる。蜘蛛の糸は伸びてくる。

「大丈夫。もう，おちついた」

「とても大丈夫に見えませぬぞ。人に酔われましたか」

「うん……」

そういう事にしておこう。

生唾を飲み込み，こめかみから流れる冷や汗を手の甲で拭う。

「動けますかな。騒ぎが大きくなって，人目が多くなって参りました故，移動いたしましょうぞ」

テリンが，懐の財布から銅貨を二枚出しながら俺に囁いた。

「しばしご辛抱を」

目立つのは，避けたい。そう言いたげなテリンの視線に，俺は奥歯をかみ締めて立ち上がる。
この周りの屋台群から人が参加して，野次馬も入りだしていた。まだまだ見物人は増えそうだ。
テリンに促されて立ち上がった時だった。一際に大きな声が討論を遮った。
同時，人垣が真っ二つに割れる。
進み出てきた人物の身なりに，俺は体が固まる。
暗緑の甲冑を着けた，後李の軍人達だ

「これは何の騒ぎだ！」

やばい。
この群集の頭に浮かんだ感情を一言で表せば，そうなるだろう。
自由な討論の場に軍人が入って，問題がないわけない。
話せない内容も，沢山議題に上っていたのだから。

「貴様ら，何を話していた！　聞こえた単語にはクマリへの進軍を非難するようなものがあったのは，気のせいであろうな！」

気のせいです。
そう表現するように，集まっていた群衆が口を閉ざして去っていく。目線を地面に下げ，関わりのない事だけを主張して。
その流れに便乗して歩き出した俺達の前に，革のブーツが立ちふさがる。
下げた目線を，辺りに流す。軍人達に取り囲まれていた。

「この雲水（うんすい）らが皆を集めたか！」

馬鹿でかい声が，屋台村の一角に響き渡る。あれだけ人でごった返していた屋台村の一角，大きな空間が出来上がっている。中心は俺とテリン。取り囲むように軍人達。

「民衆をかどわかしたか！　深淵の手先が！」

冗談じゃない。その深淵からも追われているんだよ。

思わず心の中で舌打ち。

一般人は雲水を尊敬の対象にしていても，軍人からすれば敵国のスパイと同様に思っているようだ。

最悪だ。

「それは誤解でございます。我ら，ただこの場所で一膳の飯を頂いていたまで。そのような大それたことは出来ませぬ」

丁重に，言葉を返す。丁寧な仕草でお辞儀をする。

テリンの動きを真似，俺はその影に隠れる。同じように。怪しまれぬように。せめて，足を引っ張らないように。

「お前ら雲水，どうせ深淵からの間者であろうが！　何を吹聴しておった！」

「滅相もありません。深淵から追い出された半端者でございます。吹聴など，そのような事するはずありませぬ。どうか，どうかご容赦を」

地面に額をくっつけて喋るテリンを真似るて，地面に伏せる。息をするだけで，口の中に細かな砂が入り込んでくる。

イラつく軍人達が，立ち並ぶ幾つもの革のブーツの先が，蹴りつけてきた。

段々と強くなってくる蹴りに，丸めた体が恐怖で固くなってしま

う。
どうなるんだ。今，俺がダショーと判ったら。いや，青い目を持っていると判ったら，どうなるんだ。

「言え！　雲水（うんすい）らが帝国の足を引っ張っているのは明白だ！　我が軍がクマリ討伐をし，戦の先陣を切る事のどこに批難するのだ！　あの獣使いらを処分でねば，民の安全を守れん事が判らんのか！　我ら軍人が命を懸けて，李薗（りえん）から続く後李（こうり）帝国の土地と名誉を守っているのだ！　後ろで守られておる御坊が何をぬかす！」

「これでも，あの臭い獣使いを擁護するか！　この恥知らずが！　貴様ら雲水（うんすい）の食べた飯は，どこの土地で作られておるか知っているのか！」

獣使い。
その単語がクマリの民を屈辱している事に，すぐに気づいた。
そして，大きく足が振り下ろされる。俺を庇うように前に出ていたテリンの体が，僅かに浮き上がる程の蹴り。鈍い音と，呻く声。
思わずテリンに覆い被さる。
何てこと，何てことするんだ！

「はっ。庇いあうとは余裕だな。お前達のような木偶の坊がおる故に，民衆が浮き足たつのだ！」
「我らに抵抗するのか！　その根性を叩きなおしてやろう」

勝手な言葉と，蹴りが絶え間なく体を打ち付けてくる。
うずくまったまま動かないテリンの上に，思わず覆いかぶさる。
脇腹も，太ももも，肩も，硬い革のブーツで絶え間なく蹴り続けられる。
まるで俺達が鬱憤を晴らすサンドバッグのように蹴られ続ける。
奥歯をかみ締めて，この嵐が過ぎるのを待つしかないのか。

自分には，何もない。テリンやミルのような武術も，出来ない。曖昧な記憶の唄では，何も出来ない。ここでは唄えない。

なら，テリンの盾になるしかない。

慣れない痛みに歯を噛み締め，動かなくなったテリンを庇いながら覚悟を決めた。その時だった。

「ごめんよ，ごめんよぉ！」

場違いな程に能天気な声が，緊迫した空気を破られる。

思わず目を開けた視界に飛び込んだのは，二人の少年だった。

そこに重力が存在しないかのように，軽やかに宙を飛び跳ねて人垣から飛び出した。

「はい，ごめんよぉ！」

言葉とは反対に，暴力を振るわれていた俺達の上を舞うように飛び越えていく。

その軽業に，この場を支配していた殺伐とした空気すら吹き払われていく。

「誰かそいつらを捕まえてくれぇ！」

まるでつむじ風が花弁で遊ぶような少年二人の動きに見とれていると，人垣の中から素っ頓狂な声があがる。

「金をスられた！　その悪餓鬼を捕まえてくれぇ！」

「はい，ごめんなさいよぉ」

暢気な声を残して，少年二人が見る間に人垣の向こうへ消えていく。大通りの人波に飲まれていく。

「い，いかん。追いかけるぞっ」
「はっ！」
暴力を振るっていた軍人達は，民衆の平和を守る正義の味方に変身したようだ。
執拗に蹴り続けていた俺達の存在すら忘れたように，一斉に規律とれた動作で去っていく。
助かった。
緊張と恐怖で固まっていた体が解けた途端，痛みが体中を襲ってくる。

35　青い瞳の少女

軍人達が走り去っていく足音が消えるまで確認した。
緊張が切れた途端に，体中が痛みに襲われる。呼吸をするたびに，鈍痛が響く。
文化系だったから，傷とか怪我とかに慣れていないんだよな。
場違いな事を考えつつ，とっさに庇ったテリンを覗き込む。
青白い顔に，汗を流して呻いている。

「雲水様，大丈夫ですか！」
「テリン，テリン，大丈夫？」

巻き込まれまいと取り囲んでいた群衆の中からも，幾人もの人が心配げに手を差し出す。
有り難い。
素直に手を貸してもらい，さっきまで茶を飲んでいた屋台の椅子に腰掛ける。
何も言わずとも売り子のおばさんが一杯の水とお絞りを持って駆けつけてくれた。

「雲水様に手を出すとは，罰当たりな」
「おい，そんな事いうなって」
「でも災難でしたねぇ」
「ありがとう。大丈夫。ここは大丈夫です。ありがとう」

知っている単語を丁寧に発音し，集まった人々に頭をたれる。
心配そうだが，本音は面倒に巻き込まれたくはないんだろう。俺とテリンの無事を確認すると，労わりの言葉を残して足早に去っていく。

薄情とは思わない。目の前で暴力を見たら，それに巻き込まれたくないのが正直なとこだ。
俺も反対の立場なら速攻で逃げるから。
そう思い，ため息をつきながら受け取ったお絞りで丁寧に顔を拭いてやり，茶碗をテリンの口元に近づけた。
途端，思わず顔をしかめる。
物凄い悪臭が鼻を突く。肉が腐ったような，真夏に弁当を腐らせたような，耐え難い腐臭。
手にした茶碗を思わず落としそうになる。
テリンの口臭？　まさか。どこか屋台で食べ物を腐らせているのか。でも，さっき飯を食べている時には，こんな臭いはなかった。

「だめだよ。このおじさん，ほとんど死んでるもん」

子供の声に，振り返る。
笑い顔の仮面をつけた，小さな子供。
すんなりと伸びた手足を動かし歩いてくる。空気が，キラキラと輝いていく。その子供の周りに，精霊が心地よさそうに舞い踊っている。
埃っぽい雑踏の中に現れた天使。

「あれ？　雲水（うんすい）様，ミントゥと同じ？」

俺の前で立ち止まり，笑い顔が首をかしげた。
曲線を描いてくり抜かれた仮面の奥で，青い光が煌く。

「あなたも，ニライカナイから来たの？」
「にらい，かない……」

脊髄が，瞬間で沸騰した。細胞が沸き立つ。

その単語は，何？
体が硬直した俺の前で，子供は仮面を外す。
幼子特有の，ふっくらとした頬。少し低いダンゴ鼻。アーモンド形の切れ長な目元。そして，青い瞳。

「あたしと同じだね。すごいなぁ。おそろいの人，はじめてだよ。でも，雲水様のほうが，きれい。すっごくきれい」

ミントゥとは，この子の名前なのか？
子供の澄み切った青の中で，ぽかんと口を開けた自分が映っている。
この子は，なんで青い瞳なんだ？　なんで，精霊を連れているんだ？

「あたし，ミントゥ。雲水様はエリドゥから来たの？　なんで，後李に来たの？　あれ？　雲水様，もしかして……あれれ？」
「……」

俺がダショーです。
そんな事言えるはずもなく。にこやかに自己紹介をするミントゥなる子を凝視する。
成長期の子供特有の，細い手足。肩で切りそろえられた栗色の髪。質素だけどこざっぱりした身なり。
きちんとした家の子なのだろう。言葉使いも丁寧だ。
だからこそ，共生者の能力を隠す事もなく話しかけるのが不気味だ。
この子，何者？
そしてこの子も，何か気づいたのだろう。
俺の顔を，俺の青い瞳をじっとみつめて黙ってしまう。気づいた？

「おぉい。お待たせぇ」
「あ，モル兄にシャム兄！　ありがとう」
「うまくいったか？」
「ばっちりだよ。助かった」
「で，雲水様は大丈夫ですか？　ミントゥ，お面つけとけよ。団長にばれたら怒られっぞ」

人波の中から，さっきのスリ少年コンビが現れる。にこやかにミントゥに挨拶をして，俺に対しても軽くお辞儀をする。
その礼儀正しさ，不良少年には見えない。罪を後ろめたく思う事もない晴れやかな笑顔に，こっちが戸惑う。

「さっきのひと，さいふ，どうした？」

まさか，俺達を助けるためにスリをしたのか？　それはまずい。人助けとはいえ，見知らぬ青少年達が罪人になるのはマズイ。
思わず声を出すと，三人の大きな目が丸くなる。

「返しておきましたよ。って，雲水様，エリドゥの人じゃないの？」
「本当だ。訛ってる」
「そ，そんな事，ない。大丈夫」

慌てて，深く笠の端を下げる。一番，自信ある発音で返す。
ぐったりしたテリンに肩を貸して立ち上がる。

「いろいろ，ありがとう。しつれいする」
「雲水様っ」

差し出される手を無視して，雑踏の中へ歩き出す。

ミントゥの声がしたが，スリ少年達が引き止めるのを背中で聞き流す。
事情持ちなら，マズイじゃん。お互い，深入りしない方が良いよ。
あぁ，彼らも事情持ちなのかもしれない。
まだ小学生ほどの子供が，仮面を被っていた。ミルやテリンよりも青い瞳を隠す為だろうが，その異様さに納得をする。
この群集の中，事情持ちは俺達だけではなかったという事だ。

「もう少し，しんぼうしてください」
「うぅ……」

先の酷い悪臭は消えていた。うん，気のせいなんだ。大丈夫。
嫌な予感は，考えないとこう。
今は，ミルと合流する事を考えよう。人気のない場所へ連れて行き，手当てをする事を考えよう。
暑さと焦りで流れ落ちる汗が，目に染みる。奥歯をかみ締めて，テリンを担ぐ腰に力をこめて，ふらつく足を叱咤して。
それでも，ミントゥと名乗った子の言葉が体の中を沸き立たせていた。
にらいかないから来たの？
にらいかない。
それは場所を表しているんだろうけど。
あぁ，どこだろう。
ガス栓を閉め忘れたかのような，妙な焦燥感。それに似ている。
それなら，≪にらいかない≫は思い出し損ねた大切な事だ。
体中の細胞が，血が沸騰する響き。

「にらいかない，ですか？」
「しってる？」
「いえ……でも，随分と古い響きですね」

あれから，直ぐにミルと合流出来たのは幸運だった。
事の成り行きを説明すると，ミルは顔色を変えてテリンを一緒に担いで街から脱出した。
街道からすぐに逸れ，ぐったりしたテリンを何故か嫌がるシンハに何とか乗せて。
隠れ家となった旅籠に着くなり，癒しの唄を唄い横にさせた。
必死に意識を保っていたテリンが崩れるように眠り，寝息を立てたのを見届けてから聞いてみる。
買ったばかりの刺激的な香を放つ調味料を入れたスープが出来上がるのを見ながら，昼間の騒動での疑問を聞いてみる。
ミルは首を捻ったまま，何度も≪にらいかない≫と呟き鍋の中身をかき回す。

「にらいかない……にらい，かない？　にらいか，ない？」

意味不明な具合に単語を区切り，呟き，考える。
スープに入れた青菜の色がすっかり抜けてから，ミルは一つの考えをだした。

「多分，多分ですが。その≪にらいかない≫とはハルンツ様か始祖エアシュティマス様に関係しているのでしょうか」
「そうだとおもう。はじめの，きおく。『すごく，古い記憶なのは間違いないと思う』」
「なら，ニライカナイかもしれません。常世の地，という意味ですよ」
「とこよ？」

「死んだ魂が行くという，神々の地に近い異界です。クマリでは，山の高みに神々の家があり海の向こうに祖霊の暮らす異界があると信じられております。もっとも，古い考えです。今はその考えも曖昧になってしまいました。詳しくは私も説明出来ません」

申し訳なさそうに，ミルは頭を下げる。

始祖エアシュティマスからの言葉なら，昔すぎて説明出来る人も少ないだろう。日本で例えれば，平安時代の言葉や思想を説明するようなものだ。俺も，詳しくは出来る自信なんかない。

「何か，思い出されたのですか？」

「うん，まぁ……『曖昧だよ。死んだ魂が行く所か』」

それは，あの世なんだろうか。この異世界とも，通じているだろうか。そしたら，死んだじいちゃんやばあちゃんにも会えるだろうか。

ふと，二人の遺影が並んだ仏壇を思い出す。

鼻の奥に，線香の香りが蘇る。

このままだと，あの嫌な事まで思い出しそうだ。

「テリンはまだおきないかな。さきに，たべる？」

「そうですね。先に頂きましょう」

すっかり青菜の色が抜けてしまったスープをよそって，二人で食べる。

久しぶりの二人の食事。市で買ってきた惣菜もあったけど。でも，なんだか嬉しくはない。

心配事は，山積だ。

世界は，回る。俺にとって大事なじいちゃんが死んでも，世界はそれでも回っている。

学校で先生達やクラスメイトに慰めの言葉をもらっても，日常は変わることはない。

ただ，やらなければならない事は押し寄せる。さっさと答えを出さなければいけないことも。

大学の志望校を，変更した。

じいちゃんが死んだ今，俺が下宿する大学へ進学は出来ない。

早く，自立しなければ。ばあちゃんの心配をなくさなければ。家族を養える程の給料が貰える仕事につかなければ。

夏休みに入ってすぐ，俺は地元の国立大に志望校を変えた。堅実に，地元の企業に就職活動が有利になるように。

学校の補習をこなし，予備校の夏季集中講義に申し込み，初盆も勉強三昧で過ぎていく。

模試では合格圏内だったけど，確実を狙うしかない俺には，何もかもが不安だった。

ばあちゃんに，安心してもらわなきゃ。これからは，俺が支えるから。

仏壇の前に座り続けるばあちゃんの後姿が，どんどん小さくなってる気がして怖かった。

家中に焚き染めるように線香のにおいがしたのが嫌だった。

俺はここにいるよ。ばあちゃん，ここにいる。ずっといる。

だから，じいちゃんのトコには，まだ行かないでくれ。

「なんだよ。想い出に浸ってんのか」

「浸ってないよ。思い出しただけだ」

夕食後に，テリンから逃げるように風呂に来た。

おどけながら俺にまとわりつくシンハの言葉に，俺はようやく納得した。

俺は逃げたいんだ。思い出したくないんだ。

傷ついたテリンを見るたびに，死んだじいちゃんを思い出す。ばあちゃんの最後を思い出す。

「さっさと入ろうぜ。ハルルン，汗くせぇぞ」

尻尾を振って湯気立ち上る風呂に入るシンハを見ながら，ぼんやりと昼間に出会ったミントゥの言葉が蘇る。

「このおじさん，ほとんど死んでるもん」

あぁ，そうだ。テリンからは，死のニオイがするんだ。

だから，死んだじいちゃん達を思い出すんだ。

35　青い瞳の少女（後書き）

作中に『ニライカナイ』とありますが，沖縄とは何の関係もありません。ただ海の向こうの理想郷，桃源郷的なイメージを頂きました。ここでお断りしておきます。

前作『千夜を越えて』でも，『ニライカナイ』は出てきます。主に，一章と最終話です。微妙に『ニライカナイ』という単語と周辺の出来事は『見下ろすループ』とリンクしてるので，気になる方はどうぞ。もちろん，読まなくても支障ないように描いていく予定です。

36　それでも世界は回っている

暑さ寒さも彼岸まで。
そんな言葉が信じられないほど暑い秋分の日だった。絶対，俺はこの日を忘れない。この光景を忘れられない。

リビングからの和室。仏壇の前に座るばあちゃん。その周りに散らばった色鮮やかな帯や着物。そして，いくつもの書類や古い通帳。
Tシャツに張り付いてた汗が，一瞬で凍りついた。

「もう，ないんですよぉ。ないんですよぉ……」
「ばあちゃん？　ばあちゃん？　」

そうめんと卵焼きの昼食を食べて，俺は図書館の自習室へ出かけて。
それはいつもの休日と変わらないはずだった。少し心配げに微笑み「そんなに勉強せなあかんの？　無理せんでいいんよ」と送り出してくれたのに。
虚空を見て怯えるように呟き続ける異様なばあちゃんの様子に，背筋が凍りつく。
これは，俺のばあちゃんじゃない。知らない人と思いたい。
恐る恐る俺が近づくと，ばあちゃんは小さく悲鳴を上げた。

「ごめんなさいぃ。許してぇ。もう，ないんよぉ。亜希子さん，堪忍ねぇ」
「ばあちゃん！　」

怯えるように縮こまったばあちゃんが発した言葉に，全てを悟った。

亜希子。あの女，あの死神。忌まわしい，あの女！

じいちゃんの遺産を漁りに来たに違いない。

じいちゃんの実家は，資産家だったらしく。両親との不仲で家を出たじいちゃんも，ある程度の資産は継いでいた。いくつかの不動産。株券。国債。そして，じいちゃん自身の手で築き上た貯金。

実家の豊かな資産を道楽で食いつぶしたという弟とあの女と違い，堅実なじいちゃんには財産があった。

それを，嗅ぎつけたあの女。病院からしつこく付きまとったあの女は，ばあちゃんの前で家中を物色したんだろう。

これが，初めてなんだろうか。もしかしたら，夏期講習で留守にしていたあの頃から，家に入り込んでいたんだろうか。俺とばあちゃんと，じいちゃんとの想い出が刻まれた場所に，踏み込んでいたのだろうか。俺達の大事な，大切な場所に，土足で踏み荒らしに来ていたんだろうか。何度も，何度も，踏み躙りに来てたんだろうか。

ばあちゃんは，すっと俺に隠していたんだろうか。ずっと，一人で抱え込んでいたんだろうか。

吐き気がするような考えが，湧き上がる。次から次へと押し寄せる考えに突き動かされるように，引き出しの奥の秘密の棚へ手を伸ばす。

震える指先で小さな引き出しを開けてみれば，そこにあるはずの通帳が消えていた。書類が消えていた。

関口栄太郎と刻まれていた，新しい通帳も消えていた。

「ごめんね晴貴……っ」

小さく叫んで，ばあちゃんが色鮮やかな訪問着の上に倒れこむ。

絹擦れの音が，やけに大きく聞こえた。紅色や桃色の牡丹の柄の上へ，すっかり痩せたばあちゃんの体が横たわる。

「ぅあああ！！　」

訳の判らない音が自分の口から叫んでる。
ガクガク震える足が，自分じゃない。
この現実が夢のようで。悪夢のようで。
耳に届く自分の叫び声で，夢じゃないと悟る。救急車を呼ばなくてはと，妙に冷静な自分が告げている事に気づく。
日常が，壊れた。
平凡が，壊れた。
それでも，世界は回っていくんだろうか。

泡だらけの手桶に前足を入れて遊ぶシンハが，ふいに顔を上げる。
緑色の目がまっすぐに俺を射抜いた。

「何だよ。言いたいことあるなら，ちゃっちゃと言いな」
「うん。シンハは，神苑（しんえん）で生まれた気なんだよね」

確か，玉獣（ぎょくじゅう）という生き物は神苑（しんえん）で生まれる清らかな気だと聞いた。
なら，知っているかもしれない。
湯桶の端に腕と顎を乗せて，シンハを見詰めた。

「じゃあ，魂ってのが存在すると仮定して」
「何度も生まれ変わってるダショーが言う言葉じゃなぇな」
「死んだら，魂はニライカナイへ行くのか？」
「ニライカナイだ？」

シンハは，鼻を鳴らして笑い飛ばした。

「ニライカナイなんてもんは，人間が作り出したもんだ」
「じゃあ，死んだら何処にいくんだ？」
「だからさ。ダショーのハルルンが言うのか？　何度も生まれ変わってると証明されてるハルルンの方が知ってるだろ？」
「俺の記憶は，全部思い出してないし。どれも順番も混乱してるし……ニライカナイらしき記憶はないし」
「そう。ないんだよ」

メレンゲのように前足についた泡の塊を吹き飛ばして，シンハは断言した。

「ニライカナイってのは，人間が考えた理想郷だ。行った奴にでもあったのか？」
「あぁ」

ミントゥは「雲水（うんすい）様もニライカナイから来たの？」と言った。
「も」と。
あの子は，間違いなくニライカナイから来たんだろう。
そう頷くと，シンハは困ることなく返事をする。

「じゃあ，ニライカナイっていう地名だ」
「ニライカナイ通りとか，ニライカナイ村とか？」
「だと思うぜ」

手桶の泡を吹き飛ばしながら，シンハは当然のように返事をする。
じゃあ，細胞が沸き立つこの感覚は何だろう。ニライカナイと口にする度に，ドキドキするこの気持ちは何だろう。
黙り込んだ俺を，緑の瞳が覗き込む。

「何だよ。さっきからシケた顔してると思ったら，死んだ奴の事

思い出してたのか？」

「俺を育ててくれた人達の事。ニライカナイが存在しないなら，みんなは何処にいるんだろう。何処に行ったのかな」

何を子どもみたいな事を口走っているんだろう。思わず零れた言葉に動揺してしまう。

俺はもう，じいちゃんとチェロに抱かれていた子どもではないのに。

なのに突然，胸の奥が熱くなって視界が滲んでしまう。固く目を閉じれば，残像のように色鮮やかな着物の上に倒れたばあちゃんが浮かんでしまう。

ツンと，鼻の奥が痛む。閉じた眼が潤む。目尻から涙が零れそうだ。おかしい。あの時，泣き尽くしたはずなのに。

慌てて湯を顔にかけて誤魔化すと，シンハは大きな舌で俺の目元を舐めた。

「死んだら，みんな帰るんだ。過去も未来も，一つに帰るんだ。だから大丈夫だ。いつかハルルンの大事な人達にも会えるさ」

「会えるかな」

「あぁ。みんな一つになるんだ」

大丈夫。

そう言いながら冷たい鼻先を俺の頬に寄せるシンハは，少し笑っていた。

当たり前の道理を小さな子供に言い含めるように，何度も「大丈夫」「安心しな」と繰り返し，繰り返し。

俺は鼻先を撫でながら，頷いた。

目から涙が滲み続けるのに，少し困ったが。

昼間の暑い空気を，夜風が吹き流していく。湯上りの肌に，心地よい涼しさだ。

風呂から出た俺がすっかり定位位置になった縁側に座ると，ミルが何も言わずに水差しと湯のみを持ってやってくる。

「ありがとう」

「いえ。今日は大変な日になってしまいました。ゆっくり休みましょう」

「うん。みんなのぶじ，判らなかったし。テリンはけがするし。大変だったね」

「本当に。でも，当座のお金を工面出来ましたし。これで良しといたしましょう」

「そうだね。まだ，先はながいね」

受け取った湯飲みから水を一口飲むと，ミルが遠い目をしていた。

今夜は細い月。明日は新月だろうか。

星明かりだけの深い闇。遠くに茂る神苑（しんえん）の木々を眺めながら，ミルは呟く。

「いつまで，続くんでしょうね……」

その言葉から響く，深い哀しみと諦めと孤独。

何も言わず，ミルの白い横顔を見詰める。

「物心ついてから，ずっとクマリを再興させる事を考えてきて。神苑（しんえん）の守り人の大連（おおむらじ）すら，どんどん死んでいって。家臣も何人も失って。本当に，本当に，みんな，どこにいるのでしょうね……」

夜風が，ミルの髪を撫でていく。
横で寝そべっていたシンハが，目を閉じたまま耳を立てる。揺れていた尻尾が，おとなしく丸まった。

「テリンはね，本当は絵師になりたかったんですよ」
「テリンが？！」

思わず声を上げてしまうと，ミルは少し笑って頷く。
驚いた俺の顔を面白そうに見て，口元を緩ませた。

「まるで武人になる為に生まれてきたような，あのテリンが絵師になりたかったなんて。私も初めて聞いた時は信じられなくて，ハルキと同じように叫んでしまいました。おかしいですよね」
「絵師って，絵をかいていたの？」

剣を持ったほうが様になる筋張った腕を思い出し，聞きなおしてしまう。
でも，声や雰囲気を思い出せば少し納得だ。知性を感じさせる落ち着いた声色は，絵師を志す若者を想像させるのに難しくない。

「一度だけ，若い頃に描いた絵を見せてもらいましたが……ふふ。あれでは周囲が止めるのも判ります」
「あぁ，そういう事か」

残酷な事に，本人が希望する才能を持って生まれる訳ではない。
これが現実だ。

「本人は絵筆で生活したくとも，武術のほうが才能豊かだったようです。周囲も武人としての未来を望んで説得したらしいのですが，テリンの絵師に対する想いは熱かったらしいですよ。家を飛び出し

て北の大公国へいこうと計画するぐらい」
「テリンが家出を計画するなんて，余程に思いつめていたんだね。信じられない」
「えぇ。でも，そのうちに戦が始まって。エリドゥへ人質に出される私の護衛と守り役になったので絵どころではなくなってしまい……。テリンは，どれくらい長い間絵筆を握っていないのでしょう。絵筆を握れるまで，どれくらいかかるのでしょうね」

絵筆を握れるのは，戦が終わりクマリが復活してからだろう。それは，何時の事になるのだろう。
先がわからない。それはとても不安な事。
ゴールが判れば，全力で走れる。けど，そのゴールが何時になるか判らす，仲間も消えていくなんて，不安や孤独を感じずにはいられない。
細い月明かりだけじゃ，沈黙は辛すぎる。未来は見えない。

36　それでも世界は回っている（後書き）

かなり記憶が錯綜してきます。

異世界の現在（作中の中心的なハルキが存在する『今』）。異世界の過去（ダショーとして生きた過去世）。そして日本で過ごした高校生時代。

三つの時間がここから入り乱れます。

作者の力量では，こうでしか描けませんでした（涙）。

ゴメンなさい。苦情受付中です。

37　健やかな時も　病める時も

「明日，もう一度だけ市場へ行こうよ」
「危険です。後李（こうり）の兵も増えておりましたから，しばらく市場へは行かないほうがよいと思いますが」
「絵筆を買いに行こう。絵の具とか画材とか」
「ハルキ……」

見えないゴールへ走るのは，一人じゃない。
俺も，ミルとテリンと一緒に走るんだ。
そっと，横の手を握る。不安な気持ちを，俺も感じよう。重責を負おう。
俺は，ミルに寄り添っていくから。
遠くを眺めていたミルの瞳が，潤んで俺を見詰めた。

「戦が終わったら，全て終わったら，使えるだろ？　それでさ，まずミルを描いてほしいな」
「ハルキ……ありがとう。でもそれなら，まずハルキを描くように私が頼みます。ダショー・ハルキの御影を」
「では仲睦ましいお二人を，最初に描くとしますか」
「テリン！」

突然入った声に，俺達二人が手を繋いだまま振り返る。
痛みに顔を歪ませながら，テリンは布団から上半身をゆっくり起き上がらせた。
ミルが素早く単衣をかけてやると，テリンは大きく息を吐いて笑いかける。

「市場は危険だと骨身に染みましたからな。絵筆はまた次の機会

があれば買うとしましょう。それより，姫宮様は今日のアレをお渡しになったのですかな」

「いえ，その……」

途端，ミルは顔を赤らめて俯いてしまう。

「時間というものは，無尽蔵ではありませぬぞ。このテリンでよければ見届け人になります故，お渡しになされませ」

「テリン……ありがとう。あの，ちょっと待っていて下さいね」

真っ赤な顔を俯かせたまま，ミルは板間を小走りに奥へ行ってしまう。

残された俺達の間に，シンハが素早く回りこんだ。背中の毛を逆立たせ，布団の上に痛々しく座るテリンに歯をむき出しに唸りだした。

「シンハ！」

「構いませんよ。穢れを嫌う玉獣（ぎょくじゅう）は，全てを知っているのでしょうな。誇り高きダショーの双子星よ，どうか今晩だけはここにいさせておくれ。ここで，祝福を挙げさせておくれ……」

土色の顔に微笑を浮かべ，シンハに頭を垂れるテリンの様子に戸惑う。

何を言っているのか判らない。

威嚇を止めないシンハの首元を押さえつけながら，一匹と一人のやり取りに首を捻る。

だいたい，俺以外の人間と口をきかなかったシンハが，急にテリンに怒鳴りだす事にも驚いているのに。

「くそっ……今晩だけだな？　本っ当に今晩だけだぞ！　明日は

新月だ。意味判ってんだろうな！」

「夢は覚める。その事は重々承知の上でしたからな。仕方ありませぬ……今宵が最後の覚悟はありますぞ」

「テリン？　何言ってるんだ？　最後って，何ですか？」

「姫宮様に，このような立派な殿方がいてくださる。見届けていける事に，その幸運に感謝をしておるのですよ。ダショー様でなく，姫宮様が心を寄せる殿方としてお話しますが，よろしいですかな」

襟元を直し姿勢を正したテリンは，布団の上で俺を真っ直ぐに見据えた。

心の底まで見通すような視線に，俺はシンハと首根っこから手を放して板間に座りなおす。

急に改まった雰囲気に呑まれながら，背筋を伸ばしてテリンと向かい合う。

「姫宮様が指につけられた指輪は，ハルキ様がお贈りになられたのですな」

「そう，ですが」

「ハルキ様の世界では知りませんが，我らの世界では贈り物には意味があります。男女の間の贈り物には，意味がございます」

あぁ，これは，まるで彼女の実家に挨拶にいったような雰囲気だ。

水野が言っていたのを思い出し，俺は僅かに鳥肌がたった。

相手の家の父親と向かい合って結婚をお願いするのは，面接なんか目じゃないぐらいに最高に緊張すると言っていた。

「ハルキ様は，指輪をお贈りになった。そして姫宮様はそれを受け入れて身につけられている。ハルキ様は求婚をされ，姫宮様は受け入れられたという事ですぞ」

「そう，ですか」

よかった。
ミルは，俺を受け入れてくれた。
判っていたけど，それを客観的に伝えられ事に嬉しさがこみ上げる。いや，ここでミル側の保護者にキチンと挨拶をすべきなのか。
緩む口元を慌てて引き締め，額を床につけるように頭を下げた。

「もちろん，俺はそのつもりです。こちらの慣習は知りませんでしたが，俺の気持ちは間違いありません」

口に出した途端，指先が細かく震えだす。体中の血が消えてしまったように，冷たくなっていく。それなのに，心臓の脈打つ音だけがうるさい。
あぁ，これは結納だ。まるで，結婚を約束する儀式だ。
真っ直ぐ，テリンと向き合う。
言わなければ。偽りない，真心を伝えなければ。
ミルを，ミルの傍らで生きると。

「俺は，ミルと生きて生きたい」

僅かに声が震えてしまう。

「俺は，ただその為にこの世界に来ました。ミルと一緒に，生きたい。生かせて下さい」
「ハルキっ」

布に包まれたものを胸の前で抱え，ミルが板間の端に立っていた。
大きな目が，潤んでいく。くしゃくしゃに歪むミルの顔に，緊張が解けていく。
好きだよ。大好きだよ。

「では，姫宮様の心をお渡ししましょう」
「……はいっ」

ミルが俺の横に座り，抱えていた布をゆっくりと解いていく。
その細く長い指が震えている。ミルの緊張しているのか。

「ここは，ハルキの世界とは違いすぎて。ハルキの好きな本もプレイヤーも，車も，何もないので，何がよいか判らなくて」

一瞬止めた手を，固く握り胸の前で組んだ。
祈るように。願うように。
左手の指輪が，薄暗い蝋燭の明かりに照らされて鈍く光っている。

「でも，これが私の心。偽りない，私の心と共に贈ります」

ミルがゆっくりと最後の布端を解くと，弦楽器があらわれた。
バイオリンより，やや大きく。チェロよりも小ぶりな，三味線の面影を持った見たことのない弦楽器。
添えられた弓も，胴も，古びたキャラメル色の楽器に，目を奪われる。

「どうか，受け取って下さい」
「これを，俺に？　今日の買い物って，これ？」
「今は，これしか用意出来なくて。本当はもっと名器をと思うのですが……。でも，でも，心はハルキに捧げていますからっ」

最後の方は涙声で囁いたミルの言葉に，俺は動けなくなった。
心をも，全てを，俺に委ねてくれるんだね。一緒に生きてくれるんだね。

あぁ，よかった。キミは，心をも俺にくれるんだね。
キミを好きでよかった。ここに来て，よかった。
体の奥から込み上がる激情に，思わず顔を覆う。その両手も，震えている。
心が震えると，体も震えるんだな。
ありがとう。
ありがとう。

「すんごい，嬉しい。すごく，すごく，嬉しいよ。ありがとう…
…」

同じ言葉しか，浮かばない。国語の教師だったのに，この気持ちを表現出来る言葉が浮かばないよ。
ありがとう。これ以上の言葉は，どこにあるのだろう。
それを伝えたくて，滲む涙を手の甲で拭いて楽器に手を伸ばす。

「弾いてみて，いいかな」
「おぉ。弾いて下さいますか！」

テリンに笑いかけ，そっと棹を撫でる。
手になじむ感触に，じいちゃんのチェロを思い出す。
ミルに差し出された弓を，そっと弦に当てて弾いてみる。
優しい音が，空気を震わす。
一弦一弦，音を確かめていく。弦の振動が胴を共鳴して鳴り響く。
その振動が心地よい。
あぁ，なんて懐かしい音だろう。

「三線（さんせん）という楽器です。ダショーは三線（さんせん）を好んでおられましたし，ハルキも弦楽器を持っていたので三線（さんせん）を選んだのですが」
「うん。あぁ，だからかな。懐かしいんだ。すごく，懐かしいん

だ」

軽く弦を締めて音程を整え，指の置き場所を確認する。
最初に弾く曲は，ミルに捧げよう。
キミが好きな曲を，捧げよう。

「……いい唄だな」

シンハがそう呟き，ゆったりと尻尾を揺らす。
目が合ったミルは，涙を零して微笑んだ。
テリンは，土色の顔に幸せそうな笑顔を浮かべた。
震える弦は，共鳴されて大きく空気へ広がっていく。幸せの気持ちも，広がっていく。
細かな心の動きすら，その空気の震動に乗せていこう。
世界中に，宣言するよ。キミが，好きだ。大好きだ。
キミと何処までも行こう。
虹すら越えて，何処までも。
だから，奏でる曲は，オーバー・ザ・レインボウ。
時も，空間も，全てを越えて，キミと何処までも。

吹く風に，秋の薫りがする。
悲しげで，太陽の季節の終わりを宣言する薫り。生きるものが休眠する冬の訪れを遠くに感じさせる気配。
そんなのは，気のせいだ。まやかしだ。
日照時間の変化と，葉の色の僅かな変化と，乾燥した空気の変化によって，体が感じ取っている季節の移ろいにすぎない。
噴水を背に，俺は公園の北入り口を睨んで待つ。

大きな駐車場に接しているのは北入り口だから，あの女がやってくるのはここしかない。
真っ赤な流行の小型自動車に乗ってくるのは，じいちゃんを見送ったあの女。ばあちゃんを追い詰めたあの女。
学校帰りで制服姿の俺は，噴水の端に腰掛けている。
赤ん坊を連れた若い夫婦が，「今日の晩御飯，何にしようか」と笑いながら通っていく。
駄々をこねた幼子が「まだ遊んでくぅー」と泣き叫び，母親に引きづられて行く。
犬の散歩を兼ねてジョギングするおばさん，おじさん。
近くの自動車学校の本を抱えて走っていく，大学生風のカップル。
幸せそうだ。
みんな，みんな幸せそうだ。
俺も，そう見えるだろうか。
俺も，幸せそうな学生に見えてるだろうか。
誰も，誰も他人の事なんか知らない。
誰も，俺の心の中なんか知らない。
たった一人，俺を知っていたばあちゃんは，今は病院にいない。
心臓の鼓動も止まって，柔らかな呼吸も止まって。
もう，悩む事もなく。熱で苦しむ事もなく。
葬儀を簡易にして，火葬もすませて。真っ白な骨になってしまった。小さくて軽い砂糖菓子のように真っ白な欠片になったばあちゃん。
その欠片を拾っても，俺は何も感じない。そして死んだ事実ではなく，自分が何も感じないことに戸惑っているなんて。
誰も，そんな俺を知らない。
軽薄で，残酷で，自己中心的で，自分が可愛いだけの，俺を誰も知らない。

「来た」

駐車場に，左ハンドルの赤い小型自動車が入ってくる。
大きなエンジン音を響かせて，乱暴にハンドルを切って。何度も切り返して駐車スペースに入れていく。
カバンから取り出したペットボトルを一口飲んで，固く蓋を閉じる。
ジンジャーエールの細かな炭酸が，腹ではじけた。

37　健やかな時も　病める時も（後書き）

作中の『三線』なる楽器は，架空のものです。
大きさは人が気軽に持ち運べる程の大きさで（ミルが胸に抱えてましたから，そのぐらいですね），三本の弦を弓で弾きます。……って感じの設定で（汗）。

38　深紅の地上と藍色の天上（前書き）

今回は最後の方に痛い描写があります。
苦手な方。火傷にトラウマがある方，お気をつけ下さい。

38　深紅の地上と藍色の天上

「こんなトコでのんびりしてていいの？　おばあちゃん，ほったらかしてイケナイ子ね」

ばあちゃんは，もう死んだんだよ。

飛び出しそうになった感情と言葉を，飲み込む。亜希子さんには，知らせなくていいことだ。知ったら，また骨までしゃぶろうと襲ってくる。

腹の中の炭酸が，憎しみの激情と混ざりあう。消化に悪そうだ。

「学校帰りに呼び出して，何の用事かしら」

風下になると，亜希子さんから香水のニオイが暴力的に漂ってくる。

さっきまで辺りに存在していた清清しい木々の薫りが消えていた。思わず眉を寄せて顔を上げると，禍々しい笑顔が返される。

分厚い化粧と，赤い唇。年のわりに，やけに明るく染めた茶色の髪に毛先の強めのカール。全てが，不愉快な存在。

「ここ，よく来るのかしら」

「あんまり。初めて来た」

「今日は何？　ここでお茶会でもするつもり？」

何でここに呼び出されたのか，検討もつかないのだろう。

亜希子さんは気だるそうに首元をハンカチで押さえ，俺の手にあるペットボトルを見た。

「あげますよ」

「あら，悪いわね」

放ってやると，まだ一口飲んだだけのポットボトルを何の躊躇いもなく蓋を開ける。

炭酸の音と，僅かな嚥下の音。

あぁ，全てが汚らわしい。

この女から漂う香水も，視線も，触ったものも，その気配すら，全てが汚らわしい。

返そうか。そんな仕草をされても，無視。

赤い口紅がべっとりと付いたペットボトルを返すなよ。

あんたが触ったもの，触りたくもない。

「で，何の話？　長くなるなら，お店に入らない？」

「そんなに長い話のつもりはありません」

同じ場所の空気を吸う事すら，嫌なんだよ。

判る？　こんなに嫌ってる事，判ってる？

だから簡潔に。

「返して欲しかったんだ。祖父の通帳と，土地の権利書や契約書を返して欲しかっただけ」

本家から分割された遺産はいらない。譲渡された株券もいらない。

じいちゃんが作り上げた財産だけを。じいちゃんがばあちゃんと俺の為に汗水ながして築いたものだけを，返して欲しい。

たったそれだけなんだ。

それだけを，返して欲しい。

「どういう事よ。まるで私が取ったみたいに言わないでよ」

「亜希子さんがした事を，警察に言ってもいいんですよ」

「民事には介入しないわよ」

余裕を浮かべた笑みに，俺も笑って返す。

知ってるよ。警察が遺産騒動に首を突っ込まないぐらい。

知ってるよ。あんたが，こんな言葉で臆する訳ないって。

乾いた唇を舐めて，微笑む。

「本家のものだもの。返してもらっても，おかしくないでしょ」

「その本家を傾かせたのは，誰ですか」

「私のせいじゃないわよ。父が食いつぶしたんだから。わたしはむしろ被害者よ」

江戸初期から所有していた美術品も，軽く県をまたいで移動できるほど所有していた土地すらも，全て食いつぶした奴らが。

じいちゃんから，帰る家を奪った奴らが。

被害者面かよ。

「ウチの通帳も，家の権利書も，本家のものじゃないですよ」

「本家からの財産があったから築けた財産でしょ。なら，それも本家を継いだ私のものよ」

太陽が，赤く世界を照らしていく。

噴水の雫も，コンクリートで固められた地面も，紅葉していく木々の葉も，穏やかになびく風も。

亜希子さんの持つペットボトルも。ジンジャーエールも，赤く赤く染まっていく。

沈み行く太陽が，世界を染め上げていく。

燃える炎のように，血の色のように，全てを赤く染め上げていく。

「話って，そういう事？　大丈夫よ。おばあちゃんの入院費は保

険でなんとかなるでしょ？　晴貴くんの学資保険もちゃんとあるでしょ？　大丈夫。何かあったら相談してね。ちゃんと面倒見てあげるわよ」

「……っ」

怒りのまま，喉の奥が空気を切る。

腹の奥の微炭酸が，弾ける。

亜希子さんの手の中のペットボトルが，一瞬で沸騰したように真っ白く膨れ上がり破裂する。

「きゃあ！　何これ！」

短い悲鳴で，噴水周辺にいた人々の視線が集まる。

びしょびしょになった亜希子さんが，手にしていたペットボトルを俺に投げつける。

異形の朝顔のように広がったペットボトルの残骸が，俺の肩にペコンと当って落ちる。

修羅場に漂う，ジンジャーエールの薫り。甘い甘い香り。

「当て付けに，こんな細工する訳?!」

「当て付け？」

奪ったのは，あんた。

きっかけは，あんた。

「俺からばあちゃんとじいちゃんの命を奪ったのも。家や財産を奪ったのも。お金や形以外のものも，奪ったあんたが何言ってるんだ」

俺を怒らせた，あんたのせいだよ。自分のせいだよ。

判ってる？

「今日の話は，簡単。返して。でも，駄目なら消えてくれよ。もう，キツイ」

「何いってんのよっ。消えてくれって，どういう事よっ」

「じいちゃんとばあちゃんがいたから，俺は生きてたんだ。でも，死んじゃったから，もういいんだ」

「死んだの？　おばさんも死んだの？！　いつよ！　私，知らないわよ！」

乾いた唇を，舐める。

喚く亜希子さんから視線を外して，遠くを見詰める。

北駐車場に人影がない事を確認して。

そっと，息を唇に乗せる。

赤い空気を切り裂いて，振動が赤い車へ真っ直ぐに響いていく。

公園に響いた口笛は，爆音にかき消される。

駐車場に，火柱が聳え立つ。

「あ，あ，な，何よこれっ」

「なくなったのを，返せとは言わない。死んだじいちゃんとばあちゃんを返せとか，言わない。俺はあんたと違って優しいから」

とても，とても，優しいから。

「だからお願い事は一つだけ。俺も消えるから，あんたも消えてくれ」

熱を帯びた風が，吹き荒れる。

落ち葉と悲鳴を巻き上げて，世界が完成していく。

腹の中の微炭酸が，再び弾けた。

お願い事は，一つだけ。一つの願いを叶える為に，代償を一つ。
あんたの存在が，許せないんだ。
大切な思い出があるこの世界に，あんたが存在していく事が許せないんだ。
だから。

「消えてくれよ」

唇の形を，僅かに変えて。
肺いっぱいに吸い込んだ息を，ゆっくりと吐き出そう。
さぁ，世界に響け。
あの女が消えゆく世界に，響き渡れ。

「あんたが，あんたがやったの?!　でも，そんな馬鹿な事……，何やってんのよぉおお!」

目の前で金切り声を上げる亜希子さんが，燃える車と口笛を吹いた俺を交互に指差して。
公園の事務所へ走っていく人。携帯を取り出す人。子供の手を引いて，この場から離れようとする人。遠回りに俺達を見てる人。
あぁ，消えてくれ。
全て，消えてくれよ。

「何よ，何よ!　何なのよ!」

パニックになりかけた亜希子さんは，俺を指差して罵る。
まるで酸欠の金魚。醜い，腐臭を漂わす金魚。

「電子レンジの仕組み，知ってる?」

電磁波で食品内部の分子を震動させる。
ガソリンで同じことをやれば，車を爆発させるのは簡単な事。

「だから車って簡単に爆発するな……」
「あんた，何したのよぉお！　私の車に何したのよぉお！」

口笛で，分子を震動させる。
何でこんな馬鹿げた力を持ってるんだ。
こんな力，いらないよ。欲しいのは，じいちゃんとばあちゃんと過ごした毎日だよ。欲しいのは，これから過ごすはずだった僅かな未来だけ。
ねぇ，神様。
いらないよ。こんな力。
たった一人，こんな力を持って何になる？　生きていて何になる？
だから，ねぇ，神様。
俺も消してよ。
真っ赤に燃えていく世界と一緒に，俺も消し去って。

「ぎゃあああ！」

空を見上げて，唇を細める。高く高く，口笛を響かせる
震動する音が，炎を風に巻き上げさせた。
渦巻いていく風が，熱を帯びる。俺を包んでいく。
逃げようと走り出す亜希子さんに，炎の風が吹き荒れる。
そして俺の制服に，赤い炎の舌が舐めていく，白いシャツの袖が，あちこち穴を開けて燃えていく。髪の毛が，鼻を焦がすような異臭を上げて燃えていく。
夕焼けの空を見上げて，口笛を吹き続けた。
あぁ……天頂付近の宇宙の色はなんでこんなに美しいんだろう。
藍色の，底なしの青。果てない空間の，宇の色。過去と未来を秘

めた，宙の色。
あの宇宙の色の中に，帰る。帰ろう。
じいちゃんと，ばあちゃんが帰っていく色へ。父さんと母さんが待っている色へ。
神様。
俺を青の中へ帰して。

「助けてぇぇえええ！」

空を見上げ，炎に包まれようとした瞬間だった。
炎の隙間から，闇雲に走り回る亜希子さんが燃える髪を振り乱し突進してくるのが見えた次の瞬間，体が突き飛ばされていた。
思わず，息を吸い込む。炎が唸る高温の空気を一気に吸い込んで喉が焼ける。途切れた口笛。炎の風が止んでしまった。
飛ばされたまま，盛大な水音を立てて噴水の中へ転がり込む。

「ひいいいいい！」

絶えない悲鳴と，異臭。
助けようとする，通行人。
噴水に突き落とされた俺は，浅い底に手をついて起き上がる。
あぁ，死に損ねたんだ。
そう理解するのは，早かった。
悲鳴を上げて燻る服をもみ消そうと，踊り狂う錯乱状態の亜希子さんは，走ってきた公園事務所の関係者らしき男性達に取り押さえられていた。
チリチリになった髪を振り乱し，赤く腫上がった顔をさらに醜く歪ませて，俺を指差して喚いている。
あぁ，神様。
俺は死に損なったんだね。

生臭い噴水の水が滴り落ちる前髪を上げて，ため息をつく。

「あぁ……」

通行人の優しいおじさんに引っ張られ，びしょびしょの俺は噴水から助け出される。

狂った女が焼身自殺をし損ねて，まき沿いを食らった哀れな高校生に見えるんだろう。

周りの大人が口々に「大変だったね」「火傷は酷いかい？」と気遣ってくれる。

違う。酷いのは俺。

狂っているのは，俺かもしれない。俺が狂ってるのか？　いいよ。もう。狂っているなら，それでいい。

でも，俺はこれからどうやって生きていけばいい？　狂ったまま，大切な人がいない世界で，こんな世界で生き続けなきゃいけないのか？

「大嫌いだ」

俺を指差し喚く女に，呟く。

青が濃くなった天頂を見上げ，呟く。

「大っ嫌いだ」

この力も。この女も。燃やして消し去ろうとした俺も。失敗してしまった，愚かな道化の俺も。

美しすぎる，この青い空も。淡く微かに光る星も。

全ての存在を作り出して，この時間を眺めているだろう，存在も。

あんたなんか，大嫌いだ。生きろという，残酷なあんたなんか，大嫌いだ。

神様なんて，大っ嫌いだ。

39　最悪の日の始まり

「だから，早く移動しようぜ！」
「テリンがまた具合悪いみたいだし，無理ですよ」
「だから，あいつは置いてくんだよ！」
「置いていくなんて出来ません！」
「姫さんも，今回はオイラの話を聞いとくれよぉ！」
「少し黙れ！」

思わず怒鳴ってしまい，ミルとシンハが驚いて俺を振り返る。
驚き固まった二人の顔を見て，怒鳴った自分に嫌悪。
何やってんだ，俺。
深く息を吐きながら，両手で顔を覆う。

「ごめん。少し苛々してた。顔，洗ってく」

静まり返った場が苦しくて，土間の入り口にかけてあった手ぬぐいを掴んで外へ出る。
板間で目覚めないままのテリンを見る事も出来なかった。
朝から風もなく，暑くて澱んでいる空気。まるで，朝からのこの家の中の雰囲気を具現化したような重苦しさ。
このまま，サウナのような暑苦しく重たい空気がレンガのように，重なり重なり押しつぶしてくるんじゃないか。
馬鹿げた空想に，ため息。
俺，何を現実逃避してるんだよ。

「ハルルン，ごめんな。その」
「シンハが謝るなよ。俺が勝手にイラついてんだから」

後を追ってきたシンハを振り返らず，井戸に向かって歩き続ける。
心配してく気持ちが，シンハから伝わってくる。これが双子星の由縁だろうか。お互いの心の波を感じる事が多くなった。
と事は，俺の苛々を感じてるんだろうか。悪い事してるな。

「どうしたんだよ。いつも変だけど，今朝はかなり不機嫌だし」
「そりゃね」
「何だよ。昨日は目出度く返歌の儀式もしたろ？」
「夢見が悪かったんだよ」

水を汲み上げる為，井戸の釣瓶に力を込める。
井戸底の水音を聞きながら，思わずため息。
よりによって，何であの時の記憶が出てくるんだろう。

「俺を育ててくれたばあちゃんが，死んだ頃が夢で出てきてさ。あの頃の俺は少し情緒不安定で，思い出すと今でもおかしくなるんだよ」
「ばあちゃん，死んだのか？」
「みんな，死んでるよ。でなきゃ，惚れた人を，追って，気軽に異世界，に，来れないよ」

妙に区切って，全身の力を使って水を引き上げる。
木桶の水を桶に流し移し，乱暴に顔を洗う。
一時の清涼感。手ぬぐいで擦るように顔を拭くと，少し安心する。
悪夢も擦り落とせたような錯覚。

「大丈夫か」
「大丈夫だろ。ここで文句言ってもしょうがない。だから何で移動するか話せよ」
「ここで？」

「テリンの事。なんで重傷人を置いてくなんて言うんだよ。ミルの前で話せる事か？」
「あの姫さんには，キツイな」
手ぬぐいを帯の合間に挟み込んで腕を組むと，シンハは鼻を鳴らして俺の横に座った。
袴から出た足首に，シンハの毛がフサフサと触れる。
見上げる空は，今にも雨粒を落としそうなほど重く暗くなっている。
洗濯物，乾かないな。水も，甕一杯に汲んでおかないと。夕飯の山菜も，雨が降り出す前に摘みに行かなくちゃ。
俺，異世界に馴染んできたなぁ。
妙に場違いな考えが浮かび，軽く頭を振る。
さっきから現実逃避しすぎだ。

「昨日の夜，オイラが言った事を覚えてるか？」
「今夜だけだぞってか」
「今夜は新月だからな」
「新月だと何かあるのか？　そりゃ，夜は星明りだけになるけど」
「そうだよ。月の光も届かない。しかもこの天気だ。今夜は真っ暗の闇夜だぞ」

確かに，暗いのは嫌だ。ここには蛍光灯も懐中電灯もない。植物系の油を燃やして得る明かりは，酷く心細い。囲炉裏の明かりにも限度がある。

「違う。暗くて困るって話じゃねぇよ。闇夜は呪術を仕掛けるに最高の好条件だ」
「そうなのか？」
「ハルルンや姫さんの使うような呪術には関係ねぇ。二人とも精

霊に好かれてるから，闇夜だろうが真昼間だろうが，大丈夫だ。でも，心に邪なもん抱えてるもんは違うんだよ」

神苑の森の中から遠吠えがあがるが，その悲しげな声色に思わず顔をしかめた。

何て切なそうに，心配げに泣いてるんだ。

つられるように，複数の遠吠えが森のあちこちから上がりだす。

「あいつらも，怖がってる。判るか？」

「心が邪な奴らが来るのか？」

「あぁ」

心が邪な奴ら。

悪いなと思いつつも，浮かぶのはあいつらしかいない。

「深淵（しんえん）の神官達か」

「闇夜は，神苑の星は動きづらい。妖獣（ようじゅう）は闇の影響が大きいけど，玉獣（ぎょくじゅう）は元々が光の雫だからな。かといって，闇夜に精霊を動かすには，闇夜を味方につける力が必要だ」

「闇夜の，闇夜を纏う……金星の姉神（エレシュキガル）……」

訳の判らない単語が出てきて，思わず口を覆う。

何だ，今の。

「おう。それそれ。金星の姉神（エレシュキガル）の眷属だよ。冥界の女王だ。強力なんだけど，それを使えるのは深淵（しんえん）の神官どもぐらいだからな」

シンハの注釈に，頭をかきむしる。

自分の知らないはずの事なのに，勝手に記憶が喋りだした。こんな気持ち悪い事はない。

「辺り一帯で守りに入ってる玉獣の力が弱まり，闇夜の精霊が力を発揮出来る。それが今夜なんだよ」
「それとテリンと，何の関係があるのか」
「テリンは，蜘蛛使いだ」

背中に氷を落とされた。
心臓が一瞬だけ，止まりかける。
真っ黒になる視界に，恐怖の記憶だけが蘇る。
縛られる。締め上げられる。魂を喰われる。

「姫さんが慕うのに，こんな事言いたくねぇよ。でも，テリンはハルルンを深淵の呪術で縛ろうとした。覚えてるだろ？」
「なんでテリンなんだよ。シンハも知ってるだろ。テリンはミルの大事な仲間だ。父親みたいな，大事な先生でもあるし保護者でもあるんだぞ」
「判ってるよ！　でも，あいつオカシイんだよ。気配が，時々消えるんだよ」
「……は？」
「ここんとこ，特に弱ってる。その度に，水のニオイと死臭がするんだよ。今日は，ほとんど気配がしないし」
「寝てるから，とか」
「そういうんじゃ，ねぇよ」

ブルンと，身震いして尻尾を妖怪アンテナの如く立てるシンハは，本当に何かを恐れているようだ。
俺が知る限り最強の玉獣のシンハが恐れる相手とは，何だろう。
背筋に寒気が入ったまま，両手で自分の体を抱え込む。
何が起きるんだ。何が起きてるんだ。
何も判らないけど，まるで悪夢が続いてるような錯覚に襲われる。

あの女が出てくる悪夢を見た時は，大音量で音楽をヘッドホンでかけながら酒を飲んで寝ていた。
そうやって悪夢から逃げていた。
泣き叫ぶような，鼓膜が破けるほどのラフマニノフ。狂うように頭を振って聞き入ったロック。
でも，ここで悪夢が襲ってきたら，どうやって逃げればいいんだ
ここには，酒もない。ステレオも，パソコンもない。
しかも，ここは異世界。夢ではない現実だ。
この先には，悪夢のような現実が待ち構えている。
今まで逃げようと，何度も試みて悪夢になった現実が待っている。

「何でこうなるんだ……」

思わず零した言葉に，シンハは緑の瞳を真っ直ぐに向けてきた。
何も怖がるな。
シンハの心の声が，はっきりと存在していた。

オイラがここにいる。ハルルンは一人じゃねぇ。

「ずっと。シンハも，ずっと俺の傍にいてくれるか？」

緑の瞳が微笑んだ。
可笑しいように，愛しそうに。
その笑みに，俺の心の怯えが収まっていく。
震え上がっていた心が，縮こまった心が，落ち着いていく。

「ずっと一緒だった。ずっと待ってた。ハルルンと，ずっと一緒だ。当たり前の事だ」

そうだ。
シンハは世界。
創世の瞬間に零れ落ちた星の欠片。天地，白と黒，光と影に分かれるその瞬間に生れ落ちた，清らかな気。星の雫。
だから，ずっと一緒だった。遠い遠い世界の始まりに。
だから，異世界に行った俺をずっと待っていた。あの灰色の空を見上げてくれていた。
だから，これからも一緒だ。
これは当たり前の事。星の定めなのだから。
俺達は，双子星なのだから。

「この世界の終わりまで，ずっと一緒だから泣くな」
「泣いてない」
「嘘つけ。ちょっぴり泣いてただろ」
「泣いてないって」

過去も現在も未来さえも。この世界が終わるまで，一緒。
なんて甘美な契りだろう。
一人ではないという事は，なんて幸福感を感じさせるのだろう。
この瞬間にも，「なんて事，あるのかな」と疑ってしまう俺にも感じる，震えるほどの幸福感をもたらす響き。
一人ぼっちを覚悟して，一人で人生を歩んでいく決心をしていた俺には，蕩けるほどに恍惚感。
こんな感じ方をしてしまう俺は，なんて偏屈な奴だろう。

「大丈夫か？　やっぱハルルン変だ」
「大丈夫だよ」

この幸福感を感じられた。
悪夢が現実になっても，正気を保てる自信が少しついたよ。

きっと，俺は壊れない。一緒にいてくれるのなら。本当に，本当に傍にいてくれる存在があるのなら。
俺には，シンハもいる。何より，ミルがいてくれる。
記憶の底の恐怖が現実になろうとも，俺は踏みとどまれる。
この狂気に，付き合ってくれる存在がいるのならば。

「さぁ，テリンのそばに行こう」
「だから，逃げるんだってば！　話聞いてたのかよっ」
「逃げても無駄なんだ」

歩き出した俺の足元に，不安そうに寄り添うシンハを撫でる。
このふさふさの体毛は，なんて心地いいんだろう。心強いんだろう。

「テリンの後ろに深淵（しんえん）の連中がいるのなら，全て無駄だよ。蜘蛛の糸は，何度死んでも俺の魂を見つけては縛り続けた」

そう，何度でも。
何度生まれ変わっても。魂に刻み込まれた，この恐怖。

「だから逃げても無駄なんだ。もう逃げるのは嫌なんだよ」

この恐怖に，俺の意識の芯まで囚われない今のうちに，蜘蛛の糸は断ち切らなければ。
恐怖は，何度も再現されてしまう。そんな恐ろしい事は，もう，もう二度と体験したくない。

「蜘蛛退治だ」
「姫さんが慕うテリンだぞ！　どうするんだよ！」
「どうするかは，まだ考えてないけど……。とにかく何とかする

んだよ。蜘蛛は，巣に虫がかかると牙をむくんだ。俺達は，もう，蜘蛛の巣に引っかかってるんだろ？　なら，牙を剥かれるのは時間の問題じゃないか」

周到な，その性格。甘い平調の声で，真綿で絞め殺すような残虐さ。

あぁ，思い出していく。記憶が，恐怖で開かれる。

俺の中の複数の記憶と意識が，蠢いていく。

「あいつは……アイは，大切なものを奪って身動きさせなくして縛るんだ」

「アイって誰だよっ！」

「俺を縛ってた奴……思い出した。思い出したくなかった」

一番思い出したくない事を思い出してしまって，手を握り締めた。爪が皮膚に食い込むまで，強く握り締める。

分厚い壁の向こうから囁くあの声を思い出し，思わず鳥肌になった腕を見て唇をかむ。

≪　貴方は，エリドゥと深淵（しんえん）の繁栄の為にだけ，存在しているのですよ。辛抱なされませ　≫

忘れられない，この言葉。

あの男がこの世界に，この時間に存在するのなら，今ここで一番危険なのは，ミルだ。

俺が一番大事な存在。二つの世界で，最も大切な想い人。

ミルを，あの男に触らせてなるものか。

39　最悪の日の始まり（後書き）

本文中に『金星の姉神』と出てきます。また作品中に使用しているのはシュメール神話に出てくる神々の名前ですが，本作品と現実世界は何の関係もありません。この場を借りて，お断りさせていただきます。

また，作者の不勉強さで間違いがあるやもしれません。

ご指摘，受け付けております。

40　底から伸びる糸

昼近くのはずなのに，すでに夕方のように薄暗い。そして，家の中は夜のように暗い。土間にはすでに油を入れた小皿に明かりが灯されていた。

足早に戻った俺を見て，水がめの前で安堵の表情をするミルの手には水差し。

思わずその手から奪い取ると，ミルは眉をひそめた。

「テリンが水を欲しいって言ったのか？」

「えぇ。さっき目が覚めたんです。まだ具合が悪いようなので。ハルキはもう，大丈夫ですか」

「あぁ，うん。それより，テリンの傍には行っちゃ駄目だ」

「ハルキまでそんな事言うんですか？」

さっき，シンハが「テリンから離れろ」と言った事を根に持っているのだろう。足元のシンハを軽く睨み，シンハは困ったように俺を見上げた。

まいったな。

思い出した記憶で慌てて戻ったものの，テリンと深淵（しんえん）の呪術をどうやって説明すべきか。

そもそも，テリンがどうして深淵（しんえん）の呪術を使うのか。

証明するものはなく，全ては憶測の話だ。

「雨が降り出す前にやるべき仕事は山積みなんです。早く持っていかないと」

「いや……ちょっと話があるんだよ」

「どんな話なんですか」

珍しく，怒ったような声をだす。
困ったな。
薄暗い土間で，二人と一匹で押し問答してる場合じゃないんだよ。

「これは俺の予想なんだけど。あくまで，俺の考え。はずれてるかもしれないんだけど」

念入りに前置きをして，深呼吸。
頭の中の立体迷路を，何とか解きほぐしながらミルの心を刺激しないように話さなければ。
これは難題だ。

「ずっと前，ダショーの魂は深淵（しんえん）の神殿に何度も囚われたって言ったよね」
「え，えぇ。まぁ。でも，そんな事ありえないでしょう」

突然変わった話題に，薄暗い中でもミルが眉をひそめたのが判る。
視線はまだ俺が奪った水差しのまま。

「理由なんか判らない。けど，俺の記憶の底には確かに縛られた光景や恐怖がある。それこそ，何度も何度も。この世界に来てから，妙に記憶が戻ってきてるけど，幾つもの記憶の中に確かに縛られた恐怖があるんだよ。蜘蛛の糸で何度も縛られたんだよ」
「蜘蛛の，糸？」

ミルの視線が，水差しから俺に移る。
僅かに首をかしげてから，目を見開いた。

「まさか，ハルキは蜘蛛が苦手なのはそのせいだと？」
「そうだとしか思えないんだ」

「でも，蜘蛛の糸でどうやって魂を縛るのですか？」
「そりゃ，呪術が具現化したのだろうなぁ。オイラは人間の世界の事詳しくないけど，深淵には秘密がたんまり有りそうな気がする。だろ？」
「それはそうですが。でも，蜘蛛のような呪術とテリンに何の関係があるんですか」

援護射撃に入ったシンハに，はっきりとミルは否定した。
考えたくもない。そう言うように。
俺は残酷な事をしようとしている。そう判っているけど，言わざるえない。
これは，キミの為なんだ。そう何度も心に言い聞かせて。

「俺は確かに縛られた。それに，テリンに縛られかけたんだ」
「まさか！」
「テリンを助けてここに来たあの日，俺は青い蜘蛛の糸に縛られかけたんだ」
「それでは，テリンが深淵の秘術を使ったと？　テリンは深淵の間者だと？」
「いや，そうは言わないけど……不審な事があるんだよ」

シンハの言う，水のニオイ。
市場で出会った少女の，「このおじさんしんでるよ」という言葉。
時折する，酷い死臭。
全てを繋げていけば，認めがたい事実が出てきそうだ。
ミルの薄桃色の唇が，かみ締められて真っ白になる。白い頬に赤みが入っていく。

「ハルキも知っているでしょう？　テリンは，テリンは私の師匠です！　親であり，唯一の家臣であり，仲間です！それなのに，知

っているのに，そんな酷い事を言うのですか！」
「違う！　そうじゃなくて」
「何が違うのですか！　テリンは大事な仲間ですよ！　私は，テリンがいなければ存在できなかったのに！　そのテリンを疑うなんて，何て侮辱……！」
「テリンを侮辱するわけないだろ！」

思わずミルに大声を出したと同時に，閃光が走った。
そして，空気を轟かす雷鳴。天の水甕をひっくり返したように，一斉に始まった雨音。
まるでフラッシュのように映し出されたミルは，泣きそうな表情をしていた。
絶え間なく低く流れる雨音に沈黙を支配される。

「俺は，ミルがテリンを大事にしてるのを，ずっと見て知っている。俺も，テリンを頼りにしてきた。そうだろう？」

ミルを泣かしたくない。
まるで生徒に言い聞かせるように，俺は声を落ち着かせ頭のスイッチを入れ替えた。
そう。怒っては伝わらない。怒るのではなく，諭す。
大学で教授に言われたことを，ぼんやりと思い出しながら感情を律していく。

「だから認めたくなかった。テリンが俺を縛ろうとしても，テリンを信じたかった。だから，今までミルには言わなかった」
「じゃあ，なんで今頃こんな事を言うんですか！」
「姫さん，今日は闇夜だ。今まで神苑の玉獣達が守ってきたここも，闇夜では俺達玉獣の力が弱まって完全に安全じゃねぇ。その上，テリンの様子がおかしい。気配が変わってきている。何か仕掛ける

なら今夜なんだよ。いや，今だって雷雨で夜の闇になってきてる。危険なんだよ」

「シンハ……」

薄暗い中でも，ミルが小刻みに震えだしたのが判る。

思わず，水差しを持っていない片手でミルの肩を掴んだ。

「大丈夫。テリンが何で深淵の呪術が使えたか，それが判れば何とか出来るよ。とりあえず，テリンは目が覚めたんだろ？」

「え，えぇ，えぇ。そうです」

「それなら，直接話してみよう」

「ハ，ハルルン馬鹿だろ！　本人に聞いても否定するに決ってるだろ！」

シンハが尻尾を俺に叩きつけての一喝に，おれは頷く。

昨日，市場で遠まわしに聞いたが，否定された。いや，あれは何の事かすら判らなかったようだ。

それでも，夜にシンハと向かい合った時にテリン本人が明言した。

「昨日の夜，テリンは認めたじゃないか。明日は新月，今宵が最後の覚悟は出来ていると。確かに言ったじゃないか」

「そりゃな」

「そんな事をテリンは言ったのですか？」

ミルの声が，僅かに震えている。

「それとなく蜘蛛の呪術を聞いた時は否定されたけど，今夜何か起きる事は知っていたんだ。テリンは何か知ってる。何か隠してる」

「そういう事だよな。姫さん，大丈夫か？」

俺に投げつける声とは比べられないほど，優しい声色でシンハがミルに声をかけた。
肩にかけた手の比良からは，小刻みの震えがとまらない。
もう一度雷鳴が鳴れば，泣き顔のミルが照らし出されるかもしれない。

「ミル，辛かったらここで待っていて」
「ハルキ……」
「無理しなくていい。俺が，テリンと話をする。だから，ここで待っていて」
「≪　相変わらずお優しいですね　≫」

ミルが息を呑んで薄暗い奥の座敷を凝視していた。
振り返る首が，悲鳴を上げる。振り返りたくない。
足元のシンハは，体中の毛を逆立てて唸りだす。
豪雨で舞い上がった土煙のニオイが，悪夢を現実だと突きつける。

「≪　それとも，クマリの姫宮だけにお優しいのですか？　お二人は夫婦の誓いを立てられましたからね。いや，昨晩の返歌の儀は感動でしたよ　≫」

テリンの体が，薄暗い板間を歩いてくる。
ぎこちなく左右に体を揺らして歩く様子は，まるで操り人形。
テリンの体を吊る青い糸が見えるようだ。
そう，あれはテリンの体を動かす誰かの声。

「≪　まずは祝いの言葉を述べるのが先でしょうか　≫」
「テリンじゃない！　何奴！　」

ミルの悲鳴のような声に，俺の体中の筋肉が硬直する。

見開いた目に，研ぎ澄ました耳に，逆立った神経に，平調の声が撫でていく。

「≪　その青い瞳が再び見れるとは，長生きはするものですね。ダショー・オユン。オユントゥルフールムン。あぁ，今はハルキと名乗りましたね≫」

それが俺の名前。数ある中で，自ら命を絶った俺の名前だ。閃光のように，また記憶が少し蘇る。あの忌まわしい小部屋の記憶が。

「あんた，やっぱりアイだな」

４０　底から伸びる糸（後書き）

オユン～なる名前はモンゴルの人名から頂きました。貴方の隣人友人知人に同じ名前の方がいらっしゃっても，それは偶然です。はい。

次回　２３日　水曜日に更新予定です。

41　一つの真実　一つの理由（前書き）

ここから数話，ゾンビにトラウマがある方はご注意を。
作者自身，グロいのが嫌いなのでソフトに描いてますけど。

41　一つの真実　一つの理由

「≪　おぉ！　記憶がございましたか。四十余年と経っても私を憶えていてくださるとは光栄。その青い瞳が懐かしゅうございます。今生のダショー様も美しい浄眼をお持ちだ。心が洗われるようです。その青をよくお見せ下さい　≫」

「……あんた，まだ生きてたのか。もう，いい年だろ」

「≪　泣いていたオユン様にお会いしたのは，上位神官になったばかりでしたからね。今はもう爺ですよ　≫」

「何故，何故にアイ執政官殿の声がテリンからするのですか！」

ミルの悲鳴のような声に，テリンの土色の顔が，にっこりと微笑む。

生気のなくなった肌が動く様が，おぞましい。

昨晩まで生きていた人が，今までと違う笑みを浮かべていう様が恐ろしい。

「執政官？　深淵（しんえん）のトップじゃないか。出世したんだな」

「≪　恐悦至極でございます　≫」

「褒めてない」

ミルを背に隠し，板間のテリンを睨みつける。

あれは，テリンの体を持ったアイだ。かつて，俺を縛り付けた張本人。

その記憶が，俺を震えさせる。恐怖を呼び覚ます。

握り締めた水差しの中で，水が激しく水面を揺らしている。

「執政官様が，何でテリンの体使ってるんだ」

「≪　もう爺ですからね。深淵（しんえん）からクマリへ出ること，叶いませ

ぬ。それでも，今生のダショー様に何としてでもご挨拶を致したく，この男の体を使う事にしたのですよ。この男なら……　≫」

ぽんぽんと，テリンは自分の腹を叩いた。

その手は，やけに骨ばっている。昨日，あんな細い手をしていただろうか。

「≪　姫宮が神殿にいた時からの馴染みですからな。いや本当に，この男は話が判る　≫」

「テリンに何をした！　」

背後のミルが，土間を素早く横切り壁に立ててあったつっかえ棒を掴む。

空気を切る低い音を響かせ，棒の先端をぴたりとテリンに定めた。

一連の流れるような動作に，後頭部で結い上げた黒髪が揺れる。

「≪　ほう。姫宮の腰に刀がないとは。随分と和やかな日々だったようですね　≫」

「テリンは，テリンの心はどこにある！　」

「ちょっと待て！　まさかテリンにかけたのは」

ミルの問いに，溢れ出ようとする恐怖を抑える為，思わず額を押さえた。

恐怖の奥にある記憶が，幻影のように脳裏を駆け巡る。

深淵が秘密裏に鍛錬していた，闇の呪術。人心すら掌握する為に，ダショーの魂を完全に掌握する為に繰り返し研究していた呪術の数々。

吐き気のする内容を思い出し，その光景が閃光のように蘇る。

「……傀儡（かいらい）術か？　」

「≪　ほう。ダショー様には内密で鍛錬をしていたのにご存知とは。我らの結界も穴だらけですな　≫」
「精霊は俺の味方なんだぞ。秘密も何もあるか」
「≪　それは然り　≫」

水の精霊が，風の精霊が常に怯えていた。
神殿に併設されていた病院で，末期の病人が消えていくと。
引き取り手のない病人を使って，魂の存在を縛る呪術を繰り返した深層の秘密部屋の出来事。
そうだ。俺は水を覗く度に，水の精霊が映すその光景を見ていた。

はやく　ここから　にげて

精霊達の声が聞こえても，逃げる手段を奪われていた。
何故なら家族を，人質に囚われていた。
その隙に，俺は蜘蛛の糸に絡み縛られた。
いつもの手段だ。
大切なものを手中に入れ，呪術をかける。
それなら。

「テリンは，ミルの為に術にかかったんだな」
「≪　この男は姫宮の事しか考えてない。利害が一致したのですよ　≫」
「テリンは，承知したのか」
「≪　姫宮の安全を保障するなら，自分の死後にこの肉体をどうしても構わないと　≫」
「嘘です！　そんなの，嘘だ！」
「≪　姫宮はもう少し，御自分の価値に気づかれた方がよい　≫」

しゃがれた声が，雨音を制するように響く。

この空間を支配するように，堂々と響く老人の声。
四十余年経とうと，声の響きは変わらない。

「≪　この男にとって一番大切なのは姫宮であり，クマリではない。後李に国を奪われたクマリを再興しようなどとは，思っていなかったようですよ。深淵（しんえん）に姫宮の安全を保障させる。それが代償≫」

「嘘だ！　テリンはいつだって，クマリの再興を願っていた！　国を奪われた民の旗頭になれと，族長として常にクマリを考えろと」

「≪　しかし，最近の姫宮は女になられましたな　≫」

「……おんな」

「≪　貴方はクマリを再興すると言っているが，ダショーとの恋に夢中だったではありませんか　≫」

「違う！　」

「≪　姫宮自身，クマリ再興が目的ではなくなってきている。違いますかな　≫」

「私……私は」

揺れるつっかえ棒の先端が，ミルの動揺を現しているよう。
その途端，俺の中の何かが外れた。

「黙れ！　黙れ黙れ黙れ！！　ミルまで縛り上げるな！　」

地獄の蓋が開く。キツク封印していた記憶の感情が蘇る。湧き上がる。飲み込まれる。

「こいつの言葉を本気で聞くな！　アイはそうやって，人の心を縛って人質にしていくんだっ」

「≪　これはこれは。人聞きの悪い　≫」

「傀儡術がどんなもんか，俺は知ってる。死に行く者の魂を体から退かして肉体を乗っ取る術だった」
「≪　ほう　≫」
「ハルキ……ではテリンは？　テリンはどこにいるの？！　」

記憶が止まらない。
俺の意思に反して，記憶はどんどん再生されていく。
まるで夢を見ているようだ。
どんな悪夢でも，苦しくて目覚めたくても，眠り続ける夢のよう。
もがいても唸っても，霞をつかもうとする曖昧さ。
自分の意識なのに，自分も思うとおりにならない。
目の前で小刻みに震えても，決してテリンから狙いを外さないミルの強さだけが，現実に引き止めてくれている。
それなのに，俺は残酷な推測を口にする。

「テリンは，初めて会った雲上殿（うんじょうでん）で瀕死の状態だった。もう……あの時には術は施行されていたんだな。テリンの魂は，抜けかかっていただんだな」
「そんな！　」

思わずミルの肩を掴む。細い肩が，震えている。

「確かにテリンはかなり弱っていましたけど，玉獣（ぎょくじゅう）を呼び出せないほど弱って……まさか，すでにテリンの玉獣（ぎょくじゅう）はいなかったと？　」

テリンは移動の時に玉獣（ぎょくじゅう）を呼び出せずにいた。怪我の治りも遅かった。
まだ体力も気力も完全に回復していないからと，玉獣（ぎょくじゅう）自体かなり衰弱しているから休ませていると，そうテリンは言っていた。
テリンは，事の全てを判っていたというのか？

「≪　クマリの残党が最後の望みを賭けるのは，異界へ渡ったダショーしかいない。生憎，我らは異界へ渡る術はわからぬ。だが神苑と玉獣を知り尽くし，あの創世の白鷹と接するクマリの民なら，異界渡りも出来よう　≫」

「だから，深淵の神殿は，我らに援軍を約束した……と？　ハルキを異界より連れ出す為に，後李と戦をしてでも異界へ渡る決意をさせる為に，援軍を約束したと？！　」

ミルの声が震えていた。

自信も誇りも，崩れ落ちていく声。

「深淵の神殿は，我らに後李の猛攻の中ダショー様を異界より生還させ，我らから奪おうと算段していたと？！　」

「≪　この男を使えば，造作ない　≫」

ひらり，テリンの手が宙を舞う。

土色の肌が裂けるように，赤黒い口が笑う。

鼻がもげるような死臭が，豪雨で湿気た空気を伝って漂ってきた。

足元で，全身の毛を逆立てたシンハが微かに身震いをする。

「≪　最後のクマリ族族長の姫宮が，最大の信頼を寄せるこの男の体を使えば，造作ない。後李との戦闘に紛れて重傷を負った所で攫い，条件を提示すれば簡単に落ちましたね　≫」

「テリン……っ」

震えるつっかえ棒が，土間に落ちた。

稲光が，涙を流して立ち尽くすミルを浮かび上がらせた。

「では，では，私は一体，何をしようと……。国を失い，民を失

い，家族をも失い，残された希望を掴もうと異界へ渡っても……これら全てが深淵（しんえん）の計算の中で踊らされた事だったと？」

「≪　先の後李とクマリの戦でダショー様の魂を異界へ見失った我々には，そうする他なかったのですよ　≫」

「そこまでして……ここまで大きな犠牲を払ってまで，何で俺の魂を縛りつけようとするんだ！」

崩れそうなミルを片手で抱きしめ，テリンだった肉体に叫ぶ。

死臭を放つ人形を。

「≪　当然でしょう　≫」

人形は，笑顔を消した。

白く濁った目玉が，俺を映す。

「≪　世界中の精霊を思うが侭に出来る人物を，野放しに出来ますか　≫」

皺皺に皮膚がしぼみ，肉が溶けてだした指先で，俺を指した。

「≪　一国を簡単に滅ぼさせるほどの力を，放置できますか。なれば，我ら神殿がその危険な魂を縛り付けねばなりません　≫」

焦点があってない濁った目に，正義の炎が燃え上がっていた。

42　その声は甘く響く

思いもしなかった言葉に固まる。
激しい雨の音と落雷の音だけが，時を埋めた。

「≪　世界を掌握出来る力を持つ魂を野放しにしておけましょうか。共生者ならば，その魂の価値に気づかない者はいない。世界の平和の為に，貴方様は深淵の奥底にいなければならないのです。我らには寿命があり死んでゆくのに，死ねば記憶は失うというのにダショーの魂と記憶は何度も蘇る。若く美しい青い瞳で何度も何度も蘇ってくる。厄介な事に，精霊に愛された最強の魂は，偉大な魔術師エアシュティマスの記憶を持ち合わせ，何度も蘇る。これが危険ではないと言えましょうか。生まれ変わった人物の性格や嗜好で，世界が地獄に落とされるやもしれないのに≫」

「俺は，厄介な危険人物だと？　」

「≪　もちろん，民衆の信仰の対象でもありますがね。それに，ダショーという存在を抑えた深淵の神殿の影響は大きいのはおわかりでしょう　≫」

ダショーが深淵に縛られた意味。
ダショーが神聖だからとか，宗教的な意味は深淵の神殿にはなかった。
その魂は，危険だから。その力は世界のパワーバランスを乱すから。そして，民衆の心をダショーという存在を使って掌握するために。
始祖『エアシュティマス』の記憶を持ったその存在は，他国をも押しのける。それ以前に，この世界の安全すら脅かす。
思いもよらない言葉に，眩暈がする。
二本足で踏ん張るも，体の芯から震えてくる。

俺は，異世界にも居場所がないのか？
ミルを追ってきた異界のココにも，俺の居場所はないのか？
不可解な能力を持った俺は，日本でも異質な存在だったのに。この世界でも俺は異質なのか？
俺がいけないのか？　クマリが滅んだのも，ミルとテリンの人生を狂わせたのも，俺がいたからなのか？
俺は，いなければよかった存在なのか？

「ハルルン！　外の様子がおかしいぞ！」
「……え」
「チクショウ！　雨と雷ですっかり気がつかなかった！　人間くせぇぞ！」

立ち尽くす俺達の前に，シンハが全身の毛を逆立てて飛び出した。牙をむき出し，土間に鋭い爪を立てる。

「姫さんしっかりしなっ。テリンの体から爺を引っ張り出せ！爺にこれ以上好き勝手言わせてたまるかよ！」
「……外に何名いますか」
「雨の音が酷くてわかんねぇけど，両手で数え切れないぐらいだな」
「承知。ハルキは決してシンハから離れませぬよう」

薄暗い中，ミルがゆっくりとつっかえ棒を拾い上げる。
薄紅の小花が描かれた小袖を，捲り上げた。露わになる白い足首が，薄暗い中に浮かび上がった。

「この地上に残された清らかな気の欠片を魂に宿した白鷹の主様と，輪廻を繰り返し精霊の祝福を人々に分け与えて下さるダショー様。そして神聖な神苑（しんえん）をお守りするのがクマリの役目。深淵がダシ

ョー様を愚弄しようなら，我らクマリは相対す」
「≪　もはや従う臣下はおりませんよ　≫」
「だからなんだ」

雷鳴が轟く。
閃光に照らし出されたミルの顔に息を呑んだ。
涙で濡れた茶色混じりの青い瞳が，淡い光を放っていた。
まるで，蛍火のように微かで青い光。
俺がその美しさに一瞬見とれた隙だった。
片手に持った水差しが，ミルに奪われていた。
激しく水面を揺らし，溢れた水が放射線を描いて宙へ零れていく。
雫を撒き散らしながら，ミルは水差しをテリンに向かい放り投げる。
水滴が無数に散らばり，絶え間なく落ちる雷の閃光に宙を飛ぶ水滴が煌く。

「うぁぁあ！」

ミルが散らばる水滴の空間に飛び込んでいく。
放り投げられた水差しに気をとられた瞬間に，ミルが疾風のように飛び上がる。
板間を踏み込む音が大きく響いたと，同時だった。
電光石火。テリンの体がくの字に折れ曲がる。
空気を切り裂き唸るつっかえ棒が，テリンの腹部にめり込み吹っ飛ばす。
壁に激突して倒れるテリンを一目もせず，ミルは素早く板間の片隅に置かれた籐籠をひっくり返し床板を外し床底を探る。

「ハルキ。持っていて下さい！」

鋭い声と共に，一振りの刀を投げ渡された。
この刀は，何でいつも投げ渡されるのだろう。
大黒丸。
俺の生活が一変した，あの時と同じ。

「≪　この男の体に一打を食らわせるとは……いいのですか　≫」
「この体はテリンではない。自分でそう言ったではないか？　アイ執政官殿」

苦悶の顔を浮かべて起き上がろうとするテリンの目から，ドロリと正体不明の液体が出てきた。少なくとも，あれは涙ではないのだろう。
一段と，腐臭がきつくなる。

「この肉体は既にテリンの魂を宿してはいない。ならば，何を躊躇する理由がある」

冷たく感情の宿らない声に哀しみを感じた。声にならない叫びが聞こえる。幼子の泣き声が聞こえる。
青い蛍火の向こうにミルの涙が見える。

「深淵（しんえん）の神官どもに伝えろ。クマリの姫は最後の一人になろうとダショー様を守り抜くと」
「≪　そうは出来ませぬな。ダショー様の魂に蜘蛛の糸を結び付けねば　≫」

同時，雨粒と共に突風が吹き込む。
戸板が弾き飛ばされ疾風と共に，ずぶぬれの黒い影が幾つも飛び込んできた。
シンハが素早く俺を土間から板間に上げさせる。

呆然としたままの俺は，ミルに引っ張られ背に隠れさせられた。
この状況が飲み込めない。
俺は，危険人物で。
俺は，ミルとテリンの人生を無茶苦茶にしてて。
それでもミルは，俺を体を張って守ってくれている。
俺は，一体何をやってんだ。

「≪　目的を果たさせて頂きましょう　≫」

黒い影が，頭に深く被ったフードの奥から唸るような旋律を唄いだす。
地の底かた這い上がるような，重く響く合唱。
濃い霧が立ち込めるように，真っ黒い影が男達の足元から湧き出していく。
部屋の中を吹き荒れる風の精霊は，パニックになってますます暴れ飛び回る。

「闇の精霊かよっ！　きたねぇぞ！」
「声明を止めなさい！　止めなければ，執政官の命はありませんよ！」
「≪　おやおや。この身体に刀を刺しても，私は痛くもありませぬよ。この男の身体が無駄に傷つくだけ　私はヒラリと逃げ出せば良いだけの事　≫」
「……っ」
「≪　諦めなさい，姫宮。ダショー様。貴方が深淵（しんえん）にその魂を預けると約束するならば，姫宮と暮らす事を許しますよ。貴方は，もう誰も傷つけたくないでしょう？　深淵（しんえん）に来て頂ければ，姫宮の人生を狂わさずに生きていけますよ　≫」
「もう，誰も，傷つけずに？　」

甘い甘い誘惑の言葉。
ズタズタに切り刻まれた心に，アイの言葉が蕩けるように染み込んでいく。
イチゴ味の，シロップ。
脳天まで赤く赤く染める，魅惑の声色。

「ハルキ！　駄目です！　声明を聞かないで！　深淵（しんえん）に落ちては，生きながら絞め殺されるようなものです！」
「ハルルン！」

遠くなるミルとシンハの声。
飛び回る風の精霊の気配。

「≪　さぁ，ダショー・ハルキ様……　≫」

このまま，このまま流されてしまえ。
ミルと暮らせる。
例え飼い殺されても，ミルと過ごせるのなら。
それでも，いいかな。

両手に抱えた大黒丸が，床に転がり落ちる。
板間に落ちたその瞬間，鈴の音がこの場に響き渡った。

『　いつか，この世界を旅して回るんだ　』

誰なのだろう。
鈴の音が，記憶の中の誰かを呼び覚ます。

『　いつか，大好きな人と暮らすんだ。ささやかな日々の糧を分け合って，一緒に暮らすんだ　』

青い風が，身体の中から湧き上がる。緑の草原を吹き渡る風。揺れる茂み，木々の葉が唄いさざめく。絶え間ない水音と，星の瞬く囁き。

あぁ，あんた，ハルンツだ。

見上げた暗い天井に，俺がいた。

青い瞳を持った，少年。

これが，ハルンツの願いなんだな。

深淵に最初に捕まってしまった，昔の俺の残影が笑う。

あんた，何を覚悟していたんだ？

わざわざ深淵に落ちた理由は，何なんだ？　何の為に深淵に落ちたんだ？

こんなにも，あんたは自由を求めていたのに。ささやかな幸せを追い求めていたのに。

その願いが叶わず，何度も何度も生まれ変わったなんて。

「やっぱ，落ちない。落ちれない」

楽な道なんか選べない。

ささやかな願いなんだ。ただ，好きな人と人生を添い遂げたいだけなんだ。

贅沢も，名誉も，権力も，何も求めてない。

ただ平凡な毎日だけを望んでいるんだ。

この願いを，叶えたい。その為に俺は生まれたんだ。

俺の成すべき事は，深淵からの開放だ。

「アイ。お前，何も判っちゃいないよ」

床に落ちた大黒丸を拾い上げる。

一段と大きくなる声明に，俺は笑いかける。

黒い鞘から，大黒丸の震動が伝わる。
ずっしりと手の平にかかる重みが，記憶をさらに掘り起こす。
「判らせてやる。俺がどんだけ深淵（しんえん）が大っ嫌いか，判らせてやる」
既に穴という穴から，緑の液体を垂れ流しだしたテリンだった肉体に宣言をした。
このまま，こいつらを帰すものか！

４３　業火と涙（前書き）

火傷注意報発令。
トラウマがある方。ご注意です。

43　業火と涙

手の中の大黒丸の重みを，感じる。
俺の中の記憶が呼び覚まされていく。

「≪　これはこれは。記憶すら半端にしか思い出せていない貴方に何が出来る　≫」
「そうだな。俺は，記憶の全部を思い出してない。常識もない。でも，だから出来る事もあるんだよ」

異世界である日本に生まれたから，出来る事もあるはずだ。
俺は，乾いた唇を舐める。
ゆっくりと息を吸い，肺を膨らます。
小さく細めた唇に，全てを賭ける。

「ハルルン！」
「≪　ぅおお！　≫」

鋭い高音が空気を劈く。
空気中の水分が猛烈な速さで震動していく。吹き荒れている風が，瞬く間に熱を帯びる。
何事かと浮き足立つ黒ローブ達の声がぶれる。

「執政官様！」
「炎が！　水の精霊が踊って炎が！」
「何故に炎が！」
「≪　声明を止めてはならん！　≫」

唱えていた声明が途絶え，浮き足立つ黒ローブにテリンの身体が

叱るつける。
アイの意識が俺から反れた瞬間，俺は走り出す。
迷いなく，手の中の刀を抜き放ちながら確信する。
あぁ，俺はまだ狂っている。
学校帰りの公園で，あの女を燃やしかけた自分がまだいる。
自らも燃えて消えようとしていた自分が，まだいる。
水野。
俺，まだ死にたがってる。まだ狂ってる。
苦しいよ。怖いよ。哀しくて，辛すぎるよ。

「≪　ぎゃああ！　≫」

雷鳴と稲光。
同時に鳴り響き，テリンの身体に大黒丸を突き刺した俺を照らし出す。
振り返ったその背中に，俺は迷うことなく刀を突き刺した。
肉に差し込む感触が，粘性をもって刀身を伝わり落ちてくる。
どす黒い液体が，背筋を震わす。
激しくなる腐臭に，嗚咽する。
こんな俺に，吐き気がする。
俺は，また人を殺そうとしている。なのに，歓喜を感じている自分がいる。
このまま，終わろう。終わりたい。
あの時のように，そう泣き叫ぶ自分がいる。
楽になりたい。もう，何も考えたくない。辛いのは，もう嫌だ。
哀しいのも，苦しいのも，終わらせてよ。

「≪　何を！　何をなさいます！　≫」
「言っただろ。あんた大嫌いなんだよ」

手の平の大黒丸が，一際大きく震えだす。
大黒丸の震動が，確実にテリンの中のアイの魂を捕らえた。
逃がさない。このまま燃やしてやる！　テリンの身体と一緒に，燃やして魂を消滅させてやるっ。
嗚咽を堪えて，息を吸い込む。
燃えろ。燃えろ。全て燃えろ！
口笛を響かせるほどに，炎の風は吹き荒れる。
水の精霊は踊り狂い，風の精霊は飛び走る。
黒のローブは赤く彩られ，男達は舞い乱れ，絶叫の合唱が響き渡る。
苦悶の表情で大黒丸を抜こうと暴れるテリンの身体は，乾いた薪のように燃え上がっていく。
燃えろ。燃えてしまえ。
俺の袖に燃え移った炎が，腕を舐めていく。
そう。このまま燃えろ。

『死んではいけない。おまえは，まだ死んではいけない』

揺らめく炎の中に，青い瞳。
聞き覚えのある若い男の声。凛と澄み切った空気のような，その声。

『幸せになれ。必ず幸せになれ』

あんた，エアシュティマス？

「ハルキ！」

炎の中の声に気をとられた一瞬だった。
俺の身体が後ろへ引っ張られる。

尻餅をつく俺の前で，ミルが燃え上がるテリンの身体に飛び掛り大黒丸を引き抜いた。

「ハルルン大丈夫か！」

「何で大黒丸を抜くんだ！　せっかくアイを殺せるとこだったのに！」

「ハルキまで死んでしまいます！」

シンハが俺に覆いかぶさり，袖や裾に燃え上がる炎をもみ消す。

刀を宙で払い刀身に付着した液体を振り払いながら，ミルが怒鳴り返す。

「何を考えているのですか！」

「≪　おぅ！　おぅ！　身体が！　身体を貸せぇええ！　≫」

「きゃあ！」

アイの絶叫を上げ火達磨になったテリンの体が，ミルに向かってよろめく。

同時，炎に照らされたミルの影から麒麟が飛び出た。

「雷光！」

忠臣な雷光がミルの危機に飛び出し，燃えるテリンに体当たりを食らわす。

大きく炎をまとった身体が土間へ弾き飛ばされ，さらに黒ローブの男に襲い掛かる。

「≪　身体を貸せぇえ！　私が死んでしまう！　早よう貴様の身体を渡せぇえ！　≫」

「お，御戯れを！　私が死んでしまいますっ……ぎゃあああ！」

複数の男達が，火だるまのテリンが襲い掛かる男に小刀を突き刺していく。
迷うことなく，戸惑いを感じさせない機敏さで。
男達が，倒れる男を引きずりまだ雨が降りしきる外へ運び出していった。
燃えるテリンの身体だけが，踏み荒らされた土間に取り残される。
もう，テリンの身体は動かない。
肉が焼ける臭いが立ち込める。
宙に伸ばされた腕が，燃えていく。
絵筆を握りたかった，その手が燃えていく。

「……テリン……」

赤く照らされて一言，名を呟くミルの姿。
その横顔に正気が蘇る。
俺は，何をしようとしたんだ。
ミルの大切な人の身体を燃やそうとしていた。
目の前で，肉親のように慕っていた人の身体に，刀を突き刺した。

「ミル……ごめん，ごめん！　俺，俺，テリンの身体を燃やしてしまったっ」
「いいんですよ……。いいんです。これで，よかった」
「ミル」

炎を見詰めたまま，ミルは微かに微笑んだ。

「深淵（しんえん）の術に掛かってしまったとはいえ，最後はハルキに解放してもらったではないですか」
「解放，した？　」

「術から解放して下さった。ハルキの生み出した炎で，踏み躙られた肉体を清められた。これ以上の幸運はありません」
「そんな，そんなの詭弁だ！　俺はただ」
「あぁするより，他はなかった。テリンは，術に堕ちる他なかった」
懐から出した手ぬぐいで大黒丸に付着した液体をふき取り，テリンに向かって投げる。
あっけなく手ぬぐいは炎の舌に取られて燃え上がり消えていく。
「何としてでも私に会いたかった。そう，言ってました。雲上殿から逃げ帰って目覚めたあの夜，私の手を握って言ってくれたんです。異界へ渡った私が無事に帰ってくるのを確認しなければ，死ぬに死ねぬと」
炭化して崩れていく指先をみつめ，微笑む。
「ハルキと想いあった仲になった事を先代に冥土の土産に出来ますと，あの晩そう喜んでくれた。テリンは，ただ心配だっただけ。私の事が心配で，死んでも死に切れなかったのでしょう」
「死に切れない……」
残された想いが，死してなお身体を動かしていたんだろうか。
術に掛かることを止む無しと受け入れたのだろうか。
思い残したことは，もうないだろうか。
「さぁ逃げようぜ！　あいつら，外でなんか術を始めやがってるぞ！」
「えぇ……えぇ」

見開いたままの瞳を，固く瞑る。
そこに，青い蛍火は消えていた。
再び開かれた瞳は，いつもの茶色混じりの青い瞳。

「とりあえず，ここを出ましょう。大黒丸はハルキが持ってください。私は他の荷物を持っていきます」

刀を腰に差し，ミルは俺に大黒丸を渡すと燃え移りだした炎を避けて長持からいくつかの荷物を取り出す。

「お早く！」

ミルは素早く裏手の板戸を蹴り飛ばして，荒れる雨の中へ飛び込んでいった。

「テリン」

渡された大黒丸を，固く握り誓う。
俺は，ミルをずっと愛していく。
死にかけても俺とミルを祝福してくれたテリンに，答えるよ。
ここまでミルを守ってくれた貴方に，感謝するよ。

「ハルルン！　早くしろ！」

急かすシンハの声を背に受けながら，俺は深く深くお辞儀をした。
燃え崩れゆく，テリンの肉体に。その魂に。

「ありがとう，テリン」

その腕が崩れていくのを見届け，駆け出す。

冷静さを取り戻した風と水の精霊が，建物から飛び出していく後を追いかける。
熱に炙られた肌を，雨粒が叩きつける。豪雨のカーテンで周りが見えにくい。

「ミル！」
「こちらです！」

まるで水の中を走るよう。目の中に流れ込む雨を手の甲で拭っても，叩きつける雨水の量が半端ないからキリがない。
天を切り裂き大地に突き刺さる落雷の律動。雷鳴の旋律。
激しい天の音が大地へと轟くオーケストラ。
暗い中を無茶苦茶に走る俺達を稲光がフラッシュで照らし出す。

「シンハに乗ったら駄目なのかっ」
「呪術の罠だらけだから危険ですっ」

怒鳴るように会話をしながら，前を走るミルを必死で追う。

「上空に風が渦巻いてますっ。水の精霊もどんどん集まってきていてっ」
「大祓（おおはらい）をしちゃ駄目かっ」
「居場所がばれてしまいますっ」

確かに，雷は一向に収まる気配もない。むしろ，どんどん悪天候になっていく。
これは全て，深淵の神官どものせいなのか。

「こういう時は，地道に行くしかねぇなっ」
「そういう事ですっ。シンハも危険ですから影に入って下さいっ」

「オイラの心配してる余裕はなさそだぜっ」

突然，シンハが牙を剥いて前方に飛び跳ねる。
悲鳴のような声が響き，花火が飛び散る。
泥の中から大量の風の精霊が飛び出していくのを見て，冷や汗が雨と流れていく。
冗談じゃない。
あの風の中に閉じ込められたら痛そうだ。狂気に囚われた風の精霊に，体中を切られまくるのは間違いない。

４４　幸せが遠退いていく

「下がってください！」

瞬間，ミルの周りで風が巻き起こる。
突風が渦を巻き上げ，ミルの胸元に括りつけてあった風呂敷を切り裂く。油紙に包まれた中身が泥水の中に散らばる。
飛び散った荷物に，ミルが気をとられた瞬間だった。周囲から雨粒を切り裂いて風が巻き上がった。

「姫さん立てっ！」
「ミル！！」

いきなりの風の罠に驚き立ち尽くしている間に，さらに泥が吹き上がる。
何十本もの泥柱が立て上がり見る間にミルを包み上げ，その細い足を，刀を抜きかけた手を，縛り上げていく。

「≪　逃がしませんよ　≫」

豪雨のカーテンの向こうに霞む人影。その数の多さに唇をかむ。
増えてる。さっき押しかけてきた数より，ずっと増えている。

「ハルキ！　ハルキ逃げて！」
「≪　私は，やり方を間違えてしまいましたね。ダショー様の御力と相対する事など出来ぬのに。手痛い失敗をしてしまいました　≫」
「おまえ，おまえ，アイかっ」
「≪　先とはやり方を変えていきましょう　≫」

黒装束の男が，一歩前に出る。
泥で縛り上げられたミルに寄り添い，微笑む。
打ち付ける雨粒が，彼の身体から途切れない鮮血を洗い流し続ける。
さっき襲わせた手下なのだろう。俺と同年代の男が邪魔そうにローブを脱ぎ捨てた。
この手下の身体も，ローブのように使い棄てる気なのだろう。
口が裂くように笑うその顔は，先のテリンと同じ笑い方だ。

「≪　異界渡りをしたダショーを甘く見ていました　≫」
「ハルキ逃げて！」
「≪　返歌の契りをした相手を見捨てる非情な人ではないでしょう？　貴方は足手まといの怪我人を守ろうとする優しいお人だ。後李の軍人に蹴られても身を張って下さいましたな　≫」
「……お前を助けたんじゃないっ」

再び唇を細めると，男が口の端を吊り上げて笑う。

「≪　口笛はお止めなさい。我らを炎で包むと同時に姫宮も燃えますぞ　≫」

捕らえられたミルを囲むように，男達が動いていく。
罠に掛かった蝶を糸でくるむように泥で縛り上げ，食い荒らそうと集まる蜘蛛の集団のように。

「≪　異界で一体，何があったのですか？　あのような御技，歴代のダショーにはありませんだ　≫」

男は楽しそうに顎を撫でる。

目が，見開いたまま。
瞬きをしないで喋る人は，酷く恐ろしい。
化け物，だ。

「≪　それよりも，炎で人を燃やそうとするなど……恐ろしい。貴方には躊躇がありませなんだ　≫」
「何が言いたいっ　」
「≪　これが最初，ではないですな　≫」

アイの言葉に，固まる。
打ち付ける雨粒が，痛い。酷く痛い。冷たくなっていく。

「≪　以前，あのような御技をお使いになった事があるのでしょう？　しかも，人に対して炎を燃やされた経験があおりなのでは？　≫」
「ハルキっ」

視界が暗くなる。雨のせいだけじゃない。
ミルが見えない。見れない。
俺は，こんな事をミルに知られたくないのに。
心の底に，記憶に鍵をかけた奥底を，アイツに暴かれるのだけは嫌なのに。

「≪　見事な炎でしたよ。我ら熟練の術師ばかりですが，あまりの素晴らしさに圧倒されてこの様ですからね　≫」
「言うな……言うなっ……これ以上言ってみろ！　」
「≪　否定されないという事ですね。ふふふ　≫」

それは，勝者の声だった。
アイは，人質をとる。弱みを握る。そうやって，目的を果たす。

知っていた事なのに。骨身に染みていた事なのに。
なのに何故，また過ちを繰り返しているのだろう。

「≪　大丈夫ですよ。姫宮は丁重に深淵へお迎えしましょう。この先は……お分かりですな　≫」

「俺も，深淵に来いと言うのか。蜘蛛の糸を，結びつけると言うのか」

「≪　穢れた聖者なら尚の事。唄も楽の音も舞いもなく精霊を動かせるような魂を，躊躇いもなく人を炎で燃やすお人を放置できましょうや　≫」

「ハルキは穢れてはいません！　」

降りしきる雨が，悲鳴のような声を塞いでいく。
それでも，俺にははっきりと聞こえた。
澄み切ってよく透る，ミルの声が聞こえた。
言葉が冷え切った心に染みていく。

「ハルキはずっと泣いていました！　たった一人で異界で生きてきました！　自らの生きる道を見つけようと，必死で生きていました！　」

「≪　何を言い出す？　≫」

「異質な自分の存在を，孤独な心を，必死で受け止めていました！　自分の居場所がない恐怖が，貴方達に判りますか！　私達には想像も出来ない孤独と向き合ってこられたハルキを，穢れたなどと言う事は私は許しません！　」

「……ミルっ」

「ハルキは美しい！　そして誰よりも強く優しい！　ハルキを愚弄するのは許しませんっ！　」

ミルは知っていたんだ。

俺の心の中の葛藤を。
俺が抱えていた孤独も，恐怖も，狂気も，知っていたんだ。
仏壇の中の写真を見詰めていたミルの横顔を思い出す。
眉を寄せていたミルは，そんな事を考えていたのか。

「≪　どのようにダショーを庇い立てても，この魂が化け物なのは変わりない　≫」
「化け物はお前達でしょうっ……きゃあ！　」

泥が，ミルの身体を締め上げる。
思わず息を吸い込んだ俺に，アイが微笑んだ。

「≪　深淵に，いらっしゃいますね　≫」
「駄目です！　来てはいけません！　私の事は捨て置き下さ……っ！　」
「やめろ！　これ以上ミルに手を出すな！！　」
「≪　おぉ。怖いですねぇ　≫」

わざとらしく肩を竦ませるアイに，シンハが牙をむき出し毛を逆立てて唸る。
それでも，アイが乗り移った男の顔に浮かぶ余裕が消える事はない。
配下の男が，そっと耳打ちして大きく頷く。

「≪　そこの玉獣。この神苑中の玉獣を押さえつけろ。一匹でも我らに牙を向ければ，姫宮の命は保障出来ぬぞ　≫」
「逃げる気かよっ」
「≪　そうです。そして我らはダショー様に時間を与えましょう　≫」

凶悪な笑顔。

「≪　貴方は，すでに姫宮なしでは生きていけられない。違いますか？　ならば，深淵（しんえん）に必ずいらっしゃる　≫」

「アイ……」

「≪　我らは根気強く待ちましょう。その確約として，これを渡しておきましょうか　≫」

ミルの手足を縛る泥の中に手を突っ込み，何かを強引に引っ張り出す。

稲光に照らされて，それは青い光を反射した。

アイに操られる手が放り投げた光を，俺は両手で抱くように受け取り握り締めた。

雨に濡れて，冷たく光る青い指輪。

「≪　貴方は，その指輪を見る度に姫宮を思い出す。指を，体温を，唇を思い出すでしょう。孤独を思い知るでしょう。絶望にひれ伏すでしょう。そして，例え姫宮を忘れようと他の女と一緒になったとしても，その指輪と想い出は貴方を後悔の念で押しつぶす　≫」

縛り上げられたミルが，必死に首を振る。

雨で濡れてつややかに光る黒髪が，泥で汚れた頬に張り付いていく。

手の中の指輪の感触を握り締め，俺は呆然とミルを見詰めていた。

ここで，口笛を吹いてはいけない。

ここで，絶叫を上げてはいけない。

ここで哀しみの感情を爆発させてはいけない。

ミルを，ミルの安全を。

でも。

このままじゃ，ミルが連れて行かれる。

じゃあ，どうすればいい？

「≪　貴方が深淵に来て下さる日を，心待ちにしておきましょう。その気になってくだされば，水に向かって呟いて下されば結構。何時でも何処だろうと，お迎えに参じますよ　≫」

「駄目です！　指輪を棄てて！　私を忘れて下さい！　……くぅ……っ」

「≪　私に逆らう事がどれ程苦痛か。生まれ変わって忘れている貴方が悪いのです。絶望と苦痛を充分に味わい，勉強し直しなさい　≫」

「汚ぇぞてめーら！　」

「ミル……ミルっ……ミル！！　」

突風が，彼らを包む。
風の精霊達が，吹き荒れる。
雨粒と風が音を立てて渦巻いていく。
垣間見えたミルが，何かを叫んでいても聞き取れない。
轟音と雷鳴が聴覚すら奪っていく。
喉が震える。
白く立ち上る竜巻の向こうに，声を張り上げる。
痛いほど，手を握り締めて。
叩きつける雨粒を受け止めて。

「くっそお！　水遁かよ！　まだ近くにいるはずだぞ！　追いかけようぜ！　」

「駄目っ。駄目だ！　」

「ハルルンっ。まだ間に合う！　あいつら，姿を隠しただけだ！　近くに荷馬車か何かを隠してあるはずだ！　間に合う！　」

「どうやって助ければいいんだ！　ミルを人質にとられて，どうすればいいんだ！　」

「そ，そりゃ……」

逆立ったシンハの毛が沈んでいく。
容赦なく叩きつける雨が，高ぶった気持ちを奈落の底へ落としていく。
突き落とされる。地の底よりも深く暗い，地獄へ落とされる。

「頼む……神苑中の玉獣を抑えてくれ……頼むよ……」
「ハルルン，いいのか」
「頼むよ……」

今大事なのは，ミルの安全。
ただそれだけ。
キミが無事でいてくれれば，それでいい。
今は，ただそれしか俺には出来ない。
俺は，何も出来ない。
シンハが遠吠えを始めると，神苑のあちこちから答えるように遠吠えが始まる。
いつもより，哀しく長く響いていく遠吠え。
雨が，どんどん弱くなっていく。
きっと，深淵の神官達が去っているのだろう。
ミルが，連れ去られていく。
この雨と共に，遠くなっていく。
雷鳴が，遠ざかる。ミルも，遠ざかってしまう。
何も出来ないまま。玉獣の遠吠えに見送られて，連れ去られていく。

「シンハ……俺，最低だ……」

身体を叩きつける雨粒が痛い。でも，足りないよ。

俺に，もっと罰を与えてくれ。
誰か罵ってくれ。
そうしたら，きっと楽になる。
苦痛に耐える方が，どんなにいいだろう。
非難する叫びに打ちひしがれた方が，どれだけ易しいだろう。
悔しさで手を握り締めれば，思い出させるように指輪が食い込む。
この痛みが，心を切り裂いていく。

「ミル……ミル……っ！」

あの絶望が押し寄せる。
孤独と恐怖が迫ってくる。
異世界でも，俺は大事な人を失ってしまった。
ようやく手に入れようとした幸せも，守れなかった。
泥水の中，座り込んだ俺に光が降り注ぐ。
灰色の雲の切れ間から，一条の光が零れ落ちた。
雨が，やんでいく。
遠吠えは，嘆きの叫びとなって止むことはない。
神様。
俺には，祝福を与えては下さらないのですか？
これでも，まだ生きろと言うのですか？

45　絶望の中で微かに聞こえる

「ハルルン。ボロボロの唄」
「ん」
「なぁ，ハルルン」

気遣わしげに見上げてきたシンハに小さく笑い返す。
あの豪雨でも，燃え盛る旅籠の炎を消す事は出来なかった。
一晩で全てを燃やし尽くしてから崩れ落ちた梁を除け，炭化した木材の下からテリンの亡骸を掘り出した。
高温で焼かれて脆く砕けた骨を掻き集め，庭先に埋めた。
何十頭もの玉獣（ぎょくじゅう）が，遠吠えを送る。
神苑（しんえん）で咲いていた野花を，手向ける。
テリン，ごめん。
ミルを守れなかった。
満足な弔いも出来ない。

「なぁ，ハルルン……」

あの雷雨の後に残されたのは，青い秋空。
泣きはらして，腫れた瞼。
大黒丸。
そして，ミルの残した荷物と青い指輪。
あの混乱の中，ミルが抱えた荷物は俺の服と三線だった。
袖が破けていたYシャツ。ネクタイ。スラックス。ベルト。サンダル。
いつの間にか，綺麗に洗濯をしていた。
破けて袖が千切れそうだったYシャツは，繕いなおしてある。
ネクタイは，普通に洗濯してしまったんだろう。皺が出来て縮ん

でいるけど。
ミルがいる。そこにいる。
ねぇ。そこにいるようだよ。
油紙に包まれていた服から，平穏だった暮らしのニオイがする。

「もう，秋だねぇ」

嵐一過。
見上げる高く澄んだ青い空は，燃えるように赤い公園の記憶と重なる。
風に漂う微かな秋のニオイ。
体中を食い破ろうとする，昂ぶった残虐な狂気。

「ハルルン，せめて唄を唄ってくれよ」
「唄……」
「テリンに，唄ってやれよ」

神様。
冷酷な神様。
青い空の向こうに，あんたは本当にいるのか？
白い霞のような月の裏側から，俺達を見ているのか？
こんなに辛いのに。こんな俺に，この澄み切った空へ賛美歌を響かせろというのか？

「ひどすぎるなぁ」

賛美歌なんて，唄えない。唄わない。
俺は，地面に突き刺した墓標代わりの木の棒を軽く撫でる。
心のこもってない唄なんて，耳障りだろう？
そうテリンも思うよな。

「どこ行くんだよ。おい，ハルルン」

深淵（しんえん）へ？

クマリの雲上殿（うんじょうでん）へ？

天鼓（てんこ）の泉へ？

まさか。破壊されて日本へは戻れないし。

なら，行くところは一つしかない。

「後李へ行こうよ」

俺を，殺してくれる所へ。

もう，終わりにしたいんだ。

「後李へ行こう」

「正気か？」

「どうだろう。俺も判らない」

歩き出した俺は，唯一の財産を背負う。

ミルのニオイがまだ残る洋服と，ミルの心の証の三線を。

手ぬぐいを切り裂いて紐を作り，指輪を首から提げる。

キミを忘れないように。狂気を抑える鍵となるように。

風に吹かれるまま，玉獣達（ぎょくじゅう）に見送られて歩き出す。

神苑（しんえん）の向こうへ。

俺の死に場所へ。

腹が減った。

飯が食べたい。
死にたいのに，何で飯の事を考えているんだろう。
何処からか漂ってきたの香りに意識が戻る。
冷たい風を避けるために，橋の下の茂みで身を横たえていた。
歩き通しの足が痛い。最後に食べたものは，街道沿いに植えられた街路樹の果実を勝手に拝借したもの。昨日だっけ？　一昨日だっけ？
あぁ……寒いな。
火傷するぐらい熱いコーヒーが飲みたい。
思いっきり甘くして，牛乳を入れたのでもいい。
こうなったら，熱々のカツ丼とか。
味噌タレがかかっていても良いや。
水野が大好物だった，甘い八丁味噌の味噌カツ丼。
あんなもの食えるかって言ってたけど，今なら味噌かつ丼も食えそうな気がする。
甘くふっくらと炊かれた米。さくさくの衣をまとった豚カツ。あの赤い豆味噌の中にどんだけ砂糖入れたんだという，極悪な程に甘く濃い味噌タレ。
一緒に飯を食う時，満面の笑みでソレを食っていた水野。
俺が今，何やってるか想像出来るか？
異世界の街の片隅で，橋げたの下で，拾ったゴザに包まって寝てるんだ。
あぁ……寒いな。腹が減った。

夜は好きだ。
だんだん風が冷たくなっているけど，歩けば身体は凍えない。
肌を切り裂くような風に包まれれば，自分が清められていく感覚。

夜は好きだ。
人目に付かずに移動出来る。
青い目は，昼間は目立ちすぎる。
夜は生き物が気を失ったように眠る時間。
誰も起きていない静寂の時間の中，俺とシンハは歩いていく。
今日はどれだけ歩けただろう。
もう，後李に入っただろうか。
昨日よりは，町っぽい家並が続く集落だ。もうすぐ白み始める東の空を見ながら，小さな橋の下へ入り込む。
こういう所は，人目につかないから昼間も寝られるのを憶えた。

「寒いか？　オイラにもっとくっつけよ」

シンハが影から現れ，大きな身体で俺を風から守ってくれる。
その背に寄りかかるように座ると，心地よい長い毛に包まれるような感覚。
地の底へ沈んでいくような，睡魔と疲労感。
温かな温もりは，人肌を思い出させる。
ミルの，柔らかな肌を。ほっそりとした腰を。花の香りがした艶やかな黒髪を。青い指輪が光る指を。
胸で，指輪が揺れる。ミルを主張する。
ミル。
元気でいるかな？
結構，頑固なところがあるから……深淵（しんえん）で抵抗してるだろうか。
そんな事しなくていいから。
キミは，ちゃんとご飯食べてる？
身の回りの人を困らせたら駄目だよ。
変な意地を張らないで頑張らなくていいんだよ。
キミだけは。ミルだけでも，ここから人生をやり直してくれよ。
クマリに縛られず。俺の事を忘れて良いから。見捨てていいから。

どうか，幸せになって。

「あぁ……今夜は冷えるね」

こんな寒い夜に星を見上げて思い出す。
じいちゃんもばあちゃんもいなくなった，最初の冬を思い出す。
たった一人で迎えた冬休み。
正月明けのセンター試験に向けて，ただ勉強に打ち込んでいた。
忘れたくて。頭の中から，感情を追い出したくて。
二人がいた時に決めたレールを機械的に，黙々と歩いていく事しか出来なかった。
生きている。俺は生きている。その不自然な感覚で毎日を生き延びる方法は，決められた予定をこなす事しかなかった。
リビングのコタツの上に，散乱した問題集と参考書。食事をつくる時間も手間ももったいなくて，大量に作ったカレーで食いつないでいた。
部屋の片隅に積み上げられていく新聞。小論文用に読んでいた新聞だけが，俺に今日が何日か，世界で何が起きているかを知らせてくれた。
クリスマスも，正月も，なくなった。
もう，一緒に季節を楽しむ家族がいなくなった。
その事実を理解するのが嫌で，昼間に外出はしなくなった。
深夜営業のスーパーへ買い物をして，町に流れる年の瀬のＢＧＭで浮き足立つ人々から逃げるように，人気のない堤防の道を歩いて帰った。
重いレジ袋が指に食い込む。
遠くに聞こえる，トラックの音。救急車のサイレン。
あのサイレンの所には，泣いてる人がいるんだろうか。
付き添う家族が，泣いているだろうか。
凍えるような星空の下で，俺みたいに泣いてる人がいるんだろう

か。
俺みたいな一人ぼっちが，いるのかな。
そう思って，涙で滲むまま夜空を見上げて夜の堤防を歩いていた。
東の空が，ゆっくりと色を失いだす。
あの時とは，違う星空が，溶けていく。
今目の前に広がっている空も綺麗なんだ。
キミも，この夜空を見ているといいな。
キミに逢いたいよ。逢いたいよ。
北の極星近くに一際輝く，超新星。
想い出の星は，今夜も輝いている。

「シンハも，休むんだぞ」
「ハルルンが休んだら，オイラも休むよ。だから」
「あぁ……ありがとう」

その温もりだけ。
今は，シンハの優しさが俺を現実に引き止めてる。
胸で揺れた指輪を，着物の上から握り締めた。
俺は，ここにいる。
俺は，まだ生きている。

夕闇の気配に，そっと橋げたの下から這い出す。
昼間，頭上の橋を渡る足音は騒がしかった。
今までになく，忙しなく活気がある街のようだ。北風の中に，様々な食べ物のニオイが運ばれている。
人目に付かないよう，そっと川沿いに歩き出す。
小船が，荷物を山のように積み上げて流れていく。

随分と伸びた前髪の間から，慌しく行き交う人々が見える。
このまま，人通りが途絶えるまで川沿いを歩いていこう。
闇が濃くなれば，シンハが月影から出てくる。それまでは一人で歩いていこう。
この世界は，まだ電気がないからだろう。夜の帳が下りると，殆どの人々は家に帰る。
僅かに繁華街は夜が更けても明かりをつけているが，この街はどうだろう。
家路を急ぐ人たちの足元を見上げながら，ぼんやりと歩いていく。
赤く染まっていた空は，東から夜の帳に覆われて灰色の雲が流れていく。

「あ……」

ふと，足を止めた。
冷たい風の中に，明かりを感じた。
懐かしい音。

「あぁ……」

弦が震える音。
胸が締め付けられる，あの音。
三線だ。
気づいたら，足が駆け足になっていた。
腹が減るのに，足の裏が傷むのに，音に惹かれて走っていた。川沿いから這い上がっていた。
俺の汚れた姿を見てギョッと道を空ける通行人を目の端に入れながら，音に導かれるようにその場へ行った。
人が流れるように行き交う繁華街の中，道端に座り幾人かの男と女が演奏をしていた。

流れる旋律。重なる和音。
女が二人，手足につけた鈴を鳴らして踊る。手にした太鼓を打ち鳴らす。
穏やかな笑みを浮かべて，演奏する男達。
華やかに色鮮やかな着物の裾を揺らして微笑む女達。
立ち並ぶ屋台の明かりに浮かび上がる演奏。
空気が心地よく揺れる感触に，鳥肌が立つ。
あぁ。
世界に色が蘇る。
あの時も，そうだった。
まだ桜の花びらが残る桜並木の下で，音を久々に聞いた。
入学したてのキャンパスを勝手が判らずうろついていた時だった。
俺は目の前の人懐っこい顔を睨んで，足元の桜の花びらを踏み潰していた。

46 光，煌く

「今日この後飲み会あるんだけど」
「で？」
「関口も来いよ」
「何で」
「あぁ，そのさ，これは吉田ゼミの男子全員の願いなんだよ。関口，頼むから出席してくれよ」
「何で俺が行きたくもない飲み会に出席しなきゃいけないんだよ。興味ない」
「だからさ」

いきなり俺の肩を掴んだ男の太い眉は，見事な八の字になっている。尻尾を股の間に挟んで，項垂れたゴールデンレトリバー。
麗らかな春の日差しが注ぐ中，若葉が芽吹きだした桜の下，希望溢れる学びの園で，確か同じゼミだったような男の切実な悩みを打ち明けられる。
長く苦痛の受験の冬を潜り抜け，新しい出会いを胸に入学した男子。新しい環境には，輝くばかりに微笑む魅力的な異性。甘い薫りを振りまく女子。
そんな彼女らと近づけるチャンス。
サークル，コンパ，顔合わせ。
様々に名目を作って機会を伺うも，女子の食いつきがイマイチな事。
だが，いくつか講義を受けていく中で女子が興味を持っている対象を見つけ出したと。

「とにかく，お前が出席したら，女子の出席率が高まるのは確実なんだよっ」

「だから出ろと？」
「これは吉田ゼミの男どもの総意なんだ。頼むよ。あ，金が厳しいんなら半分は……いや，三分の一ぐらいは出すから，その」
だんだん少なくなっていく金額に，俺は思わず苦笑いを浮かべてしまう。
なんだろう。
こいつは俺の目を見て必死に頼んでるけど，この青い目を，異質だと思わないのか。怖くないんだろうか。
俺は，普通と違う。外見も，中身も。
俺のどす黒い心の底を，こいつには知られたくない。
口笛の能力も，死に対する欲望も，人を焼き殺そうとした過去も，知られたくない。
そう思っている自分に気づいた。
こいつに好かれたいと思っている自分に気づいた。
ずっと夜道を歩いていた俺と正反対のような，真っ直ぐに伸びた向日葵のような男。
恐怖も憎しみも嫉妬も寂しさを押し隠した俺と，嘘偽りなく心をさらけ出して笑い嘆く素直な男。
俺は，こいつの横なら陽の光を浴びれるだろうか。そう期待していた。期待している自分に，半分戸惑っていた。
「お前，名前なんだっけ」
「ひでぇ。こないだゼミで自己紹介しただろ。水野だよ」
水野。お前は飲み会に誘っただけだろうけど，俺はその手に救い上げられたんだよ。
俺の肩を掴んだ，その大きな手で。

空腹も，マメが潰れた痛みも忘れて，俺は辻に立ち尽くしていた。
立ち並ぶ屋台や飲み屋の明かりに照らされて演奏を続ける楽師の姿に，想い出がめまぐるしく再生されていた。
何故か，二輪の免許を取りに自動車学校に行ったら水野にばったり出会った事。
免許を取得したのを隠していたら，「俺も合格したらツーリング行こうぜ」と強引に約束させられた事。
そのツーリングで，大怪我をした水野を癒した事。
何も聞かずに，俺を受け入れてくれた事。
「ありがとう」と，笑顔で俺という異質な存在を認めてくれた事。
あの夏の日に，俺は長い夜から抜け出せたんだ。
一人だけど，寂しさに囚われなくなった。恐怖が薄らいでいった。
何故だろう。
男達が奏でる音楽に，女達が唄う音に，懐かしさが込み上げる。
一人じゃないと，感じる。
弦の音が，涙腺を緩めていく。鈴の音が，心臓を震わしていく。
思い出がある。
ゼミのみんなで飲んだ後「花火を打ち上げよう」とキャンパスに忍び込んで大騒ぎした。
迷い込んだ犬に眉毛を描いて，大ヒンシュクをかった。
就職が決って，水野の母さんにお呼ばれされてご馳走になった。
あの夏の夕方，ミルと出逢えた。
哀しい事。悔しい事。嬉しい事。楽しい事。
俺の記憶に刻まれた，思い出があった。

「あんた，こっちにおいでよ」

気づいたら，いつの間にか曲が終わっていた。

目の前で満面の笑みを浮かべて，踊り子の女性が手首を掴んで引っ張り込む。

「あんたも，楽器弾くのかい？」

背にくくりつけた三線を指差され，曖昧に頷くと着飾った楽師たちの輪に入れられてしまった。

自分の薄汚れた格好に気づき居心地の悪さを感じるが，彼らは気にもしない様子だ。

道行く人々に，思わず避けられるほどに汚れた俺なのに。

「三線か。少し弾いてくれよ」

「いや……曲をあまり知らないんだ」

「あんたが知ってる曲でいいよ」

俺と同年代ぽい彼らは，人懐っこい顔に好奇心を隠さない。

俺の荷物なのに，勝手に背から外して三線を取り出してしまう。

「判るんだよ。あんた……クマリじゃないかい？」

強引に三線を押し付ける仕草に隠して，女が俺の耳元で囁いた。

慌てて身を引き相手の目を見詰める。

微笑んだ女の瞳は，僅かに青みがかった黒だった。

「ここは私達と同類が多いから安全だよ。思いっきり弾きな」

「クマリや周辺の流浪の民の店が多いから，軍の連中が来ても大丈夫さ」

「あんた程の青い目じゃあ，大変だっただろ」

「ほら，思いっきり弾きな。気が晴れるよ」

口々に言う彼らに，警戒を解いていいかと周りを見渡す。
それとなく，立ち止まる人の顔に嫌悪の色はない。
好奇の視線もない。
ただ，気配を感じた。
神苑で感じたような，懐かしさを。

「じゃあ……」

この人達が後李と通じていたら，俺は殺される。深淵（しんえん）と通じていたら，蜘蛛の糸で絡め取られる。
どこの誰とも判らない相手に，俺は何をしようとしているんだろう。
冷静にそう叫ぶ頭の中の声と反対に，反射的に弓に手を伸ばしている俺の身体。
弾きたい。音が聴きたい。この叫びを吐き出したい。
危なくなったら，逃げればいいんだ。
そう言い聞かせ，投げやりに弓を構える。
その途端，頭から煩わしさが消える。空腹も，寂しさも，哀しさすら。
ただ，目の前の空間を震わしたい欲望がわきあがる。この瞬間を，畳み掛けるように流れる時間を自分の感情で埋め尽くしたい欲望が生まれる。

「あぁ……」

溜息とともに，弦の震動が空気を満たしていく。
心地よい空間が生まれる。流れる精霊達が，そっと祝福の光を零していく。
生きていくのに必要なのは，パンだけじゃなく。水だけじゃなく。
心を満たすものが必要だ。

それは，優しい想い出。心地よい音楽。
忘れられないんだ。
身を捻り切りそうな辛い想い出の向こうに，懐かしい笑顔がある。
じいちゃんやばあちゃん。
水野や，馬鹿騒ぎしてたゼミのみんな。
ミル。
恋しいよ。逢いよ。この気持ちがある限り，辛い想いも抱えていかなくちゃいけない。
この愛おしい気持ちと，せつなさは背中合わせ。
だから逃げられない。
そうだろ？　逃げられないんだ。今まで逃げてたんだ。ミルを失った現実から逃げているだけだった。自分が可愛いだけだった。無常を嘆いているだけだった。
ミルを愛す気持ちがある限り，守れなかった悔しさも哀しさも寂しさも消える事はない。
後悔がある限り，自分を責める気持ちがある限り，ミルを愛する気持ちが消えないんだから。
だから，何を恐れる？
夜の闇に，バッハのカノンが震える。
繰り返される旋律。夜空の月へと舞い上がっていく音の粒たち。
逃げない。
この哀しさからも，この運命からも。

『幸せになれ』

そう言ったエアシュティマス。
お前の幸せって，何だろうな。
この世界に落ちる瞬間に聞こえた言葉が蘇る。

『もう充分に頑張った』『この世界を終わらせよう』

お前は俺に何をさせてるんだ？　何をさせたいんだろう。
お前の求める幸せって，俺の求める幸せと同じなのか？
俺の幸せは，平凡。
ただ，好きな人と一緒にいたい。
ミルと共に過ごしたい。
それだけなんだ。

『この世界を終わらせよう』

それは，深淵（しんえん）からの解放なのか？
それがお前の幸せなのか？
お前の幸せは，この世界を終わらせなきゃ得られないのか？
俺の幸せは，世界を犠牲にしなきゃいけないのか？
お前は，一体何者なんだ？
この世界に，どんな仕掛けを残したんだ？
記憶を俺の魂に刻み付けてまで，何を残したんだ？

『もう充分に頑張った』『幸せになれ』

そう願うなんて，俺に何を託したんだろう。
俺は大層な事は出来ない。
俺は泣き虫で，怖がりな弱虫だ。
アイを燃やして炎に包まれた時，俺は亜希子さんを殺そうとしてた時を思い出してた。
あの時，じいちゃんとばあちゃんに対する仕打ちで，俺は確かに怒っていた。
でも，俺は自分の気持ちを誤魔化してた。
亜希子さんを殺そうとしただけじゃない。
俺は，ただ自分ひとりで生きていくのが怖かっただけだ。

亜希子さんを道ずれに，自分を殺そうとしていたんだ。
自分だけ死ぬのが怖くて，亜希子さんを巻き込んで炎を吹き出したんだ。
憎かっただけじゃない。殺したいほど怨んだだけじゃない。
何よりも，一人で生きるのが怖かった。でも，一人で死ぬのも怖かった。
一人でいるのが，怖かったんだ。
異能を抱えて生きることに，悔しかった。寂しかった。何より，孤独が辛かった。

「あぁ……」

見上げる空に，金色の満月。
青の炎を吹き出して呪詛を吐いたエアシュティマス。
自分の夢を一瞬だけ語ったハルンツ。
お前も怖かったのか？
お前も哀しかったのか？
俺と同じなのか？
それなら，お前の言う『幸せ』も，俺と同じなんだろうか。
好きな人と，愛する人と共に時間を過ごして生きたい。
そう願っていたのか？
なぁ，ハルンツ。
俺達は何度も生まれ変わっているけど，『好きな人と添い遂げる』という夢は叶えてないのか？
何度生まれ変わっても，同じ課題がこなせなかったのか？
それならダショーってのは聖者じゃなく，間抜けの代名詞じゃないか。

『ミルちゃんの手，ちゃんと掴んでおけよ！』

水野。
俺，手を放してしまった。
携帯電話の向こうで，水野がきっと苦笑いしているだろうな。
けど，俺は諦めない。
ミルの手を，必ず捕まえる。
諦めない。
エアシュティマス。ハルンツ。
俺は絶対に幸せになってやる。
今はどうすればいいか判らないけど，この気持ちは変わらない。
もう一度，ミルの手を掴もう。二度と放さないよう，固く固く抱きしめよう。
弦の震えが夜の冷気に煌いていく。
カノンが，俺の想いと共に空へと舞い上がっていく。
残酷な神様。
この想いを見届けてくれ。
神様，そこにいるんだろう？　この空の向こうにいるんだろう？
残酷なあんたに，宣言してやる。
何とかしてくれなんて，言わない。祝福なんて求めない。
神様に願う事なんか，もう何一つない。
今度は俺が見せてやる。
俺が何処まで未来を切り開いていくところを，あんたに見せてやるよ。
この手でミルを抱きしめる瞬間を見せてやる。

最後の音と共に大きく息を吐き出す。
見上げる空に，大きな満月が黄金の光を放っていた。
絶望の底で奏でた曲から，光を見つけた。この光は，災難と絶望を吐き出したパンドラの箱の奥底で煌いた希望の光。
この希望の光を，ミルに届けよう。
愛しいキミへ。

４６　光，煌く（後書き）

これで二章　パンドラの光　終了です。
ここまで読んで頂き，ありがとうございます。書いてる本人も，二章で４６話という現状にビビッてます（汗）。どうやらまだ続きます。長くなってしまい，申し訳ないです。

８月は都合によりお休みします。すみません。三章は９月からスタートとします。

あと，８月中に設定集なる言い訳解説をあげると思います。お休み中の暇つぶしになれば幸いです。（都合により，時間の予告が出来ません。ご了承下さい）

三章　劫火の都（仮題）　４７話は　９月１日　水曜日に更新予定です。よろしくお願いします。
苦情，感想，よろず受付中です。

とりあえず設定集

だんだんと登場人物が多くなってきました。
えーっと。実は，書いてる私は設定やプロットというものを書き留めておりません（汗）。
設定のメモ？　ないです。設定もプロットも全て私の頭の中でございます。
でも，でもそれで失敗したこと数知れず。
えーっと，『千夜を越えて』もこれからリンクしてきます。登場人物，増えます。
書いてる私が一番危ないです。何度も過去のページをチェックして名前やら確認している次第です。
笑えない……（汗）。

という訳で。
作者の都合と進行状況によって書き足します。
二章までですが，事故防止の為に本文のネタばれになりそうなのは一応避けときます。露骨にばれそうには書いてません。
そのせいで少々不親切な解説ですがご了承を。
では。

見下ろすループは青

主要人物

関口晴貴　　主人公
ハルキ

中学校教諭　国語担当だが，吹奏楽部を指導している。趣味はチェロの演奏，シンハをイジメル事。悪意はないはず。
本人は外見には頓着しないタイプだが，青い目に『王子』と女子生徒から呼ばれるので多分それなりの容姿。
奏でる口笛や唄で物質を変化させたり風を吹かす異能の持ち主だが，その事は負担になって孤独や不安な要素となっていた。
突然現れたミルの存在で，記憶が蘇り戸惑う。それでもミルと一緒に異世界へ還る事を選択。
日本の常識が通じない異界で苦戦中。
パートナーの玉獣（双子星）は獅子タイプのシンハ。

ミルの世界では，稀代の魔術師『エアシュティマス』の魂を持つ人物『ダショー』という存在。
また，複数の過去世あり。
ハルンツ。オユン。ハル。などなど男女混合で。

昴　ミル　　ヒロイン

異世界のクマリ族最後の族長　通称『姫宮』　クマリ族の聖地『神苑』を護る支配層『大連』と呼ばれる家々の一つ『昴』家の出身。
クマリ族に伝わる秘刀『大黒丸』を持って，異世界へ渡ったダショーの魂を追いかけて日本へやってくる。
艶やかな長い黒髪に，日に焼けた健康的な肌と桃色の唇で清純系な容姿。性格も穏やかで物静かだが，事がハルキに関すると思考も行動も暴走ぎみ。基本は健気な頑張り屋さん。
幼少期に深淵の神殿へ留学という形で人質に出される。その為に深淵の神殿内部や人物にも詳しい。
パートナーの玉獣（双子星）は麒麟タイプの『雷光』。

シンハ　　玉獣

ハルキのパートナー玉獣（ぎょくじゅう）（双子星）。どうやら少年のよう。多分。

獅子のように猛々しく，その力は玉獣の中でも最大級。僅かに金色を帯びたフワフワの体毛に緑色の瞳を持つ。

基本がハルキが好き。懐いてる。おせっかいで世話焼きな面も。が，非常に口が悪い。プライドも高く，気に入らない人間には喋りもしない。

特技は洗濯。好物はハルキが唄う「適当なラヴェルのボレロ」こと，通称「ボレボレの唄」。

ラヴェルのボレロ……映画『踊る大走査線』シリーズの『交渉人真下〜』の作中のコンサート場面で鍵として使用されてたあの曲です。規則正しいリズムと繰り返される旋律をオーケストラの楽器紹介のように各楽器ごとに演奏します。一度崩れると大変そうな曲。

室南分家（ひつなん）　テリン　　クマリの民

『大連（おおむらじ）』の一つ『室（ひつなん）』家の分家の出身。中年の男性。

ミルの守役であり，剣と体術の指南役を務める。

深淵（しんえん）の神殿留学時代から，ミルの傍で見守ってきた。

クマリ再興を目指し，ミルと共に戦い続けている。が，天鼓（てんこ）の泉

での争いで重傷を負いアイに利用される。

アイ　　深淵の神殿神官

エリドゥ法王国　深淵（しんえん）の神殿の現在の最高実力者　執政官。
２０代でハルキの前世『ダショー・オユン』担当の高位神官となった有能な共生者。
齢７０代であるが，特出した『真綿で絞め殺すような平調の声』と手段は問わない方法でハルキ達を追い詰めていく。

ミンツゥ　　ニライカナイからの民

青い瞳を持つ１０歳の少女。
瞳を隠す為に，常に笑い顔のお面をつけている。

モルカン　と　シャムカン
　　ニライカナイからの民

ミンツゥから「モル兄」「シャム兄」と呼ばれている。
彼らを見分けられる人は，今のところミントゥのみ。
身軽でシンクロ率が高い彼らは，色んなことしてます。只今，食

べ盛りで育ち盛りの十代後半。

水野　　地球の地方公務員

晴貴の大学時代からの友人。野球部顧問の体育会系。年中日焼けの肌に太い眉で，ハルキには大型犬に似ていると揶揄される。
大学時代に晴貴の異能により助けられ，その異能を知りながら受け入れている懐深い友人。
婚約者の由美子さんには，すでに頭が上がらない様子。

主　　白い大鷹

見た目は金色の眼を持った白い鷹。
ハルキの魂を異界から日本へ，日本から異界へ運んだ張本人。
異界へ渡るだけの力があり信仰の対象にもなっているようだが，ハルキを運んだ時間の調整が十年ずれていたり，運びっぱなしでハルキ達を放ったらかしにするなど非常にいい加減な面も。
代々のクマリ族族長の前には姿を現している。
天地，光と影が分かれた創世の瞬間に天から零れた気から生まれた。
ダショーであるハルキの魂を見守っている様子。

――――――以降　『千夜を越えて』からの登場人物。記憶に出てくる形です。
　かなり大雑把に書いてます。また，『千夜を越えて』での作中後の業績なども書いてます。
　参考にどうぞ。

エアシュティマス　　稀代の魔術師

１０００年前に何もない二つの大河の中洲に神殿を作り上げ，深淵の神殿の基礎を創った魔術師。
バラバラだった呪術の系統を統一し，医療や教育を作り上げる。
彼以上の魔術師は未だに存在しない。
クマリの大連の一つ，昴家の出身とされる。クマリ名は昴ソンツェ。
突如として歴史の表舞台から姿を消してしまうが，その偉業や存在は神格化される。
青い浄眼を持ち，唄う声だけで全ての精霊を動かした。

ハルンツ　　初代ダショー

ハルキの過去世。青い浄眼を持ち，エアシュティマスの記憶と共生能力を受け継いだ最初の『ダショー』として，深淵の神殿で初代大神官を務める。
クマリを挟み，エリドゥ王国（前　エリドゥ法王国）と李蘭帝国

（前　後李帝国）が開戦寸前だったのを防ぐ。
エリドゥ王国の力を削ぎ，神殿の政治的発言力を強めた。
エアシュティマスとナキアの血統と能力を同時に引き継ぐ唯一の後継者だったが，生涯独身を貫いてその血統を消してしまう。
彼の死後から，エアシュティマスの記憶と共生能力を持つ魂を探し『ダショー』として大神官とするシステムが考えられていく事になる。

ナキア　　初期エリドゥ王国皇女

エアシュティマスの正室。自身も大きな力を持った共生者。
エアシュティマスの突然の失踪後，四人の子を産み大陸の三大国と政略結婚によって不侵略の盟約を交わす事に尽力。
ブラフ大陸全体の初期繁栄期を作り出した一人。

玄徳帝　　李蘭帝国　皇帝

李蘭帝国の最盛期を築いた名君。玄武家出身。
首都の春陽を流れる緑江を中心に，国中の運河網を整備。荒野が多かった国土を農地に変え，物流をスムーズし経済活動を活発にさせる。
また，政治から共生者を排除し，独特の「からくり技術」を開発させる基礎をつくる。
后はとらず，第二夫人にエリドゥ王国出身の当代の奏者マダールを迎える。

一人娘の玉葉は，玄武家を引き継いでいく。

人物はこんなもんでしょうか。
まだ増えます。三章から，愉快な仲間が増えます。
気がついたら追加しときます。
長くなってきたから，お国紹介やお断りは次回に。

とりあえず設定集　（後書き）

本当，とりあえずですが（汗）。
国やら解説が必要そうな単語も，そのうち設定集として出したいと思うのですが……。やっぱり夏休みは書くのが難しい。
ゴメンなさい。確実に「出来ます」とは言えません。
出来たら，やります。出来たら……はい。

まだ日中は酷暑が続いています。お体にお気をつけ夏休みを楽しんでくださいね。

47　三章　～劫火の都～　旅する楽師

天頂の藍は宇宙の色。
この世界の宇宙は地球と同じ宇宙なのかもしれない。少なくとも，俺が学校裏の駐車場で見上げていた夕暮れに似ていると思う。そう考えると，ついつい空を見上げてしまう。
見る間に藍は濃くなって，高圧線が見当たらない地平線に赤みが濃くなっていた。
日が沈むのが，日に日に早くなってきたのを感じる。
澄み切って鋭さを帯びた風は，夕闇の向こうから人々の営みの音を乗せて吹き渡っている。
客を呼び込む掛け声や売れ残った商品を叩き売る行商人の声が，冷たくなった風に乗って橋げたの下まで届いてきた。
川の水で顔を洗おうと，手を水に入れて息を飲み込む。水は季節の移ろいを正直に表していた。
もうじき，本格的に木枯らしが吹くだろうな。
気合を入れて盛大に水しぶきと飛ばして顔を洗うと，寝ぼけた頭が冴え渡る感覚。アクビも消えた。
少し伸びてきたヒゲの感触に，明日は風呂屋へ行こうかと懐具合を思案する。
今日の稼ぎが上手くいけば，風呂上りに饅頭も買えるかな。
長い手ぬぐいをマフラーのように首元に巻きつける。もう少し寒くなったら，外套が必要になるかもしれない。

「ちゃんと飯を食えよ」
「今から行くから大丈夫」
「まだ少し痩せてるからな。しっかり食って体力戻せ」
「判ってるよ」

足元の影から，シンハの声がする。
心配性の相棒に声を返し，荷物を背中にくくりつける。
俺の全財産が入った風呂敷だ。
この世界では異質な日本のスーツ一式と，三線という弦楽器。
そして首元で揺れる，青い石の指輪。
ミルと俺の婚約指輪のような，大切な指輪。
これを，もう一度ミルの指につけよう。
キミはまだ望んでくれるのなら，もう一度細い指にはめよう。
まだ，望んでくれるだろうか。

「さて，と」

心に浮かんだ不安を，掛け声で吹き飛ばす。
今成すべき事を，少しづつこなしていこう。
現実と，向き合わなければ。

「炒め飯定食，一つ」
「あいよっ。炒め定一つぅ」
「毎度ぉ」
「毎度ぉ」

厨房からの復唱に，思わず頬が緩む。
異世界でも，繁盛する店の雰囲気は同じだ。
ふと，日本で水野と飲んでいた居酒屋を思い出してしまう。

「兄さん，水いるかい？」
「あぁ，ありがとう」

忙しなくテーブルの間を動き回る女将さんが，空になっていた俺の湯のみに水を注いでいく。
そのついでにたずねてみる。
こういう質問は，地元の繁盛した店で聞いたほうがいい。
店の顔も広く，客からの情報も多く集まっている。

「ここらで辻演奏出来る場所ってどこかな？」
「辻演奏？　兄さん，楽師かい」
「最近始めたんだ」

俺の身なりや荷物の三線に目を走らせた女将さんは，小さな火傷だらけの腕を組んで宙を睨む。

「人通りがあるところかねぇ。そうなると軍人さんがねぇ」

女将さんは，ちらりと俺の顔を覗き込む。
随分と伸びた前髪だけれど，目元全ては隠せない。
チラリと青い瞳が見えたのだろう。
少し息を呑んで，疑いの視線を送られる。

「そっちじゃないです。楽師なんですが」
「そうなんかい？」
「よく誤解されるんですが」

呪術を行う共生者かと，暗に問いかけられて嘘をつく。
この後李帝国で共生者と名乗るのは，中世の魔女狩りのような危険が伴う。
徹底的に呪術という能力と技術をインチキと疑い，産業革命前夜の勢いを持つ巨大な国だ。

中央の方針は，こんな地方の街にまで行き届いている。

「ねぇ，あんた。辻演奏だってさ。どこがいいかね」

あの満月の晩に，俺は辻演奏という事を教えてもらった。
出会った楽師達は，道々で演奏をして人々から小銭を得るのを生業にしていた。
国を亡くしたクマリの民は，辻演奏や軽業や玉獣（ぎょくじゅう）を調教する事を生業にしているらしい。
俺の演奏技術で不安はあったが，異世界の旋律は新鮮のようで。
あの後彼らの勧めに従い辻演奏を始めると，驚くほどの結果が出た。
その晩に得た小銭で，風呂屋にも入り食事も出来た。
異世界で自立しエリドゥへミルを取り戻す旅の，本当に小さな一歩を踏み出した。

「南の大広場はどうだ」
「あそこはいけねぇや。横の赤宿に軍の連中が出入りしてるぞ」
「じゃあ，神殿跡の辺りか」
「ここを北に行った広場の奥さ」
「そうだなぁ。あそこ以外ないよなぁ」

立ち会った他の客たちも賛同していく。
ただ，女将さんは顔を顰めていく。

「あんな所，妖しか来ないじゃないの。他はないのかい」

女将さんの呟きに苦笑する。
なるほど。この街に楽師はいらないようだ。
でも商売しないと，懐が寂しい現実。

何年も人の手が入ってないのは明らかな荒れ具合。
かつては巨大な建物だったろう大きな石の柱は倒れ，積み上げられたタイルの壁は崩れ落ち，地面は腰ほどの丈まで伸びた雑草に覆われている。
朽ち果てた神殿の跡地。
僅かに通りに出れば小さな広場があり，周辺には商店や宿屋が並ぶ通りもある。
ただ神殿の跡地だけが，繁栄するこの街の空気から離れていた。

「すげぇな。確かに妖しか来ないぜ」
「来るのか？」
「オイラがいるから来ねぇよ。何だよ。ハルルン怖ぇの？」
「いや。来たら見たいと思って。ヌリカベみたいな奴かな」
「……暢気だな。で，ヌリカベって何だ？」

月明かりで出来た俺の影から，シンハが出てくる。
大黒丸を背負った玉獣（ぎょくじゅう）は，威厳溢れる歩みで朽ち果てた神殿を闊歩していた。
妖に出会うと「若い男は筋肉ついた太ももを齧られる」とか「骨を噛み砕いて髄液をしゃぶられるぞ」とか，物騒な言葉を並べていく。
用心しろと，言いたいのかもしれない。

「これじゃあ，人もこないぞ。今夜の稼ぎはどうすんだ」
「さぁ。どうしようか」

無くても，風呂屋を我慢して何とかするしかない。
無精ひげが生え始めた顎を無意識に触り，覚悟を決める。
客が来る気配がなくとも，万が一の希望を持って演奏はしよう。
するしかない。
神殿の入り口だったのだろう，正面の階段に座り荷物を降ろして，
三線を取り出す。
爪弾いて調弦する俺の様子を見て，シンハは諦めたように俺の足
元に座り込んだ。

「なぁ，客が来たら」
「客なんか来ねぇよ。こんな場所で玉獣（ぎょくじゅう）を従えて演奏してる青い
瞳の楽師が，妖そのものだからな」
「やっぱり，そう見えるかな」
「万一にも客が来たら，ちゃんと影に入ってやるさ」

相変わらず口が悪い。
憎まれ口を叩きながらも，俺の足に顎を乗せて緑の瞳を閉じてし
まう。
苦笑いをして，北風に乱された前髪をかきあげる。
さて，客がいないのなら今夜は気兼ねなく弾ける。
一応，チップを入れてもらう小さな竹籠を下の段に置いて夜空を
見上げた。
寒々とした空気は，澄み切って星空を煌かせている。
凍えそうな指先に，息を吹きかけて星を見詰める。
深く落ちそうなほどの闇に魅入る。
ミル。
希望の光は，届くかな。
慟哭の調べは聴こえるかな。
逢いたいよ。
キミに逢いたいよ。

弓を，弦の上に走らせる。
溢れ出す感情が，弦の振るえに共鳴していく。
奏でる曲は，ショパン。
清く澄み切った旋律が流れていく。
真っ直ぐ規則正しく綴られる音の流れに，意識が入り込んでいく。
俺の目的は，なんだろう。
ミルと添い遂げたい。
深淵から解放されたい。
そしてエアシュティマスとハルンツの願い。
『この世界を終わらせよう』
この世界を，一人の人間が終わらせる事など出来るんだろうか。
音が繋がっていく。
流れ零れる旋律が，冷たく澄んだ風に乗って広がっていく。
ただ，キミに逢いたいよ。
逢いたいだけなんだ。

「……」

無心に，弓を動かす。指で弦を押さえる。
心の葛藤が，旋律に憂いの色を帯びさせる。
次第に狭まる視野。研ぎ澄まされる感覚。
あぁ，世界に溶けていく。

「神殿の廃墟に鬼火が出たって？」
「楽師の周りで青や赤やら，幾つも浮かんでたとかさ」
「こりゃやっぱ，戦で殺された楽師の亡霊じゃないのか。三線の旋律が流れてたんだろ」
「あぁ。聞いたことのない旋律だったね。この世のものとは思え

ない，妙なる音色だったよ」
「あんた命拾いしたねぇ」

店を変えるべきだった。
まさか，昨日の廃墟での演奏が幽霊騒ぎになっているとは思わず，同じ店にふらりと入ったのだが。
俺は丼を食べながら居心地が悪かった。
俺の顔と昨日の会話を憶えていた女将さんは，ご丁寧にも大声で安否確認をしてくれた訳で。
違法っぽく道端で広がった屋台が立ち並んだ中，幽霊楽師の噂で持ちきりだ。
廃墟になった神殿に，鬼火が出た。そして，殺された神官の亡霊が聞いたことのない妙なる旋律を三線で弾いていた……と。
おめでとうショパン。貴方の才能は異世界でも認められたよ。
ではなくって。
まさか，こういう騒動になるとは思ってなかった。大体，鬼火ってなんだよ。
変な汗が背中に流れるのを感じる。

「しっかし，綺麗な旋律だったねぇ」

袖口に木屑をつけた男が，恍惚な顔で酒を仰ぐ。
家が広場に近く，直接音楽を聴いたという男だ。
俺の背中を叩いて溜息をついた。

「あんた損したよぉ。あんな音色で奏でられた旋律，楽師なら聴いとくべきだったねぇ」

俺も損したよ。
聴いてたんなら，チップ払ってくれよ。

鬼火が浮かんでたなんて，見てた奴いるのか？　なら，チップ置いていってくれよ。
今更その幽霊楽師ですと名乗れば，共生者かと疑われるのも困るし。
あぁあ。チップ，欲しいんだけどなぁ。

「いや本当，綺麗な曲だったねぇ」
「そんなに綺麗だったんか」
「おれも聴きたかったな～」
「幽霊だぞ。魂抜かれたらどーすんだよ」
「綺麗なもんは良いんだよ」
「いい女と美味い酒と肴と綺麗な音楽があれば，文句ねぇよな」

口々に勝手な事をいう野次馬達の下，俺は丼で隠した口元を緩める。
一緒だ。
空の色も，人の好むものも。同じような生き物だもんな。

47　三章　～劫火の都～　旅する楽師（後書き）

三章始まりました。
また読んでくださると，ＰＣの向こうで作者が喜びの舞を踊ります。

次回，９月８日　水曜日に更新予定です。

48　和やかな陽の記憶

木枯らし第一号。
異世界で体験する木枯らしも，地球と変わらず切れるような冷たさだ。
マフラー代わりに首に巻いた手ぬぐいが，風にはためく。

「ぎゃあああ！　化けもんだぁああ！」

日が暮れた山の中の街道の静寂を，絶叫が切り裂いていく。
薄暗い道の真ん中で突然刀を抜いてきた男は，俺達の姿を見て腰を抜かして座り込む。

「失礼な奴だな。化けもんだってさ」
「事実だろ」
「ひでぇな」

息も絶え絶えに地面を這い蹲り刀を放って命乞いをする男の横を，軽口をたたきながら歩いていく。
この光景を見られてしまった。きっとまた，街道の宿場町沿いに噂が流れてしまうだろう。
月明かりを頼りに夜の街道を歩く俺。そして足元の影から顔だけ出して喋るシンハ。
地面から玉獣の頭だけ出て，しかも生首が動いているという怪奇現象。
これは怖すぎるよ。
そして何より，現実離れしたホラーな光景に慣れた自分が怖い。
日本にいた頃の俺の感覚が崩壊されているのを実感する。
俺達を襲おうとした夜盗の男は，気を失ったのか倒れたまま動か

なくなっていた。
まぁ，夜盗の男に教訓かトラウマとして残れば，ここの街道の安全性は高まったに違いない。
遠まわしに，俺達は人助けをしたと思おう。

「そんな事より，早く後李の領土から出ようぜ。楽師でも咎められてるんだぞ」
「シンハが妖怪みたいな事をするから，厄介な事になってるんだ。とにかく……」
「後李帝国はダショーをイカサマ使いの親玉扱いだぞ。共生者どころか，ここで青い瞳を持ってるだけで危険なのにさ」
「そこだよ。そこが気になるんだ」
「どこだよ」

懐で組んだ腕を組み替えて，夜空を見上げる。
大気が澄んで，星の明かりが揺らめいている。
灰色の雲が流れていく様子を眺めて考えをまとめながら。
自分の中に芽生えていた妙な感覚に言葉を当てはめていく。

「何で後李帝国は科学技術を進めているんだろう。エリドゥ法王国は呪術の世界なのに，後李だけ蒸気機関や鉄鋼技術を開発してるのは何故だろうな」
「そんなの後李の勝手じゃん」
「訳があるはずだ。だって，ハルンツの記憶では後李帝国との仲は悪い感じじゃないんだよなぁ。何となく」
「……ハルンツの記憶って事は五百年前か」
「ごひゃくねん?!」

余りの時間に，俺は首をうなだれる。
五百年もあったら，国の方針は変わるだろう。

悩むだけ無駄だったか。
うな垂れてしまう俺に，シンハが鼻を動かした。嬉しいときの仕草だ。

「オイラは人間の事はよく判んねぇけどさ。ハルルン，記憶が少し戻ってきたんだな」
「気まぐれに夢で見るんだよ」
「全部思い出すかもよ」
「気まぐれを待つ時間があればね」

現実のような，感覚がリアルな夢。
昼間に眠る俺は，夢でリアルな感覚を思い出していた。
哀しい事を，悔しい事を，再認識しなきゃいけないように夢で見ていた。
そんな夢で目覚めるのは，酷く疲れた。
過去の心の傷を再体験するのは，精神的に疲れる。

「とにかく五百年の間に，何があったんだろうなぁ」
「そうだな。何か訳があるよな」

五百年。
何度も皇帝が変わっただろう。世界の力関係も変わっただろう。
俺が深淵の底に閉じ込められていた時の記憶は曖昧で，他の国がどうなってたかなんて思い出せない。
蜘蛛の糸に縛られて，むせ返るような乳香の中で決められた礼拝を時間通りにこなし，巡礼をしてきた人々の前に引き出されて。俺は，人々が感じる神や自然への恐怖や畏怖の鏡でしかなく。
そんな単調で閉塞した恐怖の中の毎日。同じ光景，同じ感情しか蘇らないダショー達の記憶。
名誉も権力も富もいらない。欲しいものは自由。風に吹かれ，果

てしない空を見上げて大地をどこまでも歩いて行きたい願望。
あれ。それって，今の俺の状況じゃないか。
空腹な上に金もないけど。社会的な地位も失ったけど。自由に旅をしている現状。

「なぁんだ」

思わず口元に笑みが浮かぶ。
俺，夢を現実にしてるじゃないか。
何代も生まれ変わっても成し遂げられなかった夢の一つは，現実に出来ているじゃないか。

「やれば出来るじゃん，俺」
「な，何だよ。急に笑ってどーしたんだよっ」
「んー？　何でもないよ」
「気味わりぃ。腹が減って気がオカシイのか？　なぁ，ハルルンっ」

夢が一つ現実になっている。
小部屋で泣いていた小さな俺。オユンだった俺。
思いっきり風を感じろ。夜空を魂に刻み付けろ。
願い続けていれば，生き続ければ，いつか叶うんだ。
俺の願いも叶うだろうか。
諦めずに歩み続ければ，いつか叶う日が来るだろうか。

「ハルルン。本当に大丈夫か？　さっきからニヤニヤしてるぞ」
「少しやる気が出たんだよ」

少年よ。大志を抱け。
人差し指を夜空に向かって突き出す。

指差す先に，今夜も星が煌いている。

その夢には，乳香は感じなかった。
手入れの行き届いた綺麗な庭には，巨石と池と木々がバランスよく配置されてある。
ここは何処だろう。かなりなお屋敷の庭園。
入道雲の空を見上げ，池の蓮を眺め，香りのよいお茶を飲み，そこで待っていた。
誰を？　ここは何処だ？
夢の中の俺は，待ち人を心待ちにしていた。
和やかな昼下がり，こんな穏やかな日々もあったんだと驚きながら。

「ハルンツちゃまー！」

小さな足音と同時に，黒髪の幼女が木陰から走ってくる。
石畳の上を飛び跳ねるように走り，小さな手を広げて全速力で。

「玉葉。急がなくてもいいよ」

慌てて『俺』が走りより，抱き上げる。
摺り寄せられた柔らかな頬の甘いニオイに，笑みがこぼれる。

「玉葉（ぎょくよう）っ。ホッペすりすりは父様だけだろうっ」
「ハルンツちゃまもだいしゅきだもの」
「あぁあ！　こらハルンツっ。笑ってないで離れろっ。婚姻までは父様以外の男と触れてはならぬ！」

愛らしい幼女。
玉葉と名乗ったこの子の父親なのだろう。
鳳凰が刺繍された豪奢な服を纏った若い男が，思いっ切り不機嫌な顔で走ってくる。
王様っぽい風貌で全速疾走してきて，駄々を捏ねるような言葉。
『ハルンツ』と彼は旧知の仲なんだろうか。
よく見れば，背が高く逞しい体つきの男には威厳がある。

「玉葉はマダールに似たんだねぇ。よかったね」
「はい。リリスも義仁もそう言いましゅ」
「賢さは吾に似たのだぞ」
「はいはい。李薗の皇帝陛下は聡明でいらっしゃいますよ」
「むむ……」
「判ってるって」

李薗の皇帝陛下？
夢の中の俺の言葉に，心臓が止まりそうだ。
目の前の，この若い男が？　幼女の父親が？
『ハルンツ』は玉葉を男に渡しながら微笑んだ。

「忙しい中，時間を作ってくれてありがとう。玄徳」

澄み切った空が一番美しいのは夜空。
星の煌きは冴え渡り，月の明かりも鋭くなる。
その月も糸のように細い。
明日は新月の晩だ。テリンが『死んだ』あの日から，ミルを奪わ

れた日から，守れなかった日から月が一巡り。
目の前の人の往来を何気に眺めながら，溜息をつく。
家路へと，歓楽街へと，急ぐ人の流れを道端で眺めながら想いに更ける。
全てが幻なら，どれだけ気が楽だろう。
ここが異世界だという現実。添い遂げようとした想い人を奪われた現実。この世界の権力達から追われているという現実。世界中を敵に回して，『世界を終わらせる』という願望を抱いている現実。
逃げ出せたら，どれだけ楽か。
でも，逃げても楽にはならないのだろう。
例え，今この瞬間に日本に帰れたとしても俺の気持ちが楽になる事はない。
確かに，空腹は満たされるだろう。身の安全はココより断然に確かだろう。
でも，魂の記憶に悩まされる。『世界を終わらせる』気でいる魂の記憶にうなされる。
なにより，ミルがいない世界に何の意味もない。
胸に下げた指輪が，揺れた。

「さて，働くか」

今の俺は国語の教師ではない。
流浪の楽師だ。

大通りから少し人の流れが少ない道端で，場所を決める。
小さな竹籠を置き，三線を取り出す。
この街は，随分と軍人が多い。気が荒い彼らに目を付けられるのが嫌なので，人通りの少ない場所で商売する事になってしまった。
もちろん，人が少なければチップも少なくなる。が，身の安全を考えればしょうがない事。

楽師はクマリ出身者が多いからか，楽師という存在が嫌いなのか，後李の軍人は楽師と見ると眉をひそめる。酷いヤツだと，いきなり殴りかかる。

一体，後李帝国に何が起こったのだろう。

こないだ見た夢を思い出すと，この現状に繋がっているとは思えない。

李薗帝国の皇帝と和やかに話しをしていた夢を思い出すほどに，不可解だ。

確かに『玄徳（げんとく）』と名前で呼んでいたのに。彼に『ハルンツ』と名前で親しげに呼ばれていたのに。

五百年の謎だ。

その反面，一般市民は楽師に対して緩い。むしろ酒場だと歓迎される。

もっとも，大抵の楽師はお決まりの酒場があるらしく飛び込みで入ると商売仇になってしまう。新人楽師は軍人達がいなさそうな寂れた裏通りで商売するしかない。

が，それ以上に俺には問題があった。

幽霊楽師。もしくは鬼火を呼ぶ楽と言えばよいのか。

俺が演奏すると，妙な火の玉が現れる……らしい。演奏に夢中の俺は気が付かないのだが，悲鳴で顔を上げると客が「鬼火が……」と腰を抜かして宙を指差している。

そこにいるのは精霊が楽しそうに踊っている姿。鬼火と言われても，俺としては「はぁ，左様で」としか言えない。

演奏しなければ金が入らず。演奏すれば怪奇現象。そして悲鳴を上げた通行人達に頭を下げて，チップの籠を掴んでダッシュで逃げる。

一晩の稼ぎしかない金で旅して，次の街で演奏して鬼火騒ぎを起こして，また一晩で逃げるように旅に出て。

この繰り返しだ。

「寒っ。布団が恋しいなぁ」

冷え切った指先に息を吹きかけて，調弦を始める。

どこからか，肉を煮込んだ香りが漂ってきて鼻と胃袋を刺激した。

この異世界特有の，少し青っぽ胡椒のような香辛料を入れたスープの香り。

この香り，何故かラーメンを連想させられる。

冬のように冷え込む今晩は，熱々のラーメンが恋しくなってしまう。

「頼むから今日は踊ってくれるなよ」

暢気に夜風に漂ってる風の精霊に呟きかけて，弓を手に取った。

４８　和やかな陽の記憶（後書き）

玄徳やら玉葉やら，人物が出てきました。
前作『千夜を越えて』の８８話がリンクしてます。（８８話の始まりの場面です）。時間が出来たときに，設定集に書いておきます。
えぇ…その，時間が出来たときに（汗）。

次回，１５日　水曜日に更新予定です。

49　双子と男と漫才と

演奏前に，必ず空を見上げる癖がついていた。
俺の世界の始まりに響いた音。
ミルと出逢って動き出した世界が奏でる音を捉えたいんだ。
澄み切った空を見てると，壮絶な速さで拡張していく時間と空間の果てで，その音が存在していると信じてしまう。
地球から遠く遠く離れた別の宇宙かもしれないけど，その音を捉えたいんだ。
捉えたら，キミに逢える気がする。もう一度，あの夏の夕暮れの空を飛んで来たミルに逢える気がする。
だから，演奏の前は空を見上げる。
俺の体の奥で眠る音は，その宇宙の音と和音になると感じているから。必ず抱きしめると決めているから。
想いが高まる。深い深い感情が込み上げる。濃縮されたその感情は，何と表現すればよいのだろう。
ミルが恋しい。表面は穏やに凪いだ水面。水面下は沸騰して滾るような激情。
こんな日は，何を奏でようか。

「……」

『砂山』がいい。荒れ狂う冬の海の前で，望郷の想いを叫ぶ唄。
弓を動かすたびに，弦を震わすたびに，感覚が研ぎ澄まされる。
視界がどんどん狭まっていく。
見開いたかはずの目に，光が消えていく。
周りが見えなくなっていくのと比例して，世界を感じていく。
通行人が足を止める動き。向かいの居酒屋からやってくる人の気配。

今夜は二曲目でこの集中力。この快感。
心地よいが，このままでは精霊達が踊ってしまう。そうなれば商売にならない。
集中を高まっていく快感に，抗えない。
やばいな。
理性の欠片がそう告げた時だった。
案の定というか，いつもより早く悲鳴が上がる。
集中が途切れた途端，世界が飛び込んでくる。
目を見開き，指を差して喚き，腰を抜かす人々。
その視線の先は俺の周辺で踊りまくっている精霊の群れ。

「商売の邪魔するなよっ」

思わず楽しげに踊る暢気な精霊達に愚痴ってしまう。
目の前に置かれた籠には，硬貨が一枚も入っていない。今日の商売は失敗だ。
この寒い中，一杯の飯も食えない結果になるんなら，手を抜いた演奏をすべきだった。
後悔しても全て遅い。
悲鳴が人を呼び，その流れがさらに野次馬を呼んでいく。
素早く荷物をまとめ始めた俺を指差し「「共生者」じゃないのか」と囁く声まで聞える。
その口調や周りの反応から，あまり歓迎されてないのを実感する。
荷物を背負い籠を引っつかんで走り出した俺の背に，「逃げるぞ！」と野次が飛んだ途端だった。
複数の足音が駆けてくる。
狭い裏通りは，今や野次馬だらけで真っ直ぐに歩けない。
その人垣の向こうから見知った暗緑色の甲冑が見える。

「鬼火を出した楽師がおるとは真かっ」

濁声はモーゼ紅海の奇跡の如く。人垣が真っ二つに割れていく。

「貴様かっ」

眼光鋭い男が，獲物を見つけたとばかりに駆け出す。
冗談じゃない！
条件反射で俺も走り出す。
ここで後李に捕まる訳にはいかない。大体，共生者って事ですごく痛い目にあいそうだ。
突然現れた軍人達と，騒ぎを聞きつけて押し寄せる人波。
ぶつかり合う人の流れに，走る事もままならない。
掻き分け，どつかれ，押し返して逆走。
僅かな人の流れの隙間を見つけ，その空間に入り込みながら懸命に大通りを目指す。
まるで嵐のような人波に必死に抗う。
右手に抱えた三線を庇おうと身を捩り，押し寄せる人の肘が避けきれずに勢いよく左目に炸裂した。

「っ」

一瞬，視界が真っ赤に染まって激痛のあまりに息が止まる。
鼻も痛み，生温かい感触とともに，鉄のニオイが溢れ出す。
思わず足が止まった俺を，人の流れが押し返す。無防備になった俺の足を，幾人もの足が踏みつけていく。
人波に翻弄されるまま，後ろ後ろへと押し戻される。不意に押されて倒れそうになる。
踏みつけられる。
無数の足に踏まれる恐怖に体が縮んだ瞬間，両脇を掴みあげられた。

足が浮き上がり，勝手に持ち上げられて走り出す。成人男性の俺を持ち上げたままの走り。

まるで遭難寸前だった船のエンジンが，奇跡の復活をしたようだ。背後に迫っていた軍人達の罵声が，どんどん小さくなっていく。

俺の両脇を持ち上げた二人の男は，無言で風のように人波を潜り抜けていく。

こいつらは，何者だろう。

軍から逃げる様子からして，軍の人間でないのは確か。そう思い至り，考えるのを放棄した。

両脇を抱えられ引っ張られるこの状況は，怪しげなＵＦＯ番組に出てくる『捉まった宇宙人』そのまんまだけど。

とにかく，体力は有り余ってそうな男達に抵抗するだけ無駄だろう。鼻血を流しながら，そう腹を据えてみる。

両脇の男は無言のまま，俺を連行した勢いを衰えることなく街中を疾走して街外れへと辿り着いた。

「おぉおい」

収穫を終えて乾燥した田んぼの中，大男が立っている。

ぼろ雑巾のような俺の姿を見て，その男は眉をひそめた。

「こりゃ酷い」

「だろ？　オレ達必死で連れてきたんだ」

「そうじゃない。お前達，手当てぐらいしてやれ。目の周りが青く腫れてきたな。鼻血もでてるし」

ようやく地面に下ろされた途端，足元からシンハが飛び出た。

俺と男達の間に素早く着地し，全身の毛を逆立てて牙をむき出して唸りだす。

「助けたのは礼を言ってやる。でも何の目的でっ……痛ぇえ！」
「勝手に出てくるなよっ」
「いきなり殴るなボケっ」

しかも何で上から目線なんだろう。
シンハの頭を叩き，懐から手ぬぐいを取り出す。
とにかく，鼻血を出した状態で何を言っても格好がつかない。血だらけの鼻元を隠しながら，頭を下げた。

「危ないところをありがとうございました。でも，何で助けて下さったのか理由が知りたい」
「こりゃあ……」
「すげぇ！　本物かなっ　」
「本物だよなっ」

男達の反応は，面白いほど意表をつくものだった。
今まで玉獣のシンハを見れば，妖だの化け物だのいう人ばかりだったが，彼らは違った。
俺を運んできた二人の男は，目をキラキラと輝かせてシンハを見ていた。ウサギでも見るようなその目つきの彼らは，驚くほど声や体つきが似ている。双子のようだ。
そして，待っていた男は興味深そうに俺とシンハを交互に見ている。
双子達より，俺よりも年長者のようだ。暗闇の中でも判るぐらい，逞しい腕を組んで唸った。

「「イルタサ。これ，本物？　」」

シンハを指差して双子がハモッて尋ねると，イルタサと呼ばれたマッチョな男が両手で双子の頭を叩いた。

素晴らしく小気味よい音がハモッて闇夜の畑に響く。

「指を差すな。これと呼ぶな。お前らは事の重大性が判ってないだろう」

イルタサは，その大きな体を折り曲げる。

「重なる無礼，すまぬ。ワシはイルタサ。こいつらはモルカンとシャムカン。どっちがどっちか，ワシも判らん。まぁ，それはいいとして」

「モル……シャム……」

どっかで聞いた単語だ。

記憶がまた引っかかるが，それが前世の記憶か俺の記憶か，既に自信がないほど最近は混乱している。

まぁ，いい。そのうち判るだろう。

俺はとりあえずイルタサの言葉に耳を傾ける。

「とりあえず，安心して欲しい。ワシ達は，クマリの敵ではない」

「そうそう。敵じゃないよ」

「俺たち」

「あんたの事」

「探してたん……「痛っ」」

「二人で交互に喋るな！　紛らわしい！」

まるで漫才を見ているような光景。

シンハは緑の瞳を輝かせ，尻尾を振っている。

明らかに，面白いおもちゃを見つけたと思っているのだろう。

「すまん。とにかく鬼火を出す楽師とは，貴方の事か？」

「出したくて出してる訳じゃない」
「そうか。では貴方はクマリの民なのか？」
「……」

妙な双子はともかく，イルタサと名乗った男は油断出来ない。彼らこそ，何者なのか判らないのに自分の事を話すのは危険すぎる。
肯定も否定もせず，じっとイルタサの目を見詰めてみた。
俺の青い瞳を見て，玉獣（ぎょくじゅう）のシンハを見て，どう判断するのか知りたい。
クマリの敵ではないと言ったし，後李の軍から助けてくれた。俺が共生者と知って，どうするのだろう。

「玉獣（ぎょくじゅう）持ってるんだから」
「まぁ，共生者って事で」
「間違いないじゃん」
「サンギ様からのお仕事はちゃんと」
「こなしたんだから」
「ちゃっちゃと緑江の船に」
「帰ろうよ」
「だから交互に喋るなっ」

再び頭を叩く音がハモる。
この双子漫才はどうにかならにのか。会話が進まない。

「とにかく，ワシ達と一緒に来い。この後李で共生者が一人で生きていく事など出来んぞ。また軍の連中に襲われるのは見えとる」
「あなた達の目的はなんだ？　その危険な共生者を助けて，何かメリットがあるのか？」
「目的，か。そうだな」

イルタサは逞しい腕を腰にあて，にやりと笑った。
とたんに，厳つい顔に愛嬌が生まれる。

「共生者を助けるのがご先祖様からの言いつけでね……って事じゃ駄目かね」

どんなご先祖様だよ，そりゃ。

４９　双子と男と漫才と（後書き）

次回２２日　水曜日の更新予定です。

50　目指すは春陽

太陽の光が心地よい。
目を閉じても，肌に温もりを感じる。陽の光を避けて，昼に寝て夜に起きる生活がどれだけ不自然だったか痛感する。陽の光というものは，人間らしく生きていく為に必要なものだったと思い知る。
何とかなるさ。大丈夫。
そんな前向きさが細胞の中から，精神の底から沸々と湧き出して皮膚の下で脈打ちだす。
体に堪った夜の冷気も，疲れた肉体が作り出した澱んだ精神も浄化されていく。
積荷の香草の束にもたれかかっていると，ローズマリーのような香りに包まれて気持ちがいい。
船の揺れも，正午の穏やかな日差しも，睡魔を誘い平和そのもの。
風が雲を流していく晩秋の青空を見上げて，何度も深呼吸を繰り返す。

「お待たせー」
「春陽が近づくと」
「人が多くて多くて」
「大変だったよ」

すっかり馴染んだ双子漫才が聞こえ，立ち上がる。
荷の上げ下ろしで混雑する船着場を身軽に駆け抜けて，停留しているこの船へ飛び移る。
両手に食材で一杯の籠を下げての身のこなしは見事なものだ。

「おう。モルもシャムもご苦労さん」
「腹減ったから」

「惣菜買ってきたけど」
「それでいい？　」

チラリと俺の方を見る彼ら二人なりの気遣いなのだろう。
やや細めの目をさらに細め，人のよさそうな顔に二人揃って愛嬌をのせた。
ここのところ，炊事は俺の担当になっている。
俺は笑顔で頭を下げた。

「ありがとう。昼飯は甘えさせてもらうよ」
「珍しく気がきくじゃねぇか」

二人からおつりを渡されたイルタサが苦笑している。
日に焼けた赤銅色の肌に筋肉質の大きな体つき。さらに丸坊主という，傭兵のような風貌のイルタサ。
それなのに何故かイルタサが笑うと，手にしてるのが抜き身の刀であっても，例えがマシンガンであっても，コーヒーカップを磨くカフェのマスターのような雰囲気になる。
そのギャップを初めて陽の下で見た時は，随分戸惑った。傭兵か，マスターか，どちらが彼の本質に近いのだろうかと。
今はややマスターに近いのかなと予想を立てている。そのエプロンの下に，小型銃は隠してると思うけど。

「すっかりハルキの飯に飼いならされたな」
「ひどい言い方だなぁ」
「イルタサだって」
「美味い美味いって食ってるじゃん」
「美味いもんを美味いといって，何が悪い」

双子漫才にイルタサも加わる。

その様子に思わず口元に笑みが浮かびながら，船尾の船室にある炊き場へいく。

せめて温かい茶を入れようと，種火に木屑をのせて火をおこす。やかんに水を入れ，五徳にのせて茶葉を棚から取り出し，大きさも色も不ぞろいな茶碗を四つ用意。

すっかり慣れた自分の手つきに，この船に乗って一週間程経った事に気づいた。

後李の軍に追われた俺を，問答無用の勢いで攫ってきた彼ら。暗闇でみたマッチョな大男と，会話まで分割して喋る双子に，最初は訳が判らず警戒をしていた。

でも，彼らは俺に危害を加える気は本当にないらしい。

あの日以来，俺に出された条件は「船から下りない事」「船べりに近づかな事」「シンハを呼ばない事」のみだ。

シンハを呼ばない事。その条件には戸惑ったが，玉獣（ぎょくじゅう）はこの世界で畏怖の存在である精霊の一種だ。ここ一ヶ月以上の流浪の旅では，玉獣（ぎょくじゅう）どころか共生者すら受け入れられなかった。力ある玉獣（ぎょくじゅう）なら，恐れるのは当然だろう。影に入れることをシンハはかなり嫌がったが，彼らの庇護を受けるなら仕方ないことだ。

そう。俺は彼らの庇護を受けながら旅をしている。緑江（りょくこう）という，後李の帝都である春陽（しゅんよう）近くへ流れる運河を目指して偽装した小型商船で遡っている。

その緑江に，彼らが仲間と過ごす船があるらしい。俺は，そこで彼らの仲間に引き合わされるようだ。

「ご先祖様からに言いつけで，青い目の共生者を助ける」彼ら仲間。

そんな馬鹿げた仲間とは何だろう。

何の利益にならない。むしろ，軍に狙われて大変だろうに，何故そんな活動をしているのか。

いや，そんな事は嘘かもしれない。

今時そんな秘密結社なんかありえない。自由と博愛のフリーメー

ソンになってしまう。いや，ここは異世界だからそれはないか。

「何だろうなぁ」

彼らの目的が判らないけど，居心地のよさに甘えている。

船の旅ならば，人目を避けて夜に歩きとおす事は必要ない。船にいれば，青い目を晒す恐怖から解放される。買出しは双子が率先して行っている。

そして，随分と慣れた彼らの船頭ぶり。旅なれているのだろう。網目のように各都市に繋がる運河を「ここらの水路は細くては軍船が入れない」「商船が多いから隠れやすい」と，熟知している様子。

彼らの目的が判らないまま，身の安全を保障されたあまりの快適な旅に「俺も飯炊きぐらいは手伝う」と食事当番を買ってでたわけで。

「毒は混ぜるなよ」と笑うイルタサは，豪快な人だ。

なるほどと，思わず唸った俺の横で双子は同じ顔を強張らせてしまったが。

そうやって脱出も出来るのかもしれないが，如何せん毒には無知だ。

だけど，自炊十年は無駄ではなかった。

始めの一口は恐る恐るだったが，双子は今や俺の作る日本食風の料理が気に入ったようだ。魚の照り焼きや炊き込みご飯で，俺はこの船の胃袋を掌握したと思う。

しかし……とりあえず，俺の立場はまな板の上の鯉状態。

湯気の悲鳴を上げたやかんを持ち上げ，陶器のポットに静かに湯を注ぐ。茶葉がゆったりと回流して開いていくのを見ながら，思わず連想した。

いや。ひょっとして俺は胃袋を掌握したつもりでも，森で迷子になって魔女に飼われた兄妹の状態だったらマズイな。緑江まで太らせてから食う，みたいな。

勢いとはいえ，自分の想像に少しげんなりする。
二十八になって，何を考えてるんだ俺。

碧の水面という水面に，船がひしめき合っている。微かに見える対岸にも，多くの船が停留している。
それでも，ここは春陽ではなく手前の港街と言われて唸ってしまう。帝都の春陽とは，どれほどの都なのだろう。

「すっげ！　軍艦の数が増えてる」
「また増えてるよ。こんなに増やして」
「どこ行くんだろ」
「やっぱり」
「エリドゥ？」

双子の台詞は興奮すると細かく分割される傾向にあるらしい。
爆音を立てて，悠々と大河の中央を進んでいく大群の軍艦。その物々しさに，停泊中の船はもちろん帆をはためかせ水面を走っている商船も場所を譲り川岸寄りに場所を譲る。
砲台を幾つものせ，船体は金属で補強され，帆ではなく黒煙を高く上げ河を切り裂き走っていく。
その異様さに，積荷の香草の束を抱えたまま双子が話し込んでいる。

「宙船（そらふね）の次は，軍艦だけど」
「春陽（しゅんよう）では徴集がかかってないだろ？」
「でも国境付近は徴集しまくり」
「戦に反発する人を狙ってるよな」

「余計に反発するよな」
「そういえばクマリの姫宮様がいよいよエリドゥ側に入ったし」
「春陽の皇帝陛下は」
「焦ってるんだろねぇ」
「各地で民の不満は増えてるし」
「税金高すぎるんだよ」
「北方の遊牧民も不穏だし」
「本来北の護りの玄武家はねぇ……」
「そうそう。知らずは春陽のみだよねぇ」
「ねぇ」

双子の口から出た単語に，体が脈打つ。
クマリの姫宮様。
ミルのことだ。

「ミ……姫宮様は，エリドゥに入ったのか？」
「あれ？」
「ハルキは知らなかった？」
「オレ達，ハルキは玉獣持ってるし」
「あの時，クマリの人と一緒にいたから」
「青い目に黒い髪だから」
「てっきりクマリの大連だと思ってたのに」

双子は，同じ角度で首を傾げる。
そのCGのような二人を見ながら，俺は気づく。
彼らは，俺の事を何か勘違いしているようだ。
そして，「あの時」。
以前に会った事があるのか？

「そこまでだ。モルもシャムも余計な事を喋るなよ」

脳ミソをフル回転させていた俺の肩に，イルタサの大きな手がのせられた。
にやりと，クセのある笑顔を浮かべてはいるが，青混じりの茶色い目は笑っていない。
「ハルキは姫宮の事，気になるのか」
「……戦かと思えば，誰だって気になるでしょう」
「しかしその玉獣はクマリの民の印だろう？　それもあれほどの大きな玉獣だ」
彼らは，俺をクマリの大連と思っているらしい。
ミルやテリンのように，クマリの中でも力があり戦闘をしていた人物と思っているのか。
イルタサや彼らの仲間の考えがわからない。
彼らは何を考えているんだ。
イルタサの質問に答えず，俺はただ見詰めた。
ここで俺がダショー本人とは明かせない。
「まぁいい。夕暮れには母船に着く。そこでサンギ様に聞けばいい」
「さんぎ様？　」
唐突に出てきた言葉に，思わず眉を寄せる。
さんぎ……参議？　いや，人名か？
「一つだけ教えとく。サンギ様には逆らうなよ」
「う，うん。ハルキ，怒らせたらだめだよっ」
「すんげー怖いんだからなっ」
「あ，本人目の前にサンギ様って言うなよ」

「団長って呼ばなきゃ怒るぞ」

双子の引きつった顔をみて，さすがに俺は頷いた。
自分の事を団長って呼ばせるなんて，どんな人物なんだ？

５０　目指すは春陽（後書き）

次回２９日　水曜日の更新予定です。

51　船上の騒動

緑江（りょくこう）。

その名が示すとおりに，河の水は緑色だ。でも水は澱み，その水面には残飯や死んだ動物の死骸らしき物体が漂っている。

岸には連なるように大小さまざまな船が停泊し，人のざわめきが途切れる事はない。

船は，そんな忙しない夕暮れの停泊場を帆に風を受けながらゆっくりと進む。

停泊した船にも岸にも無数の明かりが煌きだし，夕闇が濃くなるにつれ想像以上に大きな都市だと判ってくる。

その光の量に日本を思い出す。

夜の東京を海から眺めると，こんな感じかもしれない。

その光の下には広がる世界は，汚れているのか幸福に溢れているのか。

「お疲れさまですっ」

「おぅ。出迎えご苦労。モル，シャム」

「「はいはぁい」」

いつの間にか伴走していた船から声がかけられるとモルもシャムも，素早くも手馴れた動作で船を岸に寄せて綱を操り帆をたたんでいく。

「団長からの言づけで，やはり母船で待っている，との事です」

「判った。頼む」

イルタサの言葉で，伴走の船に吊り上げられてた小船が下げられ

る。

公園の池のボートのようなそれは，この船と比べればまるで柳の葉のように頼りなげで小さい。

とはいっても，重そうだ。

向かいの船にも，何人もの男がいるのだろう。野太い掛け声と共に作業しているのが，薄暗い夕闇の向こうに見える。

「ハルキ。荷物をまとめろ」

「母船へ行くのか？」

「サンギ様……いや，団長に会ってもらう」

もう，何が出てきても驚く事もない。そう，たとえ白粉を塗り真っ赤な鼻の道化が出てきても，丸坊主のマッチョに肩車された芸人が体当たりな芸をみせようと。

この世界に来てから，俺の価値観は激しく崩れているようだから。ミルを取り戻すまで，俺に怖いものなんかない。

自嘲気味に笑って，少ない荷物を船室から持ち出して甲板へ戻る。

何事だろう。慌しい幾人もの声が聞こえる。

「火は用意するな」

「しかし，こうも足元が見えないのは」

「とにかく篝火を消せ！」

珍しいイルタサの慌てた口調に，何事かと走りよる。

「何かありましたか？」

「ここへ来てはいかん！」

慌てて船べりに走り寄り，澱んだ水面に写った俺の霞んだ影から水柱が立ち上がる。

「くっせーーー！」
「シンハ？！」

水面から飛び出して甲板に降り立ったシンハが，体を振るい水滴を跳ね飛ばしていく。
何度も何度もその行為を繰り返し，尻尾の先までブルンとさせるとイルタサに牙を剥いて笑った。

「残念だったな」
「お，お前は何考えてるんだよっ」

夕闇とはいえ。
周りの船は比較的小さく，甲板の上は死角とはいえ。
他人様たくさんいるこの状況で，どうして出てくるんだ！
思わずシンハの頭を叩いてしまう。
このもふもふの毛に覆われた頭の中には，慎重とか遠慮とか敬語というものが入ってないに違いない。

「叩くなよっ。オイラはハルキの身の安全を第一に考えてるんだぜっ」
「また化け物とか言われるんだぞっ」
「そんな小っせー事グダグダぬかすなっ」
「俺にとっては小さくないんだよっ」

再び頭を叩こうと上げた手を，シャムとモルに捉まれる。

「頼むからっ」
「頼むから叩かないでくれ！」
「玉獣（ぎょくじゅう）を叩くなんて恐ろしい事」

「しないでくれっ」
「何でだよ。この馬鹿相手に叩くなって無理だろっ」
「だーーー！」
「馬鹿って言わないでっ」
「これ以上の刺激はヤバイよっ　」

双子の顔は，引きつっている。
いつも余裕で笑っている茶色の目が真剣そのもので，俺は思わず力を抜く。
戸惑い辺りを見渡すと，向こうの船の人も逃げ腰でこちらを伺っている。
やはり，シンハの姿を見たのだろう。普通の人間は玉獣を恐れるのが普通という事を，見せ付けられる。

「よ，よくやったモルとシャム。大丈夫か？　」

イルタサの坊主頭が汗で光っている。
心なしに，イルタサの腰が引け気味だ。

「大丈夫だ。シンハは何もしないから」
「人間はさ，オイラ玉獣が怖いんだよ」

少し誇らしげに，シンハが堂々とした歩みで俺に近づく。
それは，まさに王者の風格だ。
モルとシャムが，慌てて俺から離れてイルタサの背に隠れた。
確かに。彼らはシンハを初めて見た時，物珍しそうに見ていたが必要以上に距離を空けていた。

「神苑で生まれる星の欠片が玉獣の正体だ。そこいらの人間の共生者なんか目じゃねぇよ」

「そうなのか？」
「こいつらなんか，その気になったら瞬殺だぜ。人間が使う呪術なんか使わないで精霊を動かすんだからな」
「あぁ。なるほど」
「だから，こいつらはオイラに出てきて欲しくなかったんだろ？ハルルンを船から降ろさなかったし，船べりにも近づけなかった」
「そうだけど」
「双子星は，大地の気に触れた影からしか出てこれないからな。俺を影に閉じ込めたかったんだ」
「当たり前だろう。おい，そんなにみんなを怖がらせるな」

シンハは再び牙を見せるように笑った。
間違いなく，肉食獣の微笑み。

「ハルルンをどうする気だ？　お前らの頭……団長とか呼んでいたな。その団長がオイラを影に閉じ込めておくように言ったのか？」
「シンハ」
「答えによっちゃあ，お前ら覚悟できてるだろーな。その魂まで食ってやるぜ。誇り高きダショー……っ痛！」
「この馬鹿玉獣！」

思いっきりシンハの頭を叩いてしまう。
ここでダショーと言うなんて。相手が何者か判らないのに正体ばらす馬鹿がどこにいる。
シンハの首を捻って，耳元で囁く。

「イルタサ達は俺をクマリの大連（おおむらじ）とか思ってる。このまま勘違いさせとくんだ」
「何でだよ！　ダショーとしての扱いを要求していいじゃん」

「イルタサ達が深淵に繋がってるかも判らないんだぞ」
「あ，そっか」

やっぱりシンハの頭の中には慎重という考えはないんだな。
確信。緑の目は尊敬の眼差しで俺を見ている。勘弁してくれよ。

「まぁ……確かに，シンハが出てきた方がイルタサ達への威嚇になって話が通りやすくなりそうなのはあるけどなぁ」
「だろ？　オイラ役に立つから出てきてよかっただろ？」
「でも，さっきみたいな馬鹿は困るんだよなぁ」
「また影の中に入るのは嫌だ！　あの水，クッセーもん！」

よほど，緑の水は澱んでいるんだろう。
シンハは必死になって「影には入りたくない」と駄々をこねはじめる。
そして遠巻きに不安げな視線を送ってくるイルタサ達。
さて。どうすべきか。
三者三様。俺はついと，夕闇に包まれだした夜空を見上げて妙案を思いつく。
思わず，シンハに向かってニヤリと笑いかけた。

リーダーの条件。
決断力とか，判断力とか。
でも違うと思う。目の前のおばさんを見て，判った事がある。
リーダーの条件とは，カリスマ性と声のデカサだ。
さっきから，耳の鼓膜どころか肌まで震わす声で質問攻めだ。
船長室とはいえ，程ほどに狭い部屋に大人が幾人も入ってこの声

はキツイ。

「あんた，名前は」
「……ハルキ」
「どこの家の？」
「関口晴貴」

嘘は言ってない。
俺は事実を言っているだけだ。
ただ，それが地球での名前である事や魂の履歴は言ってない。
そう。嘘はついてないけど，解説を入れていない。
明らかに当惑した彼女は，鼻の穴から息の塊を勢いよく吐き出して唸る。
どうやら，このおばさんがイルタサやモルやシャム達のリーダーらしい。
ガリ股で仁王像のように立つその姿には，迫力がある。永田町のオジサン達より迫力があると思う。

「セキグチなんて家は大連にあったかい」
「サンギ様もご存知ないんですか」
「団長とお呼び」

イルタサを一喝し，自らを団長と修正した彼女は一歩前に出た。
途端，シンハは全身の毛を逆立たせた。

「ふん。確かに玉獣（ぎょくじゅう）は確かのもんだね。まぁ……クマリっていうのは間違いなさそうだけど」

俺は黙って，サンギと呼ばれても団長と名乗るおばさんを見返す。
僅かに青が混じった緑の目は，鋭く俺の目を捕らえたままだ。皺

が深く刻まれた肌は，赤銅色に焼けている。長い髪を後ろに一まとめに結い上げ，逞しい腕は米袋を軽々と担げそうだ。

「その青い瞳。こんなに青い瞳を持った大連なら，その筋で話題になりそうなもんだけどねぇ。ハルキとか言ったね」

「呼び捨てにすんなよっ。そんな安い魂……痛っ」

また余計な事をじゃべりそうなシンハを思わず叩く。

サンギは太い眉を片方だけ上げる。

「おやまぁ。随分な扱いだね」

「それでも，コイツがいるからあんた達はおとなしい。違うのか？」

「それはそうさね。玉獣なんか連れられたら，こちらは下手に出るかないからね。それでも縄をつけてくれたからありがたいけど……この子は随分と怒っているよ。いいのかい」

「喧嘩っぱやいから，これで丁度いいんですよ」

「ひでぇ！　ハルルンひでぇよ」

影に戻るのを嫌がるシンハと，シンハを怖がるイルタサ達。そしてシンハを威嚇に使いたいと思った俺。

妙案として，俺はシンハを縄で括る事を提案した。

荒縄で縛るだけでも，充分に威嚇として使える。そしてイルタサ達には視覚でシンハは俺の支配下であると強調出来る。

ただ，シンハはかなり怒った。ゴネた。まぁ，気持ちは判る。

「首元がかっこよくなる飾りしてやるって嘘つきやがってっ」

「ネクタイ似合ってるよ」

「これはいいんだよっ。でも後に縄つけたら括ってるのも一緒だろーがっ」

酷ぇ！　人でなし！　嘘つき！　詐欺師！
あらん限りの言葉で罵倒するシンハの首元には，俺のネクタイが縛ってある。
そして首の後で，こっそり縄を括りつけた。
作戦通りに光沢あるネクタイに気をとられ，シンハは縄付きとなった。
蝶結びのネクタイを飾ってリードを付けた姿は，ペットのようだ。

「まぁいい。話を戻そうか。私の手元の情報だと，ここんとこ街道に鬼火を出す楽師が出てたんだけど。それはアンタで間違いないかい」
「アンタじゃない。ハルキだ」
「間違いないんだね」

それは事実だ。
俺はサンギの目を見たまま頷いた。
上手な嘘をつくには，事実を混ぜる。
ここ半年で身につけてしまった技術だ。

「何の目的で後李で危険を犯して楽師をしていたんだい。鬼火と言われても，それは精霊の舞だったんだろう？　そこまでの共生能力を持っているのに楽師をしている。しかも共生者を徹底的に排除している後李で，一体何をしていたんだい」

51　船上の騒動（後書き）

次回　１０月６日　水曜日の更新予定です。

52　遠い過去からの再会（前書き）

前作『千夜を越えて』の内容が出てきます。
「判らなくても突き進む！」方でも読めるよう，説明ネームバリバリで描いてますが，気になる方は最終話や一章のラストを読んで頂ければ……。すいません，面倒くさい事して（汗）。

52　遠い過去からの再会

真実を混ぜれば，それは完璧な嘘となる。
何を隠さねばいけないのか。何処まで明らかにしていいのか。
俺の頭の中で猛スピードで計算する。

「死にたかった。後李帝国にいれば，俺は死ねるかなと思って」
「死にたかった？」

俺の言葉に，サンギが眉をひそめた。

「俺の仲間が，死んだ。どうしたら良いか，もう判らなくなってた。一人は怖くて，辛くて，だから死にたかった」
「ハルルン」

気遣わしげに俺を見上げるシンハの首元を撫でてやる。
ふわふわの感触に，俺はどれだけ救われただろう。自然と笑みが零れる。
大丈夫。俺はもう死なない。死ねないんだ。
ミルをこの手で抱きしめるまで，死ねないんだ。
だからここで大芝居だってうってやる。

「俺は何も覚えてない。天鼓（てんこ）の泉が壊された瞬間からしか，記憶がない」

地球からこの世界に来たあの瞬間以前の事は，何も知らない。
だからこれは嘘ではない。

「俺が誰なのかも判らない。名前しか思い出せない」

これは嘘。

「俺には玉獣がいる。だから共生者だと教えられた。それ以上は思い出せない」

これは半分は嘘。

蘇りつつある記憶は，サンギ達の正体もわからないのに話せない。いや。誰が相手でも話せない。

俺はじっとサンギを見詰めた。

さぁ，ボールを返したぞ。

あとは返答次第だ。

身動き出来ない沈黙がしばらく続いてから，サンギが溜息をついた。

「厄介な子を連れてきちゃったもんだね」

厄介な子。

２８の男に厄介な子と言うか。でも逞しい中年のおばさんな容姿のサンギから見れば，俺は雛鳥なんだろう。

少しムズ痒い感覚で見返すと，中央のテーブルに大判の紙を広げた。

ランプの明かりに照らされた二色刷りのソレは，地図のようだ。いくつもの曲線が描かれている。

「天鼓の泉が破壊されたのは三ヶ月近く前だね。まだ暑い頃だった。あの戦をかいくぐったクマリの戦士なのかい」

明らかに俺への問いかけなんだろう。控えている幾人かの男からも視線が送られたが，俺は無視した。

真実以外は，喋らない方がいい。余計な言葉を入れれば，嘘がばれる。

「クマリの姫宮様は噂じゃあ，十年前に異界渡りをしたダショーの魂を追っていったとか言われていたけど。どうかね」

再びの問いに，俺は黙りを決め込む。

内心，冷や汗が流れ出す。

噂というが，それは真実だ。何故知っているんだろう。

「そして天鼓（てんこ）の泉が破壊された日に，新しい星が生まれた。やっぱり，還ったんだろうかね」

「新しい星は，俺も見ました」

「そうだねぇ。ダショーの星なんて呼ばれてるねぇ。世間じゃあ，ダショーが異界から還ったとか言われているねぇ」

サンギは，地図を眺めていくつかの点を指で辿る。

網目のような河は，運河なのだろうか。陸地に書かれた各都市を結ぶ線のようなソレを，太い指がたどっていく。

一際大きい丸で印がつけられた点を，軽く指先で叩いて唸る。何を考えているんだろう。

「あんたが大連（おおむらじ）として天鼓（てんこ）の泉の戦場にいたのなら，姫宮様が異界渡りをしたか知っているだろう？」

「……」

「ダショーは異界から還ったのかい？　姫宮様はダショーを知っているのかい？　そもそも……ダショーは本当に存在するのかい？」

「その前に。あんた達はダショーの事を何で知りたがるんだ。どこに属してる？　どこの国の組織なんだ？」

話を聞いてると，サンギ達の目的が判らない。
クマリに加担する組織なのか，それともどこかの国の間諜なのか。
サンギがニヤリと笑い，俺の後ろに立っているイルタサ達に目配せをした。

「確かに，私達の素性も知らなければ質問には答えられないだろうね。見せてあげな」

男達は，首元を探り何かを引っ張り出した。
柔らかなランプの明かりに照らされて，それは白く反射した。

「私らの仲間は，この護り貝を持ってる」

ニライカナイ。
白く小さな巻貝を見た途端に，単語が閃いた。
忘れてしまった大切な記憶が，閉め忘れたようなガスの元栓のような記憶が，瞬く間に再生されだす。

「この護り貝を持った仲間は，ブラフ大陸中にいるよ。私らは，遠い先祖を同じにする仲間さ」
「先祖……ニライカナイから来た？」
「あんた，何か知ってるのかい？！」

顔色が変わったサンギの様子に気づいたが，それどころではない。
目の前から記憶に意識が奪われそうになっていく。
再生されていく記憶が，猛スピードでパズルを合わせていく。

ニライカナイには行かない。
そう宣言した夜。

いつかニライカナイも，ばれてしまうよ。その前にここを出よう。
そう説得した夜。
これから生まれる子孫の運命の為にニライカナイを出よう。
そう，みんなに頭を下げた。

みんな？　そう，みんなに。
小さな白い巻貝を，この護り貝をみんなで首に飾ったんだ。
この世界を欺く秘密を共有した印として。離れていても同志の印として。
あれは，誰？
俺は，誰？　俺は，ハルンツであり……ラインハルトであり……。

「ハルルン！」

よろめく俺を支えるように，シンハが身を寄せる。
思わず片膝をついた俺は，シンハの背を支えにゆっくり立ち上がった。
緊張が走るサンギ達に，笑いかける。
運命とは，何と不思議なものだろう。
その縁の巧みな技に，微笑んでしまう。

「……何を知ってるんだい。あんた，何者なんだい」
「さぁ。誰だろうな」

遠い遠い五百年前に別れた彼らとの再会。
彼らは，ハルンツと同じ里だった人達の子孫だ。
当時のハルンツは，自分の共生能力を戦に利用されるのを恐れていた。そして無防備の同郷の人達は権力者から逃れる為に絶海の孤島へ旅立った。
その絶海の孤島がニライカナイ。

さらにハルンツは，その危険な血統を隠す為に若い幾家族かをニライカナイから大陸中へ分散させた。
青い瞳の共生者が，大陸中に散らばる理由。
ニライカナイの記憶がやがて消えても，時とともに血は大陸のあちこちで交わり薄れて分散される。
エアシュティマスから続くその能力は，価値が薄まっていく。エアシュティマスとハルンツの血統を継ぐ印の青い瞳も，交わっていく。
ハルンツは，生涯をかけてその能力をこの世界から消し去る事に費やした。
深淵の神殿から隠れて抜け出し，何度も何度も彼らを逃がし続けた。
その途方もない記憶に，大きく溜息をつく。
何てことを，したんだ。
何人もの運命を背負って世界を変えようともがいた自分に，溜息しかでない。
呆れや，尊敬や，哀しみや，途方もない月日を思って，溜息が零れる。
好きな人と過ごせなかったのは，幸せに出来なかったのは，この事だったのか。
自分の能力を残さない為。自分の遺伝子を残して，後の抗争の元を作らない為。
その為に，ハルンツは自分の幸せを犠牲にしたのか。
好きな人と過ごす，そのささやかな幸せさえ犠牲にしたのか。
この世界の均衡を護る為に。まだ見ぬ子孫の為に。

「昔，俺はあんた達の仲間に会った事があるみたいだ。その護り貝……懐かしいよ」
「この護り貝を見たのかい」
「少し，思い出した。ニライカナイから来たと，そう言っていた

な」

ハルンツは，その巻き貝を大切に未来の自分へと残していった。
深淵に残した小さな宝箱に，幾人もの過去の自分が巻貝を大切にしまっていた事も思い出す。
あぁ，そうだ。これが，全てを犠牲にした印だった。ハルンツが護ったものの印だった。
この胸に，今下げているのは青い指輪。その指輪を，着物の上からそっと握る。
ミル。俺は運命を信じる。
進む道は，きっとキミに繋がってる。

「もちろん，誰にも話してない。死んだクマリの仲間にも話していない」

サンギ達の顔は，一斉に強張った。
主導権は俺が握った。相手の秘密を握った俺が優位に立ったと確信。

「あんた達には話す。確かにダショーは存在する。姫宮様はダショーをこの世界に連れ帰った後，深淵（しんえん）に攫われてしまった」
「ダショーは本当に存在するのかい?!」
「存在する。姫宮様は……ダショーを庇って，捉まったんだ。ダショーは無事，逃げている」

大勝負だ。
俺は深呼吸してサンギを見詰めなおす。
興奮していく血を理性で落ち着かせながら，慎重に言葉を繋げる。
この運命の道を，キミへと続けるんだ。

「ダショーの姿を知っているのは，姫宮様と俺だけだ。あんた達の狙いは判らないが……深淵や後李帝国の者ではないのだろう？そんな権力から離れた存在なんだろう？　それなら，それなら力を貸してくれ。俺は姫宮様を助けたい」

サンギを見詰める。

僅かに残った瞳の青に，記憶は残っているだろうか。

ハルンツとの記憶が，残っているだろうか。

祈るように，その瞳を見詰める。

互いを探る視線が沈黙の中で蠢いていく。

「お願い。お兄ちゃんを助けてあげて」

それは小さな声だった。

小さく震えるような少女の声に，全員がたじろぐ。

いつの間にか開いている扉から，おずおずと少女が姿を現した。

その顔には，笑い顔の仮面がつけられている。

「悪い人じゃないよ。本当だよ。嘘，ついてないよ」

白く細い手が，仮面を外す。

まだ幼さを残すふくよかな頬と，青い瞳が露わになる。

真っ青な青い瞳に蛍火が宿っている。

「ミントゥ……あんた」

「勝手に出てきてゴメンなさい。でも，でもお兄ちゃん，悪い人じゃないんだよ」

サンギや部屋にいる大人達へ一所懸命にお願いする少女の声に，思わず声を上げてしまった。

思い出した。
テリンと市場で軍人達に絡まれた時に助けてくれた，青い瞳の少女。
ニライカナイの言葉を思い出させてくれた，少女だ。

５２　遠い過去からの再会（後書き）

次回　１０月７日　明日に設定集第二弾を投入予定。
すみません。実は諸事情により，しばらく連載休止予定です（涙）
。
詳しくは活動報告に書きましたが，現実世界が忙しくなり，頭の中が回らなくなりました……。
とりあえず，明日に設定集二弾を。
連載開始は１２月１日　水曜日を予定しています。
ゴメンなさい。

設定集　2

簡単にお国紹介です。
『見下ろす』と『千夜』で時間の経過もあり，名称などの変化があります。
そこんとこ，いい加減ですが少し書いておきます。

クマリ

大陸の中央部にある山岳地帯より南の平野を領土としている。
山岳地帯には，大陸の気脈が溢れ出る『天鼓(てんこ)の泉』を中心とした『神苑(しんえん)』と呼ばれる深い森がある。『神苑』のみ，獣の姿をとった精霊の一種『玉獣(ぎょくじゅう)』が生息している。

クマリ族は，個人差があるが共生能力を持っている。その為，玉獣と心を通わせたり，楽の音に敏感だったりする。
また，能力の強いものは『玉獣』を操る『玉獣使い』を生業にしている。

『大連(おおむらじ)』という，元は『神苑』を守護していた２４の家々。支配層として存在していた。
ただ，時間の経過と共に『大連』の家は減少している。（共生能力が弱まったこと。経済力など家によって大きく差が出てきた事など）

国の基本は農業。山岳地帯からの豊富な雪解け水に農地に適した豊かな国土を持っている。

ただ，西にエリドゥ（エリドゥ法王国　深淵の神殿），東に李薗帝国（後李帝国）と，大国に挟まれて常に脅威に晒されている。

クマリの乱では，後李帝国により国土は焼き払われ徹底的に潰される。

生き残った僅かな民も，人買いに連れ去られたり方々に散らばり身を隠しているという状況。

蛇足ですが……クマリは，もともとネパールに実在している女神様の名称です。生き神様です。様々な選抜を潜り抜けた（大きな瞳に牛のような睫毛，とか。暗闇を怖がらない，胆力がある，占星術で国王との相性がよい，など）幼女がなるんだそうです。以前，ドキュメンタリーで地方のローカル・クマリを見たことがありますが（首都には国のクマリ。地方の村には，村ごとにクマリを選出するそうです），やっぱり神聖さというか，世俗離れした雰囲気がありました。美少女です。王制が崩壊した今もロイヤル・クマリが存在するのだから，その信仰は大きいんでしょうね。そこから拝借して私って……罰当たりです（汗）。とにかく，ググると資料があります。はい。『クマリ』の国のモデルはやっぱりブータンやチベットです。

後李（こうり）帝国　（李薗帝国）

大陸の東の果てに位置する大国。首都は春陽。国土の半分は荒野だったが，玄徳帝による大運河網の整備により農地が劇的に増える。

エアシュティマスの后ナキアの長女『リ』の血が流れる為，皇族には共生者が多い。

『白』を姓に持つ四つの宮家があり（朱雀　玄武　青龍　白虎），そこから皇帝を選出。
ただ政の多くは大極殿と称される官僚が支える。
『千夜』と『見下ろす』の間に内乱が起こり，白姓の皇族ではない人物が一時だけ政権を握ったが，後に朱雀家筋と玄武家筋の皇族が政権を奪い返す。この事変より李薗帝国から後李帝国と名を変える。

常に周りの小国と戦をしている軍事国。
大陸で初めて共生能力に頼らない指針を打ち出し，後李帝国時代に技術革命を起こす。
カラクリと称されるその技術力は，ハルキ曰く「近代化の一歩手前」。蒸気自動車が存在する。

蛇足……モデルはやっぱり中国で。でも中国史は苦手なので，突っ込まないで下さい（汗）。あとイギリスもイメージにいれてあります。それこそ清を植民地化していく過程などの外交手腕に長けたところろか，身分階級の感じとか。

エリドゥ法王国　（エリドゥ王国）

大陸の西に位置する大国。
大きな大河が二つ，流れている。河口近くで合流する二つの大河の中洲に存在するのが，深淵の神殿。
エアシュティマスの后ナキアの出自国。
大河がもたらす豊かな国土から得られる農作物や，深淵の神殿を目指してくる巡礼者達の落としていく金で，かなり豊かな国。政治

的にも安定し，神殿がある事で戦を避ける政情もあり，巡礼者達が起こす経済活動により王国の通貨が大陸中で使用できる唯一の通貨となる（エリ金貨　エリ銀貨）。

でも，これは『千夜』の二百年後までの話。

後，深淵の神殿が力関係を逆転。王国側の官僚が神官達に取り込まれ，また神官達が王国側を内側から侵略し王国を崩壊。　エリドゥ法王国　が生まれる。

神官達が政治を握り，宗教と政治が密接に絡み合った独特の国を生み出す。

蛇足……モデルはやっぱりイスラムです。イスラム文化が好きなんですよっ。でも，宗教と政治が絡み合って独特の思想があるって感じはアメリカをイメージしてます。現代史はただ今勉強中です。難しいです。もっと学生の時に勉強すればよかった…。

ちなみに。この名称はシュメール文明の古代都市の中の『エリドゥ』を拝借しました。響きが好きなんです。現実とは何の関係もないですからね。念のため。

深淵（しんえん）の神殿

エリドゥ王国の中を流れる二つの大河の中洲に存在する神殿群の総称。

主神殿は水神エンキを奉っている。その周りを大気の父神　大地の母神　太陽神　月神……と，取り巻くように大小の神殿が建てられている。

二つの大河の中洲に建てられているにも関わらず，千年間も大河

の氾濫は起きていない。

エアシュティマスの記憶を持つ『ダショー』を頂点に，政治と宗教の両面を司る全体の総指揮者である執政官，宗教面を司る共生能力をもつ神官，政治面を司り共生能力を持たない僧侶と，ピラミッド式に階級がある。

階級のモデルは日本の宮中。従三位以上は守護呪術を使える，いわゆる上位の共生者。僧侶も昇級試験や実績により階級化されています。

各国の王族貴族の子弟も留学している（共生能力の有り無しに関わらず，深淵の神殿との縁を保つ為に。いわば人質に近い感覚）。

ミルも後李帝国に対する後ろ盾目当てで，留学という名の人質に出されている。

蛇足……神話などの宗教面はモデルは中東。シュメール文明！シュメール神話！　カッコイイ！　日本と同じ多神教です。比較的イメージしやすいかなと。でも作者の妄想のままに描いてます。はっきり言って不勉強です。資料を読めば読むほど（資料自体，なかなか揃えられないし）混乱しています。アッシリア文明と混合してる部分も多いです。あまり参考にしてはいけません（断言っ）。

宗教的な面はシュメールですが，衣装や階級的な事は日本ちっくです。何故か袴を履かせています……。すみません。ググると資料が出てくるのでお分かり頂けると思うのですが……シュメールの神殿の遺跡から出てくる神官像って，羊毛の腰巻姿なんですよぉ（汗）。これがどうにも……想像出来ませんでした。私の妄想力を超えているのです（滝汗）。やっぱり，神官といったら白を基調にした狩衣の浄衣です。……フェチじゃないですよ。断じて。

ニライカナイ

大陸の極東，海の果てに存在する孤島。常夏の島。

エリドゥを離れたエアシュティマスが，息子のタシ（ハルンツの前世）や忠臣達とその家族を連れてたどり着いたのが最初。

幾代かを経て大陸に戻るも，再び子孫が島へ戻る事になる。（参考……『千夜を越えて』の一章と最終話）

元を辿ればクマリの民なので，僅かでも共生者の能力は持っている。ハルンツは「エアシュティマスの血統を薄める為」「権力者に利用されるのを防ぐ為」に大陸に幾家族を分散させ共生能力を薄めようとするが，皮肉な事にニライカナイに残った家系は近親婚が進み共生能力は強くなる。

さらに共生者への風当たりが厳しくなる時代の流れを読み，かつてハルンツに助けられた大恩を返そうと大陸中に散らばった彼ら子孫が「共生者達を護る」地下活動を始める。

ニライカナイは，そんな彼らの魂の故郷でもある。

蛇足……南の島ときたらブルネイ！　行きたい一度は行きたいー！！　青い海，白い珊瑚の砂浜。あの辺りを背景でイメージしてます。ウットリです。海賊とか旅するサーカス団とか，えーっと名前は忘れたのですがビルマに実在する海の民も参考にしてます。あー……名前忘れた。ドキュメンタリーを録画したはずなのですが（汗）どこにしまったかな。あ，『世界の果てまで行ってQ』で無銭宿泊企画で出てました。

かなり雑ですが，こんな感じです（汗）。

李薗の北部には幾多の遊牧民族，エリドゥの北部や南部にも1つ2つ国は存在していたハズですが，また書く時間と余力が出来た時に追加いたします。

色々書きましたが，特定の国をモデルにはしていません。ここに書ききれない細部な部分（食文化など）も含め，複数の国や文化を混ぜています。あくまで架空のお話。ファンタジーですから。妄想ですから。深読みは無用です。

設定集　2（後書き）

という訳で。
ごめんさい。連載休止に入ります（涙）。
活動報告に書いたとおり，現実世界の忙しさで手が一杯な状況でして……（汗）。もう少し私が器用ならいいんですが，ギブアップです……。

次回は12月1日　水曜日に更新予定です。宣言ですっ。
また近くなったら，活動報告の方を出します。
では，しばし季節はずれの冬眠を。クリスマスソングが聴こえる頃には復活してますので（汗）。

53　船出

狭い船内の廊下を，器用に進むイルタサの背を見ながらついて行く。

船はとにかく火の元に気をつけろ。

甲板下のこの階は，売り物の香草の束と香油の樽が置いてあるから特に火気厳禁。

トイレは綺麗に使え。生活水は手桶二杯まで。最低限に。

船上での生活のこまごまとした注意を受けながら，最下階の船員室から案内を受ける。

「この船に乗るんだから，一応仕事はしてもらう。ハルキの飯は美味いからな，厨房に推薦しといたぞ」

「ど，どーも」

俺はこの船で生活する事を，とりあえず許されたようだ。

昨晩，青い瞳のミンツゥと名乗った少女に後押しされるように，俺はここにいる。

サンギや一部の人達はまだ俺の事を疑っているようだが，とりあえずここにいる許可は出た。

ミンツゥの存在は，この船ではそれだけ大きいという事だ。

混じりけのない青い瞳を持つ少女。

「お疲れ様っす」

「おう。ご苦労さん」

狭い船内の廊下を，幾人もの男達とすれ違う。

イルタサの後にいる俺の目を見ると，大体の人が顔を強張らせる。

そして，俺の後ろにいるシンハに気づくと固まる。

余程，青い瞳と玉獣が恐ろしいのか。
その様子が可哀相なほどの怯えぶりなので，俺は足早にイルタサの後を追う。

「まだ慣れてないからだ。もうしばらくすれば，シャムやモルみたいに慣れるさ」

イルタサは，嘘をついている。
彼らは，知っている。
青い瞳の力を知っているからこそ，怯えている。
玉獣（ぎょくじゅう）の力を知っているからこそ，恐れている。
最初に出会った頃，モルとシャムはシンハを恐れていなかった。
だが，彼らはイルタサから玉獣（ぎょくじゅう）の恐ろしさを聞いたのだろう。
珍しい動物を見ているような反応だった彼らは，その翌日は酷く恐れていた。
それが，正しい反応なんだ。
そう思うと何か哀しい。
青い瞳の力が何なのか，よく判らない。けど，気心の知れた彼らも俺を恐れているんだろうか。
イルタサも，心の中では恐れているんだろうか。化け物と，思っているんだろうか。

「最上階の船尾には，サンギ様の部屋がある。昨日会ったろ」
「あのおばさんですね。あの人は船長なんですか？」
「いや。団長だ。で，あそこは女達の部屋だ。まぁ，船には女はあまり乗らないから今はミンツゥと世話係の女ぐらいだけどな」
「はぁ」
「その向かいが食堂。飯は朝と昼と夕時。八つ時と宵にも軽く用意してくれ。詳しくは厨房で聞けばいい」
「はい」

船長と団長はどう違うのか。
そもそも団長というからには，ここはホニャララ団なんだろうか。
暴走族かバラエティのお笑い番組とかじゃないだろうし。
首を傾げたままイルタサのついて階段を上ると，そこは甲板だった。
吹き渡る風に僅かな潮を感じて，陽の明るさに目を細めながら辺りを見渡す。
シンハが背後から飛び掛って，俺の肩に寄りかかるように前足を乗せてくる。
思わず重さで足がふらつく。

「すっげぇ！　進んでるっ。風で進んでるぞっ」
「今日はいい風だ。ありがたい。もう河口だ」
「海へ行くのか？」
「南へ行くんだって！」

甲高い少女の声に振り返る。
綱を操る男達が立ち働く甲板に，少女が立っていた。
太陽の光が，青い瞳を輝かせている。

「ミンツゥ。あまり外に出るな。まだ海には出ていないぞ」
「もう周りに船はないもん。ずっと船室にいたら退屈だよ」
「これからは見張りがいるな」

苦々しく呟くイルタサに，ミンツゥは微笑みかける。
幼さが僅かに残る頬にえくぼが可愛らしい。

「ハルキさん，この船に乗っていいんだね。団長から許可が出たんだね」

「いや。様子見ってとこだ。なんせ記憶がないクマリの大連(おおむらじ)だ」
「この青い目に玉獣(ぎょくじゅう)つきだし，しょうがないですね。自覚はありますよ」
「ハルキは悪い人じゃないよっ」
「はいはい。ミンツゥはすっかりハルキがお気に入りだからな」

イルタサの大きな手で頭を撫でられるのは嫌なのだろう。
頬を膨らませ腕を組んでみせる。
お年頃か。やっぱり見た感じはまだ小学生だ。中学生……ではないな。
職業病のような勘で察する。十歳過ぎた頃か。

「ハルキを船から落としたら，私も海に入るからねっ」
「ほう……珍しいな。ミンツゥがそこまで言うか」
「そうよ。だから酷い事しちゃだめだよ。ね，シャムとモルから聞いたんだけど美味しいお菓子作れるんでしょ？」
「え，あ，あぁ……」
「今日のお八つ作って！　ね，いいでしょイルタサ」
「じゃあ，あとの案内は頼むぞ」
「はぁい」

イルタサの返事を待たず，ミンツゥは俺の腕を引っぱり甲板を歩き出す。
その強引さに戸惑いながらも，引っぱられるままにまかす。
まだ少女の細い腕を引き剥がすのに，気がとがめる。

「みんな，心配なの。不安なの」
「ミンツゥ？」
「みんなあたしをダショーだって言うけど，あたし記憶がないもの。エアシュティマス様の記憶なんてない。あたしは今の記憶しか

ないの」
「ミントゥ……何を言ってるんだ」
「みんな，あたしをダショーだと思い込んでる。思い込みたかったんだよ」

俺にじゃれるように腕を引っぱり船尾へと進みながら，囁かれる。
その真剣な声色に，歩みを合わせる。

「そうしたら，あたし以外に青い瞳を持つ共生者が現れた。しかも，ニライカナイの仲間じゃなくクマリの大連（おおむらじ）だもん。怖いんだよ」
「何で？　青い瞳に，何の意味があるんだ。何でキミをダショーだと思い込みたいんだ？」
「だって，ダショーには精霊の祝福があるじゃないの」

船尾の縁で，ようやく立ち止まる。
薄緑色の水面を乱して白い航跡を残す船は風で帆を膨らまし，さらに速度を上げていく。
帆を操る男達の掛け声が遠くなっていく。

「その青い瞳は星を見ている。そうでしょ？」
「星を？」
「精霊だよ。ハルルンは苦労なく普通に見えてるだろ？　ほら，帆で跳ね回る風の精霊がみえてるだろ？」
「そういうもんじゃないのか」

風が吹けば，髪をなびかせ舞うように飛んでいく精霊達の姿を見る。
水を見れば，しなやかに水中を魚のように泳ぐ精霊の姿を見る。
緑が鮮やかな場所には，四股を踏む精霊の姿を見る。
そういうものじゃないのか？

俺は日本にいた時に，小人のような精霊達を見ていたぞ。

「普通の共生者は，自分の操れる属性の精霊達しかみれない。それも自分の力にあった程度の精霊しか見れないの。厳しい修行をしたりすれば，見えるようになるらしいけど」

「そういうもんなのか」

「時間がないの。はっきり言うね」

ミンツゥは辺りを見渡して，俺の手をさらに引っぱり座り込む。まるで宝物の隠し場所を打ち明けるように。

「ハルキ，ダショー様だよね？」

「……ミンツゥ……」

「初めて市場で会った時に気づいたの。ね，ダショー様でしょ？」

青い瞳に，俺の青い瞳が映りこんで深い海のようだ。

キラキラと輝く瞳に満たされた美しさに，息を呑む。

浄眼というのは，魂の本質まで見通すのか。

「ハルキの玉獣（ぎょくじゅう）に命を賭けて言うわ。あたし，誰にも言わない。誰にも言わないから」

「この嬢ちゃんの言ってる事は本当だな。ハルキ，言っちまいな」

「……何で，判ったんだ？」

この子が，他の大人に言うかもしれない。

そんな不安は消えていた。

同じ青い瞳だから，もある。

でもそれ以上に，ミンツゥの自然さに導かれるように話していた。

シンハを恐れず「命を賭ける」と邪気なく向かい合うその視線が，

心地よい。
こんな眼をする人を，俺は知っている。
この子は，恋しいミルと同じ眼をする。

「ダショー様……ダショー様なのねっ。凄い，本当に異世界から来たの?!」
「あ，あぁ」
「そっか。なら，余計に大変だよ」

感動もそこそこに，ミンツゥは積み上げられた綱の中から見慣れた包みを引っ張り出す。

「お，俺の荷物！」
「団長が探ろうとしてたから，隠しといたの」
「探る？　え，えぇえ?!」

荷物を勝手に探られる怒りよりも，その中身を見られたら危険だった事に気づく。
明らかに異世界のものと判るシャツやスラックス。
ミントゥの機転がなければ，どうなっていたんだろう。
背筋を震わせながら，包みを広げる。
僅かに皺がついたシャツやスラックスがあらわれ，ミントゥは「うひゃあ」と妙な声をあげた。

「これ，服？」
「うん，まぁ……危なかったな」

５３　船出（後書き）

連載再開。長らくお待たせしてすみませんでした。
次回　１２月８日　水曜に更新予定です。

54　世界の終焉よりも大切なこと

改めて日本から着てきた服を見ると，その異質さに気づく。
着物のように襟を合わせて紐や帯で体に身につけるのが，この世界の常識。それに反し，シャツはボタンで服を身につける。そもそも，生地も違う。機械で大量生産された生地と，手作業で織られた布では，織り目の細かさが違っていることを初めて知る。

「この石何に使うの？　きれいに並んでるね」
「石？　いや，これはボタンと言って……」

ミントゥは興味深く，シャツに並ぶボタンを突く。
着物のような服しかない世界だ。ボタンなんて初めて見たのかもしれない。
ボタンを穴に通して留めて見せると，青い瞳を輝かせて「ミントゥもやっていい？！」と聞いてくる。
小さな手でボタンを穴に通そうと四苦八苦する可愛らしい様子を眺めながら，考え込んでしまう。
本当に，この世界には異質な存在なんだろう。
この洋服も，サンダルも，俺の存在も。
そういえば，最初に襲われた時に携帯電話を棄ててしまった。
バッテリーの残量もなくなり，異世界のここは圏外だし，神官達に襲われた非常事態だったから棄ててしまったけど，あれは惜しい事をした。
あの中に，いくつか写真が入っていたのを思い出す。ばあちゃんの遺品同然のメモリーカードに，ミルのさりげない顔を盗み撮りしたものとか。
ミルにばれたら怒られそうだから，まぁ，良かったのか……バッテリー切れでもその写真が見たかった。

携帯，拾っておけばよかったかも。
そう思い出して，何かが引っかかる。この世界に持ってきた無用なもの……。

「あ！！」

思い出し，シャツの下のスラックスを引っ張り出す。
想像通り，そこに懐かしい重みを感じて鼓動が早くなる。

「あった……入れておいてくれたんだ……」

いつも入れていた右の尻ポケットから，革の財布を取り出す。
革の手触りも，寂しい重みも，全て遠い昔のような感触だ。

「これ，なぁに？」
「俺がいた世界で使っていた財布。……ちゃんと，取っておいてくれたんだなぁ」

教えたわけじゃないけれど，いつもの癖で財布は右のポケットに入れていたのを知っていた。
そして，ちゃんと入れていておいてくれる。
ミルの心遣いが，哀しいほどに胸に迫る。
ミルはそういう人だ。
胸の奥が酷く痛む。息が止まるほどの，激痛。

「じゃあ……それがお金？」
「うん」

小銭入れの中から硬貨を取り出すと，眼を丸くして五十円玉に手を伸ばす。

ここの世界の硬貨には穴が開いてないから珍しいのだろう。五円玉も手に取り，その穴から世界を覗く青い瞳が輝いている。
好奇心旺盛な可愛い子だ。
もっともっと驚かせたくて一万円札を取り出すと，大きな瞳がさらに大きくなる。

「これもお金だよ。これ一枚で……上等な肉や酒を腹いっぱい食べたり出来たけどね」
「そんな薄い紙が？　紙だよ？　綺麗な絵が描いてあるけど，紙だよ？」
「この中にもお金が入ってる。ここじゃ一文無しだけど」
「そのお札の中に？　ペカペカ光るそのお札もお金？！」

クレジットカードのホログラフを興味深そうに陽の光に照らす。
虹色に光沢を放つカードに歓声を上げている二人に，少し気を持ち直す。
シンハは足裏の肉球でホログラフを撫でたり突いたり，挙句に大きな舌で舐めようとした所をミントゥに取り上げられた。

「甘そうじゃん」
「食べ物じゃないよ」
「食べ物かもしれないぜ？」
「そ，そうなの？」

シンハの言葉を信じかけるミントゥは，やっぱり十歳の子供だ。
首を振り否定しつつ，苦笑いしてシャツとスラックスをたたみ直す。

「隠しておくけど，こっそり食べるなよ。食べ物じゃないから腹壊すぞ」

「隠すのか？」
「ミントゥの言う通り，こんな異質のものが俺の持ち物だってバレたら正体バレるだろ？　どこかいい場所があればいいけど」
「オイラの影に」
「却下。こっそり食うつもりだろ。」
「何で判ったんだ？　ち，ちげーよっ。そんな事しないからさっ」

確かにシンハの影に大黒丸は隠してある。
クマリの族長しか持たない宝刀を持っているのは，危険だからだ。
かといって，シンハにクレジットカードを渡すのは怖い。本気でカードを食べて，腹を壊したり歯が欠けたりしそうだ。
ギャンギャンと文句を言うシンハを視界の端に入れながら宙を睨むと，ミントゥが袖を引っぱった。

「いい方法，教えてあげよっか」

この世界は本当に不思議だ。
精霊を見る事が出来る共生者。そして，その精霊を扱える呪術者。
精霊が存在し，その力を借りて動く世界。その事を痛感しながら目の前の光景を見ていた。

「ボーっとしてないで。手ぇ切るんじゃないよ」
「あ，あぁ」

俺の目の前で唄を唄い，舞を舞った。その逞しい足は思いのほかに柔らかく動き，指先の動きで精霊達を優しく撫でていた。
唄と舞で水甕の海水を真水にしたサンギの力に，見とれてしまう。

大型客船なら海水を真水に変える装置があるんだろうけど，帆を張って進む中世のような船にはそんなものはない。だから共生者が呪術で補う。

その仕組みに圧倒されていた。サンギがリーダーなのは，その力もあるのだろう。生きていく上で必要不可欠な真水を作り出せるのだから。

「ふん。少しは出来るようだね」

「どうも」

「野菜を切り終わったら，そこの魚もさばいておきな。塩漬けにするから」

真水を作り終えたらしいサンギは，甕から作りたての水を丼に入れる。手近な椅子に腰掛けて小休止のようだ。

俺は今日の晩飯になる野菜や香草をひたすらに切り刻む。傍らの釜には塩漬け肉や葱を入れて煮込んである。最後に青菜や香草を入れ，炊き上げている米の上にトロリとのせて出来上がりだ。船の食事というのは，丼一つで終わらせるものらしい。三十人ほどの食事，しかも揺れる船の食事はこんなもんかも知れない。

とにかく量と食べ応え，早飯が必須らしい。

「本当，あんたは不思議だね」

喉を鳴らして水を飲んだサンギが，濡れた口元を手の甲で拭いながら癖のある笑いを見せた。

ゲームでも楽しむような，そんな笑い方だ。

「労働してない綺麗な手をしているし，妙に世間に染まっていない。それにあんた，荷物に封印をかけただろう？」

「あれ？　気づきました？」

鼻の穴を大きくさせて息を吹き出す。火が出てるのが見えるようだ。

あの後，ミントゥは精霊を使った封印の方法を教えてくれた。それは俺にとっては簡単な事だった。

自分の使役出来る精霊に「封印」を命じる。それだけだ。

自分より強い精霊を使役出来る人には破られるが，ダショーである俺以上の人間はいないから破られる事はない。

ある意味，最強に安全な方法だ。

「私の水の力では駄目だった。イルタサの風の力も。大地の力も火の力も，この船にいる共生者では誰も敵わない力をあんたは持っている。ミントゥにお願いしたいけど……あの子はあんたを好いてるから無理だろうしねぇ。一体どれだけの力を持ってるんだい……まったく」

サンギの力も，イルタサの力も，大きなものなんだろう。

その自信の程が感じられる。その言葉を聞いて，かえって恐ろしくなる。

そう，自分が恐ろしくなる。俺がその気になったらどうなるのだろう。本気で精霊達と唄ったら，何が起こるのだろう。

あの新月の夜，アイは俺に「世界を脅かす存在」と言った。そうなのかもしれない。本当に，そうなのかもしれない。

俺一人で，一国を焦土にしてしまう力があるのか。そんな存在，脅威だ。まともに考えればそんな危険物は処分するだろう。

大量破壊兵器。そんな単語といつぞや読んだ新聞の国際面を思い出す。

俺は一体なんなんだ。

「日にさほど焼けてないし，目立った刀傷だってない。だから深

淵の神官かと思えば……姫宮様をお助けしたいって大連みたいな事をいうし。どこかの大商人の箱入り息子かと思ったけど，飯が作れるっていうし包丁さばきは手馴れたものだし」

「……変ですか？」

「変さ。得体が知れない。ミントゥが気に入らなきゃ，乗船させてないさ」

「そっか」

俺は，本当に何をすべきなのだろう。

ミルと過ごしたいだけだ。

深淵の呪縛から逃れたいだけだ。

記憶に巣くうエアシュティマスの「世界を終わらせる」願いを叶えたいだけだ。

俺は，何の為に生きているんだろう。

俺の役目とは，何なんだろう。

あの白い鷹は，今を俺をどう見ているのだろう。

「得体が，知れないですね。本当に」

「あんた，自分の事だろう？」

呆れたようなサンギの言葉に，思わず自嘲気味な笑いを浮かべてしまう。

「少しね，記憶が飛んでいるから……自分の事が判らないんですよ」

全てを思い出した時，俺はどうなるんだろう。

世界を見る俺は，どう変わるのだろう。

そんな俺を，ミルはそんな眼で見るのだろう。

世界を滅ぼせる力があったとしても，俺が怖いのは唯一つ。

ミル……俺がどんな化け物でも，どうか嫌いにならないでくれ。
どうか，どうかお願いだから，キミだけは俺を嫌いにならないでくれ。

５４　世界の終焉よりも大切なこと（後書き）

次回　１５日　水曜日に更新予定です。

55　宴の準備

世界の果てで，空と海が溶けていた。
純白の入道雲を浮かべた青い空。高い透明度で二色に分かれた青い海。沖に行くほどに藍になって空と一体になっている。
十日ほど船に揺られて，こんな常夏の楽園に辿り着ける事に驚いてしまう。初冬からいきなり真夏にワープして体が戸惑っている。夏仕様の薄い繊維の作務衣のような服から伸びた手足の皮膚が驚いている。
飛行機もモーターもないこの世界で，こんな事が出来る理由は呪術の他にない。この世界は科学ではなく，精霊の力を活用した呪術が本当に発達している。
この船の主動力は風。大きな帆に風を受けて進む様子は，大航海時代の映画でも観ている気分だ。
ここからの進歩が，この世界ならではな訳で。
その上で，水の共生者であるサンギ達が海流を読み，風の共生者達が唄い踊り風を操り，ミントゥはそれらをまとめあげるように唄声を重ねていく。
船上で音楽が響き，その音につられるようにイルカのような大型の魚が群れを成してあらわれる。洋上を疾走する船と競争するような魚影に，何度見とれただろう。
そんな快適で驚きの連続だった船旅も，目的地に着いたらしい。しかも，何艘もの商船が集まってきていた。
ジャングルのような熱帯の木々に覆われた絶壁の山々と，真っ白な砂浜が続く観光地のような場所の沖で碇が下ろされる。
イルタサの指示で，乗員達が次々に荷物をまとめて小船に乗せて浜へ移送させていく。
一体ここで何をするのだろう。

「行くよシンハ！」
「せーのっ」
「ば，馬鹿やめろ！」

両手に食材を詰めた木箱を抱えた俺の横を，ミントゥとシンハが全速力で駆け抜ける。
あまりに突然な事で止める間もなく，甲板を駆け抜けたミントゥとシンハは船から飛び降りていた。
盛大な水音が上がると，甲板にいた大人達が苦笑いを浮かべて船縁から覗き込む。

「大丈夫かぁ」
「シンハがいるから大丈夫だよっ」
「浜に着いてから水遊びをすればいいのに。まったく」
「だって綺麗なんだもんっ」
「溺れるんじゃないぞ」
「シンハ，ミントゥの面倒しっかり見ろよっ」
「わかってるよ！　ハルキも来いよ！」
「俺は仕事があるの！」
「大丈夫だよー！　ちゃんとシンハと一緒にいるから！　シンハ，岸まで競争だよ！」

キラキラと飛沫を上げて泳ぐミントゥとシンハが，岸に向かって泳ぎだす。
仲のいい様子を見て，大人達が苦笑いをしながら仕事に戻っていく。
ただ，イルタサだけは眉をひそめてモルカンとシャムカンを呼び寄せ指示を出した。どうやら念の為に二人に付かせるようだ。

「すみません。シンハじゃ，ミントゥを見切れませんね」

慌てて海に飛び込む双子の後姿を見送りながら，イルタサに頭を下げる。
今やミントゥの横にシンハがいる風景が馴染んでしまっている。シンハが言うに「ミントゥの周りの空気はハルキに良く似ている」らしい。ミントゥは優しいし殴る事もないしなと言ったら，尻尾振って頷いたのには腹が立ったが。
いつもじゃれ合って，すっかり仲が良い二人だ。それに，ミントゥがシンハに懐いているお陰で周りの人たちの恐怖心が取り除かれたのはありがたい。

「とんでもない」

イルタサは笑みを消して俺を見た。

「精霊の力は，幼いミントゥよりシンハの方が当然強い。シンハが傍にいてくれるのだから何も心配してないさ。むしろ，ミントゥが調子にのってシンハに失礼がないように見張らせるのさ」
「イルタサ？」
「ハルキ達のお陰で，精霊の守護が多くなっている。ありがとうな」

真顔で礼を言い，肩を叩いて甲板下へと下っていく。
木箱を抱えたまま，俺は固まってしまった。ダショーだとばれたかと，一瞬ヒヤリとしたが思い直す。精霊の守護が多くなったと言っただけだ。大丈夫だろう。
久々の上陸で浮かれている船上の人々を眺めながら思い直す。
岸では多くの女子供が待っていたのだろう。歓声が沖に停留したここまで聞こえてきそうな歓迎振りが見える。
あぁ。久々に陸の感触を味わいたいな。そう思った途端，胸に激

情が込み上げた。
人間の持つ全ての感情が一斉に火を吹き出したような感覚に，思わず目を固く瞑る。足を踏ん張る。
嬉しさも哀しさも，恨めしさも歓喜も，稲妻に打たれたような痛みとともに蘇る。

「……キさん。ハルキさん」
「っ……あぁ，はい」
「その箱が最後かい？」

岸へと送る小船に下ろす荷物を渡し，甲板に積まれた箱を確認する。

「ハルキさんも荷物まとめてこいや。一緒に岸まで送ってやるよ」
「あぁ……はい」
「顔色悪いな。どうした」

気使ってくれる視線に曖昧に笑い返し，甲板下の狭い部屋へ戻る。
ハンモックが連なる部屋の片隅に置かれた風呂敷包みを持ち上げ，小さな窓から白い岸を見つめる。
遠くに歓声が聴こえる。シンハを好奇心半分，恐怖半分で遠回りに囲む人垣に記憶が重なる。
ここは遠い過去の故郷だ。
ハルンツであった時に失くしてしまった故郷だ。全てが始まった砂浜だ。
この浜で，ハルンツは自分の力を知った。運命に向かい合っていった。ニライカナイへ行く故郷の人々を見送った。
そう。この浜が全てのスタートだった。

「帰ってきたんだな」

五百年という時間を越えて，異世界からという空間を越えて，日本で観た記憶の映像の場所へ帰ってきたんだ。
波の音が，耳の奥へ染みていく。まだ眠る記憶を揺り起こす為に，波音が体中の細胞へ染みこんでゆく。

「こりゃ豪勢だねぇ。フワフワしてスープの味が染みてる」
「つなぎに卵を入れたんですよ」
「これは何かね」
「揚げ菓子です。子供が喜ぶかと思って」
「そりゃいいや。あたしら大人は酒飲むけど子供は何もないからねぇ」

高らかに笑いあいながらも，彼女達は忙しなく動き続ける。
粗末な東屋のような厨房で，湯気が立ち上る料理を次々に作り出す女達に混じって俺も料理をつくった。
彼女達の料理はとてもおいしそうで量もあるのだが，年寄りや子供向きではなかった。
そこで俺が簡単なツミレ汁と小麦と蜜を混ぜて揚げたドーナツもどきを用意してみた。
浜で待っていた沢山の女達が大量のご馳走を作り大宴会の準備に大わらわだ。
最初は青い瞳を持っている俺を遠巻きに見ていた彼女達だったが，俺がサンギ達母船の厨房にいた事を知ると急に態度が変わった。
まだ疑問があるような顔をしているが，忙しい宴の準備の人手になると判った途端に共同作業に突入して今にいたる。まさに猫の手も借りたい状況だったようだ。青い目だろうが，何だろうが，役に

立つならこき使われている。この方が居心地はいい。
魚や肉の生臭いニオイは，薪が燃える音や油が爆ぜる音とともに香ばしく変化していく。食欲を刺激する香草の香りも加わり，夕方の赤い光が射す頃には大皿や大鉢に次々と料理が配膳されていた。
額に浮かぶ汗を拭い，出来上がった料理を次々に運んでいく女達。
火元の片付けをし，ようやく立ち上がった俺も腰を軽く叩き大皿に手を伸ばす。

「あ，重たいから俺が持ちます」
「いいのかい？　熱いよ？　」

山のように積み上げられた焼いた肉の大皿を，慌てて受け取る。
そして反対の手には，素揚げされた魚の山が乗せられた大皿を持つ。

「それを置いたら，もういいからね」
「あたしらも，もうここを片付けていくからさ」
「にいさん，酒飲めるかい。一緒に飲もうよ」
「あらやだ。あんた，隣で酌でもしてあげるつもりだね」
「なにさ，お互い綺麗なにいさん観て酒を飲むつもりじゃないのかい」
「そりゃそうさ。こんな綺麗な旦那はなかなか観れないさ」
「おまけに料理上手で優しいときたもんだ」

おばさんたちの黄色い声に，曖昧に笑って逃げ出す。異世界でもおばさんのパワーは恐ろしい。
何だか吸血鬼のように生気を吸い取られる錯覚すら感じてしまう。
そのパワーがあるから，こんなにも美味しそうな料理を作れるのだろう。
砂浜に沈む足元と重たい手元に気をつけながら，波打ち際に用意された宴の場所へ歩いていく。

なんて素晴らしい光景。
赤く染まっていく砂浜に，大きな敷物が何枚も連ねて敷かれている。打ち寄せる波が，オレンジに輝き耳心地よい音を奏でていく。
沖から吹く風は心地よい涼しさを運び，砂浜に用意された沢山の松明の炎を揺らしている。
そんな映画のような風景の中，悲鳴を上げて駆けてくる無粋な奴が一匹。

「ハ，ハルルン助けてくれっ」
「馬鹿！　砂埃が飯に入るだろ！」

途端，必死の形相で俺の背後にシンハが駆け込んでくる。
尻尾は完全に後ろ足の間で丸まっていた。

「た，助けてくれよ！　あいつら無茶苦茶するんだよっ」
「あいつらって，子供じゃないか」

異様に怖がるシンハを見ながら，砂浜に敷かれた色鮮やかな絨毯に料理を置いていく。
十数人もの子供が，シンハ目がけて駆けてくる。
砂浜に着いた昼頃は，まだ遠巻きに観ていたはずだ。そう思っていると，子供達は勢いよくシンハに飛び込むように抱きついていく。

「ぎゃああっ！　ハ，ハルルンー」
「シンハかわいいー」
「モフモフ気持ちいーよー」
「ナデナデしゅりゅー」
「殺される！　殺されちまう！」

一人二人と覆いかぶさり，シンハの金色の毛が隠れていく。いや，

押し潰されていく。
神苑（しんえん）の中の玉獣（ぎょくじゅう）の中でさえ最強のシンハが。「おまえらなんか瞬殺だぜ」と大人相手に言っていたシンハが，幼子相手に押しつぶされている。
子供は大人のように玉獣（ぎょくじゅう）の怖さを知らないからとはいえ……怖いものなしだ。

「何やってんだよお前は。あぁ，みんなも砂が料理に入っちまうから向こうで遊んでおいで」

妙なところで優しいヤツだな。
シンハに覆いかぶさっている子供達を一人二人と抱き上げてやる。

「ほう。以外と優しい仕草をするのだな。お前であろう？　新しくやってきた共生者とは」

背後からの声に，首筋に電気が走った感触。
聞いたことのない男の声に振り返る。

「その青い瞳，本当にミントゥのような深い青だな」

料理を並べた敷物の向こう側，男が波打ち際から歩いてくる。
誰だ。こいつ。

55　宴の準備（後書き）

今の現状……ストックの修正加筆すら追いつけません（汗）。世界に浸れなくて……（涙）。

再開したばかりで申し訳ありませんが，次回は年明けに更新したいと思います。

ご，ごめんなさい！

次回は　1月5日　水曜日に再開したいと思います。

また活動報告で詳しく書きます……（言い訳とも言う）。

慌しい年末年始ですが，お体にお気をつけ過ごしてくださいね。

来年も皆さんにとって良い年になりますよう……。

56　重なる過去

オレンジ色に染め上げられた世界を支配しているように，そいつは歩いてきた。
波打ち際の飛沫すら，その男を際立たせる宝石のように煌く。
一寸の乱れなく結い上げられた髷。程よく日に焼けた肌。姿勢がよいその体には，人目で上質と判る着物を纏っていた。そして衣が海水に濡れるのを気にもしてない。
黒い上衣は海風を含んで大きくはためき，堂々とした男っぷりを演出している。

「これ童達。かように玉獣を扱ってはならぬぞ」
「あ，ごぜんさまだ！」
「ごぜんさま，ようこそ！」

突然，子供達の態度が変わる。
わんぱくが消えて行儀をわきまえた良い子に化けた。

「サンギ殿はどこにおられるかな」
「サンギさま，むこうだよ」
「おはなし，してる」
「あっちいけっていわれた」
「そうかそうか」

ごぜんさま……午前様……違う。御前様，か。
変換ミスをした頭を軽く振り，もう一度その若い男を観察してみる。
俺と同じ年ぐらいだろう。なのに，この威圧感はなんだろう。
庶民では晴れ着のレベルの着物を海水に濡らしても平然としてい

る。その様子からしても，お金持ちなのはわかる。
でも，ただの金持ちではない。腰に差された刀は，使い込まれた感じだ。武人か。
そして着ている着物は李薗式だ。首元に襟が立てられ，帯を巻いた下の衣は流している。
いつか夢でみた玄徳帝のような李薗式の着物。そう……この男は後李帝国の役人だろうか。

「禄山。先にサンギに挨拶へ行ってきてくれ」
「しかし」
「私はこの男と話がしたい」

御前様と呼ばれた男の後ろから，もう一人の男が現れる。
足元を取られる浅瀬を素早く駆けて，背後に控える真っ黒に日焼けをて目つきの鋭い若い男。
禄山と呼ばれた男は，俺をじっと睨む。
まるで「ご主人様に何かするんじゃないぞ」というかのような視線。
一時睨み，それでも心配だという顔をしたまま素早く砂浜を息も乱さず走っていく。
シンハに圧し掛かっていた子供達も素早く，禄山を案内するために駆け出していった。

「足が濡れてしまったな。何か拭くものはあるか」
「自分のものを使ってくれ」

砂浜に上がった男は足に付く砂粒に眉をひそめ，俺の言葉に思いついたように懐に手を入れる。
そして真っ白な紙を取り出して，ガシガシと足を拭き始める。

「あんた，何してるんだ」
「拭くものを持ってはおらぬ」
「持ってない？」

俺の使い古した手ぬぐいを差し出すと，当たり前のように紙を俺に渡し，手ぬぐいを受け取り，足を拭い，俺の手に返す。
そして，当然のように料理を並べた敷物に座る。
遠慮という概念すらないような一連の動作に，ますます不信感。
流れるような所作で，腰元の刀を脇に置く。
この男，何者だ。
というか。俺の手に残した紙はどうすればいいんだ。
見れば，真っ白で上質な和紙のような紙。こんな上等な紙を手ぬぐい代わりに使い捨てる感覚が判らない。

「さて。お主が先日サンギ殿が受け入れたという共生者であろうか」

俺が紙で困っている事すら気づいてないのか，男が問いかける。
仕方無しに，その紙を自分の懐の中へ突っ込む。

「まぁ，お世話になってますけど」
「それで，名は何と言う」
「自分から名乗らないのか」
「私の名か？」

問い返される事には慣れてないのか。男は面白そうに笑って俺を見た。
何だろう。こいつの笑った顔，どこかで見た覚えがある。この楽しそうな顔，物事を楽しそうに捉える笑顔を，どこかで見た事がある。

初対面の男を相手に何を感じているのだろう。

「私の名は分け合って名乗れぬ。それ故に御前と呼ばせておる」
「サンギ達は知っているんだろ？」
「そうだな。では黒雲とでも呼ぶ事を許そう」

何でこうも偉そうなのだろう。

「して，お主の名は」
「ハルキ。関口晴貴」
「ほう……セキグチとは聞いたことのない響きだ」
「こいつズルイぞ！　自分の名前名乗らないでハルルンに名乗らしてさっ」

子供達からようやく解放されたシンハが，歯をむき出して唸りだす。

「ハルルンも何で名乗るんだよ！」
「黙っててもバレるだろう。シンハ，ここから動くな」
「何でだよっ。今すぐそいつの首元掻っ切ってやるのにっ」

背中の毛を逆立てはじめたシンハの首元を何度も撫でてやりながら，必死に記憶をたどる。
この世界に来てから出会った顔を必死に思い出す。
こいつに，黒雲に俺は会った事がある。
さっきから，その感覚だけが心を逸らせる。

「なるほど。これでは禄山の玉獣が恐れてしまう訳だ。ハルキの玉獣はなかなかに勇猛だな。お陰で私の乗ってきた玉獣は酷く怯えてしまっていたよ」

「怯える？」
「砂浜まで乗って来たがったのだが，沖で怖がってしまってな。浅瀬までは何とか宥めて着いたが，とうとう禄山の陰に逃げ込んでしまった。故に足や着物を濡らしてしまった，難儀な事だ」
「オイラのせいじゃねーよ。その玉獣が腰抜けだって事だ。ついでにそいつら使ってるお前らも大した事ねぇな。お前らなんざ……」
「シンハっ」

ヘボ共生者。老いぼれ星使い。
散々な言葉を言い始めたシンハの首元を思わず優しく撫でて呟く。

「またネクタイを縛ってやってもいいんだぞ」

その途端，ぴたりと黙る。
よほど縄で縛られる事が嫌だったのだろう。
黙ったシンハを撫でながら，軽く頭を下げた。

「失礼な事を言った。いい奴なんだけど，口が少し悪いんだ」
「いい奴……か。そのように玉獣を宥められるとは」
「何だ？」
「いや。サンギ殿の言う通りだ。新しい共生者は変わり者だ」

黒雲がそう言い，胡坐を組んだ足をポンと叩いた。
楽しげに笑みを浮かべた口元に手を置いて頬杖をする。何気ない仕草。掠めるデジャブ。

「その青い瞳があるのに帝国にいた事，サンギ殿達も敵わぬ力を持ちながら帝国内にいた事が，不可解でならぬ」
「記憶がなかったから，仕方ない」
「記憶がなかったとはいえ，自分が共生者である事は知っていた

のだろう？　なら，エリドゥ方面へ行けば待遇が良くなった事も判るであろう？」
「黒雲はずるいな。疑問ばかりじゃないか」
「そうだな」
男前の顔で笑うな。
「その青さなら，瞳を見せれば誰もがひれ伏すだろう。それだけの力を持っているのだろう。その力で，ハルキは何をしようとしている」
「だから疑問形はやめろ」
「答えによっては，私はハルキを殺すのだろうか」
「俺に聞かれても困る」
「それはそうだ」
口の中で笑い声を含ませ，黒雲は首を傾げる。
「何故だろうな。ハルキと何故こんな話をしているのだ」
「だから俺に聞かれても困る」
途端に，声を上げて笑い出した。
笑い顔を見ると，年上かと思えた威厳が消える。ひょっとしたら同い年なのかもしれない。
「こいつ，変なの。ハルルン……こいつ何者？」
「判らないけど変な奴なのは間違いないな」
「私を変というのは，そなた達ぐらいだ」
そうだろう。いかにも身分が高そうな黒雲に言いたい放題。
でも，こいつには言いたい事を言える気がする。どんな事でも語

れる気がする。
警戒しようにも，気持ちを閉じれない。
黒雲も，そう思っているのだろうか。
砂浜を全速疾走で戻ってきた禄山が，肩を震わせて笑い声を零している黒雲の姿を見て目を見開いていた。
禄山から遅れて駆けてきたサンギ達も，目を白黒させて立ちつくしている。
ミンツゥは，嬉しそうに微笑んだ。

「御前様とハルキ，絶対仲良しになると思ったんだ。ね？　ハルキはいい人でしょ？」

満足げに微笑むミントゥの言葉に，黒雲は切れ長の眦から零れた涙を拭いて頷く。

「なるほど。人見知りのミントゥが懐くだけはある……くくっ」
「だから何で笑うんだよ」
「ハルキ。あんた何を言ったんだい」
「無礼な事を申すな！」

サンギと禄山の慌てた声に，俺は肩を竦めるしかない。
俺を殺すかもしれないと，そう言われた。
絶対に会った事がある，黒雲。
喉元まで浮かぶ『知っている』感覚をもてあまして，視線を遠くに投げる。
水平線に夕日が沈んでいく。
夢にまで見たハルンツの故郷で，これから何が起きるのだろう。
時間の経過を見守ってきた沖の岩は，すっかり小さくなっている。
タシであった自分。ハルンツであった自分。そして，今を生きている自分。

同じ魂を持った，けど別々の人格が自分の体で湧き上がる感覚。
今の感情は，俺のもの。この感覚は誰のものだろう。
連なる記憶の連鎖に，意識が巻き込まれそうだ。
砂浜に足を踏ん張って，燃えるように赤く染まった沖の岩を見つめる。
俺はまた，この岩を見つめる時があるだろうか。
別の肉体で，別の意識を持って，この記憶を抱えて，この場所に来るのだろうか。

56　重なる過去（後書き）

明けましておめでとうございます。
新年早々…ストックがとうとう無くなりました（涙）
すみません。とりあえず2月9日までお休みします。
ごめんなさい～！

57　宵の音（前書き）

未成年の酔っ払いが出てきますが，未成年の飲酒は法律で禁止されています。
念のため。異世界ですから，はい。

57　宵の音

満天の星空に響き渡る歓声。
浜辺の宴は最高潮だ。ノリに乗った大人達は楽器を爪弾き太鼓を叩き，子供達は踊りだす。穏やかに海からやってくる風は，音に惹かれた精霊達を乗せて辺りを包みこむ。
闇に潜む精霊も，誘い出され煌いていく。
目に見える世界と，見えない世界が交わっていく。
篝火の光と，精霊達の蛍火のような見えないはずの光。漂う音楽にのって流れる蛍火は，ゆったりと人々を包み込む。まるで無限の宇宙空間のよう。天も地も境がなく広がっていく錯覚。

「ハルキも唄ってはどうだ」

夢幻な光景に見蕩れ，ソレを肴に飲んでいた俺は唐突に掛けられた声に現実に戻される。
いつの間にか，隣に黒雲が腰を下ろしていた。宴の最初はサンギ達の上座に座っていたのに，いつの間にか無礼講になっていたらしい。
イルタサは小皿を指で挟んで鳴らし踊り，サンギは女達と笑いあって酒を酌み交わしている。

「後李で楽師をしていたのだろう？　何でも鬼火を出していたとか」
「何でそんな事知ってるんですか」
「双子が楽器を取りにいったぞ」

黒雲はオレの杯に勝手に酒を注ぎ，相変わらず答えにならない返事をする。

「酒は弱い方ではないようだな」
「まぁ，程ほどに嗜みますよ」
「ここの酒は美味い。何よりこの絶景にこの楽の音，この楽しげな者達。最高だな」
「あんたは，これより美味しい酒を飲んでいる気がするけど」
「……日常を忘れる為の酒など，付き合いで飲む酒など美味くない。どんな美酒より，この宴に勝るものはない」

黒雲が手酌をしそうな勢いなので，酒を満たしたヤカンのようなソレを慌てて持って黒雲の杯に酒を注ぐ。
青々とした中に甘い香りが流れる。果実酒のようなソレは，確かに美味い。

「世界を美しいと素直に認めれる。そういう者達と飲めるのは嬉しい事だ」
「あぁ……あんたも共生者なんだ」

黒雲の言葉に，思わず微笑んだ。
こいつは，共生者だ。
まるで夢のようなこの光景を，俺が見ている『見えないはず』の光の舞を捕らえているんだ。
そう思った途端に答えを呟いていた。

「参ったな。ハルキは会ったその日に判ったか」
「まずかったか？」
「いや。構わぬが，あまり口外はしないで欲しい」
「ふぅん。まぁ，判った」

何だか事情があるようだ。

視線を一度合わせ，軽く杯を持ち上げて一気に飲み干す。まるで誓いの杯だ。
何を誓う？　きっと，これからの未来へ続く関係かな。この付き合いが続くように。
こいつを知っている。この魂の記憶の中に黒雲の魂は刻まれているだろう，妙な確信。
なら，黒雲は覚えてるだろうか。
俺のモヤモヤしたこの感じを，今この瞬間感じているだろうか。
モヤモヤと。何かを思い出さねばと焦る気持ち。
何でこうも焦る？　何を思い出さねばいけない？
この世界に関係があるんだろうか。
こうなってしまった世界に，関係しているんだろうか。
深淵の呪縛に絡まれて，争いの血のニオイに満ちていくこの世界に，黒雲の魂は関わっているんだろうか。

「持ってきましたーっ」
「お待たせしましたぁ！　」

どこか舌が回りきってない声が二つ。
振り返ると，やけに赤い顔をした同じ顔。

「これでしょ」
「ハルキの三線」
「オレ達も最初に会った時以来聞いてないなぁ」
「あの聞いたことない唄」
「聞きたいなぁ」
「お前ら……酒飲んだだろう」
「「飲みましたぁ」」
「『未成年』が酒を飲むな！……いや，その，もう少し飲み方を考えろよ。水飲んどけ」

思わず日本語が出てしまって焦ったが，酔っ払っているシャムカン達は気づいてないようだ。
ただ，黒雲の視線がキツク感じる。
気のせい，ではない。
慌てて弦を爪弾き，調律を始めた。

「少しだけだぞ。ここのところ，弾いてなかったからな」
「弾けばいいのに。弾けば命の泉沸くぅ」
「ナンダそりゃ」

シャムカンは笑い出し，モルカンは腹を抱え息も切れ切れ。
何が面白いか判らない俺は，置いてけぼりを食らった感じだ。

「精霊が踊りだし，その恩恵で寿命が伸びるという格言だな。迷信だが」
「まぁ，精霊は踊るけどさ」
「精霊が踊るほどの演奏か？　それは楽しみだ」
「あまり期待するな」
「いやいや。荒んだ春陽では体験出来ぬよ」

自嘲気味の言葉に，思わず弦から顔を上げた。
夜風を受け，遠く海の果てを眺めて呟いている。その顔には尊大さは消えていた。何を考えているのか判らない笑顔が消えていた。

「皮肉な話よ。エリドゥは枯れ果て春陽に精霊は流れたが，戦疲れで荒涼とした人心に精霊は離れていってておる」
「……」

返事が出来ず，ただ弦を弾いた。

闇へと沁みていく音。
余韻の震えに音を重ねる。弦を震わせ音を揺らして，空気を変えていく。
黒雲も，荒んでいる。
何を考えているか判らない心が，何かに深く憂い悩んでいるのだけは感じる。
俺の魂の底にある黒雲の魂は，もっと明るく強い。
なぁ。
まだ互いに何者かすら，明らかにしてないけど。
けどさ。判るんだよ。
偶然なんか，ない。
きっと，この出会いは未来を切り開ける一歩になる。
自分自身が変化出来る。繋がりから何かが開ける。何かが変化する予兆に出来る。
弦の震えを，重ね重ね。舞い上がっていく音を意識が追いかける。
宙へ上りだす意識。
そっと声を重ねる。
『砂山』
何故だろう。この唄は何かに触れる。
記憶の中，核心のどこかを揺さぶる歌詞。
荒ぶる海の向こうの故郷を恋しく思う歌詞。
……違う。
一番を唄い上げて気づく。
荒ぶる海ではない。そこにあるのは，凪いだ海。赤く染まる夕日。
恋しい相手を求めて声の限りに唄う人。
瞬くように脳裏に映像が流れ出す。
弓を弾き弦を押さえる指先だけは止まらない。止めては，きっと映像が消えてしまう。
視界から光が消える。記憶に囚われる。
誰だ。知ってる。お前を知ってる。だって，お前はずっと俺の中

にいて唄っていたじゃないか。
この唄を。この唄を。

「……帰っておいで　私の宝よ　愛しい宝よ」

無意識が唄を紡ぐ。掴んだ感触に確信。
これだ。これが俺の中に鳴り響いてたんだ。
海の向こうから愛しい魂を呼び寄せる為に唄う，その唄。
エアシュティマス。あんただろう。
あんたは，ずっと唄っていたんだな。呼んでくれてたんだな。

「泣け泣け海よ　さめざめ唄え」

止まらない。
涙が止まらない。
弓を引く腕も，弦を抑える指先も，止まらない。
還っておいで。
みんな，還っておいで。
この浜で共に唄った精霊達，還っておいで。
この浜で別れた仲間よ，還ってきたよ。
この世界はこんなにも混沌としてしまった。何もかも変わってしまった。
でも，もう一度唄おう。
もう一度，響かせよう。
世界は変えられる。俺が以前変えたように，きっと変えられる。
だから，もう一度，唄おう。

「ハルルン」

涙で歪む世界。

背中に当る柔らかいシンハの体温。
吸い込まれる。記憶の奥へ。

57　宵の音（後書き）

ようやく『見下ろす』の更新です。
次回ですが，しばらく時間を持ちたいと思います。とりあえず。
ここまでの経験で，やっぱり週一で定期的に更新するには6話分のストックは必要で（あくまで，私のペースでは。1話分とかだと，精神的に余裕がなくて怖いのです。小心者なんで）。さらに，今は『恋せよヒーロー』の方をラスト向けてスパートしてます。大分，『見下ろす』の世界に入り込めたので続きを書きたいのですが，以前のような週一更新を目指すなら，ここは頑張って6話ぐらいはストックしたいので。

本当なら，いつものように次回更新日をきっちりと宣言したいのですが。
きっちりとストックを作り，ラストに向かいたいんです。
私の我が侭で申し訳ありませんが，次回更新日の予告は出来ません。
でも，必ず復帰します。この『ハルンツ』であり『ハルキ』の物語は絶対に描きたいんです。異常と言われても，気持ち悪いと言われても，下手くそなのにと言われても，どー罵られようと。描きたいんです。だから，絶対に復帰します。
ミルは囚われっぱなしですしね。それに，今の後李編もまとめなければ。

詳しくは活動報告に書きます。
更新日が決ったら，ストックできたら，活動報告に書きます。
『恋せよヒーロー！』で進行状況を書きます。更新目標日，みたいな。
後書きで。

何はともあれ。
こんなに鈍くてすみません。
でも，私に出来る限りの物語を描いていきたいと思います。
自己満足，ですが。でも，出来うる限り。脳ミソを捻り回して絞り切り，やっていきます。
では。

58　甕のぞきの色のようで

全身で感じていた。
駆け巡る気脈の脈動を感じていた。思わず自分の手を見下ろそうとして，そこに手がない事を思い出す。
今，自分という肉体はない。精神となってこの星を巡る気脈に溶け込んでいた。
精神を気脈に乗せて駆け巡る。水の粒子と溶け込み，地の底を流れる水脈を。海流を感じ泳ぐ魚のように。竜のように風を駆け蒸気になって成層圏との境まで駆け上がる。
曲線を描く水平線と地平線。衛星写真で見た地球とは違う形の大陸や島々。それでも，そこは美しい青だ。
時間と空間を抱えて膨張する宇宙の深い青。脆くも命を乗せて瞬く星の青。
二つの青をそっと抱える。

『さぁ，行け』

温かな感情が注がれていく。
何処からか判らぬ声，感情が流れ込む。
心地よい。

『星の雫を受けた魂。愛おしい我の分身』

星の向こうから，白く輝く恒星が光を差し込む。

『怖がるな。恐れるな。我はいつもここに。いつでも見守っている』

暖かい。光が精神をも暖めていく。

『その背を押していこう。道を照らす光を差し込もう。真実を求め悟りを求める魂よ，さぁ行け！』

美しい言葉。昂揚する心。柔らかく背を押すような，それでいて力強い波動に包まれて。

見下ろす星は，その世界は，瞬く生命の光は，美しい青。

その美しさに見蕩れた瞬間，世界は黒く暗転した。

「……ハルキっ」

「っ！！」

揺れた。

それが自分の体だと気づくのに，瞬く程の時間が必要だった。

色鮮やで光を感じる世界に，空気の動きを感じる世界に，一瞬だけ自分が何処にいるのか判らなくて戸惑う。

見上げた夜空に，瞬く光が煌いている。その光を遮る影に，瞬きを繰り返す。

「ハルキっ」

「……ミンツゥ？」

「よかった！」

いきなり飛び込んでくる小さな体ごと，一緒に砂浜にめり込む。

何が起きたんだろう。

訳が判らぬまま，俺の上で泣きじゃくるミンツゥの背中をあやすように軽く叩いて周りを見渡す。

「何だ。大丈夫そうじゃないか」

「寝てたのかい」
「あぁ，寝てたんだろう」

口々に笑いながら「寝るならそこの天幕の下で寝なさいよ」と言うおばさん達。
今夜は飲み明かすつもりなのだろうか。呆然とする俺と，俺の上で泣き続けるミントゥを置いてきぼりにして宴に戻る背中を見送る。
どうなってんだ。

「何が起こったのか判らぬといった所か」
「黒雲……」
「自覚がないのも困りものだな。ミンツゥ，そう泣くでない。ハルキが随分と困っておるぞ」
「でっ……でもぉ」
「かように泣いていては，サンギ達が不審に思うぞ。そなた，まだハルキの事は秘密にしておきたいのであろう」

俺の上で泣き続けるミンツゥに，杯片手に宥める黒雲は優しく微笑んでいる。

「ハルルンっ。さっさとどけよっ」
「シンハ？」
「いつまでオイラの上で寝てんだよっ」
「寝てた……寝てたのか？」
「ふぇえぇん」

シンハの尻尾が俺の頭を何度も叩き，ミンツゥが泣きじゃくりながら俺の腹から降り，ようやく起き上がる。
一体どれだけの時間が経っていたのだろう。
砂浜に用意されていた松明は，幾つかが崩れ落ちていた。

酔いつぶれた者，子供達は天幕で寝ている。
底なしかと思われたサンギ達も，座り込んで笑っている。
見上げる空の星は，幾つかが海に沈んでいた。

「驚いたな。そなた，本当に覚えがないのか？」

黒雲の傍を離れなかった禄山が天幕で寝ている子どもに足で蹴られながら寝ているのを眺めながら，俺は必死で記憶を辿っていく。
天幕に行く途中で睡魔に負けたのだろう。仲良く砂浜で倒れている双子を確認して，やっと思い出す。
三線を弾いて，思い出したんだ。
俺の中で唄うエアシュティマスの唄を，思い出したんだ。
夕焼けに染まる海に向かい，泣き叫ぶように唄うエアシュティマスの祈りの唄を思い出したんだ。
あれは，そう。

「御魂拾いの唄，だ」
「みたまひろい？」

思わず呟いた言葉に，ミンツゥは涙で濡れた睫毛をしばたかせる。
そして黒雲は唸った。

「それが魂を飛ばす唄なのか？　そなた，魂が抜けておったらしいぞ」
「魂が抜けた？」
「そうだよ。いきなり聞いたこともない不思議な響きの唄を唄ったと思ったら，いきなり倒れたんだよ。シンハが呼びかけても全然戻ってこないし。よぉく観たら，ハルキの魂が抜けてるんだもん。ミントゥ，てっきり死んだのかと思って驚いたんだよっ」
「ハルルン何処に行ってきたんだよ」

なるほど。
魂が抜けた，とは。
さっきまでの感覚は夢でなかった。夢のような，あの恍惚感は夢ではなかった。
ミントゥ達の言葉に唸った。
では，あれは誰の声だったのだろう。誰の意思を感じたのだろう。
暖かく包まれた，あの安心感。心強さ。あの昂ぶる鼓動。
永遠に感じていたい，幸福感。

「オイラ，てっきりハルルンが死んだかと」
「勝手に殺すなよ。ちょっと遠出しただけだよ」
「どこへ？」
「あそこ，かな」

見上げる夜空。
煌く星空。吸い込まれそうな宇宙の闇。無限に広がる空間と時間。
あそこに，いた。俺は地の底から大気圏まで突き抜けて，この星を見下ろしていた。
美しい青に包まれ，煌く星を見つめた。
大気と宇宙の狭間に，俺は確かに存在していた。

「そなた，夢でも見たのか」
「夢だと思うか？」
「ミンツゥ，ちゃんと観たよ。ハルキの魂，どっか行ってたもん」
「うむ……」

手の中の杯を飲み干し，黒雲は唸る。

「まぁ……どちらにせよ，その唄はあまり唄わぬことだ。何度も

魂が抜かれては，落ち着いて酒も飲めぬ」
「そうだよハルキ。迷子になったら大変だよっ」
「迷子，ねぇ」
「オイラは探しにいかねぇからな」

それぞれの忠告を聞きながら，俺の頭の中で違う事を考えていた。
魂が抜けた。
もしそうだとしたら。
あの記憶の断片が本当だったとしたら。
さっき通った気脈の道を使えれば。
それは，とても有効な使い道がないだろうか。

「うん。魂が迷子になるのは困るな」

そう。魂が迷子になるのは困る。
俺にはまだ，やらねばならない事があるのだから。
柔らかなミンツゥの髪を撫でながら，微笑む。

「魂だけ飛ばすのは，もうやめるよ」

魂だけを飛ばすのは，やめるよ。魂だけ，はね。

そこは，見覚えがある景色。
自分にとって大切な場所。そう，この場所に流れる時間は宝物。
自分が諦めたものが，そこには存在する。
この場所は変わらずにいて欲しい。そう，世界の終わりになっても変わらずに存在して欲しい。

それは，可能だろうか。そんな事は有り得ないと判っているのだけど。

でも，祈る事は許されるだろうか。

祈る事だけは，許されて欲しい。

そう思っている自分に気づく。

これは，遠い遠い俺の過去の記憶。

いつか見た夢と同じ，趣ある庭の一角。

揺れる柳の枝。零れる木漏れ日の下で座る自分。心地よい茶の香り。

ここは，李薗の宮廷の奥。

俺は，円卓の上に組み上げられた機械を見つめていた。

そして，誇らしげに説明をする青年を見つめていた。

「この水が流れ落ちる力を利用するのです。この歯車で上下運動を横へと変換してこちらの装置に送ります」

「尚慧……そのような事しなくとも，その円筒を回せば鈴は鳴るのでしょう？　水をわざわざ流し落とさずとも良いのに」

「それでは意味がありませぬ。姉様には，このカラクリの意味が判らぬのですか」

「えぇ。判りませぬ。鈴を鳴らす為に水を流す訳など判りませぬっ」

「まぁまぁ。そのように怒っては綺麗な顔が台無しだよ。兄弟ケンカはそのぐらいにして座りなさい」

円卓の向かい側で頬を膨らませる艶やかな黒髪を結い上げた少女。緑の瞳に勝気な色を浮かべている。

その少女と同じ緑の瞳をした青年は，優しげな目元を困ったように自分に向けてくる。

「玉葉。これは人の手を使わずに鈴を鳴らす事に意味があるのだ

よ。尚慧の考えたカラクリを使えば，人の力では出来ぬような事を可能にするのだよ」

「そのぐらい判りますっ。でも，そういう事は共生者が行えばよいのでしょう？　尚慧は何故にハルンツ様の御前でそんなカラクリを披露するのか。それが皆目判らぬと申しているのですっ」

この子は，変わらない。

幼子から美しい大輪の華と成長した今も，優しい心は変わらない。

その事が，何よりも嬉しく誇らしく。

夢の中のハルンツが微笑むのを感じた。

これは，ハルンツの記憶なのか。

「玉葉も李薗の皇族ならば，理解せねばならぬよ」

「父上」

「父はな，考える所がある。深淵の大神官であるハルンツと共に考える未来があるのだよ」

傍らからの声に，頷くハルンツである自分。

横には，中年となった男がいた。そう……名は玄徳といったか。

「今，この世界は共生者が大きな力を持っている。大地に祈り，風を読み，火を操り鉄を作り出す。だが，その共生者とて人だ。金や権力で動いていく。力のある者が富み，持っていないものは飢えていく。吾はそのような不平等があってはならぬと思うのだ」

低く響く声が，穏やかに心に伝わる。

58　甕のぞきの色のようで（後書き）

不定期ですが，こちらも再スタートします。
水曜日更新だったので，こちらも水曜にＵＰしますね。
ただ，今の状況で２作品を定期連載にする勇気はちょとないので……こちらはストックが出来次第，更新する形にします。

ノロいですが，少しずつ継続してラストまで書いていきたいと思います。
苛立たせて申し訳ありませんが，どうぞご了承願います。すみません。

59　流れる月日の果てに

円卓の向かいに座る三人の若者が不思議そうな顔をする。
その僅かな間に幼い日々が重なって微笑む。
自分をしっかりと主張する玉葉。そんな姉に隠れる事なく，自分の意見を秘めて着実堅実な尚慧。おっとりとしながらも，どんな環境も受け入れていくカルマ。

「何度も言うようだが，吾はカラクリという手段を用いて国が築く富を民に平等に行き渡らせたいと思っているのだ」
「それは知っていますが，それを此処で仰ってよいのでしょうか」
「カルマは，ボクの事を気にしているのかな。共生者を蔑ろにする発言かと気にしているのかい？」

その言葉に，カルマと呼ばれた娘が小さく頷く。
黒い髪と，僅かに日に焼けた肌。真っ直ぐに視線を投げる瞳は僅かに青が混ざっている。驚くほど，ミルに似ている。クマリの出身だろうか。

「ボクはね，いつか共生者なんかいなくなればいいと思っているんだよ」

ハルンツの言葉に，眺めている自分も息を呑む。
こいつ，本当にそんな事を考えていたのか。

「そんなに驚く事かな」
「驚く事であろ。共生者の頂点が言う台詞ではない。酒屋が「酒など無くなれば良い」と言うのと同じだ」
「あぁ，そうか」

「父上っ。大神官様っ」
「尚慧。今はハルンツと呼んでおくれ」
三人に微笑み，頷く。
「確かに，ボクは大神官だ。始祖エアシュティマスの血筋を引いて，その記憶を継いだ。けどね，ボクのような存在がいるから世界に戦は絶えないんだよ。人がボクの力を欲しがる限り，戦はなくならない。戦は，嫌なんだ。君達も，玄徳が即位する時の話は聞いた事あるだろう？　クマリとボクの力を巡って戦が起きそうになった時の事を」
手の中に，茶碗を包み呟くように話しかける。
柳の葉が微かな音をたてて揺れていく。木漏れ日が揺れていく。
「呪術も魔術も，精霊の力を僅かに貸してもらうだけだ。それを，どれだけの人が勘違いしているのだろう。いや，最近じゃあ呪術師すら勘違いしている輩がいる。自分の持つ力以上のものを得てはいけないのに。人に力を欲する欲望がある限り，戦はなくならないのなら，いっそ力を持つ共生者などいなくなればいいんだ」
「その事を，始祖エアシュティマス様は何と仰るでしょうか……。エアシュティマス様は，共生者を守る為に深淵の神殿を創られたと習いましたが」
「あの人は，そんな事の為に深淵を創ってはいないよ」
口の端をあげて，音もなくハルンツは笑った。
冷たい笑い。
こんな風に，笑えるのか。
心に感じる凍える想いに恐怖を覚える。

「そんな事を深淵の神官は教えているのかい？　駄目だねぇ。やっぱり駄目だ。深淵を大きくしたのは失敗だったな。真実はいつだって歪んで伝わる。都合のよいようにしか，伝わらない」
「おい，ハルンツ……」
「すまない。カルマを怖がらせてしまったかな」

強張ったカルマに手を伸ばそうと思っても，円卓が邪魔だ。手が届かない。

「共生者は，いつだって少数派だ。力を持って群集に恐怖を持たせなければ，異端者として抹殺される可能性すらある。それ故に深淵が砦に成らねばならなかった。それも一理あるから。カルマ。キミの習った事は全て偽りではないよ」
「私も，歴史でそのように学びました。クマリの室家（はつゐ）でも，同じように伝え聞いておりますが……」
「おう。吾もそのように習ったぞ。そなたのお陰で歴史の講義がひっくり返る所であったわ」
「歴史かぁ」
「そうだ。そなた，いくら前世の記憶だかがあるからといってだな，吾らの歴史観まで狂わせるな。まして若者を前にややこしい事を言うでない」
「そうよ。ハルンツおじ様のせいで，次の歴史の試験で居残りさせられたら堪らないわ」
「……玉葉様。それは少し違うかと思います」
「姉様。自分の居残りをハルンツおじ様のせいにしてはならないと思いますが」
「お，おじ様のせいにしないわよっ。今度は大丈夫なんだからっ」
「まぁ，それは聞かなかった事にして」

玉葉と玄徳のお陰で変わった雰囲気を味わうように，ゆっくりと

茶を飲む。

「カラクリを創り上げる事は，深淵としても反対してないよ。カラクリを創る考えは，世界を発展させる素晴らしいものになるはずだ」

「では深淵もカラクリを受け入れるのですか？」

「神殿の神官殿達が反対しなければね」

「クマリは，あまりカラクリを受け入れる気はないかしら？」

「うーん。昴のジクメ様は頑固ですから。あ，今度の族長候補の兄様は興味を持っていましたよ。是非，尚慧様の考案したカラクリを持って行ったらどうでしょう」

「うふふ。そんな事言わないで正直になさい。カルマは尚慧にクマリに来て欲しいんでしょ」

玉葉の言葉に，尚慧とカルマが真っ赤に染まる。

玄徳が肩を震わせながら，必死で笑いを押し殺した。

「まぁ，今度の大霊会には皇太子として秋虎を送るつもりだ。補佐として尚慧もクマリへ送る計画で進めておる。それで構わぬな」

「本当でございますか！」

「カルマ殿も深淵の留学帰りに吾が李薗へ遠回りしたのは，クマリの大連として見聞を深める為。ならば尚慧も李薗の皇族として見聞を深めるのもよいではないか？」

その玄徳の言葉に，尚慧が深く頭を下げた。

「カルマ殿が生まれた土地を，よく見てきなさい」

「はいっ。父様，ありがとうございます！」

玉葉はカルマを抱きしめ，微笑みあう。

この子達は，本当に仲がよい。隣国の皇族や権力者達の子息達が，こうやって仲を持つ事は平和への何よりの近道だろう。

「では，さっそく準備を始めます」
「気が早いな。まぁよい。マダールにも伝えておいてくれ」
「はいっ」

手を取り合い，三人が庭から飛び出す後姿を見送る。
あの様子では大騒ぎして，まずマダールに窘められる気もするが。

「いいのかい？　尚慧はあのままクマリへ婿に行くのかもしれないよ」
「そうなのか？」
「深淵では，室家が随分煩かったよ。絶対に神官にはさせぬと，留学の際に強く要望されたとコムが笑っていた。「兄上様はカルマが可愛くてしかたないようです」とさ」
「うむぅ。箱入り娘か。まぁ，良い娘だが」
「うん。カルマは良い子だよ。でも，尚慧は玄武家の長子だろう？」
「そうだ。だが，玉葉が無事に嫁に行ける気が最近しないのだよ……。あれは婿をとる方が性に合うかもしれぬ」
「それはまた……思い切った事を言うねぇ」

先の様子を思い出し，やけに本当になりそうで思わず笑い声をあげる。
幼子だった彼らには婚姻の話が出るようになり，そしてボクらは歳をとったということだ。
穏やかに，和やかに時は流れた。

「そなた，ようやっと笑ったな。李薗に来て一月の間，なかなか

笑った顔が見れなくてマダールは心配しておったぞ」
「そうかな」
「あぁ。腹の底から笑わなかっただろう？　笑っても愛想笑いで目が怖かったぞ。先のカルマを怖がらせうような言葉だけは飛び出すからな」
「そうかな」
「そうだ。マダール宛てにコム殿が文を送られてな。最近のハルンツが塞ぎ気味故に，今回の行幸で少しでも気持ちが晴れればいいと」
「そうか。心配をかけていたな」

深淵に留学していたカルマをクマリへ帰るのに付いて行き，李薗へ行ってはどうかと薦めたのは，そういう事か。
あと一月半と迫った大霊会でクマリに行き玄徳たちに会えるのに，李薗行きを薦めてくれたコムの心遣いがやっと判る。
きっと，玄徳とゆっくり話す機会と子供達と触れ合える時間を贈ってくれたのだ。
心の奥が，じんわりと暖かい。

「そなた，また悩んでおるのだろう？　今度も吾に言えぬような悩みか？　そなたは悩みすぎだ。そのように塞ぎ込んでいては禿げるぞ。禿げてはコム殿も悲しむであろう」
「……どうしてそこに持って行く」

時々始まる玄徳の不可思議な思考に付いていけない。
手の中の茶碗を円卓に戻し，深く息を吐き出す。
こればかりは，話しても支障はないだろう。
エアシュティマスの血を引いた仲間を無事に大陸に散らした今，これ以上の秘密を抱えるのは重かった。
もう，以前ほど若く柔軟な精神ではない。

ひどく疲れを感じていた。
話せば楽になるのだろうか。

「最近，夢を見るんだよ」

口が，語りだす。
玄徳。キミにだけに零すよ。
一緒に，この重い荷を背負ってくれ。

「世界の終わりを，見るんだよ」

ありえないと，笑ってくれ。
そう願い，柳の枝を眺める。
見えるんだ。この柳が大木になった頃，この庭は燃え崩れる。
そして炎の中で立ち尽くす自分が見える。

「最初に見たのは，前回の大霊会の直前。ほら，マダールが行方不明になった朝の時」
「懐かしいな」
「あの時は，クマリの終焉を見たんだ」
「……ハルンツ」
「今は栄え誇るクマリの京が，地獄絵のように燃える姿が見える。幾万もの黒焦げの死体で大地は覆われて，空は灰色の煙で覆われて，生きるものがいなくなった世界が見えるんだ」

死に絶えた大地に蹄の音を轟かせてやってくるのは，四神獣と勾玉をあしらった李薗の旗を持った大軍なんだ。
李薗帝国は，やがてクマリを滅ぼすんだ。
今は皇族同士に交流がある仲でも，やがてそれは消えてしまうんだ。

カルマと尚慧の想いも，消えていくんだよ。

「クマリだけじゃない。ボクは，その地で死ぬ。まだ母の胎内にいるままで死んでいく」

「ハルンツ」

「深淵も消える。中州にそびえる神殿群は消え去ってた」

「……やめよ」

「全てが無くなった後，ボクは泥の中を走り回るんだ。砂浜を泥だらけになってね」

「ハルンツやめよ……やめよ！！」

「これが世界の終わりだよ」

「それ以上申すな！」

強く肩を掴まれた。

ボクを睨むように見るその顔には，幾つもの皺が刻まれていたけど瞳の強さは変わらない。

初めて会った，あの若い日から変わらぬ真っ直ぐさ。

「落ち着いてよく考えよ。吾は戦のない世を作り上げてきた。だからそんな事は有り得ぬ」

「いつか終末はやってくる。間違いないんだ」

「何故そのような事を言うのだ。吾とそなたは，新しい世界を作り上げようとしてきたではないか」

真っ直ぐな玄徳。何時だって前を向く玄徳は眩しい。

あぁ。欲しい。そのひたむきさが欲しい。その純真な心が欲しい。

権力の高みにあろうと，穢れてもなお輝きを放つその魂が羨ましい。

「そうだね。ボクと玄徳は新しい世界を作ろうとした。それは，成功していると思うよ」

李蘭は共生能力から離れる為の新しい技術を作り出した。
そして深淵は，宗教という枠を超えてエリドゥ王国への侵略を始めた。互いの官僚と学僧を交換する事で，深淵の神殿は数年もすればエリドゥ王国の中枢を侵食していくだろう。信仰と権力がぬ結びついた新しい国家を築くだろう。

「何故，ボクは記憶を持ったままなんだろう。何故，生まれ変わっても記憶を持っているのだろう。何故，先が判るのに生まれ変わらねばならぬのだろう」
「何を言っている……」
「玄徳。ボクは失敗をしたのかもしれない」

大きな失敗をしたのかも知れない。覚めても繰り返す悪夢を見るのやもしれない。

「何で，ボクは何度も生まれ変わっては囚われるんだ……。抜け出せないんだ。何度生まれ変わっても，深淵の大神官をしているんだ」
「……何を言っている？」
「何度も深淵の神殿に囚われて，囚われて，やがて世界の終わりがやってくる。その終焉で，ボクは唄を唄ってるのが見えるんだ」

５９　流れる月日の果てに（後書き）

あいかわらず不定期連載ですみません……。
またストックが出来たらＵＰします。

60　休日の朝

終末を唄う為に，ボクは何度も記憶を持って生まれ変わるのか。
この世の終末を見守る為に，生まれ変わるのか。
生まれ変わってもなお深淵に囚われる怒りで，ボクは世界を壊すのか。

「玄徳……ボクは判らないんだ。何故，ボクは何度も生まれては死んでいくんだろう。何度生まれ変わっても，深淵で大神官をしているのだろう。エアシュティマスの影に怯える世界を終わらせる為に，ボクは子どもを諦めたのに。全てを賭けて，ボクの血を消し去る仕組みを作ったのに……」

「そのような事，そのような事が吾に判るわけなかろう……そなたは，阿呆だ。とんでもない阿呆だっ」

かみ締めた歯の間から，玄徳の唸るような言葉が零れた。
ボクが映った瞳から，涙が零れていた。

「判るわけ，なかろう……っ。そのような事を悟る為に，吾らは何度も生きるのでろうから！　そなたの生まれ変わる訳が，吾に判る訳なかろう！　その答えを見つける為に生きるのだろうから！　それはそなたが見つける課題だ！」

何故，玄徳はこんなにも綺麗な涙を流すのだろう。
かみ締めるような言葉に全身を打たれながら，玄徳の涙に引き込まれていた。
なんて，綺麗なんだろう。
そして気付く。
ボクは，澱んでしまったんだ。

深淵の底で新しい世界を夢見ながら，濁ってしまった。いつからだろう。エリドゥ王国を煩わしく思い，その力を利用しようと思ったのは何時からだろう。

信仰心という得体の知れないモノを利用しようとした罰なのだろうか。

だから玄徳の澄み切った魂がこんなにも美しく思えるのだろう。

「ただ，世界の終わりが怖いのなら，一人で終末を迎えるのが怖いのなら，吾もその場にいると誓おう。クマリが地獄になろうと，深淵と李薗に終わりが来ようとその場に吾も居合わせようぞ」

「そんな約束をしても，玄徳は覚えてないだろう？」

「なら，見つけ出せ」

「……」

「吾を見つけ出してみよ！　生まれ変わっても記憶を持ち続けるのであろう？　なら，吾を探し出せ！」

何て無茶苦茶な要求だろう。何千何万もの人間の中から，容貌も変わった一人の魂を見つけることなど出来る訳がない。

そう判っているのに，嬉しい。

憂いていた心に，一筋の光が差し込む。

「その終末とやら，吾も立ち会ってやろうぞ。光栄に思え」

「……うん」

一人じゃない。

たった一人，何度も薄暗い水底で生まれ変わると思っていた。その先には終末しかないと思っていた。

でも，寄り添ってくれると友は言ってくれた。

例え今日この事を忘れてしまっても，いや……記憶に残る訳がない。

それでも，共に終末を迎えようと言ってくれた事が嬉しい。

「まだ，怖いのか」
「……さっき程では，ないよ」
「そうか」
「うん」

強く握られた肩が解放される。
その痛みが心地よい。
この痛みが続く限り，これは夢ではない。

「大体な。未来など判らぬものではないか」
「判らないものかな」
「そなた，未来は創るものと言っていたではないか。宿命は変えられないけど，運命は変えられると」
「あぁ……そんな事を言っていたな」

定められた障害は変えられない。けれど，それに立ち向かう自分の気持ち次第で未来は変えられる。
そう思ったからこそ，ボクは深淵へ飛び込んだんだ。
エアシュティマスの記憶を受け継ぎ，混沌とした渦の中へ飛び込んだんだ。
すっかり，忘れてたよ。

「運命は変えられる，か。いい言葉だね」

潮風が酒の臭いを消し去っていく。朝の日差しが爽やかに砂浜を

照らし，昨夜の宴の残骸をつきつける。
この片付けは大変だぞ。
唸って腕を組むと，足元で子供達が不平を言い出す。

「おじさん，おなか減ったよぉ」
「朝ごはんまだぁ？」
「のどかわいたよぉ」

親は何してるんだと天幕を見るが，イビキが聞こえてくる。遅くまで飲んで確信犯的な寝坊だ。

「まだ寝てるのか」

思わずそう声をかけると，同時に二つの人影が起き出した。
棺桶に帰り遅れて朝日を浴びてしまった吸血鬼のような有様の双子は，天幕から這い出てくる。

「シャム兄達，どうしたのかなぁ」
「今日はみんなおねぼうさんだね」
「ずるいぃ」

純粋な子どもの言葉に，黙って頭を抱える。
子どもの情操教育に，あまりにもよくない場面だ。

「す，すみません……」
「今日の朝飯当番……俺達なんですけど」
「何かすごく……気持ち悪くて」
「「ぅぷ！　」」

こんな時でも二人同時に口元に手を当てて砂浜に倒れこむ。

俺の頭が痛いのは，二日酔いのせいではないはず。

「これから酒の飲み方ぐらい覚えろよ。あぁ，今日は寝てていいから」

二人はまるで打ち上げられた魚のように口をあけては呻いている。まだ体の中にかなり酒が残って酔っ払っている状態なんだろう。昼まで動けるやつはいなさそうだ。

まったく。

「吾も腹が減ってきたな。朝餉はまだか」

「あぁ，お前は絶対に料理なんかしないよな」

昨晩遅くまで飲んでいた黒雲が，平然と宴の残骸の前に座りこむ。一通り見渡し，綺麗な杯を選ぶとまた酒を飲みだす。

こいつは本当にザルだ。

「そういえば禄山はどこだ。朝飯の手伝いさせたいんだけど」

「酒を飲ませたから，そこでのびておる」

「……下戸に酒を飲ますな」

杯を傾ける速さを変えず，さらりと言い返す様子に頭痛が激しくなる。

威圧的だった禄山に，初めて同情した。

いっその事，転職を勧めてやりたい。この主人では，将来の苦難が目に見えるようだ。

「おじさん，おなかへったー」

「判ったからおじさん言うな。とりあえず飯作るから，薪をもってこい。あとこの釜に水を入れてきて。あと，森へ行って適当な果

物を集めておいで。シンハ，付いてってくれ」
「オイラも何か食わせてくれるか」
「食わせるから」
「ミンツゥも手伝うよ」

まともに動ける大人が俺しかいない今，俺が作るしかないだろうと腹を括る。
残り物で適当に何か作るしかない。
酒を飲みだした黒雲に咳払いをしながら，宴の残り物から使えそうな食べ物を選んでいく。
魚に挟む香草の残り。焼いた肉の欠片。固くなったナン。
食材を入れた箱から幾つかの卵を取り出す。竈に水を張った釜を用意した年上の男の子に，山羊の乳を用意するように頼む。
薪を持ってきたミンツゥは，手際よく竈に薪を組みいれる。
周りをキョロキョロと見渡し火種を探す様子に気づき，笑いかけた。

「ちょっと離れてな」

口笛を短く吹き，竈の薪を一気に燃え上がらせる。
炎が瞬く間に薪を包み，熱が頬を焼いていく。

「すごいっ。そんな事出来るんだっ」
「このぐらいしか役に立たないけどね」
「ほう」

背後からの突然な声に，驚いて振り返ると黒雲が杯片手に立っていた。
いつから見ていたのだろう。不気味さに思わず鳥肌が立つが，そんな俺の様子に頓着する事なく興味深そうに炊事場を見渡す。

「御前様，手伝って下さるの？」
「何か吾に出来る事がないかとな。……この硬くなったナンはどうするのだ」
「食べるんだよ」
「食べられるのか？」
「文句言うなら食うな」

手伝う気があるといいながら文句を言うとは，どういう思考回路をしているんだろう。
理不順さを喉元で押し殺して，山羊の乳を少年から受け取り卵を入れてかき回す。
竈の上に鉄板を置いて，残り物の肉を端で温め直しながらナンを卵と乳によく浸す。
そんな俺の様子と肉のニオイに引き寄せられるように，果物を取りに行った子ども達も帰ってきた。
好奇心で光らせた目を，じっと俺の手元に集中させる。

「蜂蜜でもあると美味しいんだけど，ある？」
「あるかもしれないけど，勝手に出したら怒られるよ」

ミンツゥの言葉に，子ども達が一斉に頷いた。
ここでは少々高価なものなんだろう。甘味を入れると食べやすいと思うんだけどな。
熱くなった鉄板を前に，溶き混ぜた液にシナモンに近い香草をみじん切りにして入れてみる。

「そのふやけたナンをどうするのだ」
「焼くんだよ。休みの日の朝はコレでしょ。コレ」

油をひき，鉄板に乳と卵でふやけたナンを次々に置いていく。
香ばしく甘い香りが立ち上がり，歓声が起こる。
この世界にはフレンチトーストはないのだろうか。こんなに美味しいのに。
手際よく，焼けた面をひっくり返して皿に盛り付けていき，小さな子から順に果物を添えて皿を手渡してやりながら黒雲に杓子を渡す。

「ぼーとしてないで，スープをよそってくれ」
「吾がか？」
「子どもが火傷でもしたらどうするんだ」
「吾が火傷をする心配はないのか」
「……大人として最低だなお前」

黒雲に代わって杓子を取ろうとした年長者の子どもに微笑みかけて，黒雲に木の食器を押し付ける。
竈に近づき，恐る恐る杓子をスープの中に入れる。ゆっくりと持ち上げた杓子でスープを掬えるのを確認したように一人頷くと，スープを零し木の器を汚しながらよそいだす。
その黒雲の危ない手つきに，ミンツゥがソワソワと手を出したり引っ込めたりしている。
シンハはその足元で「スープがもったいねぇ」とうなだれた。

「ハルキって，本当に変わってるねぇ」
「うん。おじさん変わってる」
「御前様相手に，こんな事言うのおじさんだけだし」
「おじさんって言わないでくれ……」
「でも，このナン美味しいよ」
「うん！　おいしー！　」
「ハルルン！　オイラにもオイラにも！　」

満面の笑みを浮かべる子ども達と，恐る恐るスープをよそう黒雲と，尻尾を猛烈な勢いで振りながら皿の上のナンに齧りつくシンハと。

何だか妙なピクニックのような光景に，しみじみ思う。

カメラで撮っておきたかったな。出来れば動画で。

６０　休日の朝（後書き）

あいかわらずの不定期です。
またストックが出来たら更新します。

61　虹球ころがる

働かざるもの食うべからず。ここ『ニライカナイからの仲間』のモットー。

昼飯の片付けもそこそこに，沖合いに停泊中の船に呼び出しをされる。

何かまずいことをしたかなと，戦々恐々でサンギの前に立っていた。

「つまり，食事当番を辞めろって事ですか」

「あんたには他の仕事をやってもらいたいんだよ」

「飯，まずかったですか？」

「そんな事言ってないだろう」

「ひょっとして，黒雲に配膳頼んだのがいけなかった，とか」

サンギの大きな緑の目がオレを射抜く。

慌てて「御前様です，はい」と訂正をいれると溜息をついた。

「その御前様の要望でね」

「はぁ」

大きな机に並べられた手紙と，地図。

見慣れぬ文字が並んだ手紙をまとめて机の片隅に寄せた。窓から吹く潮風に対抗するように大きな石を乗せ，さらにインク壷も片隅に寄せる。

サンギの船室に呼ばれた俺は，大人しく机の前で直立不動だ。

なんだか，職員室に呼ばれた生徒のようだ。おかしなもんだ，つい半年前まで立たせる立場だったのに。

「どうやら，御前様もあんたの共生能力に気づかれてね。このまま料理番をやらせるのは勿体無いとのお言葉だ」
「俺は料理番が気に入ってるんですけど」
「私もあんたの料理は気に入ってるけどね。それに，どうも正体不明の奴を最前線に出すのも困る。かといって，あんたの能力はデカイ。ニライカナイの仲間の中でも，ミンツゥ以外でそれだけの能力を持つ奴はいない」
「はぁ」
「そこで，だ」

昨晩の酔いをまったく感じさせない鋭い目が，俺を射抜いたまま。内面すら探るその目つきに，背筋を伸ばす。

「あんた，水の精霊は扱えたね」
「まぁ」
「風も扱えたね」
「ボチボチ，ですが」

やばいな。ここの常識がない俺に，踏み込んだ質問をされると異世界から着た人間だとばれてしまいそうだ。
まだ，ダショーとばれたくない。
サンギ達なら俺を好意的に受け入れてくれると思うけど，ダショーとしての役割も判らない今は告白できない。
もう少し，彼らの動きや考えを知っておきたい。ここで尻尾を出すわけにはいかない。シンハがいたなら少しは誤魔化せるんだけど，今は浜でミンツゥと遊んでるはずだ。

「他は？」
「何をやれば良いんですか？　やれる事にも限りがありますよ」
「ふん」

炎の代わりに鼻息を出すと，引き出しから小さな袋を取り出した。
太い指が器用に袋の紐を解き，中から小さな珠をつまみ出す。
薄暗いし船室で，それは鈍く光った。
親指の爪ほどの珠は，虹色に光っていた。

「見たこと，あるかい？」
「……見た事は，あります。でも，それの名前は，思い出せません」
「虹球」

以前，ミルが使っていた小さな珠だ。なにやら文句を言ってから息を吹きかけて，精霊を一斉に動かしていた。
精霊を動かすには唄を歌ったりし舞を舞ったりするが，その虹球でその手間を省いているような印象だった。まるで，虹球の中に精霊を集め使役する為の唄や想いを閉じ込めてあるような。
サンギが無言で差し出すそれを，そっと両手で受け取る。
まるで真珠球のよう。

「使い方は知ってるかい？」
「俺は使ったことないですね。……姫宮様が使っていたのを見たことあります」
「先の天鼓の泉での戦でかい」
「はい」
「なるほど。あれだけの宙船相手に，普通の呪術じゃあ間に合わないからね。さすがクマリってとこだ」

光沢ある表面が僅かに淡く色を変化させながら光る様は，シャボン玉にも似ている。
工業がない社会だから，これ天然モノなのかな。作り物って事は

ないだろうし。

「ここから南東に進んだ海に，この虹球が採れる場所があるんだがね。後李が取り締まる採掘場さ」

「あぁ，聞いた事があります。後李が独占していると」

「どうにかして，その採掘場で働かされてる共生者達を逃がしたいのさ」

「採掘場も，ですか？」

「出来ればいいが……そんな事は無理だろうさ。私達にはそんな力はない。せいぜいエリドゥに密告して採掘場を奪い取らせる。そんな手段で後李から力をそぎ落とすぐらいしか出来ないね」

自嘲気味の笑いに，俺は唇を噛む。腹に沸き立つ黒い感情に気づき，理性できつく蓋をする。

共生者の自由を求めていたのに。ハルンツは，共生能力を権力に使われるのを何よりも嫌っていたのに。

五百年経っても，何も世界は変っていないのだろうか。ハルンツは自分の人生の多くを犠牲にしたというのに。

「エリドゥに密告しても……その採掘場で共生者たちが働かされるのは変わりないのでしょうね」

「そりゃ，そうさ。虹球に精霊や唄を入れれるのは共生者だけだからね。でも，待遇は後李より断然にいいはずさ。少なくとも差別はない。食事だって格段によくなる」

「そんなに酷い扱いを受けるのですか？」

思わず尋ねると，サンギは鼻で笑った。

「後李の軍人には，共生者が妖と同じに見えるんだろうさ。あんた，後李を一人で旅していたんだろう？　楽師と偽っていても青い

眼で随分と大変だったんじゃないかい」
「それは，そうですけど」
「後李の連中にとって，共生者は詐欺師同然なんだよ。あいつらの使う宙船は大量の虹球で浮いているというのに。国の基盤だって共生者である王族が作り上げたというのに，あいつら自分達が侮辱しているものが何かも判っちゃいない。今や目に見えるモノが全てなのさ」
「……ならいっそ，採掘場も壊してしまえばいいじゃないか」
目に見えるものが全てと考えるのなら，目の前で起きる現象しか信じない，考えないというのなら。
「何もなければいい。全てを失くせば気づくんでしょう」
「私達は，そこまで考えてない。そこまでは……ハルキ，あんた」
「いえ，失くせられる訳ないですよねー。冗談ですよ，冗談。で，俺は何をすればいいんですか」
「いや，いい。やめた」
サンギは深く息を吐いて目を瞑った。
目頭を押さえる手が僅かに震えているように見えたのは，気のせいだろうか。
鋼鉄色に日焼けした顔に刻まれた皺が，深く見える。
「ハルキは，他の仕事をしてもらうよ」
「料理当番でいいですよ」
「料理当番するんなら，もう少し経費を抑えとくれ。少し油や蜂蜜を使いすぎだ」
「でも，サンギもドーナツ好きでしょう。いっそ商売にしたら売れますよ」
「むぅう」

そうなんだよなぁ。ドーナツというよりサーターアンダーギーだけど，これが好評なのだ。
イルタサは本気で経費を細かく計算しだしたようだ。というか。この集団はどういう手段で現金を得ているのだろうか。
見た目は商人の集団だから貿易をしているようにも見えるが。
詳しくは俺に明かしていない。まだ不審者扱いだ。

「そいつはイルタサがやってくれるだろうさ。とにかく，この件はあんたには頼まないから忘れとくれ」
「それはいいですが……でも，何か困った事があったら言ってください。恩は返しますよ」
「は。恩，ねぇ」
「本気ですから」
「そりゃ頼もしい。じゃあ，とりあえず今日の晩飯を期待してるよ。御前様は明日の夜明け前にお帰りになるから，少し早めに用意しておくれ」

本気の恩返し宣言を鼻で笑われて，苦笑いをしてしまう。
まぁ，何も困ることが起きなければ良いか。
手で払うように退室を促され，扉をあけながら振り返る。
手紙の束を再び読み出したサンギに，頭を下げた。

「サンギ達に出会えたのは，本当に感謝している。恩以上のものを俺は貰っている」

ハルンツの時から，勇気を貰った。見えない未来を掴み取るための力を貰っている。
五百年経った今も，助けてもらった。まるで奇跡のように。

「否定されても構わない。俺があんた達に何かをしたいんだ。それでいいだろう？」
「……馬鹿言ってないで晩飯の準備しとくれっ」
「じゃあ，とりあえず腕によりをかけます」
「経費は抑え目にしとくれ」
「御前様がお帰りになられたら，でしょう」
「早く行きなっ」

最後は怒鳴られるように追い出されてしまう。
あのサンギが真っ赤になって照れるなんて思わなかったと驚きながら。

61　虹球ころがる（後書き）

夏休みに入ってしまいました…（涙）

とりあえず，隙を見ては書いていきます。更新していきたいなぁ…希望で（汗）

あいかわらずの不定期更新中。ごめんなさい。

62　零れる水

下処理を終えた魚を香草に挟むようにして，一息いれる。これで生臭さを和らぐだろう。

「あとはどうするんだい」

「さっき切ってもらった野菜を炒めて下さい。味付けはそうですね。柑橘系の酢とかありますか？」

「これかね」

調理台の上に置かれた籠に寝かされた小瓶を指差され，栓を取って嗅いでみる。オレンジのような爽やかさをもった甘い酢の香りに頷く。

「この酢と塩で味を調えてトロミをつけて下さい。この魚を素揚げして上にかけましょう」

「こりゃいいや。なら，熱々じゃないといけないね」

「とりあえず野菜を準備して，魚は寸前で揚げようか」

「香草は最後に入れないと香りが飛んじまう。他の料理も先に進めとこう」

やっぱり普段料理をしている人は，未知の料理を目の前にしても手早い。

それぞれの船で料理をしてきたおばさん達は百戦錬磨の兵ぞろいだ。俺が提案した中華料理もどきを素早く理解して手順を割り振り動き出す。

俺はこの職場のほうが気楽かも。

空に赤みがさした刻限，浜辺の片隅で料理当番の職務を全うするべく汗を流すのは心地よい。

異質な俺に戸惑っていたおばさん達も，昨晩一緒に料理を作り上げればすっかり仲間のようだ。
若い男達はあいかわらず酒を飲んだり『仕事』の話をしているようだが，『仕事』に入れさせてもらえない俺はここが仕事場だ。
東屋のような壁のない小屋の中で野菜や香草を刻み，子ども性質が釣ってきた魚を捌き，料理を作り上げる。

「もう少し湯を沸かしておきましょうか」
「助かるよ。お願いできるかい」

余った香草の茎で手を揉み生臭さを消し，水甕から大釜へ水を足す。
猛烈な湯気が海風に吹かれていくと，少しだけ汗が引く。それでも熱気で汗は流れ落ちてくる。袖で軽く目元を拭い，薪を竈へ放り込む。インドア人間だった俺も慣れたもんだ。

「確かに，ハルキさんの言う通りだったねぇ」
「はい？」

竈からの熱気で赤く上気した顔のおばさんが，手早く粉を練りながら笑いかける。
エリドゥ風という無発酵のパンを焼くのだろう。喋りながらも，手だけは捏ねた粉の塊を磨かれた石の板に叩きつけ回して楕円形に伸ばしていく。
まるでピザ職人のような妙技だ。

「最初は面倒かと思ったんだけどねぇ。ハルキさんが沸かした水を飲ませたらウチの子の腹痛が止まったんだよねぇ」
「そうそう。ウチの坊もさ」
「腹の具合が嘘みたいに直った子が多いよねぇ」

「精霊の加護が無くなると思ったんだけど不思議なもんさ」

いや。不思議じゃない。

そう心の中で思いながらも微笑み返すに留める。

俺からすれば，生水を飲むのが信じられない。一見綺麗な水であっても細菌はいるだろうから，大人より免疫や体力が劣る子どもには負担が大きかったのだろう。

子どもの飲み水も生水だったのに気づき，料理用に沸かした水を子どもに飲ませたのが成功したらしい。

やっぱりココは異世界なんだよなぁ。細菌や微生物の存在を知っている現代日本と，精霊の加護を信じるココと。

もちろん，見えない存在を信じるココだから良い面もあるだろうけど。でも，それは何だろう。

ふと，竈の中で燃える炎を見つめる。昼間サンギが言っていた事を思い出す。

虹球の採掘場を失くせば良いと俺が言った時，サンギは酷く動揺していたようだった。見えないものが信じられないのなら，いっそ得られる結果を失くせばいいと思っただけなのに。

何故あんなに動揺していたのだろう。理解しようとしなかった事に気づけば，きっと考えが変るだろうに。

赤く燃える薪が爆ぜて崩れる。

変化が怖いのだろうか。それとも『失う』事が怖いのか。

「ハルキはおるか」

よくとおる声に，オバサン達が調理中の手を休めて一斉に砂浜に身を伏せた。

湯気の向こうに黒雲が笑いかけてきた。無邪気な顔で。

潮風が日中の暑さを払っていく。それでも，肌にまとわりつく潮が不快感。なかなか慣れない感覚だ。
涼を求めて，足を海に投げ出した。打ち寄せる波が足を揺らすのが心地よい。
黒雲も，俺に習うように足を海に入れる。
いい年した大人が二人，磯の岩場で腰掛けて夕日を眺めている。
何やってるんだ一体。

「あのさ，俺は仕事をしてたんだけど。夕飯作ってたんだけど」
「そなた，仕事を断ったのか」
「……本当に黒雲は唐突だな。何の話だよ」
「サンギ殿に頼んだはずだが。虹球の採掘場を探る話だ」
「あぁ，昼間の話か」

急に俺一人を呼び出して何の話かと思った。禄山も寄せ付けず，浜辺の端でいきなり始まった話に肩を竦める。

「虹球の採掘場を探る話だったんだ。でも，俺が断ったんじゃないぞ。サンギが勝手に「お前に任せるのはやめた」って言ったんだぞ」
「サンギ殿がそう言ったのか？」

酷く驚いた顔で俺を見つめる。
この近距離で，それこそ無精ひげの本数を数えるように見つめる。
そして溜息をついた。

「ハルキに頼めば容易い事と思ったのだがな」
「何で俺が」

「そなたしかおるまい」

その断定する口調に，心臓が飛び跳ねる。何で，何で俺しかないと思う？　極秘の採掘場を探る仕事は，それほど難しいのか。俺なら出来るという根拠は？

確かに俺なら，出来る。不可能は，きっとない。ダショーなのだから。

思わず沈黙する。

やばい。この沈黙の間は肯定していると同然だ。

「虹球の採掘場は後李にとって最大の軍事機密。国内の共生者も集められておる。宙船の浮力源であり，精霊を使った諸々の力の根源となるものだ。ハルキが採掘場の内情を探れば，皆の手で崩せるやもしれぬのに。採掘場に囚われた共生者も者達も解放出来よう。酷使され束縛される精霊達も自由を得る事が出来よう。何より，後李はそこから崩れていくというのに」

俺の青い瞳を凝視したまま，淡々と呟く文句は本当なのか。感情が見えないままに零れる言葉が意味不明。

「何故サンギ殿は諦めたのだろうか。判らぬ」

「採掘場が欲しいのか」

「吾がか？　欲しい訳なかろう」

小さく笑った黒雲は，痛そうに顔を歪ませる。

夕日が照らすその顔は大人なのに。泣きそうな小さな子供に思えるのは何故だろう。

「黒雲は後李の人間なんだろう？　何で自分の国に不利になる事がしたいんだ」

「吾は国の有利になるよう，しておる。いや，後李に住む民に有利になるように，だな」

波の音でかき消されそうな小声で囁き，小さく笑う。

何が面白いのか。小さく口元で笑う。

「誰も吾の考えなど理解しようとせぬ。カラクリだとほざいても精霊や神の与える恵みなくて国は立ち行かぬのに。小さな力の上に胡坐をかいてふんぞり返っている春陽の役人貴族どもは，目の前の栄華しか理解出来ぬようだ」

「なんだ。俺と同じこと考えてるな」

僅かに曲線を描く水平線の奥へ沈んでいく太陽を見送りながら呟く。

見渡す限り，何もない。大海原の向こうに見える夕日と俺の間に遮るものがない絶景。

微かに聞こえる子ども達の声を，時折り波の音がかき消していく。

なんだか世界に俺達しかいない錯覚。

俺達二人だけで，本音を吐き出している。

誰にも言えない事まで，話してしまいそうだ。どんな残酷な事でも。

「だからサンギに言ったんだ。誰もがその採掘場に囚われているのなら，いっそ壊してしまえばいいと」

「言ったのか！」

「駄目か？」

「駄目であろう。それは……そんな事をしては駄目であろう」

「何でさ」

さっき，黒雲も採掘場があるからいけないと言ったのに。矛盾し

てる。
咳払いをして，黒雲が軽くこめかみを押さながら頷く。
「そなた，極端すぎるのだ」
「どこが極端なんだよ。採掘場があるから利権争いがあるんだろ？」
「だからと言って，壊して何とする。一度壊れたものは元通りにはならぬぞ」
「直らないのか？」
「いや……気が遠くなる年月をかければ不可能ではないやもしれぬが」
「虹球なんて，精霊を閉じ込めるようなモノがなくったって，昔は世界は回っていただろ？　虹球がなくったって人々も国家も動いていた。宙に大きな軍艦を浮かせなくても，困らなかっただろ。だから無くてもいいじゃないか」
ハルンツだった五百年前は，虹球なんか無くっても生活できたじゃないか。
何でそれが今出来ないんだ。
大きな力を求めているんだ。
「ましてそれが争いのタネになるのなら，いっそ壊せばいいじゃないか」
「まるで幼子だな」
黒雲が呟いた。
「思い通りにならぬのなら壊すとは，癇癪を起こす幼子と変らぬ。もう少し大人かと思っていたが，残念だ」

波が砕けて水しぶきが顔にかかる。
心の蓋が砕けた。砕けた欠片が，柔らかいところに突き刺さる。
降り注ぐ矢のように，容赦なく。

「あのクマリですら破れたんだ。人の言う栄華なんて儚い夢だ」
「ハルキ？」
「採掘場がどうのこうって……。何で目の前の喜びや快感だけを追うんだ。それは幸せではないだろう？　一瞬の快感の為に幸せを失おうとしてるんだ」

止まらない。
溢れる言葉を止められない。
哀しくて，虚しくて，腹立だしくて。
ここの人々は，間違いを犯そうとしているのに。
利便を追いかけても幸せが来るわけではないのに。

62　零れる水（後書き）

今回は2話更新。続きどーぞ

63　懐かしい友

握り締めた手の平の痛みが，喋るなと叫ぶ。
でも，この苦しみを吐き出したい。

「過ちを繰り返すのを見なければいけないのなら，いっそ壊したい。そう思う事も俺は許されないのか？　うんざりなんだ！　もう巻き込まないでくれよ！」

この世界を見続けなければいけない。何度も囚われなければいけない。
その訳は何だ。俺は何か大罪を犯したのか。ならば，どれだけの罪を背負い辛い思いをしなければいけないんだ。争いごとをしてもいいさ。勝手に自滅すればいいさ。でも，俺を。俺の人生を巻き込むな！

「これ以上の絶望を味わうのが俺の宿命なら，いっそ終末がくればいい！　全て終わればすっきりする！」
「生きるのが怖いのか」

見渡す限りの海原に，黒雲の声が零れて熔けた。
赤く染まった世界へ熔けていく。
怒りに熔けていき，言葉が零れた。
くすぶっていた不安を言い当てられた。

「あぁ……怖いんだ」
「ならば，吾がいよう。終末が来るのなら，吾も一緒に終末を迎えよう」
「黒雲」

この言葉を，知っている。
昨晩の夢で聞いた，あの言葉。
細胞が目覚める。眠っていた記憶が叫ぶ。

「一人きりだから，破壊的な終末を望むのであろう？　ならば，誰かの為にと考えてみよ。出来ないと思っている事も，誰かの為になら何とかしようと思うであろう？」

「誰かの，為」

「誰かの為になら，踏ん張れるであろ。それでも駄目なら。全力を賭して対処して全てを神に預けるしか手がない所まできてしまったのなら」

不敵な笑い。それでいて優しい瞳。氷のように砕けた心が熔けていく。

「その終末とやら，吾も見てやろうぞ」

遮ることなく夕暮れの陽が黒雲を照らした。
そこにいる男は，遠い記憶にいる男とは違う顔をしているけど。
俺は知っている。
その不敵な笑いも優しげな瞳も魂も，記憶の男と同じだ。
流れ過ぎた月日の向こうで交わした約束を，ここに存在してくれている。
玄徳帝。見つけたよ。
あんた，人が良すぎだ。偉そーなのにさ。こんなに偉そうなのにさ……。

「どうした」

「……意地悪だ。神様ってやつは，意地悪だ……」

こんなサプライズを用意するなんて。
孤独だと思っていた。
何度生まれても暗闇の記憶を抱えて一人で生きていくと思っていた。
愛しい人と別れ，希望が手から零れ落ちるのを何度も味わってたけれど。
でも，そうじゃないんだ。
きっと，ただ孤独や絶望を味わうだけじゃない。
今までの絶望は希望をを見るために必要なものだったのかもしれない。
闇の中ではっきりと光の筋が見えるように。

「ハルキ？」

不意に涙が溢れてきて，空を見上げる。
天頂は深い藍に包まれている。
時間と空間と，命を包んだ藍が揺れる。
涙で揺れる藍に微笑んだ。
そこにいる神様に，見せてやるんだ。そう誓ったじゃないか。
ミルを失ってから迎えた初めての満月の晩に，そう誓ったじゃないか。
そうだ。
終末を迎えるのは簡単だ。壊すのは簡単だ。でも，その前にやらねばいけない事が山のようにある。

「やってみる。その人が望むなら，その為になら何だってやれる……」

ミルがクマリ復興を諦めていないのだから，生きつづけているの

だから，ミルに絶望を味わせたくないのだから。ミルと生きていくために，この異世界に来たのだから。
何度も諦めても，虚しくなったとしても，まだ終末は来ていない。きっと時間はまだある。
無限のように流れていく時間の中で果たされた約束を，守ってみよう。
誰かの為にならば，俺はまだ生きていける。闇の中に射す一筋の光を目指して，立ち上がれる。歩き続ける。

「採掘場の件，考えておいてくれ。これが後李を崩す一角となるはずだ」
「まぁ，考えるだけな。後李を崩すっていうのが，俺の目的になるのならね」
「ハルキは相変わらず変っておるな」
「あんた程じゃないよ」

生まれ変わって逢いにきて来てくれる，貴方ほどではないよ。
ありがとう。

６３　懐かしい友（後書き）

今回は2話更新です。

６３話を入れようか迷ったのですが，思い切って出しました。ついでに黒雲さんの正体も暴露同然で（汗）。描くのが久しぶりで，ややこしいまま描ける自信がありませぬ…。という訳で６３話はオマケで。

またストック出来次第に更新します。

ペースは水曜かなぁ。毎週はまだ難しそうですが，頑張っていきます。はい。

64　小石を踏む痛みのような

東の空の闇が薄くなっていく。風は今だに夜の冷気を含んでそよぎ，波は穏やかに浜辺に打ち寄せる。

「ここから大変かと思うが，頑張りどころだ。皆々心を合わせていこうぞ」

「御前様，くれぐれもお気をつけて。お疲れの出ませぬよう」

「判っておる」

百人近くの老若男女が，黒雲を見送るために夜明け前の浜に集まっていた。何十もの円で黒雲を囲み，別れを惜しんでいる。

祈るように拝む老婆，気遣わしげに見つめる男，両手を胸の前に組む女。

「無理をなさらずに。危険を感じたら，お逃げください。我等はいつでも駆けつけます」

「そうだな。期待している」

サンギの言葉に小さく笑う。

あいつは，一体何者なんだろう。

後李の貴族だろうとは想像出来る。でも，昨夜の会話ではそんな地位を裏切るような事を言っていた。

まるで民の為なら国を切り捨ててしまうような覚悟を持っている。

「あいつがいなくなると寂しいか？」

「まさか」

「そうか？　ハルルン，あいつ好きだろ」

「まぁ，嫌いな奴じゃないけどね」

久しぶりにシンハが俺の足元で大あくびをする。
ミンツゥはサンギの横で見送りをしている。まだシンハを恐れる大人がいるために，集団から少し離れた俺のそばにやってきたようだ。
足元に触れる長い毛の感触が，酷く懐かしい。
手を伸ばして，首の後ろを撫でてやる。

「オイラも，あいつ嫌いじゃないよ。あの禄山って奴は睨んでくるけど」
「禄山は黒雲の警護が仕事だからな。しょうがない」
「でも，すんごい気を飛ばしてくるぞ」
「気？」
「あいつ，クマリだぞ，多分」

シンハの言葉に，撫でていた手が止まる。

「なんだい。気づいてなかったのか？　あ，耳の後ろも撫でておくれよ」
「あ，あぁ」

シンハの言う通りだ。
禄山は玉獣を扱っている。今も，見送りの皆を見ながら波打ち際で二匹の玉獣を影から出して控えている。
玉獣を扱えるのはそれなりに力を持った共生者か共生能力をもったクマリの民だけと，ミルに以前聞いた覚えがある。
滅ぼした国の民を警護に控えさせる貴族。
妙な取り合わせだ。
指先で耳の後ろを掻いてやりながら，首を傾げる。
この世界では，それが従属の印なんだろうか。滅ぼした国の人間

に自分の警護を任せるなんて，俺の感覚だと寝首を取られそうで考えられないんだけど。

「ハルキ！」

突然，黒雲の声がして集団が真っ二つに分かれる。
すっかり馴染んだ顔が，笑いかけてくる。

「そなた，しばらくここにおるか？」
「まぁ，許されるなら厄介になるつもりですけど」
「ならばよい。また酒を酌み交わそうぞ」
「やだよ。お前ザルだから，付き合う俺が体壊す」
「いや，そなたもザルよ」
「冗談きつい」

思わず砕けた口調になると，途端に控える禄山からの視線が痛いほど突き刺さる。
くわばらくわばら。

「その時まで，皆を頼むぞ。ミンツゥ，良い子にしておるのだぞ」
「もう子どもじゃないですっ」
「サンギや皆の言う事を守って表には出るではないぞ」
「判ってますっ」

黒雲は口を尖らすミンツゥの頭を撫で，もう一度俺へ視線をよこす。
声には出さない言葉が聞こえるようだ。
黒雲は，心配なのだろう。
力はあるが，まだ子どものミンツゥが気がかりなのだろう。精一杯背伸びしている彼女が。まだ口を尖らして反抗する事が子どもだ

と気づいてない彼女が。
青い瞳をして大きな力を持った彼女は，後李に知られてはいけない存在。『ダショー』として扱われている存在なのだから。
それは偽りだとしても，間違いを信じているにしても，クマリの民や共生者を信じる者達にとって大きな切り札。
黒雲は何をしようとしているのだろう。
共生者たちを助けようという，ニライカナイからの人達と手を組む理由は何だろう。

「あ……」

ふいと，宙を見上げる。
肌を撫でる風の向きが変った。
もうすぐ夜が明ける。旅立ちだ。

沸騰した湯を，慎重に水甕に移す。それから麦を練っておく。芋の皮を剥き魚を捌き，香草を千切る。
そこまでは一人でやらねば。

「おい，こんなに火力強いと焦げる」
「そうなのか？」
「使えねぇな」
「つーか，玉獣を煮炊きにこき使うな」
「だって人手が足りないんだよ。猫の手も借りたいっていうのさ」
「ねこって何だよぉ」

シンハがぼやきつつ竈の火に息を吹きかけると，火の周りを踊っ

ていた小人達が吹き飛んでいく。
精霊が扱えると，こういう時は楽だ。
俺も口笛を吹いて，隣の竈の火をつける。マッチいらず。

「おばちゃん達はどこ行ったんだよぉ。昨日のおばちゃん」
「針仕事がまだ終わらないんだってさ。シンハこそ，いつもの子守りはいいのか？」
「子守りじゃねえ！　あれはガキどもがまとわりついて来るんだよっ」
「楽しそうじゃん」
「尻尾引っぱられて，圧し掛かられて，追っかけてくるんだぞっ。ハルルンも同じ目にあえば判るっ」

緑の瞳が潤んでいるのは気のせいではないな。
昨日までの光景を思い出して，笑いながら視線は砂浜へ吸い寄せられる。
そういえば，今日は子ども達がいない。

「シャムカン達と一緒に果物集め行ったみたいだな。助かった～」
「お前はついていかないのか？」
「オイラはひ弱だからねー」

こき使われるのを悟って，逃げてきたんだな。

「でも大丈夫か？」
「シャムカン達がついてるし，危ないか？　ミンツゥがいるから精霊の助けもあるだろうさ」
「……ふううん」

判ったような，判らない返答。

日本なら子どもだけで外を歩かせないものだから，ついつい過保護気味に気になる。
大釜に水を満たし，大鉢に麦と一掴みの塩を入れてかき混ぜる。
「まぁ，賢い子達だし。危ない事はしないだろうけど，けど」
これも職業柄だろうか。
一応，半年前は教師だった事を思い出す。今や給食のおじさんだけど。
水を加え，練り上げていく。
生地が余ったら，香草を練りこんで薄く焼いてみよう。クラッカーみたいなものが焼きあがれば，オヤツになるかもしれない。
そう考えながら，練っていた時だった。
シンハが浜辺へ歩き出す。
何やら宙を漂う匂いを追うような動きに，俺も無言で見つめる。
「ミンツゥ，どうしたんだよ」
吸い寄せられるように，山側の森へ近づいて声をかけた。
「ミンツゥ，みんなとはぐれたか？」
「……先に帰って来ちゃった」
森から，ミンツゥが小走りにやってくる。
肩で揃えた髪を揺らし，小屋に飛び込んでくる。
「おなかすいちゃった！　何か食べるものある？」
「あ，あぁ」
調理台に置かれた籠の中から果物を手に取り，小屋から駆け出し

ていく。
目を合わせる事なく，まるで遊び足りない子どものように。
「サンギ様の所に行ってるねっ。まだ勉強終わってなかったから！」
「ミンツゥ？」
「ごめんねシンハー。後で遊ぼうねー」
一人で喋り，砂浜を走っていく。
その後姿を見送って，シンハが尻尾を丸めて小屋へ帰ってくる。
見上げる緑の目は，明らかに戸惑っていた。
「ミンツゥ，泣いてたよな？　泣いてたよな？　涙のニオイがするんだよ」
「うん……」
「最近さぁ，餓鬼どもがミンツゥに嫌味いうんだよなぁ。本当に過去世の記憶があるのか，とかさぁ。聴いてて腹が立つんだけど」
過去世，とは生まれ変わるハルンツ以来の記憶の事だろう。記憶がない事でダショーとしての地位が曖昧だと，出会った頃のミンツゥが言っていたのを思い出す。
ミンツゥ本人は本物のダショーである俺が現われた事で重責から吹っ切れたような事を言っていたが，本物のダショーが欲しい大人達はミンツゥをダショーとしたいようだった。
「それでミンツゥは？　怒鳴り返すのか？」
「困った顔して笑ってるんだよ。あの顔，なんだろなぁ。オイラにゃ判らないね」
曖昧に返事をして，溜息をつく。

トラブル発生。いつも元気な子が何かを隠す為にカラ元気を演じてると感じたのは，間違いないようだ。
丸め終わった生地を布巾で包み，そっとシンハの首元に顔を寄せる。
柔らかな毛先が頬を撫でた。

「今はそっとしておこう」
「でもさぁ」
「夕飯は食べに出てくるさ。そうしたら，いつも通りに横に居てやれよ」
「うー」
「泣いてた事は気づかなかった事にするんだぞ」
「でも」
「気づかないふりも優しさなの」

俺の言葉に何度か尻尾や耳を上げ下げし，何か言いたげにしつつも小屋も前で座り込む。
ミンツゥが気がかりで，竈の手伝いをする気も失せたようだ。
シャムカン達が帰ってきたら，それとなく聞いてみようか。いや，それも余計なお世話かな。そう考えながら包丁を手に取る。
おばちゃん達がやって来るまでに，芋の皮剥きぐらい終わらせておこう。
俺に出来る仕事をしていたほうが，気を煩わせなくていいから。

夜は早く，朝も早く。
この世界に来てから，生活リズムが変った事を痛感する。
夜はＣＧのような星空が出てきたら，寝る。そして空が白みだし

朝日と共に起きる。
日本にいた時は，夜中まで仕事してたりダラダラ映画や音楽してたりしていたけど。
今日も朝日が出る前に起きて，麦粉を練る俺。生活習慣というのは，変えれるもんだ。

「おはようさん。いつも悪いねぇ」
「おはようございます」

ここ3日ぐらいは，炊飯は俺の仕事になりつつある。
百人近くの食事をサバイバルな状況で用意する事にも慣れてきた。
メニューは無発酵のパンと魚のスープに果物を切ったものぐらいだから，楽なもんだ。
それでも，揺りかごぐらい大きな鉢一杯の生地を捏ね上げていると汗が噴出す。滴る汗を肩で拭きながら，手首に体重をかけて捏ね上げていく。

「ここんとこすっかりハルキさんに任せちゃって，悪かったねぇ」

柄杓で水甕から一杯の水を掬い取ると，おばちゃんは一気に飲み干して伸びをした。
おばちゃん達は，昨夜も遅くまで針仕事をしていた。何を作っているのかは知らないが，船団でやってきた女の人たちは円陣を組み盛大にお喋りをしながら縫い物をしている。

６４　小石を踏む痛みのような（後書き）

まだ不定期ですみません。
ストック出来たらまたＵＰします。

65　泣き声が聞こえる

「おやまぁ，殆んど支度が終わってるのかい」
「あとは，この生地だけですね。どうにも，俺は上手く捏ねれない，から」
手を生地だらけにして答えると，オバサンは日に焼けた顔に皺を増やして笑う。
「それならあたし達がやっておくからさ。おさんどん任せて悪かったねぇ。これを作っていたから手が離せなくなってね」
「ようやっく作り終わったんだよ」
足元にいたシンハに近づけないオバサンが，手招きをして調理小屋の外へ手招きをする。
後からやってきたオバサン達が，手に持った布をハラリと広げた。鮮やかに染められた緑の生地で作られた男性用のチャイナ服，と言えばいいのか。
黒で縁取りされ，緑がよりいっそう深く映える。
「あんたの舞台衣装さ」
「どうだい。なかなかの出来だろ」
「これなら見栄えがあるねぇ」
「下手したら軽業師の子を食っちゃうねぇ」
「いいさ。食っちゃえば。それより着てごらんよ」
あははははと，笑いあうオバサン達に目が点。
舞台衣装？　俺の？　舞台ってナンなんだ。
聞き間違いと言ってくれ。誰か，頬を思いっきり抓ってくれ。き

っと痛くないハズだ。
でもシンハが揺らす尻尾が，足元に触れてこしょぐったい。
嘘だろ，絶対。誰でもいいから嘘と言ってくれ。

砂を巻き上げ飛び跳ねる足先から，幾つもの球が空へ飛んでいく。
色鮮やかな色で飾られた球が南国の空に映える。
重力に従い落下する幾つもの球を，たった一人の男が次々とお手玉のように回していく。俺はそのリズムに合わせて三線を弾く。
コミカルに，リズムに乗って奏でる三線は，アイリッシュ音楽を思い出して。

「球，増やすぞ！」

声と同時に無造作に球が投げ加えられる。さらにスピードを上げて，三線をかき鳴らす。
弓を必死で動かし弦を押さえる指を忙しなく動かしながら気づく。
彼らはサーカス団でもあったんだ。
虐げられた共生者を助け出すには，それなりの財力と情報源が必要だ。
おそらく，イルタサ達は貿易を通じて財布と耳を肥やしていたのだろう。
そして，この浜で合流した一団はサーカスのような旅芸人をする事で各地から情報を集めていたようだ。
納得。

「シメろー！」

一際高く球が宙へ舞い上がる。籠を持った女性が走りこみ，お手玉をしていた男の肩に飛び乗り籠を宙へ捧げ上げる。
そのタイミングを見ながら繰り返す旋律をさらに早める。強く，さらに強く弦を震わしていく。叩きつけるように弓を引く。
球は吸い込まれるように男の肩の上で宙にせり出した女性の籠へ落ちていく。
三つ，四つ五つ……最後の一球。同時に弓を解き放ち，余韻で震える弦を素早く指先で押さえ消す。
一瞬の静寂。そして安堵の声が砂浜に広がる。

「いいんじゃねぇか」
「でもこれじゃあ，次の演目に行く時はどうすればいいんだ？」
「演目の順を逆にしたらどう？」

感想を言いながら集まる彼らを見ながら，俺は汗をかいた手の平を着物の裾で拭う。
久々に楽器を人前で弾いた上に，即興だったから酷く緊張した。馴染みのある曲でも，人の動作に合わせるのは初めてだから勝手が判らない。
そんな俺に気づいたのか，軽業師の彼らが笑いかける。

「どうだ？　出来そうか？」
「俺の出来る音楽は少ないですけど，こんなのでいいですか」
「上出来さ。何だか聞いた事のない異国情緒があっていいじゃねぇか」
「イルタサ様，どうだね。ハルキさん，俺達の団に入れていいだろ」
「そいつは団長が決める。まぁ，当面はハルキを楽師でやってみようか」

ずっと後方で見ていたのだろう。イルタサが砂を払いながら軽業師達へ頷きかけた。
なるほど。サンギが「団長」という呼称を使いたがっていたのは，この事なんだと納得する。
イルタサは財力重視の貿易商グループを率い，サンギは情報重視のサーカス団を率いていた，という事か。
他の軽業師たちも加わり演目の順を決める中で俺は三線をおろす。
もうすぐ昼飯の時間だ。とりあえず三線の出番はないだろうし，調理場の手伝いをしようかな。

「あぁ，ハルキさん。どこ行くんだい」
「昼飯の手伝いをしようかなぁと」
「演目決めるから，あんた曲を決めておくれよ」

ちょっと待て。俺，本当にサーカスの専属楽師になるのかよ。
冗談だろと，イルタサを見ると笑って首を振る。

「料理も上手いが，演奏も上手いからな。これから重宝しそうだ」
「俺は料理してた方が気が楽なんですけど」
「それより採掘場の件はどうだ。考えてくれたのか」
「何で知ってるんですか」
「どうだ。手伝ってくれないか」
「考え中ですよ」

まだ決めかねている事を言われてしまい，苦笑いをして誤魔化す。
まいったな。
でも仲間として受け入れられた気がする。一度おろした三線を持ち上げ，砂を払い立ち上がる。
さて，何の曲をだそうか。テンポよく，何度も繰り返して時間の調節が出来そうなもの。

頭の中のストックを引っ張り出し，ふと宙に視線をとばす。
風が，止まった。風と漂う水の精霊が止まる。木々がざわめき，大地から小人の姿をした精霊達が顔をだした。
そして俺の首筋がゆっくりと逆立っていく。緊張の電流が駆け上っていく。

「おい，これって」
「……」

軽業師達が一斉に黙り，辺りをうかがう。共生能力を少なからず持っているようだ。
見えない電波を探るように，感覚のアンテナを張り巡らす。
どこだ。何が起こってる？　何が起こる？　耳をすませろ。肌で感じろ。
空気中の緊張が一気に高まる。

「イルタサ！　ミンツゥはどこだ！」

森の方から悲鳴が聞こえる。音なき悲鳴。空気をつんざくような哀しみの波。
波が押し寄せる方向に向けて走り出す。
聴こえる。感じる。ミンツゥが泣いている。
精霊を動揺させているのはミンツゥだ。泣き叫び，辺り一帯の精霊を動揺させてかき乱していく。その感情に同調した精霊達が緊張していく。

「ミンツゥ！」

強い日差しを遮る森の中に飛び込む。
たしか子ども達は果物や枝を取りに森に行ったはずだ。子ども達

に何かあったのか。まさか後李の襲撃とか。

「ハルキ！　これは何なんだ！」

「判らない！　けどミンツゥが泣いてるんだ！」

精霊をも巻き込む激情。何が起きてるか俺も知りたい。

俺が指差す方向へイルタサが俺を追い抜かして駆ける。地面を張り巡る木の根につまずきながら，俺も必死に走る。胸が，喉が痛む。

急激な運動に喘ぎながら，坂道を上る。

知っている。

この道を走ったことがある。乱れた呼吸と霞の中から出てくる記憶の欠片。

この先にあるのは，そう，祭壇。

「ミンツゥ！」

立ち尽くすイルタサ。その黒い背中の向こうに，ぽっかりと開いた空間。

森の巨木が枝を伸ばし，中央に開いた空間から零れ落ちる陽の光。スポットライトのような光の中，ミンツゥが立ち尽くしていた。

青い瞳から止めどなく涙を零し，虚空を見つめていた。

そこはまさに，精霊が荒れ狂う台風の目のようになっている。様々な精霊がかき集められていた。

ミンツゥから迸る感情が，光も闇も引き寄せている。

ここは祭壇だった。ハルンツの頃，ここで何度も祭りをして祭文を唄った。

何故なら，ここは気脈の穴だから。

この星と通じる場所だから。

「こ，こりゃあ……」

「暴走，です……精霊達がパニックになってる……」

音を立てて唾を飲み込むイルタサの横にようやくたどり着き，息を整える。

酸素を求めて喘ぎ，辺りを見渡し気づく。

ミンツゥの横に，全身の毛を逆立ててシンハがいた。

６５　泣き声が聞こえる（後書き）

次回　二週間後の１１月１６日　水曜日に更新予定です。
定期更新までもう少し…もう少しお待ちください（汗）

66　渦の底から

陽の光の中で涙を流して立ち尽くすミンツゥ。底なしの気脈から飛び出してくる精霊達も，その青い瞳には映っていない。

「一体何があった！」

イルタサの一喝に，子ども達が身を震わして蹲る。腰が抜けたと表現したほうが当てはまるかもしれない。

シンハは全身の毛を逆立てたまま遠吠えを繰り替えす。

空へ響く遠吠えが，荒れ狂うようミンツゥの周りを疾風する精霊達を空へと導く。まるで竜巻が出来上がっていくようだ。

「何があったんだ！　後李の襲来ではないのだな?!」

「み，ミンツゥがいきなり，いきなり泣いて」

「泣いたら急に風が吹いてっ」

「精霊が怒って急に……」

「いきなり泣く訳ないだろう！」

子ども達の説明に嫌な予感がする。

雷を撒き散らしながら飛び回る竜巻に，精霊が深い哀しみや怒りに翻弄されているのを感じる。その感情の根源はミンツゥだ。

気脈の穴の付近で，こんな激情に身を任せたからだ。ミンツゥの激情に精霊が引きずられ，暴走し気脈を通して他の場所からも精霊を引き込んでしまっている。

「ミンツゥ！」

荒れ狂う暴風の中を進み歩き，手を竜巻の中に入れる。ミンツゥ

に早く触れたい。抱きしめたい。
猛烈な風となって俺をはじき出そうとする。力任せじゃ，駄目だ。
ミンツゥの感情に流されている精霊達の勢いに抗えない。
落ち着けなくては。そう，吾を失った精霊達を落ち着かせなければ。

「　八百万の神々の　住まう天地　深淵の果て　全てに響かせ轟かそう　」

全てを零に。粒子も，力も，感情も零に戻せ。

「　天地合わさる果てにまで　全てを包む風にのせ　汝の僕関口晴貴は唄いましょう　」

押し出そうとした精霊達が，ゆっくりと振り返る。俺を見る。そうして，優しく包み込む。
気脈から溢れた精霊が，宙を漂い溶けていく。自分のいた場所へ帰っていく。
精霊の変化に唄を唄った事はマチガイではなかったと安心して，ミンツゥの腕をそっと掴む。
途端に激情が俺の中を焼き焦がした。哀しさ，怒り，苛立ち，虚しさ，恨めしさ，喘ぎ苦しい黒々とした絶望の渦。
稲妻のような激しい感情が電流のように俺の神経を焼け焦がしていく。
生きる事を否定するような，真っ黒な感情。それがミンツゥの中を支配している。
これは全て，ミンツゥに叩きつけられた感情。力に憧れ，権威を欲しがる人々の欲望。純粋な気持ち。
ミンツゥ，君はそんな感情を真っ直ぐに受けとめてしまったのか。

「ハルルン……」

足元にシンハのフサフサとした毛を感じ，深く息を吐き出す。
気を抜くと飲み込まれそうだ。
ミンツゥの激情に，自分の奥深くに巣くう暗闇の感情に飲み込まれそうだ。
かつて苦しんだ感情を思い出し，ゆっくりと呼吸を整える。
大丈夫。俺はもう大丈夫。異能を持った劣等感も，殺したいほどの恨みも，哀しみも，全て受け入れて認めている。だから，自分を信じてミンツゥに手を差し伸べられるはず。
ゆっくり，ミンツゥの肩を引き寄せる。
風の精霊が再び吹き荒れる。その勢いに抗い，抱きしめる。
細い背中を，強く強く抱きしめる。
虚ろに宙を見上げる青い瞳を覗き込む。
さぁ，その感情の底を見せて。俺はここにいる。

「ミンツゥ。大丈夫だから」

僅かに揺れた瞳の奥から，様々な子どもの声が吐き出される。
「ダショーだからって」「一緒にいると怒られるんだよ」「エラそーにしてんな」「大人から叱られないんでしょ？」「いいだろ。いつも特別なんだからこれくらい」「『ダショーの娘』だからっていい気になってんなよ」
吐き気がする。
純粋な悪意が吐き出されていく。ミンツゥの体に巣くっていた毒々しい感情が流れ込んで，眩暈がする。
こんなにも恨み辛みを当てられたら，苦しかっただろうに。

「　天道そびえる十二の宮　巡り巡り六十支　永久の契約の下

吾は叫ぼう」

人に妬まれ，恐れられる。これがダショーの宿命なのか。
それを，こんな幼い女の子が背負わなければいけないのか。
共生者の多いニライカナイの集団でも，こんな恐れや欲望が生まれるのか。

「汝の威光を栄光を　エンリル　その御力は世界を回す」

この世に，こんな力は要らない。そう出来たらどんなにいいだろう。
そう出来ない。でも，地球のように力がない世界ならばミンツゥは別の人生を歩めたのかも。

「その慈悲の下　吾等は従いましょう」

どうか吾等に。異能を持つ吾等に。
異能を持って生きていく俺達に，共生者に一時の休息を。生き抜いていく為の力を，安息を。
現状を憂うのは，一時。俺はこの世界で生きていかなければ。ミンツゥも，生きていかねば。
財力と権力を，共生能力を，よりよい生活を，『恵まれた』環境を妬む感情は，異世界でも共通で。
そんな自分自身，「当たり前の幸せ」を求めている。愛しい人と穏やかに過ごし家族で暮らす人生を求めている。
そう，自分にないモノを求める人の浅ましさは共通で。
俺だって，妬んでいた。
『普通』を求めていた。共生能力を持っている事を疎ましく思っていた。全てを疎んじ，天に向かって罵倒の言葉を叫んだ時もあった。

でも，妬んで人を引きずり下ろしてはいけない。自分を卑下して堕ちてもいけない。自分に与えられた役目を果たすために自分の足元を見つめなければ。
何度も蜘蛛の糸で絡め囚われても，絶望に突き落とされても，上を見て歩んでいかなければ。
ミンツゥ，一緒に歩もう。俺の手を掴め。自らの意思で生きると決めろ。
ないモノを強請る者達の中で，自分の幸せを探していこう。
幸せは，希望は，きっと光のように溢れている。きっと自分達から溢れてくるよ。

「ミンツゥ！　一緒にいこう！」

生きろ！
強く，強く這い上がれ！　ここまで来い！
抱きしめて，そっと額に口付ける。
俺がいる。
大丈夫。
愛おしい，もう一人の自分。

「……ハルキ……」

青い瞳が揺れた。
潤んでいく瞳に輝いていく青。涙を零す瞳に微笑みかける。

「一人で，辛かったね」

同じ青を持つ魂。
もう大丈夫だから。
抱きしめた腕をそっと解く。

頬を流れた涙を手の平で拭い，拍手を打つ。
万物を震わす音を放つ。
哀しみも喜びも，苦しみも歓喜も，全ては零（ゼロ）に。

「　これをもって　全ての終わり　全ての始まりとする。この拍手は拍手でなく　神の御息吹なり　鼓動なり　」

気脈から飛び出した精霊が光り輝いていく。
光の粒子が漂い降りかかり，祝砲のようにシンハの遠吠えが響き渡る。
止めどなく涙を流すミンツゥを隠すように，抱きしめる。
自分の腰までの背丈の頭を，何度も何度も撫でて抱きしめる。
頑張ったね。頑張ったね。
そう，伝えたくて。
穏やかな陽射しの中で，そっと抱きしめた。

ここに来て，夜空を見上げる事が多くなったと思う。
目の錯覚かと思うほど沢山の星が瞬くその光景に，見飽きる事はまったくない。
遮るものがない空を横断する天の川。その周りに煌く星の場所は地球で習ったものとは違うけど，それはそれで美しい。
夏の大三角形が五角形でも，地平線近くの蠍の心臓がシリウスのように青白い星でも，美しい夜空に変りはない。
ミンツゥの寝息を聞きながら，砂浜に張られた天幕から頭を出して見上げていた。
目元を赤く腫らしたミンツゥは，小さく胸を上下に動かして眠っている。

心配げに添い寝するシンハの背をあやすように軽く叩いてやると，尻尾を振って返してくる。

「なぁ，ミンツゥ，いつ起きるかな」

「腹が減ったら起きるさ。大丈夫」

「もう夜だけど」

シンハが心配そうにミンツゥの手を舐めて俯く。

あれから，気を失うように倒れたミンツゥを抱えて森を出れば砂浜を大騒ぎだった。

共生能力を多かれ少なかれ持っている集団だ。ミンツゥの身に何があったのか感覚で察していた。

男達は寝起きしている天幕から，一つを離れに組み立て直してミンツゥ用にあてがってくれた。

女達は水や布団を素早く用意してくれた。

ただ，恐る恐る俺とミンツゥを遠巻きにして見ている。

その様子で，続いて森から子ども達が酷くおびえて帰りたがらなかった訳がようやく判る。

彼らは，力ある者の反逆を恐れていたのだ。報復を，罰を恐れていた。

ダショーと呼ばれるミンツゥを傷つけた，罪を問われる事を。

「オイラ，なんも出来なかったよ」

「シンハが横に居てくれたから，ミンツゥは精霊で自分を傷つける事はなかったぞ」

「でも，さ。あいつらに言われ放題で……」

「多分，ミンツゥが手出し無用だって言ったんだろ」

「そりゃそうだけど」

「しょうがないよ。通らなければいけない道だったんだ」

俺の言葉を，シンハは鼻で吹き飛ばした。
「馬鹿馬鹿しい！」と。
その通りかもしれない。

６６　渦の底から（後書き）

次回は２週間後の　１１月３０日　水曜日　に更新予定です。
……やり残した事山積みなのに今年が終わってしまう……！

67　ミンツゥの想い

「ミンツゥはまだ小さいぞ。手も足も，こんなに小さいんだぞ！　水だってちょっとしか汲めないし，鳥を射取る事も出来ないんだぞ！」

「そうだな」

「通らなくてもいい道だった！　求めればオイラが八つ裂きにするのに！　何でわざわざ苦労をかうんだよっ」

「それが人間なんだよ」

「バッカバカしい！」

鼻息荒くシンハは荒ぶる心を吐き出すと，前足の上に顎を乗せて苛立つままに尻尾を床に叩きつける。

なんだか替わりに怒ってくれたようで，口元で笑ってしまった。

そんな俺を見て，ますます腹が立つようだけど。

「……お空に，大きな鳥が飛んでたよ……」

掠れた，小さな声。

シンハと俺が飛び起きると，ミンツゥの青い瞳がゆっくりと開いていく。

乾燥してひび割れた唇から，囁くように言葉が零れていく。

「鳥が飛んでお空に雲が一筋出来るの……石とガラスの塔が，いくつも，いくつもお空にそびえてるの」

「ミンツゥ」

「ハルキがいた世界って，すごく変ね」

首を動かすのも億劫な仕草で，ミンツゥが俺に微笑みかけた。

あぁ，そうか。
精霊の竜巻の中で腕を掴んでミンツゥの記憶や感情が流れ込んできたように，俺の記憶が感情がミンツゥに流れてしまったんだろう。
苦笑いで，ミンツゥの額に手の平を乗せる。

「ゴメンな。変なもの見せちゃったね」
「ううん……嬉しい。ハルキのいた世界が見れて面白い」
「面白いか」
「うん。すごく変。でも，お日様やお月様は一緒だね。藍色の空も，紅色の夕日も」
「そこは，忘れていいよ」
「……ハルキ」

いつだったか。
高校三年の秋の光景。
自分を殺したくて，道ずれにオバサンも殺したくて，炎に飲まれそうになったあの夕日の事。天に向かって罵りの言葉を吐いた，あの時の事。

「汚いところを見せたね……」
「ハルキも，一緒なんだって思えるもん。だからいいの」
「いい，か。ミンツゥは強いな」
「いーや！　馬鹿だ！　人間ってのは大馬鹿だ！」

シンハの尻尾がパチンパチンと床を叩く。
大きな肉球で何度も頭を叩く。その人間臭い仕草を見て，ミンツゥの顔を合わせて吹き出した。
ミンツゥは咳き込み，慌ててシンハは背中をさすり，俺は水差しから水をコップに注ぎこぼして。
天幕の下はちょっとした騒ぎ。その物音を聞いたのだろう。サン

ギの声が外からかけられる。

「具合はどうだい。どこか身体が痛むとか，あるかい」

大きな身体を折るように，三角に釣られた天幕の下にサンギが入ってくる。

俺が場所を空けようとすると，それを手を上げて押しとどめる。

敷き布の手前で座り，額を砂につけるように深く頭を下げる。

いきなりの土下座に，俺は固まってしまった。土下座なんて，初めて見たぞ。

「ミンツゥを助けてくれた礼を，まずさせておくれ。本当に，本当にありがとう……」

「いや，その，取り合えず頭を上げてくれ」

「ミンツゥの叔母として，命の恩人にまずは感謝と謝罪を」

「叔母さん？！」

思わずシンハと俺が素っ頓狂な声を上げてしまう。

そして，お互いの目を合わせて無言の会話。

細く華奢なミンツゥと，女性らしからぬ巨体の持ち主サンギが同じ血を持っている事に驚いて。そして将来，ミンツゥがサンギ並みに逞しくなる可能性を感じて。

複雑な思いで互いの目を見合わせて咳をする。態勢を整える。

唐突に想像以上の事を聞いたからといって，ココまで挙動不審になっては失礼だ。うん。

「いや，驚いて構わないよ。この子は私の妹の忘れ形見なのさ」

「あ，あぁ。その，すまない」

「似てないと思われてるのは，慣れているよ」

サンギが苦笑いして，自分の頬に手を添える。思いのほか女性らしい仕草にドキリとする。

「妹は私と違って器量よしでね。それに，とても綺麗な唄い手だった。唄うと精霊が舞い集まってねぇ……まるで天女様のようだったよ」

「私も，お母さんみたいに唄えるかな」

「唄えるさ。その前に水を飲みな。そんなガラガラ声じゃあ，笑われちまうよ」

サンギの言葉に，素直に頷いて手を伸ばす。

天幕の外に誰か控えているのだろう。水を満たした器が差し出される。

サンギは無言で受け取った器をミンツゥに手渡し，飲み始るのを確認してから俺に向き合う。

「それで，子ども達をどうするんだい」

「何もしてないですか？」

「あぁ。何もするな，手を出すなって言う約束だからね。ミンツゥを守ってあの精霊達を戻したハルキならあの子らをどうしようが親達は文句はあるまい……」

「まるで取って喰うみたいな言い方ですけど」

「……違うのかい」

人を何だと思っているんだ。

まるで死刑執行人のように言われて，肩を落としてしまう。

あの後，森を出てきた子ども達を取り囲んだ大人達に，ミンツゥが目覚めるまで手を出さないでくれと頼んだのだ。

放っておくと，あの子ども達は罪人として扱われそうな雰囲気に慌てて頼んで正解だったな。

ゆっくりと水を飲み息を吐き出したミンツゥに微笑みかける。

「仲直り，しようか」

「ハルキ……」

「ミンツゥ，辛いと思うけどみんなと仲直り，出来るかい？」

「何言ってるんだい！　あの子らは，あの子らはダショー……いや，ミンツゥが手を出さない事を知って散々な屈辱を言い貶めていたのに！」

「ミンツゥを辱めた。散々に言葉で心を刺し続けた。判ってるよ，サンギ」

不安そうなミンツゥの手から，器を受け取って頷く。

「腹が立つと思う。でも，やり返しても前に進めないだろ」

「何でだよっ。ミンツゥが優しいからって，力を持ってもやり返さないの判ってて散々虐めてきたんだぞ！」

「そうだな。ズルイよな。確かに，ミンツゥはあの子達に罰を与えられるよ。けど，その後は？　このニライカナイの仲間は，恐怖で縛られて一緒にいるのか？　俺の知るニライカナイの仲間は，信頼で繋がっていたよ」

力を憎んで。ただ安住の地と時代を望んでいた。

ささやかな幸せを望んでひっそりと生きていたじゃないか。

俺の知る，彼らの姿だ。

尻尾を床に叩きつけて牙を見せるシンハを見つめる。

「未来をどうしたいか考えるんだ。感情のまま突き進むのが正解ではないんだよ。腹は立つけどね」

「感情のままではなくて？　未来を考えるの？」

ミンツゥに頷き，微笑む。

「ミンツゥは，どんな仲間でいたい？　どんな自分になりたい？」

「どんな自分かって……強くなりたい。もっと強くなりたいよ」

「それは，力だけではないよね」

まだ血の気のない唇を固く噛み締め，ミンツゥは頷いた。

「強くなりたいよ。共生能力だけじゃないよ。だから，許すんだね？」

「ミンツゥ……あんた，いいのかい」

「うん。みんな，そこにいるの？」

ミンツゥの言葉に，天幕の向こうから小さな影が幾つも出てくる。憔悴しきった顔に，生気はない。小さく震えながら天幕に恐る恐る入ってくる。

押し合いながら，さらにミンツゥから遠ざかろうとする子どもらの僅かな動きが気に入らないのだろう。シンハが「ガゥ！」と一唸りすると悲鳴を上げて凍りついた。

ライオンの前に引き出されたかのような図。いや，そのものだ。

「自分達がやった事，理解出来たよね」

「ひゅ！」

妙な音を立てて息を吸い込み，子ども達が身を寄せ合う。

「判るなら，まず何を言うべきか考えて」

こんなに恐れていては，周りの大人が何を言っても聴こえないかもしれない。

溜息をついて，ミンツゥを見る。思いのほか，背筋を伸ばして子ども達を見ていた。

幼いながら，その威厳に微笑む。

ここはミンツゥに任せたほうがいいかも知れない。

「自分の犯した過ちと向かい合うのは，すごく辛いけど目を背けちゃ駄目だよ。何をしたか気づいて。これからどうすべきか，どう償うべきか考えて教えて。君達はニライカナイの仲間なんだろう？互いを尊重して信頼していく仲間なんだろう？」

この子達に課した事は，罪を罰によって償うより難しい事だ。

でも仲間として共に歩いていくのなら，乗り越えなくてはいけない。感情を理性で抑える。傷つけた，傷つけられた事実を受け入れる。醜く残る傷口を隠す事なく強さに変えていく。

それを成し遂げていく事が，この子達の大きな力になるはずだから。

「ほら，シンハ。邪魔したら駄目だからいくぞ」

「がぁあ！　こいつらの中にミンツゥ置いてくのかっ。そんなん野獣の中に雛を置いてくようなもんだぞ！」

野獣のように牙を見せて唸るシンハに，子ども達がますます萎縮して固まる。

あぁ，もう。

「ネクタイ，するか？」

「っ！」

耳元の囁きは三蔵法師の経文が如し。
逆立った毛も振り回す尻尾も垂れ下がり，歯軋りしながら天幕を出て行く。
サンギも心配そうにミンツゥを何度も振り返りながら出て行く。
心配は，わかる。ここは分岐点。子ども達がどんな未来を行くかの，分岐点。
心配を奥に隠して，俺も天幕から出るべく腰を上げる。

「ハルキ！　あの，貸して欲しいの」

唐突な申し出に，腫れたミンツゥの目元を見ると早くも涙が零れている。
その視線の先に腰に下げた俺の手ぬぐいに気づく。

「え，あ，使い古しだけど，使うの？　きれいじゃないよ」
「だって，困るから，その」

昼間，汗を散々に拭いた手ぬぐいだ。臭いと申し訳ないけど。こんなんでいいのか。サンギの方がきれいな手ぬぐい持ってるだろう。
そう思いつつ一日の疲れを体現している手ぬぐいを差し出すと，ミンツゥは嬉しそうに受け取る。

「ありがとう」
「う，うん。何かあったら外にいるから。みんなでちゃんと話すんだよ」
「あたし，出来るから」
「うん」

よれよれの手ぬぐいを胸の前で握り締めたミンツゥが，大人びて見える。何故だろう。

６７　ミンツゥの想い（後書き）

次回　１２月１４日　水曜日に更新予定です。

68　本当は臆病で弱虫で

生ぬるい風が海からやってくる。慣れた潮の香りを胸いっぱいに吸い込んで吐き出す。

疲れ，心配，恐れ。吐き出したかった。安心が欲しい。安易に手に入れられるものではないけど。

「サンギ様，子ども達は……」

「あぁ，取り合えずは大丈夫だ。処分はない。今は子ども達で話をしているよ。自分のやってしまった事を悔いて過ちを繰り返さないようにする為にね。……まったく」

星明りに照らされた浜辺に，幾つもの人影が動いている。あの子ども達の親だろうか。

天幕から出てきたサンギを取り囲むように動いた人影がぴたりと止まり，視線を感じる。

「ただね，あの子達は重い試練を与えられたよ。そういうことだね，ハルキ」

「そうですね。でも，きっとあの子達なら乗り越えられますよ。いや……絶対に乗り越えられるように手助けをしてあげて欲しい」

俺のように，自分を否定する事がないように。自分を見失って一人彷徨う事がないように。

「本当の仲間として成長出来るように，見守って欲しい。ミンツゥは確かに青い瞳で大きな力を持っているけど。だからと言って自分の力も地位も過信しないように。子ども達は自分達を卑下しないように。互いに尊重して認めるように」

「そんな事……だって，ミンツゥ様は『ダショー』でしょう？」
「そうだ。尊い魂だ」
「その方にどうこうなど……」

こういう考えなのか。
大人からして，この世界はこういう考えなのか。
頭を殴られたような感覚だ。

「ダショーへの尊敬や敬意を払うのをやめろと言っている訳ではない。信頼さ」

サンギの言葉に頷いて，ミンツゥ達がいる天幕を振り返る。
ひょっとして，俺はこの世界に妙な価値観を持ち込んでしまったんだろうか。
理解されない，信じるものを壊す考え方を押し付けてしまったんだろうか。
それを含めて。俺も頑張らなければ。
ミンツゥにばかり負担はかけられない。
風が沖へと吹き出した。天気は下り坂。

水平線の向こうにそびえる入道雲の下は灰色の嵐の世界。雲の内部を青白い稲妻が何度も切り裂いていくのを見ながらコメカミが鈍く傷むのに気づく。どうやら，奥歯を噛み締めていたらしい。
潮風が僅かに生暖かく，背後から勢いをつけて吹き付ける。
彼方に見える入道雲に向けて疾走する風が心地よい。

嵐になるよ　雨が降るよ　風が荒れるよ　全てを混ぜるよ　掃き清めるよ　ほら　ほら　いそげ　あつまれ　かけあがれ

そんな精霊達の唄うような声が聞こえる。
人間が何をしようと，精霊や自然は法則に沿って動いている。
汚れたら清める。乱れたら整える。全ては美しい法則に沿って粛々と進められる。
逆らうのは，人間だけだ。

「ハルルン。いいのか」

足元のシンハの言葉に溜息で答える。
いいか悪いかなんて，判らない。
だから悩んでいるんだ。答えは，もう出してしまったけど。

「採掘場を見つける件，本当に手助けするのか」
「サンギに返事するよ。ずっと待たせてるし」
「あいつらに力を貸すのか？」

船べりから彼方の入道雲を見つめて頷く。
後李が極秘に管理している虹球採掘場を，見つける。そして強制労働させられている共生者達を助け出す。
ニライカナイの仲間達だけでは成功するか判らない勝負に手を貸すことで，俺の立場も変るだろう。
力を前にした彼らが，俺を利用しようとするかもしれない。
深淵の神殿で息を潜めて探っているだろう，アイや神官達が動き出すかもしれない。
後李帝国が襲ってくるかもしれない。
そうしたら，俺はどうなるだろう。
ニライカナイの仲間達はどうなるだろう。
何より，何よりもミルはどうなる？
どうなるか判らない未来が怖い。このまま時が止まればいい。逃

げ出したい。今すぐに地球に帰りたい。
でも。

「やってみよう」

怖いのは，もう立ち向かう気持ちがあるから。判らない未来を見据えたから。
逃げるな。足を踏ん張れ。まずは一歩進むんだ。
そうすればきっと，次の一歩に繋がる。

「何とかなるさ」
「なるかぁ？」
「何とかする」

言葉で勢いをつけて歩き出す。階下の船室へ向かい，一歩進める。
深呼吸。腹の奥へ気を込めて。震える自分を慰めるように，ゆっくりと息を溜めて。
ミンツゥにこれ以上は負担をかけられない。ダショーは俺だ。何時までも偽れない。
逃げるな，自分。
昼なのに薄暗い船内へ降り，船長室のドアをノックした。
漏れ聴こえたざわめきが止まる。

「お入り」
「失礼します」

ドアを開けた瞬間に好奇と疑いの視線に串刺しにされて，もう一度深呼吸をしてから足を踏み入れる。
様々な感情が俺の動作に合わせて無遠慮に投げつけられる。
恐れや苛立ち。

昨日まで俺はただの料理人だった。それが突然，ミンツゥの暴走を収めて元の『大連かもしれない記憶喪失の不審人物』に戻ったわけだ。

やっぱり，俺は逃げていたのかも知れない。

ニライカナイの仲間の中でさえ異質な自分の立ち位置から，目を背けたかったのかもしれない。だから，おばちゃん達と料理をする事を無意識に選択しいたのかもしれない。

俺は，臆病者だ。

あまりに幼い自分の内面に苦笑いをして，直立不動の姿勢をとる。

船長室に集まった男達に向かい合うために。

「採掘場の件ですが」

「やってくれるのかい！　イルタサ，あの子を連れてきておくれ」

イルタサが部屋を出て，中央のテーブルの周りに座った男達がどよめき，サンギを凝視した。

料理人をしていた俺がこの場に入り，採掘場の件を言ったので驚いたのだろう。

それほどの重要な話だったんだ。改めて，身体が硬直する。

どうする。どうやる。何が出来る？

動悸が身体を震わす。

「俺が出来る範囲です。それと，条件があります」

「ちょっと待て！　サンギ様，どういう事ですか。なんで料理番のこの男が襲撃の事を知っているのですか。この件は素破の我々と隠遁が密かに進めていた事」

「黒雲様が直接ハルキを指名された。それに」

サンギはゆっくりと男達を睨んだ。

「私も何も出来ず，素破すら手を出せれなかった昨日の精霊の暴走は誰が収めたんだい？　この男がどれだけの力を持っているか，判らないのかい」
「それは，しかし」

まるで雷様のように癖のある顎鬚を蓄えた中年の男性が目尻を痙攣させて腕を組直す。
気に入らないと，全身からの意思表示。もちろん他の男達も，その逞しい身体に不平不満を押さえ込んでいる。

「皆の衆が納得いかないのは判る。だが，後李の軍が各地へ広がり手薄な今を逃す手はないだろう。第一採掘場は長く探している中でも最大級の規模だ。ここを叩く意味は大きい」
「ですから我ら素破がっ」
「聞き飽きた」
「サンギ様！」

緊迫してる。非常に俺は居心地が悪い。
素破と名乗る彼らの顔には見覚えがある。浜辺で何やら話し合っていた男達の顔がちらほら。兵士のような雰囲気に押され，遠めで眺めながら料理をしていた。
彼らは，最前線で戦っているのか。
そして，厳つい彼らに牙を向ける足元のシンハ。低く唸るその声が，頭痛を引き起こす。
よけいなケンカを売って欲しくないんだが。

「聴けば，後李の内陸で放浪楽師をしていたとか。楽師が何が出来る！」
「いかに力があろうと，正体不明な輩に任せるなど信じられぬ！」

それはそうだろう。男達の主張は納得できる。でも，それを覆させなくては。
彼らを納得させなければ。
彼らの力にならなければ。
頭の中を高速回転させ奥歯を噛み締めた瞬間。

「あたしは信じます！」

高く澄んだ声に，全員が振り返った。

「あたしは信じてます！　ハルキなら出来るって，信じてます！」

「……ミンツゥ」

青い瞳が男達を射すくめる。イルタサとシャムカン達を引き連れて堂々と自分の倍もある大人達の間を歩き，サンギの横に立った。
この場にいる大人達全てが，その凛とした立ち姿に見蕩れていた。
息を飲んだ。
おそらく，誰もがその美しさに。

「ハルキが手伝ってくれるなら，私も出来ます」

青い瞳が強い意思の力を漲らせて，屈強な男達を圧倒する。
まだ少女のミンツゥのどこに，これほどの力があったのだろう。
いつのまに，こんなに美しくなったのだろう。
か細い線の体から，優美なラインを描く首筋から，凛とした美しさが輝いている。

「私，出来ます！　採掘場を見つけ出して，精霊達も解放させま

す！」

「しかし……今まで数多の呪術師や共生者が挑んでも破れなかった場所だ。いくらミンツゥ様が『ダショー』だとしても」

「だから，俺が手伝う」

「お前がいくら力ある大連（おおむらじ）であろうとも無理だ。第一採掘場は東海の精霊達を一挙に拘束している場所だぞ。そこを破れるのは今や『ダショー様』のみだ。それでもお前は出来るというのか」

「我ら素破が総がかりでも無理だったものが出来るはずもない」

「本当にミンツゥ様が『ダショー』なのか確信できないのに」

一斉に投げられる野次に肩を怒らせたミンツゥが，一歩前へ進みかけるのを肩を押さえてとどめる。

怒りに潤む青い瞳に笑いかける。

足元で唸るシンハの横腹を軽く撫でてやる。

「では，ダショーなら出来るんだな」

逃げるな，自分。

あぁ，手が震えてる。脈打つたびに，指先が震える。

逃げるな，自分。

６８　本当は臆病で弱虫で（後書き）

次回　２８日水曜日に更新予定です

69　恋する女は無敵になるの

船室中の視線に串刺しにされた。
ダショーという単語を出しただけで，この注目度の高さ。
ここで俺自身がダショーと言ってもいいけど，信じてもらえるだろうか。いや，無理だな。
一瞬でそれは悟る。
「『ダショー』なら出来る，とはどういう事だ！」
「『ダショー』を，『ダショー』様を知っているのか?!」
「そういえば，先の天鼓の泉での戦場にいたとか……」
「それでは本当に『ダショー』様はいるのか。異界渡りをされた『ダショーの魂』が還っていると」
「しかしミンツゥ様は『ダショー』であろう？　ダショー・ハルンツの魂を持っていらっしゃるのだろう？」
「ミンツゥ様はやはり『ダショー』でないという事か？」
様々な憶測が小声で飛び交う。
ミンツゥが『ダショー』と信じていながら，迷っているのか。
このまま信じさせていいのか。いや，きちんと言ったほうがいいのか。
迷いながら言葉を続ける。
「『ダショー』は，『ダショー』はいるんだ」
俺の言葉に，船室の喧騒が静まり返る。
「お前，何を言っている。『ダショー』の御魂はミンツゥ様だ！」
「初代からの記憶を持つのはただ一人だ！　ミンツゥ様をおいて

いない！」
「何と失礼な！」

沈黙から飛び出した声に，男達が殺気立っていく。
体の芯が震えるのに気づき，深く深く息を吐く。
しっかりしろ自分。この重責を担うのはミンツゥでは重過ぎる。

「ミンツゥ様こそ，初代から続く血統と魂を持ち続ける唯一無二の存在だ！」
「異界渡りをして還ってきたんだ。信じてくれなくてもいい。ただ，俺が」
「ハルキ！　違う！」
「ミンツゥお待ち！」

ミンツゥが俺と男達の間に入り，それをサンギが留める。
限界まで張り詰めた船室の中で，ミンツゥは一歩前へ進んだ。
俺の胸ほどの背丈の子どもが，激高する大人へ向かい立ちはだかる。

「あたしが『ダショー』なのは変らない。でも，子どもの身では限界がある」

凛と，響き渡る声。
人の上にたち指示する威厳をもった声。
目の前の少女は，いつから強くなったんだろう。

「ハルキはクマリの姫宮様から，一つ秘法を授かった。きっとそれなら，あたしの手伝いを充分に出来るはずです」
「秘法，と？」
「秘法。だからあたしの手伝いが出来るはず。そうでしょう？」

振り返ったミンツゥの目が，俺に縋りついてくる。威厳が消え去り，頷いてくれと訴えかけてくる。
どうなっているんだ。
足元のシンハはわかるのだろう。尻尾を何度も上げ下ろししている。
ミンツゥは，こんなの嘘を何でつくんだ。『ダショー』が俺なのは知っているのに。
手伝いも秘法もなにも，あったもんじゃない。
俺が『ダショー』だ。だから，俺が表に立たなければいけないのに。
それなのに，目の前のミンツゥに圧倒されたまま動けない。

「クマリの姫宮様から，一つの秘法を授かった。それがあるから，昨日の暴走も収められた。ハルキはそう言いました」
「本当なのか?!　ならば，その秘法なる技を教えよ！　そうすれば我ら素破にも」
「秘法を教えたところで，貴方達があたしの助けにはならない」
「なんと！　それは我ら素破と隠遁への侮辱か！」
「あたしの手伝いはハルキしか出来ません！」

生唾を飲み込む。
ミンツゥが別人のようだ。
同い年の子どもに対しても，言い返せなかったのに。
そのミンツゥが，全身を奮い立たせて大男達相手に俺の前で言い合いをしていのが信じられない。

「お黙り！」

サンギの一喝で，船室の喧騒が静まる。

いい大人が肩を怒らせて言い合いをしていた事に気づいて，お互いに唇をかんで一歩下がるしかない。

「とにかく，その秘法とやらを使ってやってみようじゃないか。あんた達も自分達の力だけでは何度も失敗してる相手だ。助力はありがたいんじゃないかい。どうなんだいカムパ」

「サンギ様の仰るとおりだが……理屈じゃあ，そうなんだが。お前らはいいのか」

カムパと呼ばれた髭もじゃ雷様は，太い腕を組みながら強い視線をサンギの後に立ったシャムカンとモルカンに向けた。

厳つい男達が集まる中，シャムカンとモルカンは場違いなヒョロリと優男だ。人のよさそうな顔を綻ばせて，二人は同時に頷いて喋りだす。

「ハルキの力は助けたおれ達が一番知ってますよ」

「何の心配もしてません」

「だから」

「大丈夫」

俺に向かい，二人は同じ角度で口の端を持ち上げて笑顔を作った。

目が細くなる。

胸が，ぎゅっと痛くなる笑顔。

なんであんな清清しい笑いをするんだろう。

双子は何の為にこの会議に呼ばれたのだろう。カムパ達のような突撃隊じゃないはずだ。ミンツゥのような強い力を持っている訳ではない。

俺を後李で助けてくれた彼らは，地味な偵察中心だと思っていたのに。

サンギは船室の全員を見渡して頷いた。

「二人がいいなら作戦を進める事に反対はないね」
「全ては青き海と空の御心のままに」
船室の男達が一斉に同じ言葉を唱えて拳で胸を叩いた。
ミンツゥが俺に微笑む。
「風と水の導くままに」
また風向きが変った。空の上で風がうねっている。大きな力が蠢いている。
万華鏡のように変る雲の模様を感じながら，足元で打ち寄せてる波の感触に身を任す。
まるで全身がアンテナのような感覚。違う。
深く息を吐いて，目を閉じる。
そうじゃない。
空っぽの俺は増幅器。様々な波が入ってくる。それを一つ一つ大きくして判別する。
風の精霊，水の精霊，大地の精霊，沢山の自然からの気まぐれな喜びや悲しみや苛立ち。
圧倒的な量の波の狭間に，小さな揺らぎ。
見つけた。
「……」
「……またひとつ」
繋いだ小さな手が，一瞬強く握られる。

波打ち際で両手を繋いだミンツゥが，俺の中で掴んだ小さな揺らぎに気づいたのだろう。
互いに目を瞑ったままだから判るはずもないまま，俺も頷く。
この揺らぎは精霊じゃない。
不安と恐怖を感じた人の心の波。
まるで澱んで黒ずんだ一滴の水。さぁ，この水は何処から来た？
注意深く探れ。
これで何度目かの挑戦。絶対に外せない。
触るのをためらうほどの澱みに意識を伸ばす。
苦しむ『貴方』はどこにいるの？

「……っ！」

手の中の小さな手が弾かれる。勢いのまま体が倒れて，全身が何かに包まれる。
冷たさ。うねる力。全てが意識の感覚ではなく，現実の感覚と気づいて目が覚める。
体が海へ倒れたんだ！
苦しい！

「失敗したなぁ。何度目だよぉ」

海中から飛び起きた俺に，暢気なシンハの声。
腹立ち紛れで，砂泥を掴んで投げつける。
金色の体がヒラリ飛び跳ね，大あくびをした。

「諦めなよ。こんな大海原から人間の意思を辿るなんざ，狂気の沙汰だぜ」
「ごめんねハルキ。ミンツゥが気を乱したからだよね」
「いや，俺も乱れた……痛てて」

無意識な状態で倒れてしまい，鼻の奥に海水が入ってしまった。
脳髄を刺すような痛みに顔をしかめつつ，海の中から何とか立ち上がる。
全身のだるさ。でもそれ以上に無力感が襲い掛かる。

「もう，いいですよ。おれ達は覚悟出来てましたから」
「ここで体力を使うな。本番にとっておけ。採掘場を探るのはモルカンに任せろ」

いつからいたのだろう。
イルタサとシャムカンが立っていた。
泣きそうな笑顔を見せるシャムカンから，目を背ける。

「計画通りなら，潜入は始まった頃です。でも，モルカンは落ち着いているようだし。大丈夫ですよ」
「でも，でもシャム兄ぃ」
「ミンツゥ，大丈夫だよ。オレ達そんなに軟弱じゃない」

何時だって分割で喋る双子達。互いの感情は距離も時間も関係なくリアルタイムで繋がっている。
だからこその作戦。
双子の片割れを採掘場へ労働者と偽り潜入させる。
モルカンからの合図を，シャムカンは受け取る。秘密の採掘場を探るために。
あの合図は俺にはわからない。わかりたくもない。それはきっと，強烈な，魂の叫びなのだから。
受けるも地獄。送るも地獄。
いつも一緒だった双子が受けるだろう，想像を絶する苦痛を見たくない。

「あと，少しなんだ。もう少しで掴めそうなんだ。だから」
「船出だ。あきらめろ」

イルタサの宣告に，うな垂れる。
こんな残酷な作戦しかないのか。
俺がもっと力があれば，変ったのか。
何であの時ダショーと，名乗れなかったのか。黙ってしまったのか。
沖の母船へと，男達が小船に分乗して漕ぎ出す声が聞こえる。女達が見送る声が聞こえる。
もう，立ち止まれない。戻れない。
俺はどこまでも臆病者だ。

６９　恋する女は無敵になるの（後書き）

次回は年明けです。
２０１２年　１月１１日　水曜日に更新予定です。

『見下ろす』を呼んで頂き，ありがとうございました。
今年は特にノロノロで，申し訳ないです。
来年はもう少し，質も速度も向上出来るよう頑張っていきます。

では，よいお年を。
来年は，穏やかな年になりますよう。

70　知っているんだ

「シャムカンはねぇ，蒸かし芋にお塩かけたの好きなの。モルカンはね，揚げたお芋が好きなんだ」
「ふんふん」
「あとねぇ，二人とも卵は半熟よりトロトロのが好きなの。変だよねぇ。何か生卵みたいであたしは苦手」
「俺も半熟トロトロが好きだよ」

途端にミンツゥは黙ってしまう。
込み上げる笑いを堪えつつ，手早く蒸かした芋に塩を軽く振りかけて鍋から卵を一つだけ取り出す。
竈の炭を取り出し，念入りに火桶の中へ仕舞う。火気厳禁の船内だから，特に気を使いながら火元の確認。
ミンツゥは傍らで俺が作ったオカズを，大きな木の葉で手早く包んでくれる。

「少し食べれるといいけどな」
「ハルキのご飯おいしいから，きっと食べてくれるよ。あ，卵はどうすればいい？」
「このまま鍋に入れておこう。しっかり火を通した湯で卵になるから」
「よかった」

正直な言葉に，卵賭けご飯は彼らに出せれないなと苦笑い。
手早く配膳の準備を始めると，男達が食堂にちらほらとやって来る。筋肉隆々な彼らが，それなりの広さだった食堂を狭くしていく。
天井に頭を擦り付けそうにして，若い男がミンツゥを見ると小走りにやって来る。

「お嬢，おれらがやりますから」

身をかがめるように少女のミンツゥに伺い，彼らは手早く配膳しだす。

蒸かし芋に焼いた野菜を入れた小鉢を任された彼らが，不思議そうに俺とミンツゥを見比べている。

ミンツゥが配膳を手伝うのが不思議なのか。俺が飯を作っているのが不思議なのか。

浜では炊飯は女の仕事のようだったから，よほどに珍しいのかもしれない。

「サンギ様は？」

「船室で海図を睨んでます。あとで顔出して下さい」

ミンツゥが顔をしかめて乱暴に丼を持ち上げる仕草に，男達が肩を竦める。

シンハは面白そうに足元で尻尾を振り出す。ミンツゥの仕草一つで大人達が右往左往するのが面白いらしい。

あいかわらず趣味が悪い。いっそ，前足を踏みつけてやりたい。

片足を上げたところで，ドアが勢いよく開きカムパが身を屈めて入ってきた。肩を鳴らしながら「やっぱりここにいましたか」とミンツゥの方を見て笑う。

「ミンツゥ様は炊事場にこもりっきりですな。これは若い衆の仕事だ」

「だって，貴方達に食事任せたら美味しいの出てこないもの」

「まぁ，それは認めますがね。お，香魚を炊き込みご飯にしたのか。芋も上手そうだ」

カムパが入ってくるなりミンツゥの目の前にあった蒸かし芋を摘んで食べてしまう。

「それはシャムカンのご飯！　食べちゃ駄目ですっ」

「そりゃ失敬。しかし……今日で3日目か」

俺は黙って丼に炊き込みご飯を盛り付ける。香魚の白い身が茶色く炊き込まれたご飯に映え，香ばしくも穀物の甘い香りが漂う湯気が立ち上がる。

機械的に丼に大盛り。大盛り。大盛り。次々とよそい，男達は入れ替わり立ち代り受け取っていく。

ミンツゥは蜜柑を入れた籠を持ち，男達へ一つ一つ渡していく。

指先についた塩を舐めながら，カムパがニヤリと笑う。

「しかしまぁ，本当だったな」

「何がです」

「お前の飯が上手いって噂だ。お陰でいつもの航海よりいいモン食える」

「そりゃどうも」

「浜にいた時は女連中の中で男が混じって飯作ってるって気味が悪かったけどな。記憶と一緒にタマもなくしたんかってな」

股を軽く叩くカムパを見て，丼を前に突き出す。

「おかわり，なしですよ」

「冗談だよ」

「もちろん冗談です」

どこにも嫌な奴はいるが，異世界にもいるのかよ。髭親父っ。

まったく，男が料理してもいいだろ。

苛々したままお釜に蓋をして蜜柑を放り投げる。
片手に丼を持ったまま，カムパは腹正しいほどの余裕の動きで蜜柑を受け取った。
腹が立つ。まったく。

「夕刻までにはティム島付近に着いて禄山殿と合流する」
「禄山が来るのか？」
「まずは本番前に採掘場周辺を探る。本番にミンツゥ様をしっかり補助しろよ」
「判ってる」
「ほれ。早くシャムカンに飯，持っていってやれ」
「……あぁ」

濡れた手を拭いて葉に包まれた弁当を持つと，足元で寝そべっていたシンハが寄り添うように歩き出す。

「ハルキ」
「ミンツゥは先に食べてて。もうすぐ卵に熱が通るだろ？　あとサンギとイルタサにもご飯を包んで持っていってくれ」
「うん。でも」
「大丈夫」

まだ何か言い足りなさそなミンツゥに微笑みかけて，扉を締める。
俺は心配をかけてばかりだ。負担をかけてばかりだ。
ダショーだという事を隠したまま，何をやっているんだろう。小さなミンツゥに庇われたまま，何をやっているんだろう。何が出来るんだろう。
狭く薄暗い廊下を通り，甲板へ出る。
潮風を受けてはためく帆の音と，波の音。帆を張る綱がきしむ音。
船体に当り砕ける波の音。そして海原を切り進む波の音。

交代で食事に来ているからだろう。帆と舵を取る船頭と数人の水夫だけが，のんびりと甲板で空と水面を見つめている。
濡れた甲板を歩く水音すら，聴こえそうだ。

「シャムカン」

見渡す限りの水平線を背景に，船首に座った後姿。潮風に打たれ続けも，陽に照り付けられても，まるで彫像のように動かない。
ゴザの上に胡坐で座り海を見つめ続けているシャムカンの横に，そっと座る。
浜を出発して三日間。何も喋らず動かず飲み食いもしない。薄汚れ無精ひげが生えてきた頬と目元が僅かに窪んだ顔を，ただ見つめる。
シャムカンが見つめているのは海の先の，モルカンなのだろう。
耳を澄ませ，目を開け放ち，全身全霊で兄弟の声を聞こうとしている。
声なき叫びを。魂の叫びを。

「ごめん」

俺に度胸があれば。強さがあれば。知恵があれば。俺がダショーと言っていたら，こんな事にはならなかったのかもしれない。
採掘場にモルカンが潜入して，騒動を起こさせて。それを合図に襲撃。俺とミンツゥは虹珠に閉じ込められた精霊達を開放する。
無謀な作戦。潜入したモルカンがどうなるか。誰も口にしないけど，結果が見えるようだ。
俺がダショーと名乗れば，こんな作戦にはならなかったのかもしれない。
ダショーと名乗れば。
名乗るチャンスはどれだけでもあったのに。

俺は結局，自分が可愛いだけなのか。

「……んで」

「シャムカン？」

「なんで，ハルキが謝るんだ……」

耳元を切る風の音より微かに，しゃがれた声が零れた。

「謝ることを，したのか？」

「シャムカン……」

「おれ達の事，かわいそうだなんて思うなよ」

土色に干からびてひび割れた唇が，少し斜めに歪んだ。

視線は広がる海原を見つめたまま，掠れた声が風に飛ばされていく。

「この役目は，おれ達しか出来ねぇ。素破や隠遁のヤツラの共生能力には勝てないけど，お互いの事が離れてても判るのはおれ達しか出来ない。へへっ……おれ達，それしかないからな」

「凄い事じゃないか」

「そう言ってくれるのはハルキとミンツゥだけだなぁ」

シンハは濡れた甲板に座るのは嫌なのだろうか。

シャムカンの座るゴザの端に寝そべり前足の上に頭を乗せて大あくびをしている。揺れる尻尾が風になびく。

「おれ達さ，クマリの乱で親なし子になってさ。後李の兵隊に殺されるところをイルタサ様に助けられてさ」

「クマリの乱……１０年前か」

「おれ達ガキだったし，訳わかんないまま逃げててさぁ。でも薄

暗い空の下で振り上げられた刀，まだ覚えてるよ」
「あぁ……酷かった。むごい光景だった」

炭となって焼け焦げた遺体が足の踏み場もないほど転がった大地。
いたるところから立ち上がる焦げ臭い煙。薄暗く霞む空。
所々で上がる断末魔。馬の駆け音。狂気を帯びた笑い声。
そして，母親の温もり。
終末のクマリの光景。忘れられない，忘れてはいけない時間。
俺が胎児だったという，記憶。あの時間，同じ空間に彼らはいたのか。
俺が変えてしまった運命が，目の前にある。巻き込んでしまった人が目の前にいる。
逃げ出したい。逃げてしまいたい。

「でもな。信じるかなぁ。おれ達見たんだよ」

掠れた呟きに喜びが混じる。

「大地から立ち上る白い光の柱を見たんだよ」

小さな子が「お月様キレイ」というように，その言葉を口にする。

「ダショー様の魂が空へ舞い上がるのを見たんだよ」

甘い響きを口にするように。大切な秘めた思い出のように。

「だから，大丈夫だって思った。ダショー様は無事だって。いつか還って来るって。そうだろう？　ハルキは還って来た。唄が聞こえた」
「シャムカン」

「ミンツゥを，大事にしてやって下さい。あいつは，本当はダショーじゃないでしょう？　でも，でも必死なんです。ミンツゥの存在がニライカナイを団結させてる。あいつ自身，それは判ってる自分は『ダショー』を演じなければいけないって判っている」

シャムカンは知っている。

ミンツゥが『ダショー』の役目を負っているわけも。本物の『ダショー』が，俺である事も。

モルカンも全てを悟った上で，潜入に行ったという事なのか。

「どうか，ミンツゥを守ってやって下さい。仇の後李を討って下さい」

窪んだ目元に笑みを浮かべ水平線の先を見つめている。穏やかな姿に，抉られたような痛みが全身を貫く。

『ダショー』の自分なら問題を解決できると，そう思いあがっていたんじゃないか。

まるで全ての問題を解決できると，上から目線で物事をみていたんじゃないか。

傲慢だった自分が恥ずかしい。

全ては自分が撒いた種なのに。

クマリに生まれなければ，戦は起きなかっただろう。この力が無ければ。世に隠れて暮らしていれば。深淵に捕まらなければ。

過ちを何度も繰り返し，周りの命を巻き込み，何度も絶望をぶち撒いて。

そんな俺に，シャムカン達は自らの命と引き換えのように希望を託している。

親の敵を討って欲しいと。ニライカナイとミンツゥの無事を。

手の中の弁当が，重い。とてつもなく重い。

ようやく，俺は理解した。

俺の背負った罪の重さに。魂に繋った枷に。自分の幼稚さに。
何十万もの命と血の涙が見えた。途切れる事のない望郷の念を背負っている痛みで貫かれた。
ただ自分が傷つくのを恐れていただけで。色んな理由をつけて逃げていただけで。
深淵に囚われた自分が不幸だと，そう甘えていただけで。自分の身の上を嘆いていただけで。
背負わなければいけない。この世界を，『共生者』というモノに囚われている人々を，踏み躙られた人々を。
これ以上，逃げられない。
でも，怖いんだ。
俺は，そんな聖人じゃない。ただ愛する人を追いかけているだけなんだ。ただ，平凡で単純な毎日を繰り返したいだけなんだ。
こんな俺に，どうしようもない奴に，その純粋な願いが叶えられるはずないじゃないか！

７０　知っているんだ（後書き）

明けましておめでとうございます。今年こそは鈍足の更新速度をせめて蝸牛から亀並みに…（汗）。早く描き終わりたい！せめてエリドゥの街並みを描かずしてどうするっ！…てのが今年の目標です。その為にはまず3章を描き終わらねば…（苦笑）

次回更新は２５日　水曜日　の予定です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2502k/

見下ろすループは青

2012年1月11日08時55分発行